9811 space Design

スペースデザイン ISSN 0563-0991
第410号1998年11月1日発行
毎月1回1日発行
昭和40年2月5日第三種郵便物許可

SD

特集

「白」と「透明」の詩:
モダンデザインの秀作135

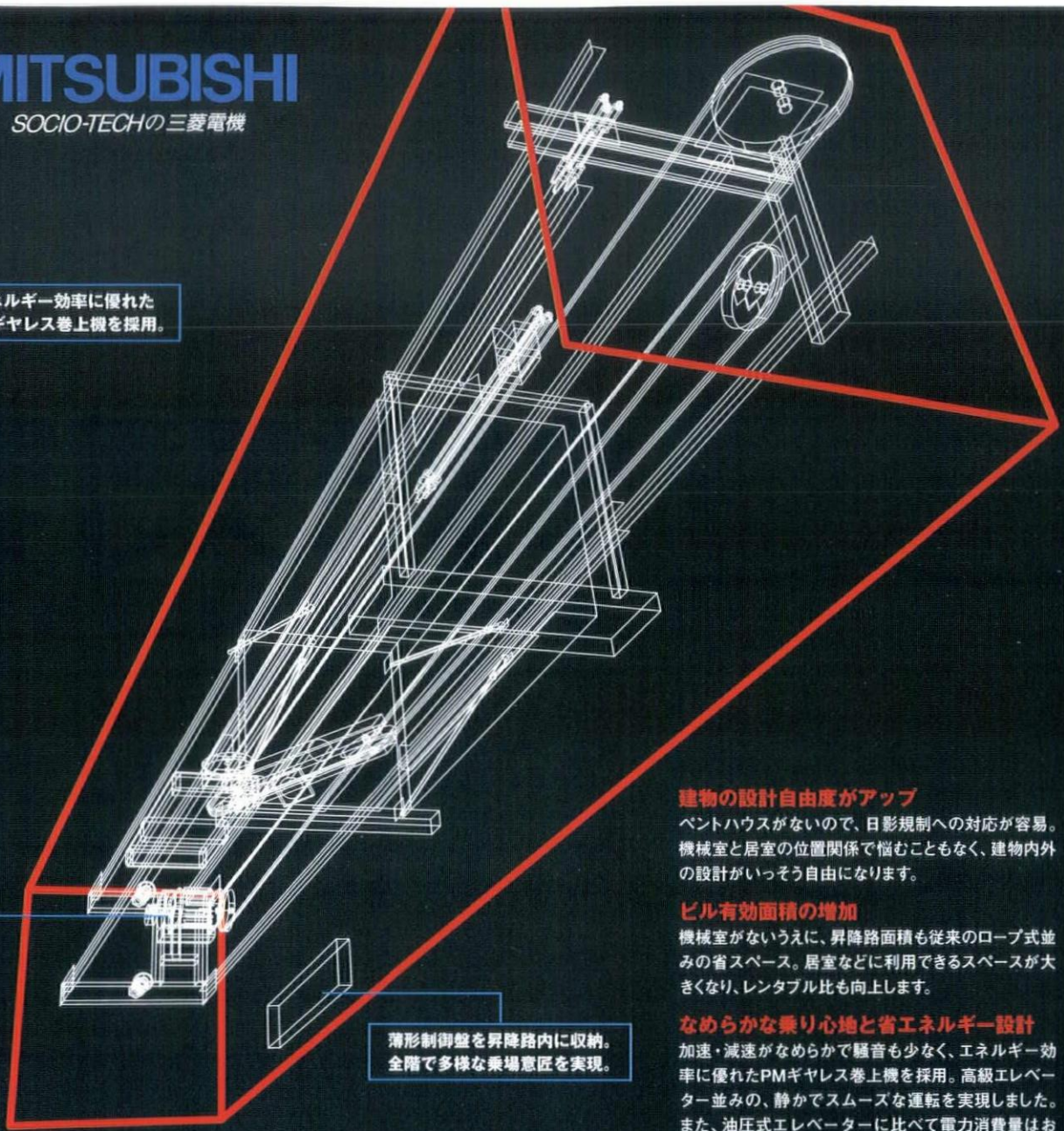
135 Outstanding Works of Modern Design



Monthly Journal of Art and Architecture

MITSUBISHI

SOCIO-TECHの三菱電機



昇降路だけのエレベーター

三菱〈エレパック〉誕生。

機械室にあったすべての機器を昇降路内にすっきり収納しました。もちろん制御盤も昇降路内に設置。エレベーター乗場の出入口わきなどに置く必要はありません。昇降路だけのエレベーターですから、設計の自由度がアップ、すべての階で多様な乗場デザインを可能にします。

新登場

ELEPAQ エレパック

三菱エレベーター／機械室レスタイプ

建物の設計自由度がアップ

ペントハウスがないので、日影規制への対応が容易。機械室と居室の位置関係で悩むこともなく、建物内外の設計がいっそう自由になります。

ビル有効面積の増加

機械室がないうえに、昇降路面積も従来のロープ式並みの省スペース。居室などに利用できるスペースが大きくなり、レンタブル比も向上します。

なめらかな乗り心地と省エネルギー設計

加速・減速がなめらかで騒音も少なく、エネルギー効率に優れたPMギヤレス巻上機を採用。高級エレベーター並みの、静かでスムーズな運転を実現しました。また、油圧式エレベーターに比べて電力消費量はおよそ1/3になります。

環境に配慮

油圧式エレベーターでは避けることのできなかった廃油処理の必要もありません。「環境にやさしいエレベーター」、これも〈エレパック〉の優れた特長です。

Efficient, Reliable & Comfortable
Vertical Transportation Systems
All Over The World

効率がよく（Efficient）
信頼性に優れ（Reliable）
快適な移動空間の創造（Comfortable）
エレベーターの3つのキーワードを基に
そのすべてにおいて、世界トップクラスの製品を
全世界に向けて提供します。

三菱電機株式会社

お問合せ・資料のご請求は……三菱電機株式会社　〒107-6150 東京都港区赤坂5-2-20（赤坂パークビルヂング）
本社ビル事業部　TEL.(03)5573-3793

OSAKI

検針の大崎が初めて実用化

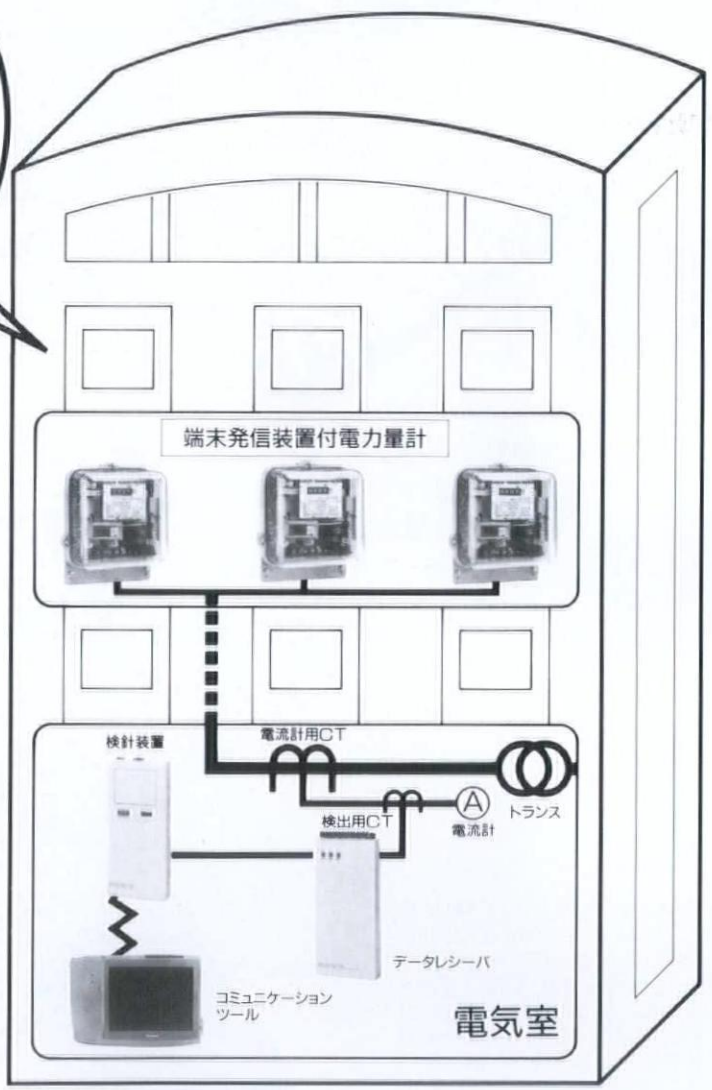
電力線通信方式集中検針システム
POWER LINE CARRIER-ONE-O

PLC-10

ぴい える しい いち まる

カンタン シンプル ローコスト の電力線通信検針システム

**リニューアルetc.
既設の建物に
お手軽に
導入できます。**



電力線通信方式とは?

通信経路として、**屋内配電線**を利用します。
ですから……

専用のケーブルの敷設が不要なので……

- ■工事が簡単
- ■システムがシンプル
- ■導入がローコスト
- ■既設の建物(ビル、寮など)に手軽に導入できる
- ■増設にも即対応可能

コンパクトだから……

- ■設置場所を選ばない

検針の大崎だから

- ■電気のほか水道、ガスも検針

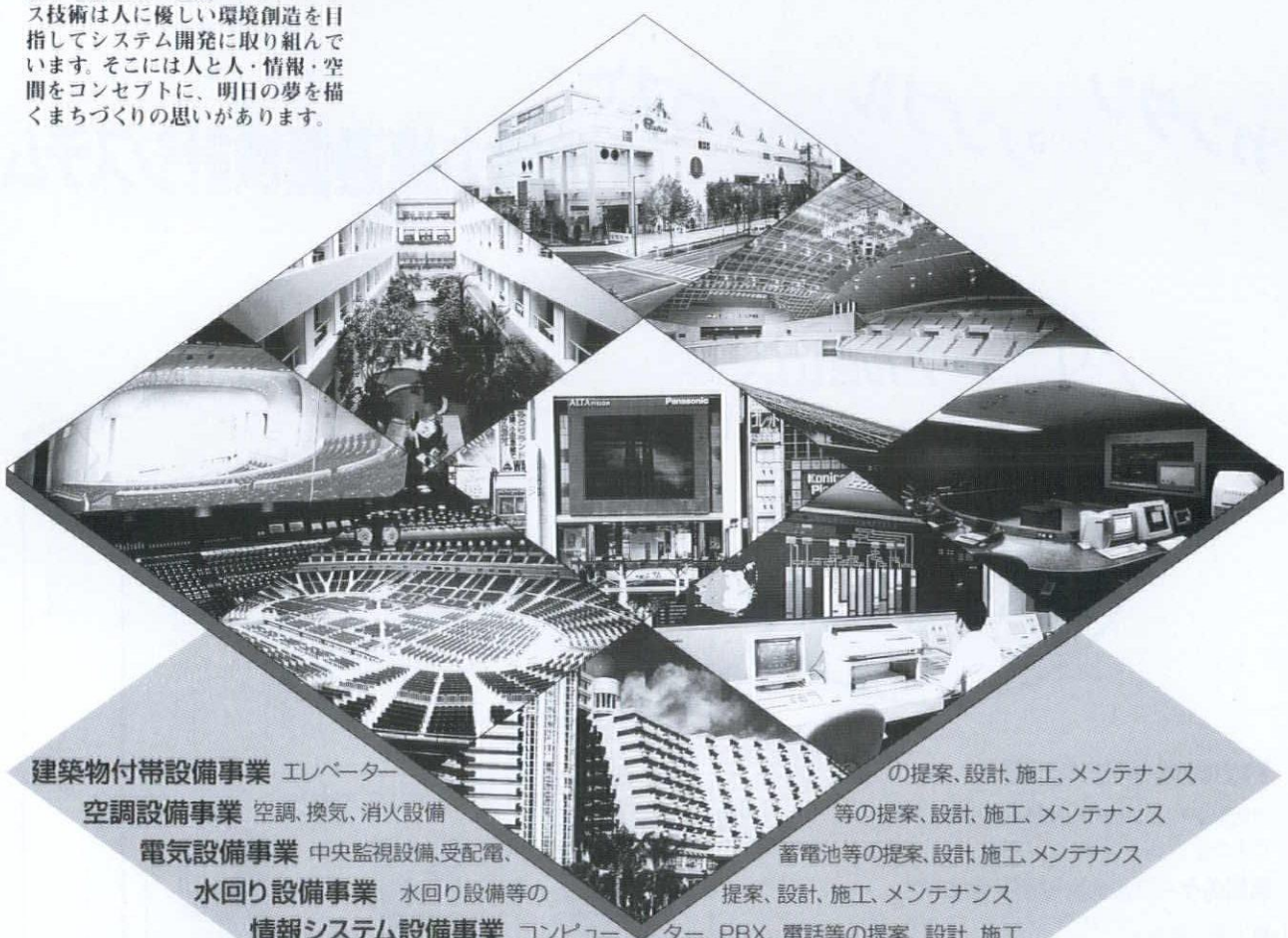
大崎電気工業株式会社

本　　社　〒141-8646 東京都品川区東五反田2-2-7　☎03-3443-7171
システム・機器営業部第二課　☎03-3443-7176　FAX03-3443-0265
大阪支店　☎06-373-2556
営 業 所　札　幌☎011-251-6622／仙　台☎022-223-3747／北関東☎048-653-5901／千　葉☎043-221-5714
横　浜☎045-664-5561／広　島☎082-243-1611／沖　縄☎098-832-7406

National/Panasonic

私たちは快適をシステムにしてお届けします。

松下電器産業の建設エレクトロニクス技術は人に優しい環境創造を目指してシステム開発に取り組んでいます。そこには人と人・情報・空間をコンセプトに、明日の夢を描くまちづくりの思いがあります。



建築物付帯設備事業 エレベーター　の提案、設計、施工、メンテナンス

空調設備事業 空調、換気、消火設備　等の提案、設計、施工、メンテナンス

電気設備事業 中央監視設備、受配電、　蓄電池等の提案、設計、施工、メンテナンス

水回り設備事業 水回り設備等の　提案、設計、施工、メンテナンス

情報システム設備事業 コンピューター、PBX、電話等の提案、設計、施工、メンテナンス

映像・音響設備事業 映像、音響システムの提案、設計、施工、メンテナンス

まちづくり事業 都市再開発、施設開発、環境創造の提案、設計

松下電器産業株式会社

建設システム営業本部	☎03-5500-7504
北海道支店	☎011-207-7722
東北支店	☎022-711-3551
新潟支店	☎025-246-1031
関東支店	☎0286-37-2241
神奈川支店	☎045-651-5051
建設システム営業本部中部支店	☎052-951-6010
長野支店	☎0262-26-3990
北陸支店	☎0762-23-1121
静岡支店	☎054-247-5155
建設システム営業本部関西支店	☎06-949-2111
中国支店	☎082-247-5272
四国支店	☎0878-26-1711
九州支店	☎092-431-1100
沖縄支店	☎098-869-2926

FLAPS、羽ばたくという意味をもつ新キーワード「AV & CC FLAPS」は映像・音響・情報通信システム・食品流通・照明・空調・水管理・搬送とさまざまな設備システムの融合により真の快適環境を求め夢の実現へと願いをこめて事業展開を進めていきます。



AV&CC FLAPS

AUDIO VISUAL COMMUNICATION COMPUTER FOOD LIGHT AIR&AQUA PASSAGE SOFTWARE&SYSTEM

快適さは…安全、確実が基本。

快適な環境づくりに、豊かな経験。



●技術と伝統の…
内線工事■外線工事

東光電気工事株式会社

本社　〒101-8350 東京都千代田区西神田1-4-5　TEL.(03)3292-2111

支社所在地／札幌・仙台・大宮・千葉・丸の内(東京)・新宿(東京)・横浜・名古屋・大阪・広島・福岡

広告についてのお問合せの際は≪SDを見て≫と御明記願います

自由の女神さま、
グラリときたら、ユラリと踊ってください。



東京湾の海風がほのかに香るお台場海浜公園に、今年、フランスから、どえらいVIPがやってきました。「自由の女神像」です。

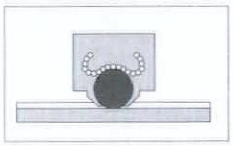
ちなみに、アメリカ合衆国建国100年を記念してフランスが寄贈したのが「ニューヨークの自由の女神」。その返礼にアメリカがフランス革命100年を記念して贈ったのが、この「パリの自由の女神」です。もし日本で地震に遭って"パリッ"なんてことでもあったら、それこそシャレではすみません。

地震対策には知恵が必要です。大切なお預かりもの、ということに加え、女神は年齢100歳をはるかに超えるご老体なのですから。(失礼!)もちろん地震のことなど考えてつくってあるはずもありません。そしてわたしたちは、こんな課題に挑戦しました。「女神の本体には一切補強を加えないで、震度7の揺れに耐えること。」

この難問を解決したのが、「台座の下に入れた6基の免震装置」です。台座の下のボールがコロコロころがり、地震の揺れを吸収。像に加わる力を1/5以下に減らします。これで、もしほんとうに大地震が来たとしても、女神さまは台座ごとユラユラ踊っているように見えるんじゃないかな。もちろん、地震なんて来ない方がいいことは、言うまでもありませんが…。

以上、わたしたち鹿島の仕事の一部を、ここにご報告いたします。

*免震装置の仕組み



ボールベアリングが転がる動きで地震の揺れを吸収します オイルダンパが動きすぎを制御するので心配ありません なお、免震装置の下には、マットスラブによる直接基礎を施し、地下12mまでの地盤改良工事も行っています

*自由の女神像



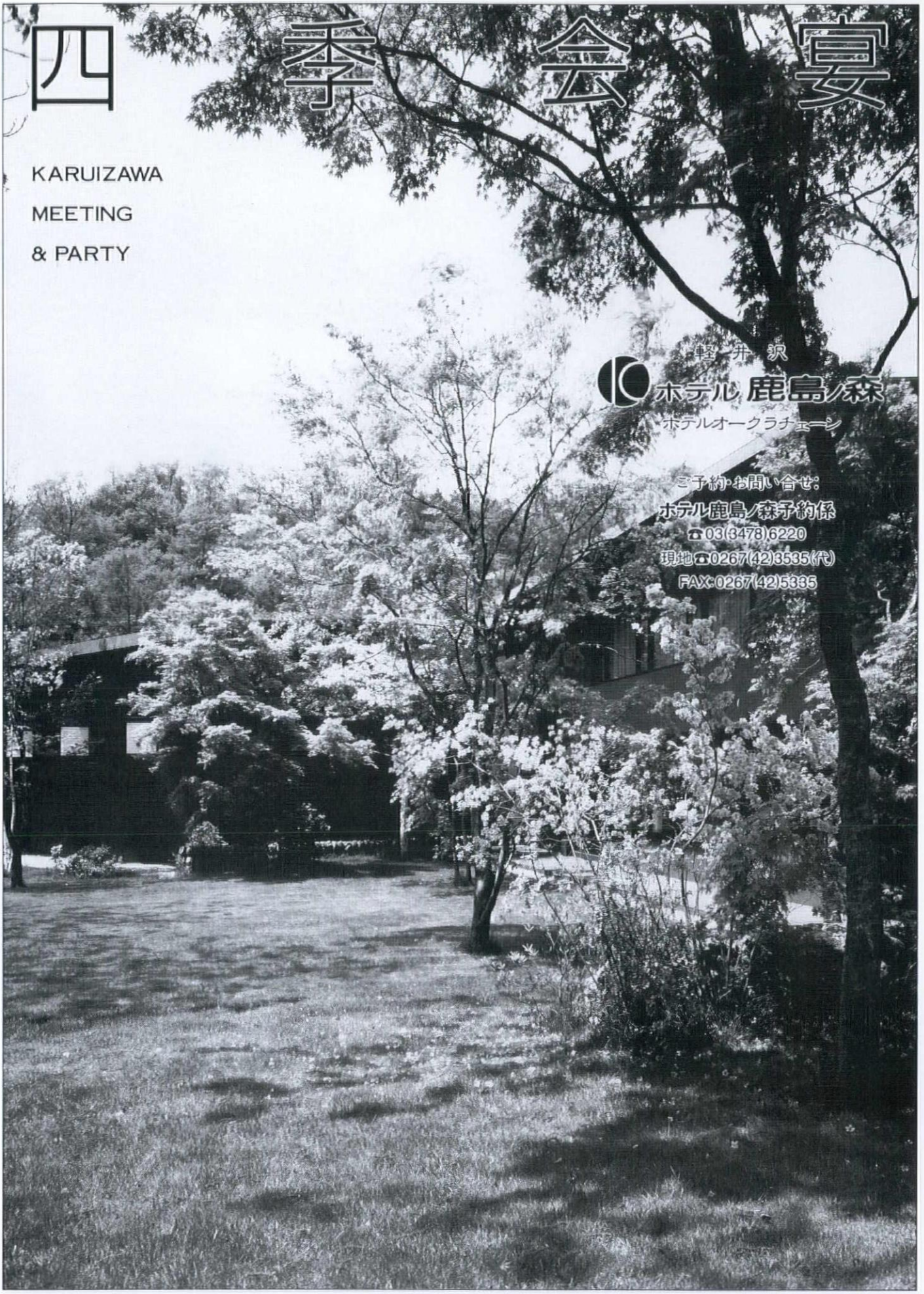
1998年1月までお台場海浜公園に展示されています

自由の女神像移築
主催　「日本におけるフランス年」実行委員会
　　株式会社フジテレビジョン
共催　東京都



鹿島

東京都港区元赤坂1-2-7　〒107-8388
http://www.kajima.co.jp/



広告についてのお問合せの際は≪SDを見て≫と御明記願います



ロビーラウンジ

ようこそ、クラシカル・エレガントな世界へ。

19世紀初頭のヨーロッパ様式で統一された本格的都市型ホテル。

すべてのファシリティに調度品に、そしてきめ細やかなおもてなしに漂う欧州の美意識。
ドアマンに迎えられホテルに一歩脚を踏み込めば、
あなたの新しい物語がはじまります。

〔客室&施設〕
●ビジネス向き、女性向き、観光、ファミリー、個人滞在用と、目的に応じて選べる全404室。(シングル¥15,000～ ツイン¥25,000～) ●ジャグジー、ヒーティングルームなどを付帯した2,000㎡の"ガーデンプール"。●クラシカルなインテリアや絵画で統一された趣のあるロビー。●個性的なステンドグラス、パイプオルガンを配したチャペル〈3F〉。ガーデンプールの一角に設けられたガーデンチャペル〈5F屋外〉。厳粛な神殿(八幡殿=やひろでん)〈3F〉。●最大800名様まで可能な大宴会場(永代)、中、小、さまざまな8つの宴会場。●最新設備を完備したビジネスセンター。●心身の健康管理と増進、心の交流を目的とした新しいタイプのヘルスクラブ"ジ・イースト"。●都内初のホテル直結型多目的ホール"イースト21ホール"。

〔レストラン&バー〕
●フランス料理を主としたコンチネンタル料理……【ブラスリー ハーモニー(2F)】
●本格的広東料理……【中国料理 桃園(2F)】
●アフリカンムードのメインバー……【バー エレファント(2F)】
●旬の素材が織りなす食の芸術……【日本料理 さざんか(21F)】
●四季折々の味覚…【鉄板焼 木場(21F)】●心に残る夜景…【カクテルラウンジ パノラマ(21F)】



チャペル

HOTEL East 21 TOKYO

地下鉄東西線『東陽町駅』より徒歩7分。
東陽町駅～ホテル間、ホテル専用シャトルバス運行。

株式会社 鹿島ホテルエンタプライズ
KAJIMA HOTEL ENTERPRISES, LTD.

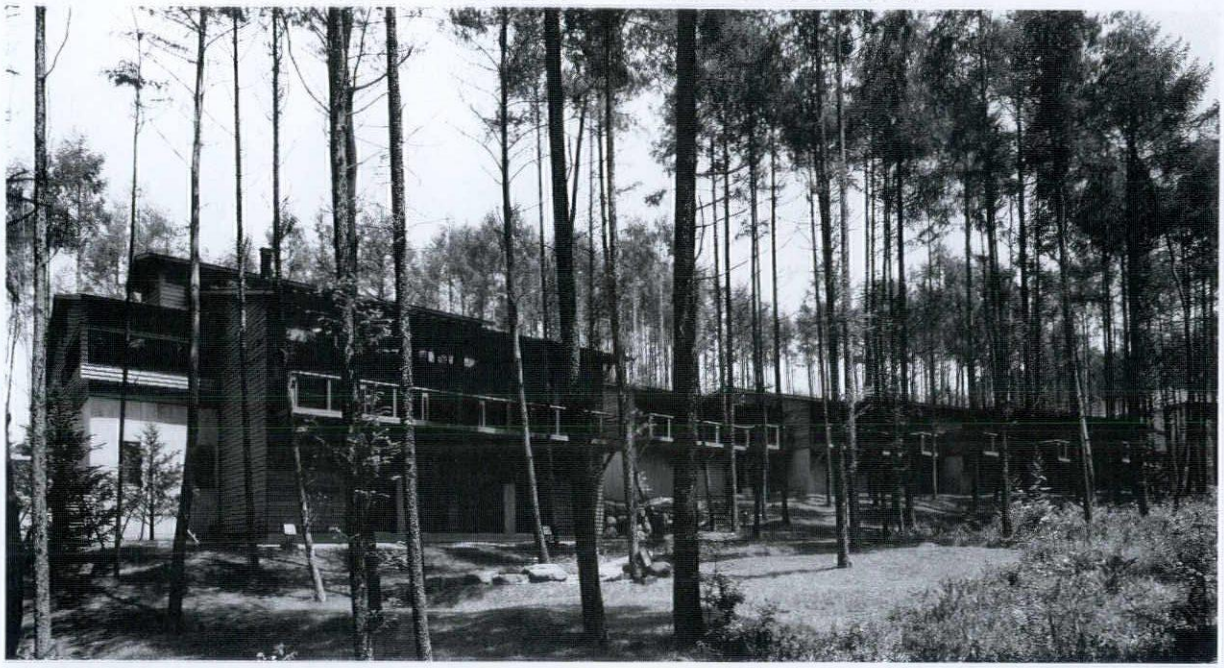
ホテル イースト21東京

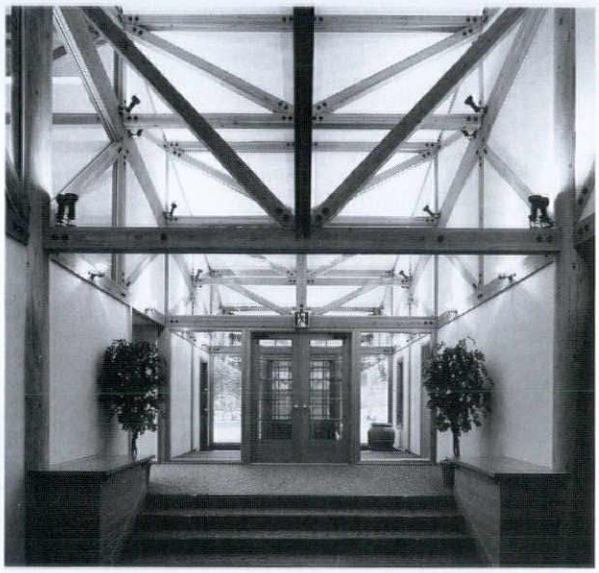
〒135-0016 東京都江東区東陽6-3-3
TEL 03(5683)5683㈹ FAX 03(5683)5775

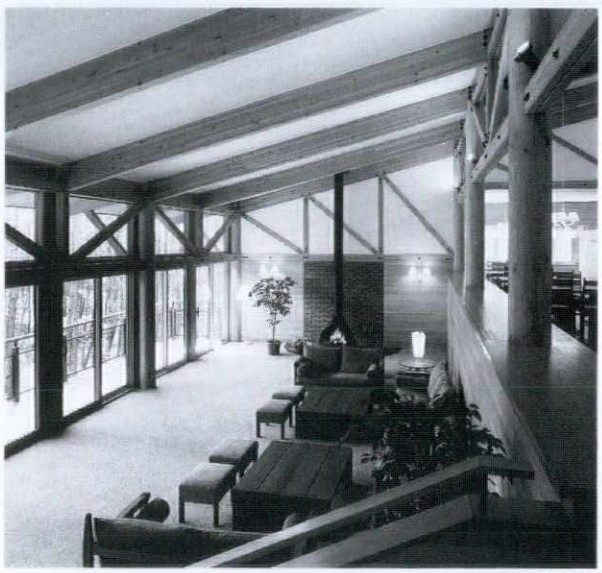


大興物産の海外建材シリーズ

No.6　木製品(ツーバイフォー,集成材)







大興蓼科山荘

大興物産は、米国ツーバイフォーシステム用各種部材をパッケージ輸入しており、
企画段階から調達・施工段階までトータルなコーディネーションを致します。

お問い合わせは、大興物産株式会社・海外調達部まで。
〒107-8318 東京都港区元赤坂1-5-31(新井ビル) TEL 03-5474-6054 FAX 03-5474-6386

建設資機材の総合商社

鹿島グループ　**大興物産株式会社**

本　社　〒107-8307 東京都港区元赤坂1－6－4 安全ビル

本　社	☎(03)5474-6060	FAX(03)5474-6076	札幌営業所	☎(011)231-6841	FAX(011)222-4074	四国営業所	☎(0878)39-3191 FAX(0878)35-4722
東京支店	☎(03)5474-6072	FAX(03)3423-1915	東北営業所	☎(022)219-6861	FAX(022)219-6867	九州営業所	☎(092)441-2624 FAX(092)471-7996
横浜支店	☎(045)212-3925	FAX(045)212-3996	関東営業所	☎(03)5632-6717	FAX(03)5632-6719	シンガポール オフィス	☎65-3440590　FAX65-3446714
名古屋支店	☎(052)961-6171	FAX(052)961-6179	北陸営業所	☎(025)247-2286	FAX(025)243-5248		
大阪支店	☎(06) 762-5661	FAX(06) 762-1074	広島営業所	☎(082)249-9221	FAX(082)249-9270		

繊細な色柄とソフトな質感で
空間をやさしく彩る、
ビニル床シートです。

学校や病院、公共施設などのパブリックスペースでは、よりソフトで温もりの感じられる空間づくりが求められています。こうしたトレンドにお応えし、ロンシールでは幅広い用途で活躍する汎用性の高いビニル床材として、ロンリウムナチュールを開発。雲柄をベースに数種のチップを散りばめたソフトなデザインが、空間にやさしい表情を与えます。また重歩行にも耐える耐久性も備えながら、価格を抑えることによってコストパフォーマンスも追求したビニル床シートです。



ビニル床シート

ロンリウム ナチュール

用　途

学校・幼稚園等文教施設、病院・養護老人ホーム等　医療福祉施設、庁舎等公共施設の一般室・廊下・通路・階段、レストラン・喫茶店・デパート・ショッピングセンター・オフィスなどのロビー・エレベーターホール・湯沸室など。

規　格

- 12色
- 2.0㎜(2.5㎜※)厚さ×1820㎜ 幅×9m長さ

※受注生産品

お客様の満足が私たちの目標です
ISO 9001 認証取得

特　長

●雲柄に加え、微細な繊維状・粒状など数種のチップが深みのあるデザインと温もりを醸しだしています。また、ピーチを思わせるソフトでやさしい質感を備えています。カラーは12色。さまざまな空間イメージにお応えできる多彩なラインアップです。

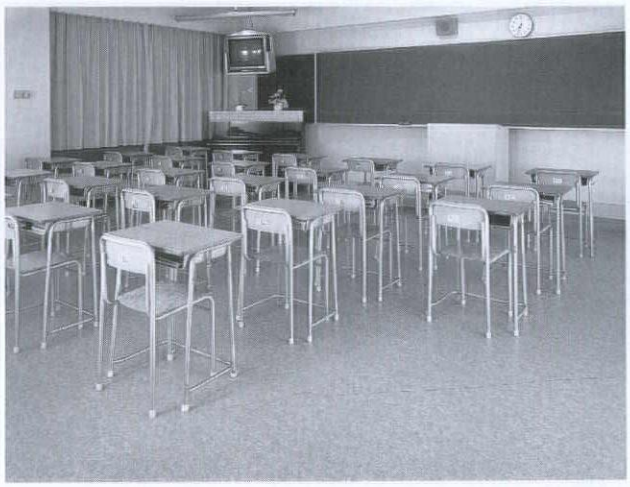
●歩行時のショックをやわらげる適度な柔軟性・弾力性、さらには適度な防滑性を備えているため、快適な歩行感が得られます。

●継ぎ目はスーパーシームシーラーによる液溶着ですから接合部が目立たず、一枚フロアのような美しい仕上がりで、かつ十分な強度を実現しています。また、下地によくなじむうえにカッティングも軽く、細部の施工が容易です。

●重歩行に耐える、すぐれた耐久性を備えていますから、仕上がり時の美しさを保ちます。

●酸、アルカリ、アルコール類、塩類などへの耐薬品性にすぐれています。

●一体化した床面をつくることができるため、汚れが取れやすく日常のメンテナンスが容易です。



ときめきの生活空間をサイエンスする

ロンシール工業株式会社

●本社 建装部／〒130-8570 東京都墨田区緑4-15-3　☎03(5600)1821
●大阪支店／〒532-0011 大阪市淀川区西中島3-9-13大北ビル ☎06 (304) 2700
インターネットホームページアドレス http://www.lonseal.co.jp/

●営業所

札 幌	☎011(271)0411	大 宮	☎048(664)1511	静 岡	☎054(251)3712	広 島	☎082(211)2700
盛 岡	☎019(624)6925	土 浦	☎0298(32)8813	名古屋	☎052(935)7063	高 松	☎087(831)4177
仙 台	☎022(265)4771	千 葉	☎043(246)5851	金 沢	☎076(292)1161	福 岡	☎092(472)5857
新 潟	☎025(243)3791	横 浜	☎045(662)7370	岡 山	☎086(231)6011	鹿児島	☎099(258)6571



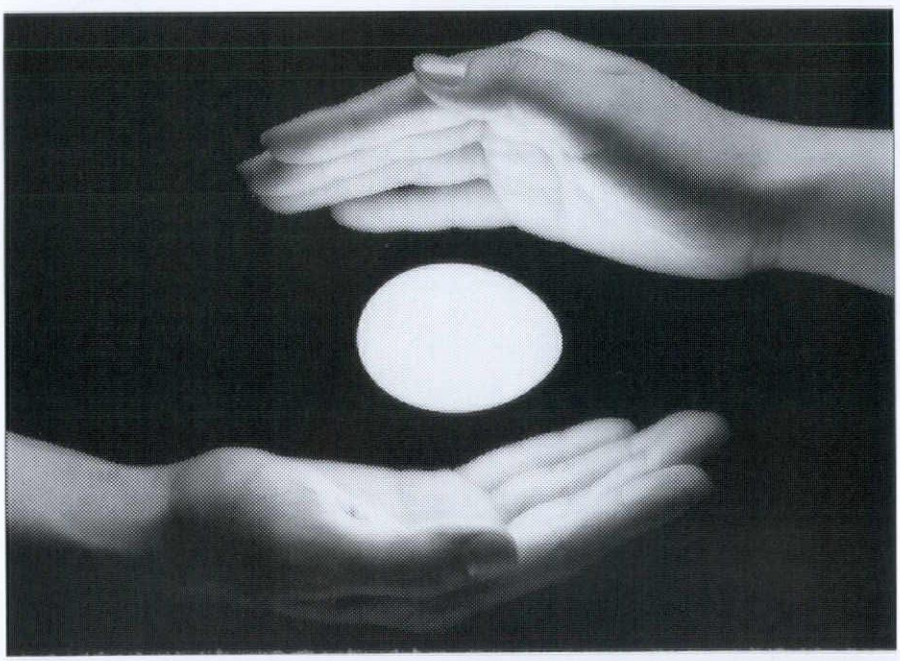
あなたの、いちばん心地良い場所はどこですか。
きっと、多くの方が、
大自然の中をイメージされることでしょう。
私たちは、そんな快適さをあらゆる建物の内に
創造していきたいと考えています。
人間は、あくまでも自然の一部。その事実を大切に、
新しい最適環境を創造していきたい。
もっとナチュラルに、
いつもあなたのそばに、ダイダンです。

Always With You.

―光と空気と水を生かす―
ダイダン

SANKEN
ENVIRONMENTAL ENGINEERING

設備は手にとって選べません。だから……



大切なのは、技術の信頼性。
豊富な実績と、
そのなかで培われた
確かなノウハウです。
私たち三建設備工業は、
求められる環境を
信頼の技術で創りだします。

望まれる環境を、信頼の技術で。

三建設備工業株式會社

〒103-0014 東京都中央区日本橋蛎殻町1-35-8 TEL.03-3667-3431

信頼と確かな技術で未来を築く

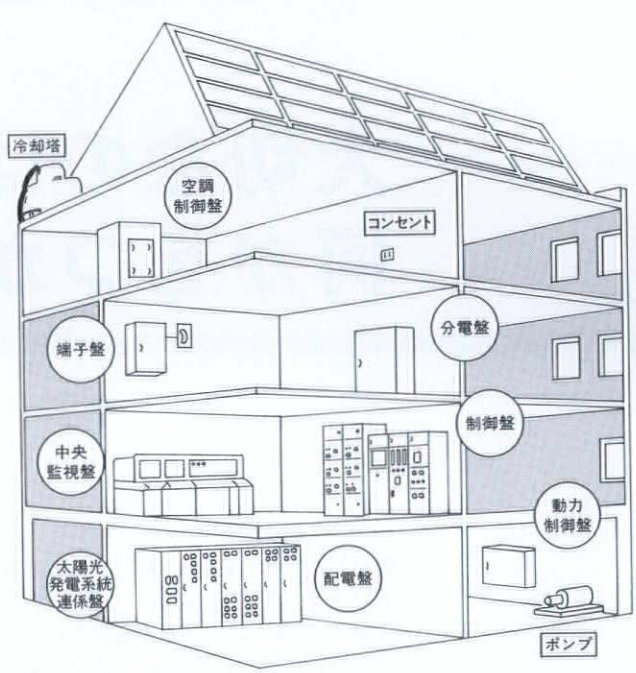
大栄電気株式会社

代表取締役社長　伊藤　赳

本　　社　東京都中央区銀座3−7−10　TEL03(3562)0311(大代表)　FAX03(3562)0300
支店営業所　大阪,名古屋,北海道,東北,北関東,東関東,神奈川,浜松,神戸,四国,中国,九州,沖縄

見えない電気を交通整理 それはKAWADEN

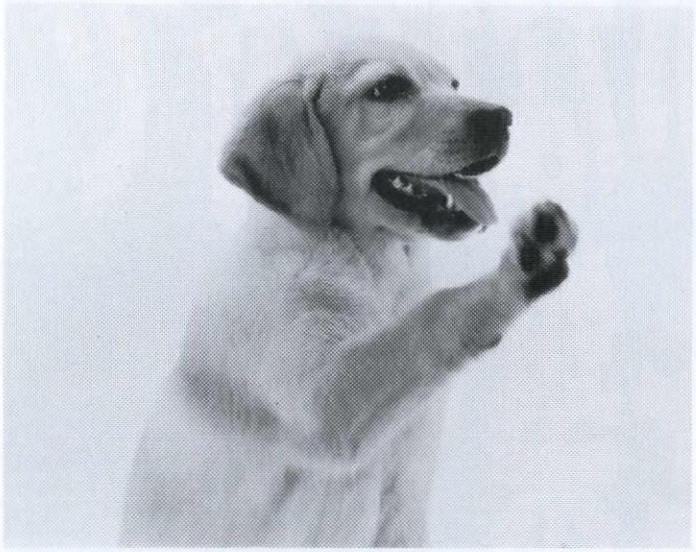


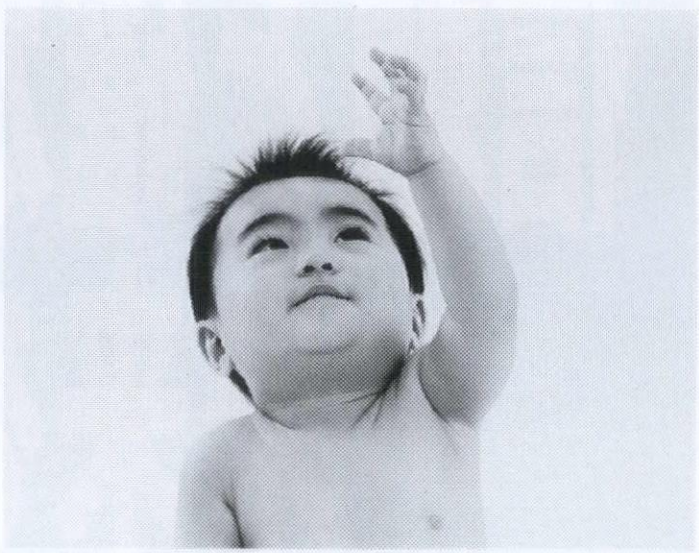


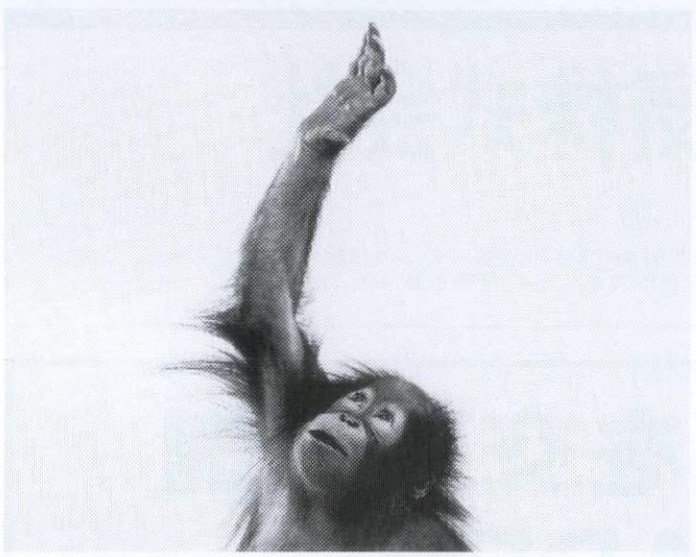
川崎電気株式会社

●本　　社／山形県南陽市小岩沢225
●東京本社／東京都港区芝浦3-7-4

KANDENKO









大切なのは、
何かをつかもうとする心。

電気は光・熱・情報・音響などに姿を変え、私たちの暮らしを支えています。関電工はこうした電気を、住宅で、オフィスで、劇場で、工場で、環境への配慮と安全性を第一に具体的なシステムや設備のカタチでお届けしています。そしてつねに、さらなる可能性を広げようと、新たな夢を描き、日夜さまざまな研究を続けています。今までも、これからも、関電工の技術はいつもあなたの近くにいます。

いつも、人に優しい技術で未来へ。

関電工

本社：〒108-8533 東京都港区芝浦4丁目8番33号
☎：NTT 03(5476)2111 TTNet 03(4431)2111

広告についてのお問合せの際は≪SDを見て≫と御明記願います

SD

バックナンバー

鹿島出版会
東京都港区赤坂6-5-13
電話：03-5561-2550
振替：00160-2-180883
Home Page Address:
http://www.kajima.co.jp/group/publish/index.htm
年間定期購読料
26,000円（特別定価号＋消費税、送料込み）

SDバックナンバー常備店
［東京］
八重洲ブックセンター
03-3281-8203
三省堂本店（神田）
03-3233-3314
書泉ブックマート
03-3294-0011
紀伊国屋本店 03-3354-0131
大盛堂書店 03-3463-0511
［大阪］
旭屋書店本店
柳々堂 06-443-0167
［札幌］
旭屋書店 011-241-3007
［横浜］
有隣堂本店 045-261-1231
［京都］
大龍堂書店 075-231-3036
［大学生協内書店］
東北工業大学　東京工業大学
法政大学工学部　早稲田大学理工学部　関東学院大学

9611　栗生明　2548円
彼のみごとなディレクションに裏付けられた、コラボレーションの結晶を紹介。岡崎市美術館、植村直巳冒険館、カーニバル・ショーケース、他。［田窪恭治のサン・ヴィゴール・ド・ミュー礼拝堂プロジェクト3］

9612　SDレビュー1996　1988円
第15回SDレビュー誌上発表。ユストス・ビザール＋ペーター・ルーケ、高橋昌巳、城戸崎和佐建築設計事務所、他［伊丹潤の近作より：石彩の教会、木の教会、土の教会］

9701　葉祥栄：カリステニクス　3059円
地方自治体主体のまちづくりプロジェクトを紹介。事例：くまもとアートポリス、クリエイティブTOWN岡山、長崎アーバン・ルネッサンス、白石メディア・ポリス、他

9702　木を生かした架構と空間　1988円
木の性質を生かした国内外の25例を紹介。金山の火葬場、モルジュのホール、他。文＝川口衛、今川憲英［アジアを熱くする新世代建築家たち：IAA国際会議より］アジアの都市・建築の現在、未来を問う。

9703　ミニマル・スペース・アーキテクチュア　1988円
ミニマルでシンプルな建築表現が特徴的な、4人の建築家を紹介。ジョン・ポーソン、小川晋一、岸和郎、石田敏明。文＝丸山洋志、他［東京国際フォーラム］写真＝堀内広治

9704　拡張するデジタル・デザイン　3059円
コンピュータとネットワーク技術による、建築・都市の新しい環境を造り出すプロジェクトを紹介。文＝田島則行、山口重之、桂 英史、マイケル・ベネディクト、藤幡正樹、久保田晃弘、坂村健、奥出直人、而角光男、他

9705　アフラ＋トビア・スカルパと［ベネトン］　2000円
アフラ＋トビア・スカルパによるベネトンのオフィス社屋、ショップなどを紹介。文＋インタビュー＋写真＝豊田博之［都市ビサとカルマッシの仕事］カーサ・ムーティ、ヴェルティ劇場修復計画など

9706　柳澤孝彦：劇場の空間構成　2000円
新国立劇場、東京オペラシティビル、三鷹市芸術文化センター、他。文＝長友宗重、本杉省三　対話＝川向正人×柳澤孝彦［装飾を排したフォルムデザイン――スウェーデンのグッドデザイン展より］

9707　加速都市・香港1997　2000円
「速度」をテーマに激動する香港の姿を捉える。参加作家＝アラン・チャン、タイクーングラフィックス、湯川敏、江頭慎、他　監修＝村松伸、小嶋一浩、木下光　文＝松田直則

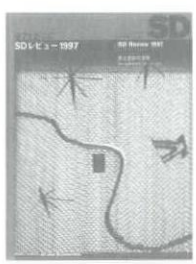
9708　R.ヴェンチューリ＋D.スコット・ブラウン　2447円
日本での処女作（メルパルク日光霧降）を中心に90年代の作品を紹介。シアトル美術館、他。文＝香山壽夫、安山宜之、他［岐阜県営北方住宅プロジェクト］談＝磯崎新

9709　駅空間の新曲面　2000円
コミュニティ性を重視した駅を紹介。JR矢吹駅、JR大曲駅、他。国際コンペとして衆目を集めたJR京都駅も併せて紹介する。文＝宮林敬幸、饗庭孝男、他。対談＝横尾忠則×原広司　写真＝大野繁

9710　ガラス建築　3000円
光学的、構造的特性など、ガラスの性質を幅広く採り入れた作品を紹介し、ガラス建築の現在と今後の可能性を探る。ガラス建築23作品、他。座談会＝伊東豊雄×難波和彦×今川憲英、他



9711
隈研吾
ポストモダン以降の建築における言説を続けてる隈研吾。今年建築学会賞、ヴェネディクタス賞を受賞した近作を紹介する。慰霊公園、他。文＝飯島洋一、グレッグ・リン、対談＝槇文彦×隈研吾
2800円



9712
SDレビュー1997
第16回SDレビュー誌上発表。建築研究室高安重一事務所＋佐久間達也＋横爪宏直＋重富博之、川人洋志、藤本壮介、松原隆、他。［光と色が彩る空間――チェコのガラスアーティストたち］写真＝鈴木豊
2000円



9801
SDレビューの15年
これまでのSDレビューを一挙に振り返る。出展作、建築界での意義などを再確認し、今後の方向性を探る。文＝槇文彦、原広司、飯島洋一、中筋修、他。座談会＝元倉眞琴＋鈴木了二＋栗生明＋小嶋一浩
2800円



9802
都市へ向かう透明性：スイス・ドイツ語圏の建築
スイス建築の背景、建築の生まれる文脈を捉えながらその魅力を探る。文＝貝島桃代、ハンス・フライ、他。往復書簡＝篠原一男×ヘルツォーク＆ド・ムロン
2200円



9803
表層革命再考：チェコ・キュビスム-ロンドキュビスム建築
現存するプラハのキュビスム建築を撮り下ろし写真により紹介する。撮影＝鈴木豊。［香山壽夫のドローイングと空間］文＝香山壽夫、八木幸二、鈴木悌、青木淳
2000円



9804
次世代のマルチ・アーキテクトたち
30歳代の若手建築家たちの作品と創作活動を紹介し、時代性を浮かび上がらせる。インテンショナリーズ、みかんぐみ、他。［デスクトップ・コミュニティ］
2000円



9805
空間演出の最前線
建築家とデザイナー、アーティストとのコラボレーションの具体例を紹介。藤江和子、中村綾平、新宮晋、他。［カーロとリベラの家］ファン・オゴルマンの建築とメキシカン・モダン
2000円



9806
風景創出の現在：ランドスケープ・アーキテクトの挑戦
「公共的な価値」によって自然の風景と区別され、積極的な社会性が意図されている事例を紹介。佐々木葉二、プレイスメディア、三谷徹、登坂誠、他。
3000円



9807
シーラカンス
彼等の12年間の建築活動の軌跡を、作品紹介を中心に振り返る。作品：吉備高原小学校、大阪市水上消防署、（仮称）外ヶ岡交流拠点施設、他。論文：原広司、土居義岳。インタビュー：山本理顕
2600円



9808
光のデザイン・ウォキャブラリー：LPAの仕事1990-1998
LPAのデザイン言語を40に厳選して紹介する本書は、光が生み出す空間を全般的に考察する本格的な照明バイブルである。
文＝磯崎新、面出薫
2500円



9809
ディテールが創る風景：細部に宿る美と技巧
建築作品のディテールを写真と図面で紹介する。宮崎浩／Plants Associates、渡辺明設計事務所、竹中工務店、谷口建築研究所、KAJIMA DESIGN、他。
2300円



9810
オフィス環境の近未来
最新のオフィス環境を、事例を中心に紹介する。作品＝電通インタラクティブ・ソリューション・センター、他。文＝仲隆介、他。
［京町屋再生の手法――時を超えて生きる空間を求めて］
2000円

SD

現代の建築家、ハードカバー・シリーズ

鹿島出版会がホームページを開設いたしました。

SDをはじめ、当社で出版している書籍の検索が出来ます。是非ご覧下さい。

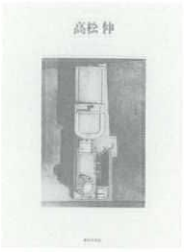
Address: http://www.kajima.co.jp/group/publish/index.htm



アルヴァ・アアルト

巨匠A.アアルトの全主要作品を掲載した総特集。A.アアルトのデザイン・ヴォキャブラリー：武藤 章、アアルトの年表1899-1976、アアルト建築所在一覧。

3090円



高松 伸

88年度建築学会賞受賞作のキリンプラザ大阪を中心とし、1988年までの全主要作品を一挙掲載。精緻なる細部と大胆な素材の扱い、独特な造形により、磁ぎ澄まされた独自の作品を創り続ける高松伸の世界を紹介する。繊陣Ⅰ、Ⅲ、他。

3800円



槇事務所のディテール/TEPIA

機械産業情報会館（TEPIA）というハイテクの殿堂にふさわしいデザインを支える、精密かつダイナミックなディテールの仕組みを写真とドローイングの構成で解剖する。槇文彦のディテールとしては初の作品集。

6800円



菊竹清訓

メタボリスト菊竹清訓の初期から1980年までの作品集。第三世代の建築/とりかえ論1950-1960年/方法論の時代1960年-1970年/私の中の菊竹清訓の作品：内井昭蔵、他/作品データ・主要作品分布図。年表、他。

3090円



早川邦彦

プロジェクト、商業施設、都市型複合建築、集合住宅、住宅、コンペ案まで、初期の作品から1988年までの全主要作品を一挙に紹介した早川邦彦の初作品集。SKY VILAGE、ラビリンス、成城交差点の家、アトリウム、他。

4300円



磯崎新❸ 1985-1991 part 1

キーワードを軸に自らの作品をいくつかの流れに分けて、つくばセンタービル以来、1985-1991年の作品群を紹介。水戸芸術館、サンジョルディパレス、お茶の水スクエア、他。

4800円



白井晟一

孤高の建築家・白井晟一の珠玉の作品集。懐霄館、ノアビル、聖アキラ館、昨雪軒、尻別山寮、虚白庵、他。論文＝磯崎新、針生一郎、浅野敏一郎、白井晟磨。座談＝大江宏＋藤井正一郎＋宮内嘉久。作品文献年表1935-1975年。

3605円



ドイツ表現主義の建築

1920年代のドイツを席捲した表現主義の嵐。そこにはレンガとガラスを素材とした自由奔放な造形と多様な表情をもった建築が生まれた。近代建築誕生の母体となり、現代にも影響を与える表現主義建築の全容を紹介。B.タウト、他。

3300円



磯崎新❹ 1985-1991 part 2

part 1 同様、自らの「自註」と共に作品を紹介してゆく。ティーム ディズニー ビルディング、北九州国際会議場、シュトゥットガルト現代美術館、パラディアム、［蝶々夫人］舞台美術、他。

4500円



象設計集団

独自の造形理念により常に新鮮な作品を生み出し続ける象設計集団の初めての作品集。そのユニークな建築群の生々しい姿を捉える。安住町農協町民センター、名護市庁舎、宮代町立笠原小学校、進修館、他。論文＝荒俣宏、宇佐美圭司、他。

4000円



続・木造建築の現在

海外61作品、国内13作品の木造建築を紹介。豊かで暖か味のある空間を生み、またあらゆる空間構造に対応できる木構造を再評価する。インタビュー：坪井善勝、杉山英男、内田祥哉。対談：今川憲英×安村基。

3708円



カルロ・スカルパ図画集

ブリオン家墓地を始めとする主要作品のドローイング約150点を収蔵。ブリオン・ヴェガ墓地、フェルトレの遺跡博物館、ヴェネツィア大学文学・哲学部校舎増改築、他。文：豊田博之、カルロ・スカルパ、他。

3500円



槇 文彦❷

槇文彦の80年代の活動を知る第2作品集。そこには増々精緻さと多彩さを加えた作品群が見て取れる。スパイラル、藤沢市秋葉台文化体育館、前沢ガーデンハウス、慶應義塾日吉図書館、電通大阪支社、京都国立近代美術館、他全21作品。

4326円



ブルーノ・タウト

1933-36年滞日期間の活動を中心に、没後40年を記念した特集。作品＝熱海の家、ボスポラス海峡に臨む自邸、ヴァイネルト通りの集合住宅、グレル通りの集合住宅、他。タウトの工芸品と著書、他。

2575円



安藤忠雄❸アンビルト・プロジェクト

70年代からの見逃せないアンビルト作品29点を紹介。JR京都駅改築設計競技案、岡本ハウジング、I計画、伊豆プロジェクト、水の劇場、中之島プロジェクトⅠ、Ⅱ、Iギャラリー、大淀の茶室、他。

3800円



伊東豊雄

風のように、光のように変様する建築。独自の感性で貫かれた作品群。その初期から1986年までの軌跡。中野本町の家、シルバー・ハット、レストラン・ノマド、馬込沢の家、風の塔、東京遊牧少女の家具、ホンダクリオショールーム他。

3914円



ボザール：その栄光と歴史

ボザールの全貌を紹介。アカデミーの功罪：高階秀爾、ボザール―その歴史と思想：三宅理一編、ボザールの成立とネオ・グレコの形成、折衷主義の世界、近代の憂愁、戦後のボザール、パリ・オペラ座の図面と写真、他。

2575円



都市デザイン｜横浜

横浜市の20年にわたる都市デザイン活動の足跡を辿り、これからのアーバンデザインの課題と展望を探る。座談会：都市づくりの新局面へ向けて、槇 文彦×養原敬×小澤恵一、他。

5000円

9811 Space Design

スペースデザイン 第410号
1998年11月号
都市・建築・芸術の
総合誌

SD

5 特集

「白」と「透明」の詩:

モダンデザインの秀作135

8
原点あるいは原理をめざし　そして　超正統へ
羽原肅郎

46
インタビュー
「伝統、文化、生活
デザインと
現代社会について」
柳 宗理
インタビュアー=河合俊和

68
デザインの意味
アンジェロ・
マンジャロッティ

71
陶磁器デザインの
これから
長井千春

117
クリスタルガラス
企業内37年の
デザインワークからの
メッセージ
船越三郎

130
まず、白い食器から
森 正洋

146
オリジナリティの尊厳
河合俊和

12-70
白陶磁器

ティー・サービス／カシミール・マレービッチ
ティー・サービス／ゲートルード・ヴェースガルト
コーヒー・サービス／トゥルーデ・ペトゥリ
ティー・サービス／トゥルーデ・ペトゥリ
カップ・アンド・ソーサー／カリーナ・アホ
コーヒー・サービス／スティグ・リンドベルク
ティー・サービス／エベ・サドリン
コーヒー・サービス／ヘルマン・グレッツェ
コーヒー・サービス／カイ・ボイセン
ティー・サービス／ヘニング・コペル
ストーンウェア／シグナ・P.メリン
コーヒー・サービス／ヘインツ・H.イングラー
コーヒー・サービス／カイ・フランク
コーヒー・サービス／レイモンド・ローウィ+リチャード・レイサム
スタッキング・サービス／ニック・ローエリヒト
コーヒー・サービス／ティモ・サルパネバ
コーヒー・サービス／タピオ・ウィルカーラ
ティーポット／柳 宗理
ティー・サービス／ワルター・グロピウス+ルイス・A.マクミラン
コーヒー・サービス／ハインリッヒ・ローフェルハルト
ティー・サービス／ハンス・T.バウマン
コーヒー・サービス／グレス・メイヤー
他

72-145
透明ガラス器

ティー・サービス／ウイルヘルム・ワーゲンフェルド
インク・ボトル／ウイルヘルム・ワーゲンフェルド
ワイン・ゴブレット／ヨセフ・ホフマン
コーヒー・メーカー／ピーター・シュラムボーム
湯沸かし器／ピーター・シュラムボーム
ティー・サービス／ハインリッヒ・ローフェルハルト
ココア・ピッチャー／ウイルヘルム・ワーゲンフェルド
ティー・サービス／シグナ・P.メリン
グラス／オズワルド・ハーデル
デカンター／カイ・フランク
グラス・サービス／アンジェロ・マンジャロッティ
グラス・サービス／ジョエ・コロンボ
カラッファ／ティモ・サルパネバ
スタッキング・グラス／グレス・メイヤー+イビ・トリアー
グラス／ロベルト・サンボネ
グラスウェア／アイノ・アアルト
スタッカブル・グラス／ロベルト・サンボネ
ピッチャー／ヴィック・リンドストランド
デカンター・アンド・グラス／タピオ・ウィルカーラ
デカンター・アンド・グラス／エットーレ・ソットサス
グラス／アキーレ・カスティリオーニ
カラッファ・アンド・グラス／インゲガード・ラーマン
コンディメントセット／船越三郎
ゴブレット／淡島雅吉
ピッチャー／エンゾ・マリ
キャンドル・ホルダー／アンジェロ・マンジャロッティ
花瓶／アルヴァ・アアルト
ピッチャー／ヘニング・コッペル
他

150	連載：森島紘史の起こし絵図――日本のかたち紙考 11. 七五三	森島紘史
153	連載：世界の現代美術館探訪――美術館は生まれ変わる 13. (最終回) 座談会：21世紀の美術館はどうなるか	
161	新刊紹介	
162	書評	
164	メトロポリタン・ライブラリー	太田佳代子
166	ニュース： ヨーロッパというジレンマを超えて――社会との距離がもたらしたもの	ロート美恵
168	ニュース： ワイズマンの捉える場所／空間、あるいは欲望――フレデリックワイズマン映画祭	緒方恵一
170	ニュース 中心市街地の活性化へのアクション	後藤幸三
173	お知らせ	
174	海外レポート： [サンフランシスコ] ディズニー・コンサート・ホールとフィランソロピーの相関関係	瀧口範子
175	海外レポート： [上海] 「海派(ハイパイ) 建築」案内	陸 鐘驍
176	海外レポート： [ロッテルダム] 21世紀へのヴィジョン――オランダ建築博物館の野望	吉良森子

編集長：相川幸二
編集スタッフ：
寺田真理子　高木伸哉
大野由美　飯塚りえ
高森和志
制作協力：久世健
勅使河原馨／guild
(有)シンクス

発行人：平田輪那
編集人：長谷川愛子

発行所：鹿島出版会
〒107-8345 東京都港区
赤坂6丁目5番13号
電話：
(03) 5561-2551 営業
(03) 5561-2555 編集
FAX：
(03) 5561-2561 営業
(03) 5561-2565 編集
TELEX：
02422467 KAJIMA J
振替00160-2-180883番
Home Page：
http://www.kajima.co.jp/
group/publish/index.htm

印刷・製本：
凸版印刷株式会社
〒174-0056 東京都板橋区
志村1丁目11番1号
電話：
(03) 3968-5111 案内

取次店：トーハン・日販・
大阪屋・太洋社・
栗田出版販売・誠光堂・
鈴木書店・西村書店・中央社

特別定価：3,000円
[本体2,857円]

年間直接購読料：26,000円
特別定価号+送料込み

表紙：ティーポット「Tac」
ワルター・グロピウス+
ルイス・A.マクミラン
表紙写真：知識たかし
表紙デザイン：小泉均

9811 Space Design

Monthly Journal of Art and Architecture
No. 410
November 1998

SD

5 **Special Feature:**

135 Outstanding Works of Modern Design

8
Toward the Origin or Original Principle: Beyond Legitimacy
Shukuro Habara

46
Interview: Tradition, Culture, Daily Life: On Design and Contemporary Society
Sori Yanagi
Interviewer=
Toshikazu Kawai

68
The Significance of Design
Angelo Mangiarotti

71
Designs of Porcelain from Now On
Chiharu Nagai

117
Message from 37 Years of Design Work in the Crystal Glass Industry
Saburo Funakoshi

130
Starting from White Tableware
Masahiro Mori

146
The Dignity of Originality
Toshikazu Kawai

40
White ceramic, White porcelain

Tea service/Kasimir Malevich
Tea service/Gertrud Vasegaard
Coffee service/Trude Petri
Tea service/Trude Petri
Cups and Saucers/Kaarina Aho
Coffee service/Stig Lindberg
Tea service/Ebbe Sadolin
Coffee service/Hermann Gretsch
Coffee service/Kay Bojesen
Tea service/Henning Koppel
Stone wear/Signe P. Melin
Coffee service/Heinz H. Engler
Coffee service/Kaj Frank
Coffee service/Raymond Loewy + Richard Latham
Stacking service/Nick Roericht
Coffee service/Timo Sarpaneva
Coffee service/Tapio Wirkkala
Tea pot/Sori Yanagi
Tea service/Walter Gropius+Louis A. McMillen
Coffee service/Heinrich Löffelhardt
Tea service/Hans T. Bauman
Coffee service/Grethe Meyer
etc.

77
Glass instrument

Tea service/Wilhelm Wagenfeld
Ink bottle/Wilhelm Wagenfeld
Wine Goblet/Josef Hoffman
Coffee Maker/Peter Schlumbohm
Water Kettle/Peter Schlumbohm
Tea Service/Heinrich Löffelhardt
Cocoa Pitcher/Wilhelm Wagenfeld
Tea service/Signe P. Melin
Glass service/Oswald Haerdtl
Decanter/Kaj Frank
Glass service/Angelo Mangiarotti
Glass service/Joe Colombo
Carafe/Timo Sarpaneva
Stacking glasses/Grethe Meyer+Ibi Trier
Crystal glasses/Roberto Sambonet
Glassware/Aino Aalto
Staakable glasses/Roberto Sambonet
Pitcher/Vicke Lindstrand
Decanter and Glasses/Tapio Wirkkala
Decanter and Glasses/Ettore Sottsass
Glass/Achille Castiglioni
Karafe with glass/Ingegerd Råman
Condiment set/Saburo Funakoshi
Goblet/Masakichi Awashima
Pitcher/Enzo Mari
Candle holder/Angelo Mangiarotti
Vase/Alvar Aalto
Pitcher/Henning Koppel
etc.

150	The Okoshi-e of Hiroshi Morishima: Forms of Japanese Tradition in Paper 11. Seven-Five-Three (Shichigosan) Festival	Hiroshi Morishima
153	"Museums of the World" Series: The Museum Transforms 13. Round-table Discussion: What Will the Art Museums of the Twenty-firstCentury Be Like?	
161	Book Information	
162	Book Review	
164	Metropolitan Library	Kayoko Ohta
166	News: Transcending the Dilemma of Europe: What Distance from Society Wrought	Mie Roth
168	News: The Place/Space or desire: Frederich Weissman Retrospective	Keiichi Ogata
170	News: Action to Revitalize City Centers	Kozo Goto
173	Announcements	
174	Topics Abroad: [Los Angeles] The Relationship between Disney Concert Hall and Philanthropy	Noriko Takiguchi
175	Topics Abroad: [Shanghai] A Guide to "Hai-pai Architecture"	Luo Zhong Xiao
176	Topics Abroad: [Rotterdam] Vision of Future: The Ambition of the Netherlands Architecture Institute	Moriko Kira

Chief Editor: Koji Aikawa
Associate Editors:
Mariko Terada
Shinya Takagi
Yumi Ohno
Rie Iizuka
Kazushi Takamori
Production Cooperation:
Takeshi Kuze
Kaoru Teshigahara/guild
Digital Studio SINKS

Publisher: Kanna Hirata
Executive Director:
Aiko Hasegawa

Published by
Kajima Institute Publishing Co., Ltd.
6-5-13 Akasaka,
Minato-ku, Tokyo 107-8345
Japan
TEL:
03.5561.2551 [Managemen
03.5561.2555 [Editing]
FAX:
03.5561.2561 [Managemen
03.5561.2565 [Editing]
TELEX:
02422467 KAJIMA J
Home Page:
http://www.kajima.co.jp/group/publish/index.htm

Printed in Japan

This Copy: ¥3,000
¥30,000 a year
¥50,000 two years

Order Form: Page184

Cover: Tea Pot "Tac I"
Walter Gropius+Louis A. M
Cover Photo: Takashi Chis
Cover Design:
Hitoshi Koizumi/NID

特集

「白」と「透明」の詩：

モダンデザインの秀作135

私達はさまざまなモノ——素材、機能、形、色、装飾、
などによる違い——に取り囲まれながら、
そのデザインに目を向ける機会が少なかったのではなかろうか。
今回はそうした生活に密着した多くのモノたち——コーヒー・サービス、ティー・サービス、グラス、ピッチャー、花瓶、灰皿など——の中から、「白」の陶磁器と「透明」ガラスのモノに焦点をあて、
その数135を一挙に掲載した。
ではなぜ、「白」と「透明」なのか。
それはこうしたモノたちが、素材の特性を生かした形や
そのデザインの純粋性、それぞれの持つ文化性、
つまり、デザインの原点を最も素直に体現しているからに他ならない。
そしてそこには、素材の持つ美しさ、造形の力強さを
感じずにはいられない。
さらには、そのそっと佇む姿には、創造心を心地よく刺激する
「白」く「透明」な詩(うた)が奏でられているのだから。（編）

135 Outstanding Works of Modern Design

掲載作家リスト

Achille Castiglioni——P.114
Achille & P.G.Castiglioni——P.113
Aino Aalto——P.104
Alvar Aalto——P.134
Angelo Mangiarotti——P.90、92, 93, 95, 122-127, 141-144
Arne Jacobsen——P.144
Axel Brüel——P.21
Dieter Sieger——P.65
Ebbe Sadolin——P.23
Enzo Mari——P.121, 140
Erik Magnussen——P.53, 63
Ettore Sottsass——P.112
Gerald Gulotta——P.58
Gertrud Vasegaard——P.14, 67
Göran Bäck——P.20
Göran Hongeli——P.103
Grethe Meyer——P.62, 100
Hans Harald Rath——P.85
Hans Theo Baumann——P.52, 57, 61
Heinrich Löffelhardt——P.7, 35, 54, 55, 80
Heinz H. Engler——P.36, 41
Henning Koppel——P.33, 89, 137
Hermann Gretsch——P.26, 27, 28, 29, 35
Hubert Griemert——P.60
Ibi Trier——P.100
Ingegerd Råman——P.115, 136
Jens Quistgaard——P.133
Joe Colombo——P.94
Josef Hoffmann——P.76, 77, 83
Kaarina Aho——P.20
Kaj Frank——P.37, 86, 87, 88, 105, 140
Kasimir Malevich——P.12, 13
Kay Bojesen——P.32
Louis A. McMillen——P.59
Luigi Colani——P.50
Mamoru Tojo——P.148
Marguerite F. Wildenhain——P.24, 25
Masahiro Mori——P.131, 132
Masakichi Awashima——P.118, 119
Nick Roericht——P.42, 43
Niels Refsgaard——P.133
Nobuhiko Motora——P.120
Oswald Haerdtl——P.84
Per Lütken——P.107
Peter Schlumbohm——P.78, 79
Raymond Loewy——P.38
Richard Latham——P.38
Roberto Sambonet——P.102, 106, 107, 121
Saara Hopea——P.85
Saburo Funakoshi——P.116
Setsu Ito——P.120
Siegmund Schütz——P.60
Signe Persson-Melin——P.34, 82
Sori Yanagi——P.48, 49, 145
Stig Lindberg——P.22
Sven Palm Quist——P.108
Tapio Wirkkala——P.45, 56, 66, 99, 101, 110, 111, 129, 138, 139, 147
Tias Eckhoff——P.40
Timo Sarpaneva——P.44, 97, 98, 128
Trude Petri——P.16, 17, 18, 19, 30, 31
Vicke Lindstrand——P.109
Walter Gropius——P.51, 59
Wilhelm Wagenfeld——P.72, 73, 74, 75, 81, 96
Wolf Karrangel——P.53

作品紹介に記載されている解説文は、下記の筆者たちに客観的説明だけでなく、むしろ各人の視点による主観的な意見を含めたものを執筆いただいた。

解説者：
河合俊和（T.K.）／建築家
川上元美（M.K.）／デザイナー
永井敬二（K.N.）／ケイ＆デザイン主宰
羽原肅郎（S.H.）／明星大学教授

撮影：
知識たかし
有川幸雄



Teacup 1957/Heinrich Löffelhardt/Vereinigte Farbenglawerke Zwiesel, Germany

原点あるいは原理をめざし
そして
超正統へ

羽原肅郎

原点あるいは原理をめざして

デザイン運動あるいは芸術運動，美術運動，思想運動，そして人間の生き方の運動といってよいのかも知れないが……，原点あるいは原理のようなものをめざした運動に，私は特に魅力を感じ感動する．例えば，古くは古代ローマやギリシャの彫刻も，そうかも知れないが，それはさておき，ある程度現代の実生活との関連をもって考えられる幾つかをここにあげてみたいと思う．既知の読者には申し訳とも思うが，私の復習と事跡の確認と認識のために諒解してもらいたい．

シェーカー教徒の思想とその家具や調度品

「教祖アン・リー Ann Lee, 1736—84 が神の啓示を受け，同志とともに1774年イギリスからアメリカに渡り，ニューイングランド，ニューヨーク市，オハイオ州およびケンタッキー州などに多くのシェーカーと呼ぶ宗教的共同体を建設した．そこの信者たちが彼らの日常生活で使うために製作した実用的で簡素な家具やストーブ，その他生活に必要な調度品を製作．19世紀初期から南北戦争(1861—65)頃までが教団の最盛期で，その時期に実用的な機能と素材で単純な形態とが融合して，直線的でシンプルなシェーカー家具を中心とした様式が確立した．」[*1]これらの家具，特に椅子，テーブル等は，使用目的のために素材をできるだけ少なくし，削れる所まで削り落して出来上がる美しさであった．

ルイス・サリヴァンの言葉

「形は機能に従う」という言葉を最初に聴いた時の感動を忘れることはできない．その瞬間に機能とは何か，と考えた．すると友人が，機能とは，基は医学用語であり，心臓や肺，胃や腸など人間あらゆる器官の働きを機能というのだと言ったのである．私はその言葉に更に感心したものだ．生きるために最も精巧に精緻に正直に働くもの．人間の身体こそ機能に従っているのだ．だから機能が完全に近い人間の裸形は美しいし，美しくなければならないと思ったものである．

シンプル・イズ・ベスト

「シンプル・イズ・ベスト」という言葉は，いつ，どこで，どの様にして私の中に認識されたか明らかではない．いつの間にか私に身についてしまっている．このたび，その起源を調べてみたが，結局何にも分からなかった．誰れか読者の中にこの言葉の由来等をご存知の方が居られましたらお教えいただきたい．難しいものを，難しく表現するのではなく，難しいものを，いかにシンプルに分かり易く，美しく表現するかが難しく，それが素晴らしい．

デ・スティールの運動

1917年，テオ・ファン・ドゥースブルフによってレイデンで創刊された同名De Stijlの雑誌をもとに展開された．デ・スティールとは「ザ・スタイル」であり「様式」であるが，そこに集まった建築家，美術家，デザイナーたちの活動は造形各分野の一体化を目指し，キュビスムの影響を受けながら，直線と直角と平面など単純な幾何学的形態の組合せより成る限定された純粋な抽象的造形，三原色(赤・黄・青)および白・灰・黒のみを使用するという限定された原点に向う造形を意図したと言ってよいだろう．それらはモンドリアンの絵画，リートフェルトの一連の家具や理論家でもあったヴァントンゲルローの作品に顕著に現らわれている．

コンクリート・アート

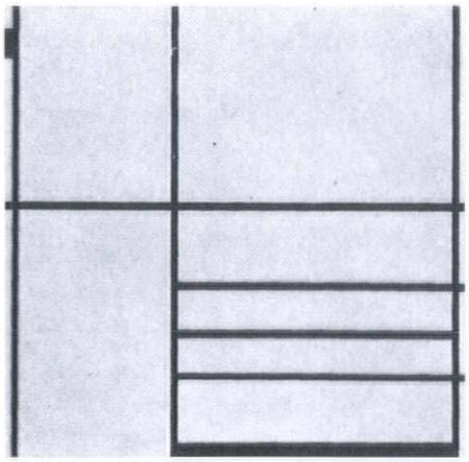
1930年デ・スティールの主導的メンバーであった，テオ・ヴァン・ドースブルクが同志と共に団体を結成して「アール・コンクレArt Concret」という雑誌発行と共に提唱した具体芸術である．その思潮は，マックス・ビルやリヒャルト・ローゼ等によって継承され発展し，1960年スイスのチューリッヒにて行われた「コンクレーテ・クンストKonkrete Kunst」展によって，世界的に認められる芸術の一派となった．グラフィック・デザインのチューリヒ派と呼ばれているデザイナーたちにも大いなる影響を与えた．

バウハウスの理念

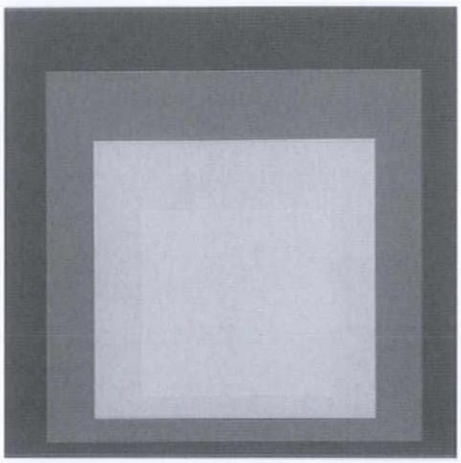
「バウハウスはひとつの理念である……ミース・ファン・デル・ローエ」(ジークフリード・ギーディオン著『ワルター・グロピウス』ラインホールド出版社，ニューヨーク，1954年から引用)，この言葉はハンスM・ウイングラー著『バウハウス』[*2]の冒頭に捧げられてある．カンディンスキーの『点・線・面』，『芸術における精神的なもの』，クレーの『造形思考』，『無限の造形』をはじめとするバウハウス叢書や，これらの教師陣から教ったマックス・ビルやヨゼフ・アルベルス，今，この号でも多数の作品を紹介する，ウィルヘルム・ワーゲンフェルトなどの作品はバウハウスの理念にもとづいて，それぞれの原理に向ったも

＊1：
「新潮世界美術辞典」新潮社版，1985年．

＊2：
「バウハウス」ハンスM.ウイングラー編著，バウハウス翻訳委員会翻訳，造型社，1969年．



ピエト・モンドリアン「コンポジション」1936年



ヨゼフ・アルベルス「正方形讃」1962年

のである. グラフィック・デザインでも, ハーバート・バイヤー(バイヤー論にアレクサンダー・ドルナーAlexander Dornerのthe way beyond"Art"「"美術"を超えて(超える道)」というのがある)の「ユニバーサル・タイプ・フェイス」もあらゆる要素を, より少なく, より合理的にして原点に向っている.

サンセリフSans serif体のアルファベット

サンセリフ体はわが国やアメリカではゴシック体とも言われている. 上述のハーバート・バイヤーの「ユニバーサル・タイプ・フェイス」もそうであるが,「スタンダードstandard」とも呼ばれている「Akzidenz-Grotesk」や「Futura」「Gill」「Folio」「Univers」「Helvetica」から「Rotis」へと続く, サンセリフ体の書体は, 天が創造した人間のコミュニケーション手段の印号として, 万人が共通に感受, 認識できる書体をめざしている. 願はくは, もし出来ることなら文字とか字体を感じさせないで, 伝達すべき内容だけを, 確実に伝られることを目的としている.

レス・イズ・モアー

レス・イズ・モアーはミース・ファン・デル・ローエの理念として, 彼の造形に集約される言葉である. いろいろの訳があるが「『少ないほど豊かになる』構造的に機能的に最少限の材料を造形物構築物の形態的な要素に整理統一し, それらだけで一定の秩序を求め, 最大の効果をあげることである」*3が私の最も賛成する解釈である. 彼はこの言葉の以前, 1929年バルセロナの世界博覧会・ドイツ館を設計し,「バルセロナ・チェアー」を展示した. その時『ほとんどなにもない』という言葉を発している. ローエの前期の絶頂を示すこの作品, 誰れもが認める今世紀における最も大きな影響を与えたものに, 彼は自ら言っているのである. この頃から既にローエの中には「レス・イズ・モアー」の精神が宿っていたのだろう. モダニズムの造形の均質性とその奥に蓄積され, 研磨された古典主義的な構築の秩序を超克すべく自分の最高の精神の実践である. 70年代になってポストモダンの潮流によって"Less is Bore"と言う言葉を浴びた. しかし,"Less is More"は不動である. それは何よりも原理にそして原点に向っているからである.

マシン・アート展

ニューヨーク近代美術館は1929年の開館である. 開館してわずか2年目には「国際様式の建築1922年より　The International Style: Architecture since 1922展」を開催. 1934年には「機械美術Machine Art展」を開催している. 今まで, 応用美術Applide artsとか言って, いわゆる純粋美術と別扱いされていたものに新しく光を当て, 建築的なもの、デザイン的なものをアートの仲間に入れたのである. マシン・アート展に出品されたものの中には, ボール・ベアリングやプロペラ, そして, フラスコやビーカーや蒸発皿が入っている. 普通なら……空気のように, 意識しないもの, デザインの必要のないもののように思われるものである. しかし, それが, そうではないのである. この一見必要ではないのではないかと思われる科学の実験用器具や用品の中にも, 為さねばならないデザインがあるのである. 現在, 実際に販買されている, これらの製品(用器具)の各社のものを, 全部揃えて, 並べ, 各々を比較して見るとよい. 微妙なる形の違い, 質の違い, 厚さの違い更には目盛や数字の入れ方, その印字・タイポブラフィーの完成度, メーカーのマークの形や色彩などが, 違うのである. そこにはどれだけ機能に則して原理に向っているかが問われているのである. 自然の節理, 自然の結晶, 自然の秩序と同様の質と形が要求されているのである.

ル・コルビュジェの『今日の装飾芸術』

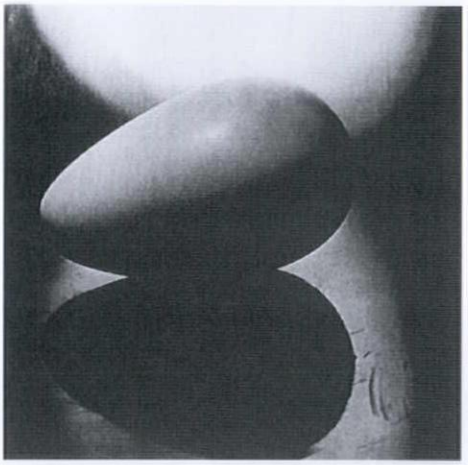
「今日の装飾芸術は装飾をもたない. しかし, 人は装飾は人生に必要であるという. 私はこれを次のように言い直したい. 芸術が人生に必要である. 芸術とは人間を向上させる無償の情熱である. 無償の情熱と効用的必要とを画然と区別さえできれば事態はすべて明確となる. 人間の効用的必要のもとめるものは, インダストリーにおいて実現された完全さのような成完された道具である. この必要を充たすことこそ実にこれまで装飾芸術と呼ばれてきたものの本格的な素晴らしいプログラムである. 構想の洗練と, 仕上げと, 実用能力との純粋さによる真の贅沢および完全な効用価値をもつ実用品が日々インダストリーによって生産されている. 工業製品におけるこの合理的完全さと, それが創り出される過程における正確な決定は, それらの生産品の相互間におのずから強固な連帯を創造し, そしてこの連帯こそが一つの様式を決定する」.*4

「建築に何故の装飾ぞ！　時代の保証によって価値づけられた難かしい, そして壮麗な大作品も, 勿論建築であろうが, 小さなあばら屋も,

*3:
「現代建築事典」浜口隆一・神代雄一郎:監修, 鹿島出版会, 1972年, 傍点部分は筆者.

ABCDEFGH
IJKLMNOPQR
STUVWXYZ
abcdefghijklm
nopqrstuvwxyz
1234567890

H.Berthold AG「Akzidenz-Grotesk, Standard」1898年



コンスタンチン・ブランクーシ「世界の始まり」1920年

数学的均衡を満足する様な幾何性を持ってさへ居れば，一つの立派な建築となり得るのである．かくの如き遍歴の後，私の装飾に対する尊敬は一度にその地位を失墜してしまった．私はかつてオペラコミックの舞台に装置された滑稽な各国の様式の実物を見学するために各地を歩いて廻った．しかし，この旅人の心を動かすものは，ついに装飾物ではなかった．」[*4'] 例えば，上記のように，『今日の装飾芸術』において「いわゆる装飾的なもの」を否定している．飾けのない機能を最も重要とした機械，飛行機，船，旅行カバン，ビンやコップ等を引用しながら結局は「装飾のないのが，今日＝現代の装飾芸術だ」「装飾とは装飾を廃除することだ」と告白し結論しているのである．「純粋な合理的な形――構造をもった造形，自然界の動植物＝生物の生理を内蔵した外形と外観，また宇宙の秩序，例えば，太陽系の惑星とその軌跡という公理にあるいは真理に感動することを『今日の装飾芸術』の中で執拗に主張している．

宋の壺

「宋の壺があった．私もかねがね多くの人と同じように，陶磁器は宋，世界中でこれにかなうものはない，と漠然と思って居たが，その日程，明瞭に，この事を痛感したのは稀れである．文化とはこんなものだな，と実は私はその時ひそかに独語した．その壺には文様があった．勿論文様があるから美しかったのではない，宋の陶磁器の偉大さは，文様のあるものも無地のものほど美しく，無地のものも文様のあるものほど美しい，と言える點だと思う．文様をつけなければ美しそうになれない陶器なら，文様をつければ一層醜くなるだけだろう．また無地だから美しいので文様をつけたらその美が損われるようなものも，ほんとうに美しいのではない，と私は信じて居る．自然は，どうだろうか？」[*5] これは，長谷川三郎の文章である．文様すなわち飾りのある壺をみて，文様のない壺を連想しているのである．もし文様があっても，神が創った自然界の一見自由に見える中の，各々に生命が通じた生きている文様でなくてはならないと言っているのだろう．そして，それは文様ではなく文様を超えた無地に等しく，もしまたそうでなければ無地の上に咲く花だと言うのである．花は植物が，生物が持続する原点である．

茶の諸流，その道具と精神

利休から始まる茶の諸流と，それらの道具と精神が，原点に向っていることは自明の理であろう．

ヘルムート・ニュートンのヌード写真

H.ニュートンの写真には，同じ場所，同じ姿態で，「衣装をつけたもの」，「衣装をつけない全裸のもの（靴は必ず履いているのだが……）」を撮った写真が数多くある．

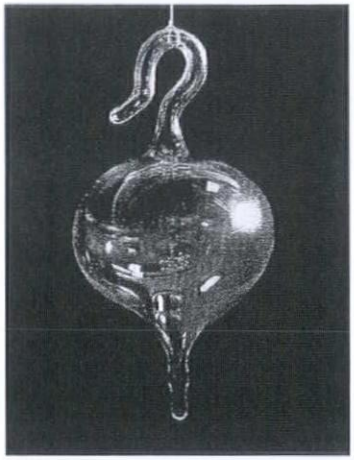
なぜ，衣装をつけないヌードまで，撮るのだろうか？　ファッション写真ならば衣装をつけたものだけで十分ではないか．しかし，H.ニュートンにとってファッション写真もそうではなかったのであろう．衣装の内にある見えない所の人間を使用した，衣桁の表面・骨組から芯まで本ものの美しい，純製のものであることを証明したいのではないだろうか．それらの中でも特に私が注目したのは「4人の女性が一緒に，しかし相前後して向って来る」写真である．衣装をつけたものも，ヌードのものもモノクローム写真である．各々衣装の違いは勿論であるが，裸形の相違が見事である．金髪と予想される細いしなやかなロングヘヤー，栗色の豊かな丸形の髪，断髪にして男のように分けている髪，濃く，硬く，多そうなちぢれ毛．小さく淡い乳輪に尖った乳房，大きな乳輪に豊満な乳房，等々人間のあらゆる場所，あらゆる気管が同じものは一つも無いのであるが，それぞれが機能をもっている．その機能が完璧であればある程，それは美しいのである．フォルム・フォローズ・ファンクションの出発点はここにもある．この違っている形・色・テクスクチュアー等々，そして違っている視線，しかし，それぞれが同じ機能と目的をもちながら，この4人は原理に向って，原点に向って，最も原始的な健康な姿態の全てを見せて，ゆっくりと静かに悠然と歩いて来る．

バッハの音楽

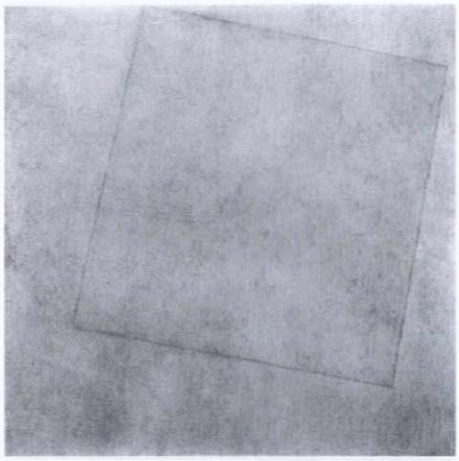
バッハは自然界の音を模倣するのではなく，音を音として認識させること．人間が生み出した新しい音を，自然界の秩序や法則や原理と同じ様な力と美しさをもつものにしようとしたのではないだろうか．その意義では，色や形の基本的な関係を追究した，バウハウスやデ・スティールの人々と共通した，原理を解明し，創造しようとするテーマに向ったと言ってよいだろう．一つの種によって変化し生成し実って，

＊4，＊4'：
「今日の装飾芸術」ル・コルビュジエ著，前川國男訳，構成社書房1930年，鹿島出版会1966年，傍点筆者および部分的に筆者が変更．

＊5：
「宋元花鳥画漫語」長谷川三郎，「三彩」49号・臨時増刊，美術出版社，1950年．



マルセル・デュシャン「パリの空気」1919年



カシミール・マレーヴィチ「白の上の白」1918?年

成就して行く生物. 循環する太陽, 循環する春夏秋冬の様に, バッハの音楽にも, 一つのテーマが, ある秩序と法則をもって生成し, 数学的・力学的・均衡によって作られた音楽がある. 「ゴールトベルク変奏曲」「平均律クラヴァ曲集」「音楽の捧げもの」「フーガの技法」は単にバッハの脳裡に浮んで来るメロディーを格好よく並べただけではなく, 彼の思考や技法を駆使して, 自然の持つ秩序と節理と同等のものを創ろうとしたのである. 音とは何んだろう. バッハは人間が創った音で, 旋律と旋律の規則の美しさを教えてくれる. 自然の風が規則正しく旋律の様に吹く様…….

透明なガラスと白い陶磁器

本号に多数掲載した(ある部分に付属した金属や木材をのぞいてほとんどが)「透明なガラス」と「白い陶磁器」は, 前述のいろいろの物事よりも, 素材の数は少なく原料に近い人間の作り出した材料であるが, 原理あるいは原点に向っているのであろうか. それはこれらを見る人によって, それぞれ異るであろう. しかし, 少なくとも私達が編集部その他の協力者と共に集めた, そして集まって来たものたちは時には私達を黙らせた. そして, またそれらは長い時間と鍛練のような追究と謙虚さと誠実によって, 出来上っているであろうことを予想させた. 今回, これだけでも, 私達は学び取らなければならない.

これらは, 宮中やロイヤルの晩餐会で, 既に使用されているものもあるが, その他のものも素晴らしい役割と十全な機能を発揮するであろう. さらに芸術的センスのある人には、歓喜と感動の安らぎを与えるに違いない.

ここに, こうして手に取る様に, 臨場感をもって, 掲載している器具のほとんど全部が, 永井敬二氏の収集によるものである. その慧眼と情熱にも敬服し感激する.

これらはまた, 応用美術=アプライド・アートの範疇ではなく, ちょっと違った別のそれぞれの主義と思潮をもって, デザイン=計画, 設計されて生まれた結晶のようなものたちであると私は思う.

白と透明, 原点と原理などは, どのような関係にあり, どのような相違があるのだろう.

マルセル・デュシャンの「大ガラス」, 透明ガラスの変形したハートのような用器に入った「パリの空気」.

長さ1mの紐を水平にして1mの高さから, 3回くり返してできた3本の曲線を基にして定規にした作品「ストパージュ=三つの停止原基(器)」.

コンスタンチン・ブランクーシの白い大理石できた卵「世界の始まり」, 「鳥の習作」「カップ」「無限の柱の習作」.

カシミール・マレーヴィチの「白の上の白」.

北園克衛の詩「白」.

倉俣史朗の「ガラスの椅子, テーブル, 棚」.

ピーター・シュラムボームの「湯沸し器」「コーヒー・ポット」.

ウイルヘルム・ワーゲンフェルトのガラスの「ティー・ポット」.

「ティー・カップと受皿」「ミルク入れ」.

トゥルーデ・ペトゥリの白磁の「ティー・カップと受皿」.

……等々は.

ある時は前衛芸術として, またある時は造形の原点に向って, そして今「超正統的な造形」ということはできないだろうか.

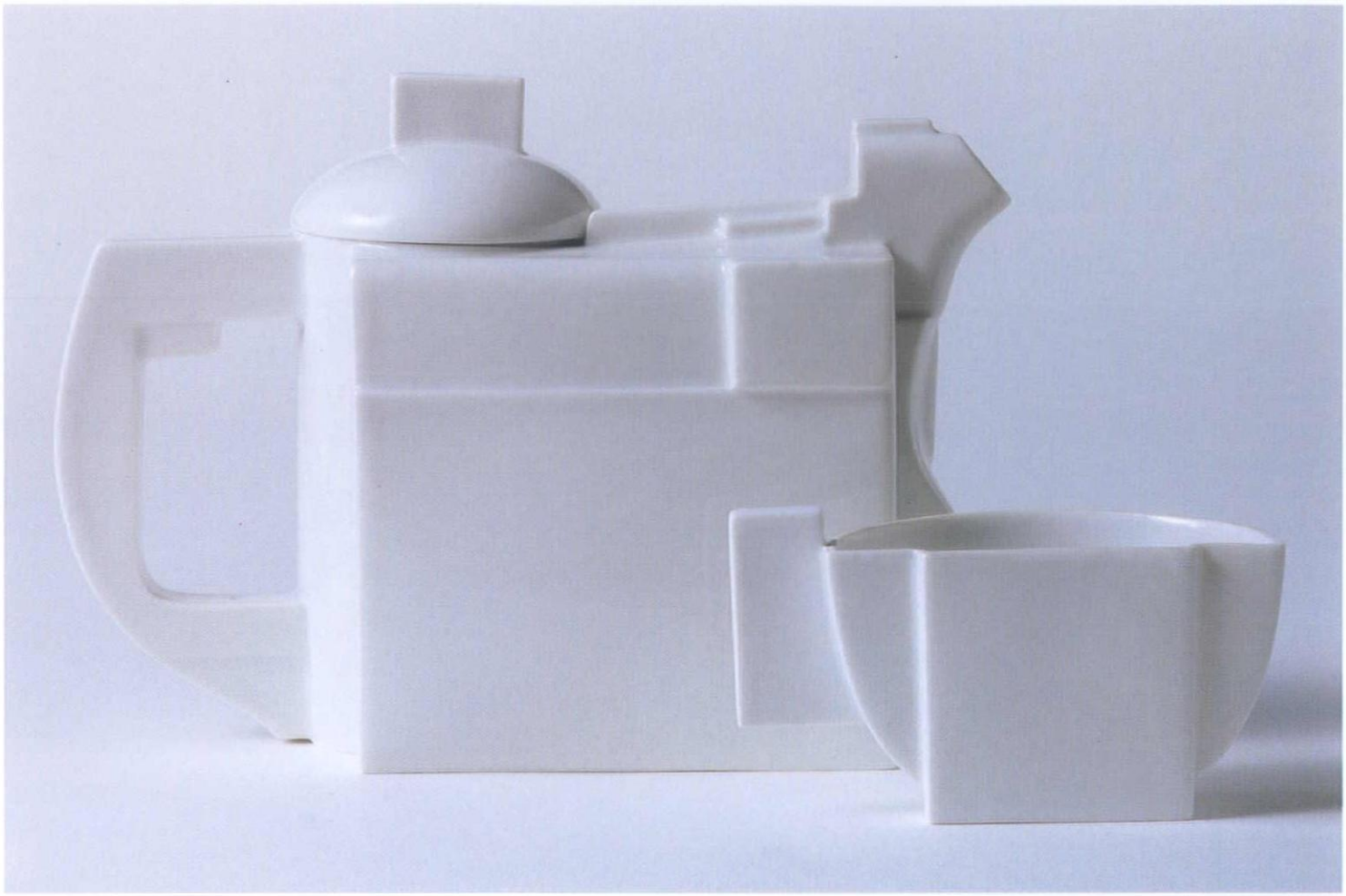
「超正統」とは次のようなものだと私は考える.

- 美しいこと. それはまず直観的に美しくなければならない.
- 知的であること. 機智や構造をもっていること. 自然の秩序, 法則, 公理の様な…….
- 祈りたくなるものであること. 神や仏の様な精神の安らぎと, 太陽の様な健康な光.
- 嬰孩性のあること. 子供が生まれて初めて笑う, 純粋な, 素朴な正直な, ユーモアがあること.
- 質が最も適切であること.
- 機能的であること. 上記の質と大の関係があるが, 目的に対して忠実で合理的であること.
- 愛らしいこと. エロティシズムまたは愛があること. 人間のあるいは生物全体の性や業に関する欲望的な魅力. 植物の花の様に.
- 新しいこと. いつでも新しく, 古くならないこと.

などである. 皆様のご厚情に満ちたご意見をいただきたい.

●はばら・しゅくろう／明星大学生活芸術学科教授

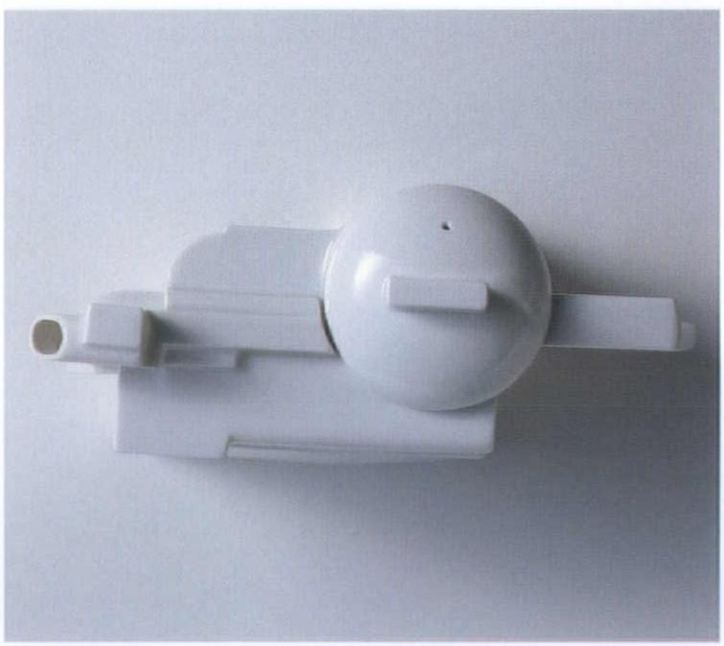




Tea service 1923

Kasimir Malevich

Staatliche Porzellarnmanufaktur Leningrad, U.S.S.R



ナイフで削ったクレイモデルに注ぎ口と握手を取り付けたような特異なデザインは、ロシアの構成主義のアーティスト、マレーヴィッチの作品。オリジナルはエルミタージュ美術館収蔵のものを含め、世界に2点といわれている。当時のものは、1923年前後にデザインされ、国立レニングラード製陶所で作られたが、何時まで作られたものか、幾つ生産されたかも定かでない。現代に蘇ったのは、1995年。ドイツのアンソロジー・カルテットという風変わりなインテリアメーカーが復刻させた。しかしである。私が写真のポットをパリのルーブル美術館にほど近いショップで求めたのはそれよりはるかに前のこと。メーカーの刻印すらない糸底を見ては、これはもしかして世界で3点目のオリジナルではと心時めかせている。だからという訳ではないが、この作品は、心和むティータイムにいい意味での緊張感を漂わせる稀有な存在である。(K.N.)

マレーヴィッチ（1878—1985）はキエフ近郊に生まれ、レーニングラードで歿。印象派、フォーヴィズム、キュビズムを通過して、1913年最初のシュプレマティズムの絵画を描き、「非対象の世界」を1928年バウハウス叢書の第11巻として刊行。この1920年頃デザイン製作されたこのティーポットとカップは誰もが想像しなかった形態である。カップの形もそれぞれ違っている。正に非対象の世界The non-object worldから生まれた非対称Asymmetryの作品である。(S.H.)



Tea service 1957

Gertrud Vasegaard

Bing & Grøndahl A/S, Denmark





Coffeecup "Urbino" 1934

Trude Petri

Staatliche Porzellanmanufaktur Berlin, Germany

トルゥーデ・ペトゥリ（1906—）によってデザインされたこの「ウルビノ」シリーズは、アルツベルグ社の「1382」シリーズと共に、近代世界陶磁デザイン界の先駆的製品として位置づけられている。ニューヨーク近代美術館は早くからパーマネント・コレクションにした。そして「茶碗として完全であるといえる。このシリーズの繊細な美は、把手の形によって補足されており、それは持ち易く、しかもカップやポットの形にあうように作られている。そのデザインは素材の精良な質を十分に利用し、その細部は明快である。このシリーズ全体が、近代的な白磁の正式ディナー・セットの模範といえる。」と述べている。(S.H.)



Coffee service "Urbino" 1934

Trude Petri

Staatliche Porzellanmanufaktur Berlin, Germany



Teacup "Urbino" 1934

Trude Petri

Staatliche Porzellanmanufaktur Berlin, Germany



Tea service "Urbino" 1934

Trude Petri

Staatliche Porzellanmanufaktur Berlin, Germany



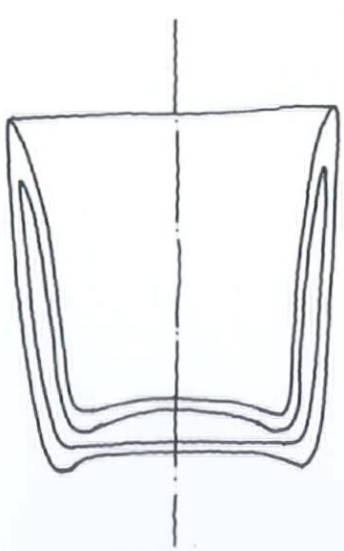




Cups and Saucers "DA-1" 1964

Kaarina Aho

Arabia, Finland



Coffee service "Thermodan" 1957

Axel Brüel

A/S Kongens Lyngby, Denmark

熱いコーヒーを飲むためのカップやポットにとって取手は必要不可欠なものである。この作品の特徴は、取手をなくしたことである。熱くても手に持てるように断熱性とさめにくくした保温性も兼ね備えた二重構造としている。素材は磁器である。そして手に持ちやすいよう、その中央部は膨らみをもたせ、かつ縦溝をあしらっている。機能性と共にそのフォルムとテクスチュアは非常に優美なものである。(T.K.)

Handleless Coffeecups 1964

Göran Bäck

Arabia, Finland



Coffee service 1948

Stig Lindberg

Gustavsberg, Sweden



Tea service "Form 18" 1932

Ebbe Sadolin

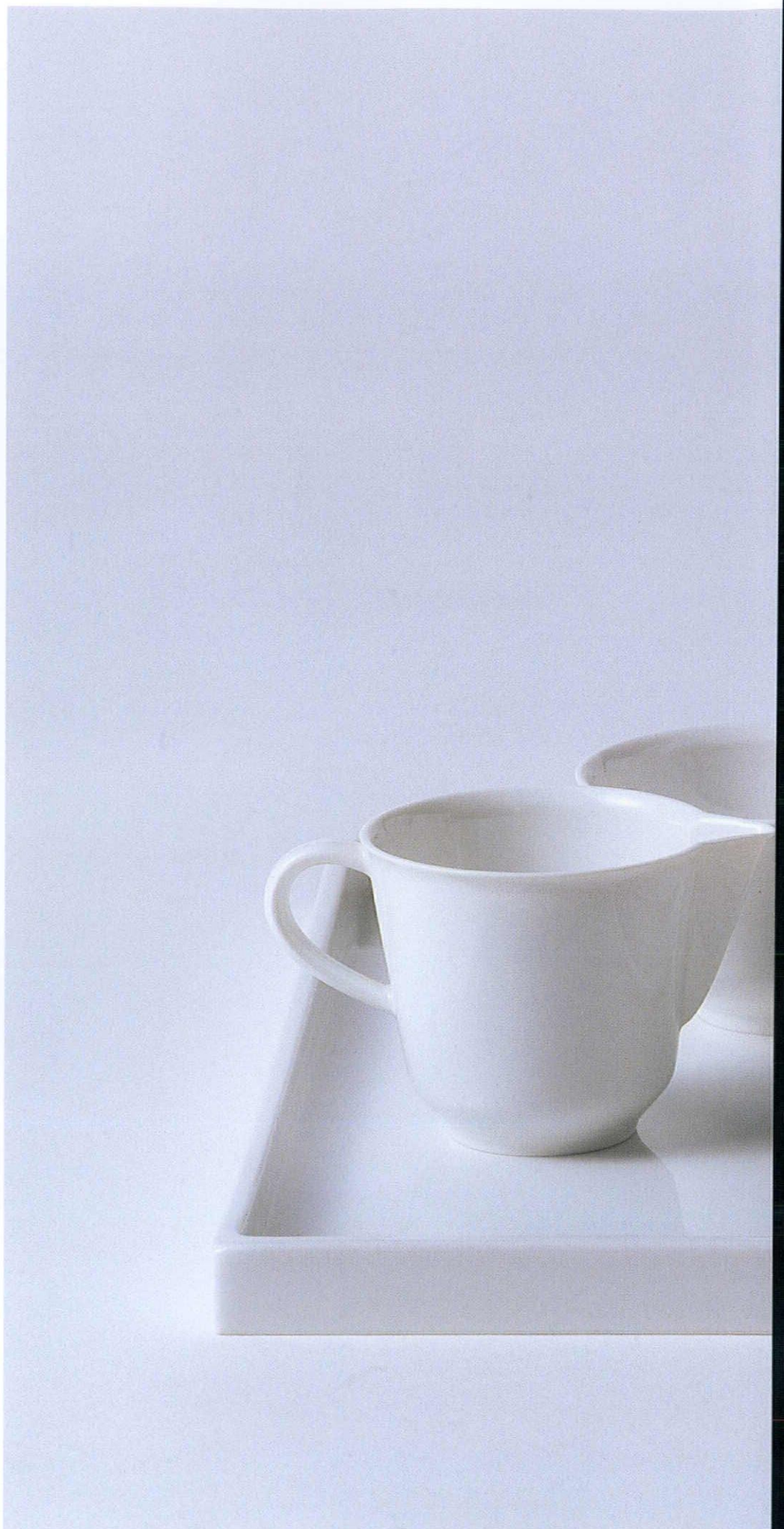
Bing & Grøndahl A/S, Denmark

Coffee service "Hallesche Form" 1930

Marguerite Friedländer-Wildenhain

K.P.M. Berlin, Germany

ドイツのハーレという町の美術学校のディレクターをしていた作者のデザイン。トレーに至るまですべて磁器でできている。この作品に限らず、色や模様は美しさを高めもするが、作品の本質を覆い隠しもする。このセットも白であるが故に、その「調和」を詠うものとなった。バウハウスを地下水脈とするデザインの流れが再び地表に現れたと見ることができる。(K.N.)







Tea service "Form 1495" 1940

Hermann Gretsch

Arzberg, Germany



Coffee service "Form 1495" 1940

Hermann Gretsch

Arzberg, Germany



Teacup "Arzberg 1382" 1931
Hermann Gretsch
Arzberg, Germany



Tea service "Arzberg 1382" 1931
Hermann Gretsch
Arzberg, Germany



Coffee service "Arzberg 1382" 1931

Hermann Gretsch

Arzberg, Germany

ヘルマン・グレッツェ博士（1895—1950）によるこの「アルツベルグ 1382」シリーズは“A shape that made history”として1936年第4回ミラノ・トリエンナーレ展で金賞を受賞以来、数々の賞を取り国際的な評価を得ている。エンジニアであり建築家でもあるグレッツェ博士の実用的で芸術性の高い無駄のない形が、トルゥーデ・ペトゥリ女史の「ウルビノ」シリーズと良い対照としてオーソドックスな形態の双璧である。また、アルツベルク社製品の全体が、1890年創業以来、ドイツを代表する陶磁器専門メーカーでフッチェンロイターHutschenreutherグループの1社としてモダンデザインのリーダーを目指している。(S.H.)



Demitassepot & Cup "Urania" 1938

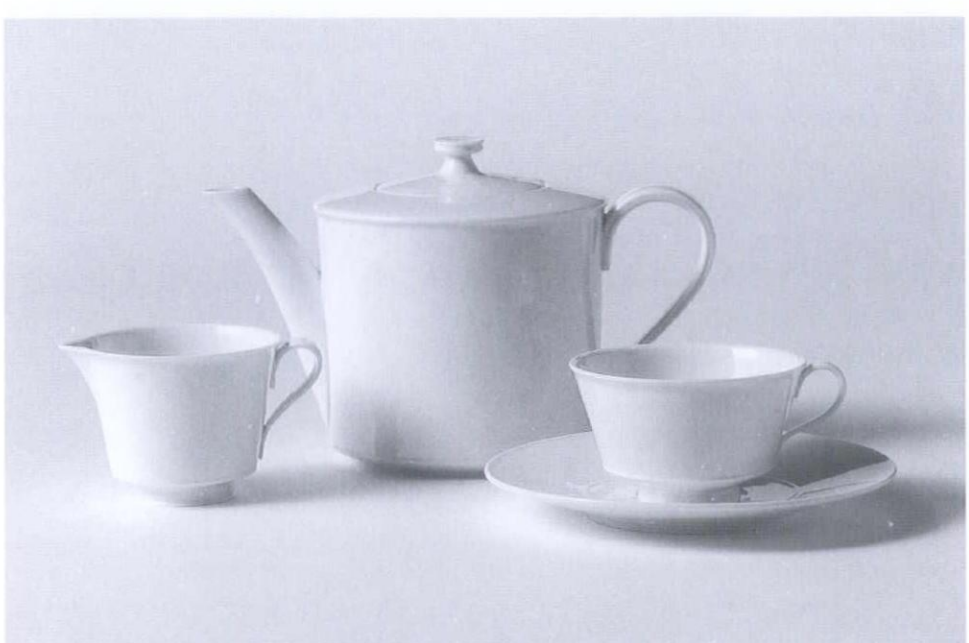
Trude Petri

K.P.M. Berlin, Germany

Coffee service "Urania" 1938

Trude Petri

K.P.M. Berlin, Germany



Tea service "Urania" 1938

Trude Petri

K.P.M. Berlin, Germany



Coffee service 1931

Kay Bojesen

Bing & Grøndahl A/S, Denmark



Tea service 1962

Henning Koppel

Bing & Grøndahl A/S, Denmark



Stonewear, Coffeecup 1972

Signe Persson-Melin

Boda Nova, Sweden

Tea service "Arzberg 2000" 1954

Heinrich Löffelhardt

Arzberg, Germany



Tea service "Form 98" 1936

Hermann Gretsch

Schönwald, Germany





Coffee service "Rustica Herdfest" 1959

Heinz H. Engler

Bauscher Weiden, Germany



Coffee service "Kilta" 1948

Kaj Frank

Arabia, Finland





Coffee service "Form 2000" 1954

Raymond Loewy, Richard Latham

Rosenthal, Germany

日本では、あの群青のパッケージが印象的なタバコ、「ピース」のデザインで知られるローウィのデザイン。今これを見ても実にモダーンなデザインだ。直線的なボディ部分と優美なハンドルの曲線が音楽を奏で、つんと突き出た取っ手が忘れ得ぬアクセントとなる。ローウィは、口紅から機関車に至る膨大な仕事を残した巨人だが、細部にまで手抜きがなかった事がこのポットのデザインを見ただけでもよく解る。(K.N.)





Coffee service "Regent" 1962

Tias Eckhoff

Porzellanfabrik Porsgrund, Norway





Teapot "Novum 65" 1958
Heinz H. Engler
Hutschenreuther, Germany



Coffee service "Novum 65" 1958
Heinz H. Engler
Hutschenreuther, Germany

Stacking service 1959

Nick Roericht

Thomas China and Crystal U.S.A., U.S.A.

ハンス・ロエリヒト（1932〜）はドイツに生まれる。このホテル用としての積重ね可能な食器は、1958年彼がウルム造形大学プロダクト・デザインの卒業制作・作品としてデザインされた。「この学科の教育目的は、日常生活、事務や生産の職場あるいは科学的な研究活動の場など、社会の諸分野で使用される物のデザインに置かれていた。その場合いっぽうでは製品のデザイン過程に包括されるすべての諸要因、すなわち機能的、文化的、技術的あるいは経済的な諸要素を統合する必要があり、また他方では、新しい有意義な使用方法を考案し決定していく必要があった。そのデザインの課題としては、個々の独立した製品が対象とされるのではなく、統一された製品像を提示する必要のあるひとつの製品群が、扱う対象とされた。講師：ビル、ボンジーペ、ギュジョロ、レオワルド、リンデンガー、マルドナード、ツァイシェグ」（現代デザインの水脈：ウルム造形大学展1989年カタログより）以上のような理念と講師陣から生まれた作品である。この様に美しく、整理・整頓されて完成した製品を見ると実に簡単なもののように思われる。本当に何百年も前から自然界が形成した結晶のようだ。ニューヨーク近代美術館のパーマネント・コレクションに加えられている。ロエリヒトは他にオトル・アイヒヤーたちとルフトハンザ・ドイツ航空会社のC.I.も行っている。

（S.H.）







Coffee service "Suomi" 1974
Timo Sarpaneva
Rosenthal, Germany

フィンランドは北欧の中でもとりわけクラフトとインダストリアルなデザインが融合してきた。モダン・デザインの軌跡を見るような、ティモ・サルパネバのグラスウェアとともに、彼のドイツ・ローゼンタール社で作られた、ふくよかで、スーパー楕円の形をした〈SUOMI〉シリーズは、タイムレスなフォルムであり、磁気としてホモジニアスで、品質の高い完成度を有している。同様のフォルムをし、これより先にデザインされたOPA社の一連のステンレス・ウエアは特に秀逸である。(また近年のガスラ塊の若々しく割られ、削られた彫刻は造型家としての新たなる境地を彷彿とさせるものがある)。(M.K.)

Coffee service 1979

Tapio Wirkkala

Rosenthal, Germany

戦後フィンランドのデザインでリードした、カイ・フランクやティモ・サルパネバと同世代で、ホエヤガラス、陶磁器に、北欧の自然風土が強くインスピレーションを得るが、本質的な素朴さや素材感を礎に、力強く、優しく、また詩情豊かに造形表現している。木の葉のような集成様のボールや氷ついた川面を写し取ったようなグラス等、深く心を射るものが多い。フィンランド人の素材や自然の形、空間に寄せる思いは、我々日本人に似ているといわれるが、それ以上に人と自然の絆は強いようだ。数多くデザインされたコーヒーカップの中でもこれは、ローゼンタール社の100周年を記念するものとして作られたものにココナッツのフォルムをモチーフにして、テクスチュアを馬糞ウニからメタファし、蛍焼のような薄く透き通ったエレガントな作品である。(M.K.)



安定性を保つため高台を3点支持としている。

インタビュー

伝統、文化、生活

デザインと現代社会について

柳 宗理

インタビュアー：河合俊和

コルビュジエ、瀧口修造との出会い

――今回の特集は、我々の身近な生活の中にあるコーヒーカップ、ティーカップ、ポットや花瓶などを通して、デザインするという行為の原点やデザインのオリジナリティの価値をもう一度見直そうというものです。そういう意味で、柳さんにはご自身にとって、デザインをするという行為の原点をお伺いしたいと思います。少し質問が抽象的ではありますが、例えば伝統や文化のこと、より具体的には素材に対して、あるいはデザインのプロセスなどもお話しいただけますか。

私は今、民芸館に関わっていましてね。小さい時分からこういうところに育ったものですから、美しいものとか醜いものとかに対しての感覚をしょっちゅう訓練されてきたんです。それでも年頃になると、やっぱり反抗期になりましてね。うちの親父のやっていることは何かかび臭くてこけむして古くてしょうがないんじゃないかと反発したこともあるんです。

その当時ちょうどヨーロッパからいろいろなアヴァンギャルドの芸術というのが入ってきて、ピカソとかダリとかシュルレアリスムの運動が入ってきて、そういうものがこれからの新しい美術の道が開けるのではないかというふうに考えるようになったんですね。私は勝手にそういう新しい前衛美術に突っ込んでいったんです。アヴァンギャルドの瀧口修造のことを僕はよく知っていましてね。瀧口修造のところに伺って、色々な新しい美術のことを教わった。あそこは実験工房といったかな。新しい音楽家とかいろいろな人が集まって来てね。それから新しいシュルレアリストの絵描きとかアヴァンギャルドの人たちが集まり、実験工房と言って、非常に活気を呈していたわけですよ。私もその中に入って、そっちの方に心が魅かれましてね。活動し始めたんですけれども、しばらくしてバウハウスから帰ってきた水谷武彦さんという方が、ある学校で建築の講演をしておられてね。その方の講義を聞いて非常に感激したんですね。バウハウスでは、これからの芸術は、人間の生活に準じた用途を志したものでなければ発展しないんだと。この話には非常に興味を持ってね。これは大変なことだと思って、その頃だんだん絵を描くのをやめてしまいましてね。同じ頃、前川國男さん、坂倉準三さんが、コルビュジエのところから帰ってこられてね。コルビュジエの思想をいろいろお聞きしましたが、その前にコルビュジエの本を見つけていましてね。その頃は図書を輸入するのが非常に難しかったけども、国会図書館で『輝く都市』という本を見て非常に感激して……。文章もすごいんだけどもいろいろな絵が書いてあるんですよ。それに非常に感激しましてね。これは大変だと思って、コルビュジエを理解するにはフランス語を勉強しなくちゃいけないって一生懸命読んだんです。でもその文章がまたものすごく抑揚が強くてね。センテンスが何もないんですよ、詩みたいな……。非常に感激しちゃってね。これこそ我が道を行くんじゃないかというふうに考えましてね。

それからブルーノ・タウトも、私の父のところへよく来ていたので少しは知っていましたけれども、やはり僕はコルビュジエにまったくいかれてしまっていましたね。また、昔のことですが、コルビュジエの協力者のシャルロット・ペリアンが来日した時に案内役を仰せつかり、その時ペリアンと長い時間を共有できたことは僕にはデザインについてとても良い勉強になり、深い印象として残っているんですよ。

ペリアンと日本の文化

――柳さんは当時ペリアンやコルビュジエとの交流を深める中で、彼等と日本の生活を通してみた、ものの造形とかデザインについてお話をされたことはありますか。

はい。当時は機械時代に入っていたと言っても、プラスチックのインジェクションの機械って日本に2台しかなかったのを僕は覚えている。それほどプラスチックなんてまだ普及してない時ですからね。だけども、そういう時にペリアンは本栖湖の浜辺にある部落を見てものすごく感激して、伝統的な人間的生活と、生活が必要とする生活空間というものに対してものすごく興味を持っていた。だから日本の伝統というのは日本人の伝統的な生活と、それを包む空間やその生活の態度。生活と空間と使うものとには非常に密接な関係をもつ。そういう伝統的な生活の中から生まれてくる良さ。そういう点で、日本の伝統に対して非常に興味を持っていたんですよ。だけど伝統はいくら素晴らしくても、それをそのまま真似てはいけないとしょっちゅう言ってましたよ。時代はどんどん変わっている。そして素材も、生活の様子も変わってくるから、やはりそういう伝統のあり方というものの基本的なものはしっかり土台に持っていて、それから新しいものへ進んでいかなくてはいけないということをしきりに言っていました。

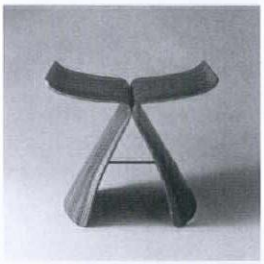
――ごく当たり前のこととして、自然との関わり合いのなかで哲学をお持ちなのだと思います。私も民芸館に足繁く通うひとりですが、やはり歴史を踏まえた上でものを見ていくと、そこには新しい素材の発見がありますし、それ以上にそのものの本質を見ることができ、それは非常に重要なことだと思っています。

民芸とデザイン

良い民芸というのはだんだん少なくなってきているけれども、それが生み出されたときはやっぱり使うために、人間の周りの生活のために作っているわけですね。だから別に職人は美しく作ろうとか考えていなくて、自然にそういうふうになっていくわけですね。だんだんそういう形になっちゃう。それがやっぱり民芸だと思うんですよね。

私も民芸のそういう自然になった形というのは、非常に重要なことだと思っています。伝統というのを別に意識したのではなくて、そういう生活の中からにじみ出てくる。長い間の歴史の中から出てきて、別にデザイナーがいいデザインしようとか芸術家が美しいものを作ろうとか、そういうものではないですからね、民芸というのは。やはりデザイナーというのが出てきた背景には、手仕事の時代から機械時代になって必然的に機械による新しい製品が出てきたために、そこにデザインというのが出てきたと思うんですよ。しかし近代のデザイン、


柳工業デザイン研究会にて


バタフライ・チェア

今のいわゆるインダストリアル・デザインは、そういう純粋なデザイン的な方向だといいんだけども、オーバープロダクションから出てきた言葉だと思うんですよ。世の中がだんだんインダストリアル化されて、今はオーバープロダクションの最たるものです。インダストリアル・デザインというのは、もともと非常にコマーシャライズされているものですね。最近は「インダストリアル・デザイン」と言わないんですよ。「プロダクト・デザイン」と言うんだね。その方がまだコマーシャルの響きがないですからね。

しかしプロダクト・デザイン自体の現状が非常に僕は怪しいと思うんですよ。今の状況に対してこれは大変だなと思うのは、現在は機械による大量生産だからなるべく人にたくさん消費させるためのデザインをする。浪費だな、ウェイスト・コンサンプション。すなわち、日本人に浪費させ、日本の経済を発展させなくてはいけない。また一方、アメリカはアメリカでもって、日本の内需を強めるというんでしょう。内需をこれ以上強めたらだめですよ。ものをどんどんどん作ってね。そして捨ててね。

そういうふうに、ものを生産することが経済。機械によって生産品が多量に出るので、その製品をはかせるために次々と目新しいデザインをする。経済が繁栄して、ものが増えれば増えるほど繁栄して、そして人間の幸福はそこにあるんだというふうにみんなは思っているかもしれないけど、そうじゃないね。僕はまったく今や大変な時代に突入していると思うんですよ。なにしろオーバープロダクション。本当にごみの捨て場がもうないじゃないの。だけども今経済を発展しようとか何とかやっているでしょう。あれも僕は良くないと……。そんな発展じゃなくて、目先だけの経済だけでじゃなくて、本気に地球自体のことを考えてやればいいのにと思うんだけどね。

――経済のことは議論しますけれど、日本の文化のことは何も議論しないですね。

僕は戦争中は戦争に行ったんですよ。戦争に行ったときにはやはりいつ死ぬかわからないからね。死ぬ時はコルビュジエの本と一緒に死のうと思った。それからやっぱり戦争中の戦友というのは互いに助け合ってやるという。だからいつ死んでもいい覚悟があったけども、その時は何か今みたいに変なモヤモヤした圧迫感というのはないね。今は何かモヤモヤしていてね。地球がだめになる。

デザインと現代社会

――社会としても人間としても、具体的なベースがあって思考し、行動しなければなりません。現代の日本においては、そのベースが希薄なように感じます。建築家やデザイナーはそれを本来つくっていく職能を担っているはずなんですが、ただつくって壊してという。

そうです。だからデザイナーもみんな流行とか何とか言って。僕もへそ曲がりかもしれないけども、流行と闘うところにデザインがある。

――これからの時代をどうするべきか、現時点で柳さんがお考えになっていることやさらに若いデザイナーや建築家に何かメッセージはありますか。

今の経済界や社会というのはあまり良くないね。今の政治家が悪いというよりも、やっぱり資本主義というのは良くないような気がする。せっかく一生懸命やっていて、資本家がみんなうわべの利益だけ持っていってしまう。僕は専門家ではないからよくわからないけども。それからさっき言ったように、ものをたくさん作れば作るほど経済が繁栄するという考えは良くないように思いますね。それからポストモダンに対してね、一時ほど議論されなくなりましたけれど、僕もポストモダンというのはやっぱりアートフォアアートでね。芸術のための芸術で、ちっとも人間生活を豊かにしてないと思うんですよ。

――何か柳さんのデザイン活動を通しての原点をお話いただくことが、次の時代のキーワードになるような気がします。

しかし僕もそう言っているだけで、ちっとも役に立っていないような気がするね。だけど、ものを作るのは好きだからね。これは止めようがない。一生懸命作っていますけどね。あと能力ないですよね。ときどき文句を言うぐらいで。

〈バタフライ・チェア〉について

――具体的なデザインの話をお伺いしますが、柳先生の〈バタフライ・チェア〉を学生時代に初めて見た時、私にとっては衝撃的だったことを記憶しています。あの形と構造です。あの形が出てきたという瞬間は、どういうとこからなのでしょうか。

あれは色々と模型を作りながらさまざまな形を考えていったんですよ。材料をいじりながら考えていくと、必然にああいうものが出てきちゃったんだね。いろいろと検討していくうちに、腰掛けるようなイメージが湧いてきて、それをどういうふうに椅子として成立させるか。昔の日本は床が木とかコンクリートじゃなくて畳のわけだから、床を傷つけないようにということで、ああいうふうにだんだん出てきたんですよ。別にどうってことないけどね。

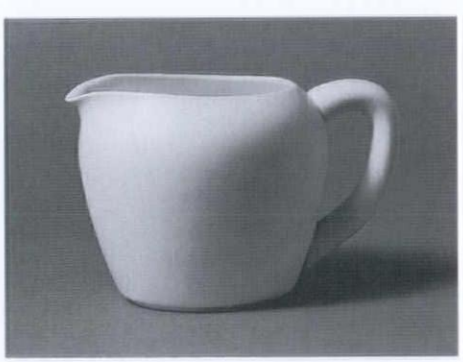
――同じ形をした成形板をお互い合わせて、それが座ることによって開くから、それを抑えるために引っ張ると。すごくシンプルなデザインで、これ以上何もしようがないという驚きがあります。

しかし非常に形が難しいんですよ。最近になってだんだん気がついてきてね。あれまだいろいろいじっているんですよ。このオリジナルタイプのものは、実は今ではスイスでこしらえているんですよ。

――ひとつのもののデザインについてずっと続けているというのは、素晴らしいことですね。楽しいお話しをいろいろとありがとうございました。

（1998年8月24日　於：柳工業デザイン研究会）

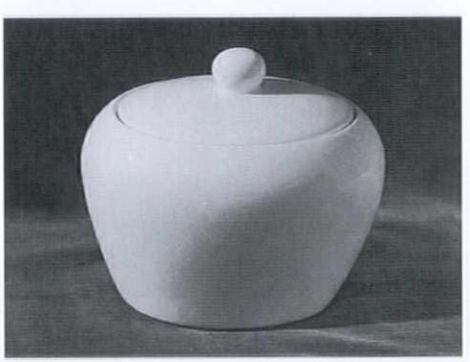


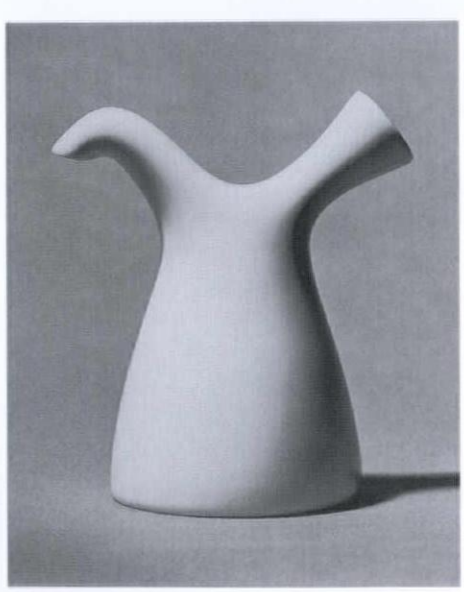


ティーポット　1948
柳宗理
松村硬質陶器、日本

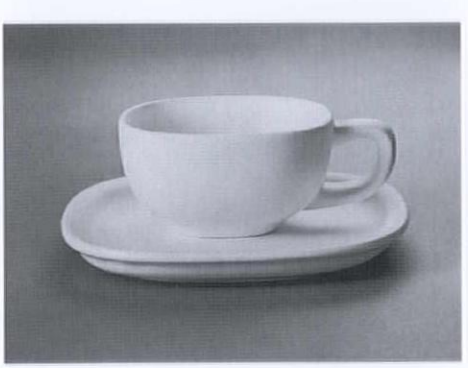
シュガーポット　1948-50
柳宗理
松村硬質陶器、日本

クリーマー　1948-50
柳宗理
松村硬質陶器、日本





コーヒーカップ＆ソーサー　1982
柳宗理
加正製陶、日本



醤油さし　1956
柳宗理
多治見陶磁器試験所、日本

白磁土瓶 1956
柳宗理
多治見陶磁器試験所、日本





Tea service "Drop" 1970
Luigi Colani
Rosenthal, Germany





Tea service "Tac I" 1968

Walter Gropius, Louis A. McMillen

Rosenthal, Germany

バウハウスの校長も務めた建築家グロピウスのデザインした唯一の食器。紅茶のセットは現在まで作り続けられているが、コーヒーセットの方はわずか2年しか生産されなかった。どうしても焼成の段階でハンドルの部分が取れて裏れてしまうためであったという(p.59参照)。これから仕事に出かけようとする朝の食卓と、午後の紅茶の時間。テンションの違いを具現したデザインは作者の心まで映しているようだ。ちなみにティーポット、クリーマー、シュガーポットそしてカップまでフォルムのモチーフは統一されており、カップは逆さにして伏せてみると、なだらかなカーブから取っ手の付き具合までポットと同じ姿となる。

(K.N.)







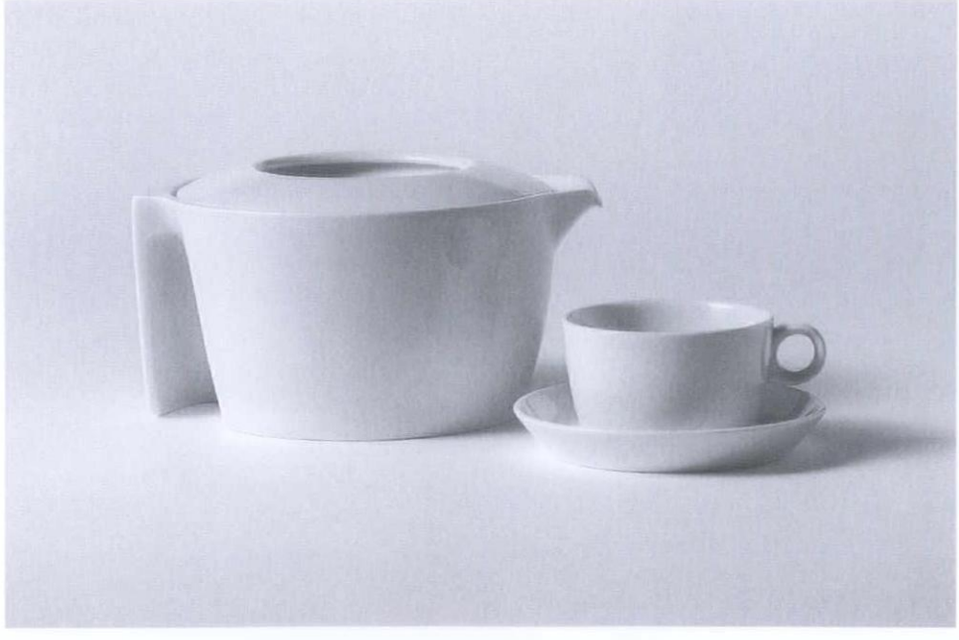
Tea service "Brasilia" (Form 5500) 1971
Hans Theo Baumann
Arzberg, Germany



Tea service "Tavola" 1969

Wolf Karnagel

Hutschenreuther, Germany

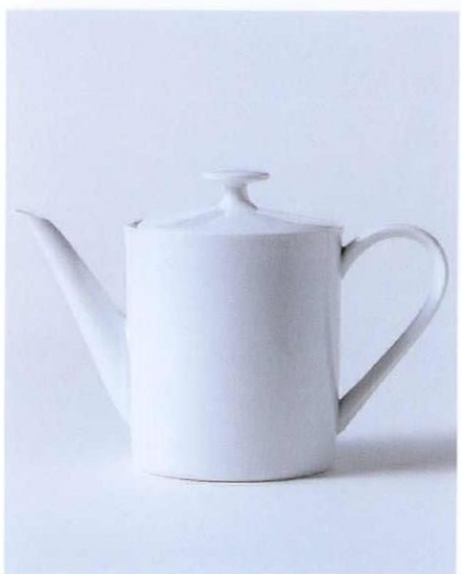


Coffee service "Form 679" 1963-65

Erik Magnussen

Bing & Grøndahls Porcellaensfabrik, Denmark





Coffee service "Arzberg 2050" 1959
Heinrich Löffelhardt
Arzberg, Germany

Teapot "Arzberg 2050" 1959
Heinrich Löffelhardt
Arzberg, Germany



Coffee service "Schönwald 511" 1958

Heinrich Löffelhardt

Porzellanfabrik Schönwald, Germany



Coffee servise 1962

Tapio Wirkkala

Rosentahl, Germany

Tea service "Thomas Medaillon"
(Form 10700) 1961

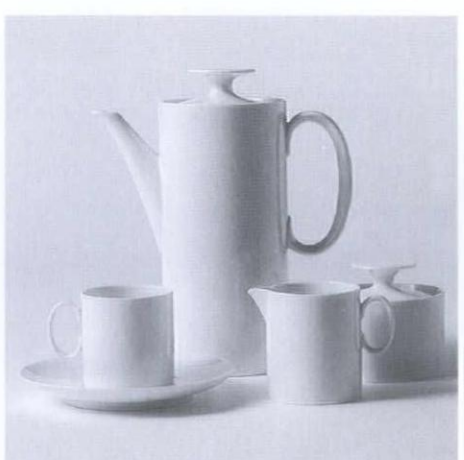
Hans Theo Baumann

Thomas Glas und Porzellan AG, Germany

Coffee service "Thomas Medaillon"
(Form 10700) 1961

Hans Theo Baumann

Thomas Glas und Porzellan AG, Germany





Coffee & Tea service "Transition" 1968

Gerald Gulotta

Porzellanfabrik Langenthal AG, Germany





Coffee service "TAC II" 1969
Walter Gropius, Louis A. McMillen
Rosenthal Studio-Line, Germany





Tea service "Circle and Oval" 1963

Hubert Griemert, Siegmund Schütz

K.P.M. Berlin, Germany

ポットの蓋と底の部分は円、それを結ぶ中心の部分は楕円である。いわば普通に始まって普通に終わるストーリーの只中に、ある種の異端を出現させた悪戯心がこのセットを「普通」ではなくしているのだ。デザインは1963年と比較的新しいが、現代の感覚では、新しくて古く、古くて新しく見える。この事が時を超える術なのではと思えてくる。(K.N.)



Tea service "Berlin" (Form 13000) 1958
Hans Theo Baumann
Rosenthal, Germany







Coffee service 1973

Erik Magnussen

Bing & Grøndahl A/S, Denmark

Coffee service 1973

Erik Magnussen

Bing & Grøndahl A/S, Denmark



Coffee service "Blue line" 1962

Grethe Meyer

Königliche Porzellanmanufaktur
Kopenhagen, Denmark

Bowl "Blue line" 1962

Grethe Meyer

Königliche Porzellanmanufaktur
Kopenhagen, Denmark





Coffee service 1994

Dieter Sieger

Arzberg, Germany



Teapot "CULT"（Form 9400）1994

Dieter Sieger

Arzberg, Germany

恐らく本誌で紹介された作品の中で最新であろう1994年のデザイン。私はバウハウスとそれに連なる人たちが現在に蘇ったかのような軽い衝撃を受けた。部分的に直線で切り取られたエッジが印象的で、作者が只者ではないことを雄弁に物語っている。私はこの作者の受けた教育や環境がどの様なものだったのか興味津々である。（K.N.）

Tea service "Century" 1968

Tapio Wirkkala

Rosenthal, Germany



Tea service "Capella" 1975

Gertrud Vasegaard

Royal Copenhagen Porcelanfabrik, Denmark



デザインの意味

アンジェロ・マンジャロッティ

工業デザインの近年の潮流を振り返ってみると、デザイナーとしての我々の成果品は明らかに無秩序、無指向、無責任そのものを呈している状況と言って良いだろう。それは我々全員が巻き込まれている出来事であって、だれか特定の人物を指して言っているのではない。デザイナーであると同時に知識人として、我々の社会的な地位は、日常生活に具体的に貢献することによって成立している。デザイナーの有要性には疑問の余地はないにしても、その機能を果たさないならば、何も生み出さない者と言われても致し方ないであろう。

日常生活を賑わせる数々の物に関わる状況に目を向けると、デザインがこれほどまでに無指向で耐えがたいものであったことはこれまでにもないだろう。我々はどんな窮地に追い込まれているかを認識し、解決策を見出さねばならない。人間の創造力を開花させるためには、デザインが本来もっている解放する機能を裏切らず、うってつけの道具であるという具体性を表現するような、新しい工業デザインのコンセプトを見出さねばならない。こうした意味において、形態、機能、素材こそが工業デザインへの正しいアプローチと考えて良いのではないか。

デザインは工業化時代以前から、そしてすべての文明社会に存在していると言うことができるが、デザインという言葉を使うときに、それが一体何を意味するのかを説明せねばならないし、デザイン・コンセプトを提案してゆくための条件を確立せねばならないだろう。

その第一の条件とは、こうあるべきと考えられていることに役立つ計画であることであり、第二の条件は、何のためにどのように使われるべきであるかが表現されていることである。このふたつの基本的な条件こそは、今日のデザインが正しいかどうかを疑う根拠となるものである。実際問題、特に近年では、多くのデザインされた物が私の挙げたふたつの条件を満たしていない。もしこうした逸脱した道が将来、デザインの主流になるとしたら、日常生活の質を保証する積極的な活動が理解不能になってしまうことは明らかである。今日の流行デザインのほとんどは、物の機能的な性格を「装飾的な意味」へと置換しようとしているようである。私が主張するのはむしろ、デザインが生き残っていくために、物や製品それぞれが本来尊重されるべき素材感や機能によって即座に理解されるようなデザインの方向性を取り戻すべきであるということである。今や貧弱な技術や不完全なデザインは、垂れ流した装飾によって隠蔽されているのである。しかし装飾は、装飾自身のために使うことはできない。装飾が素材や機能から発生する意味の構造によって生まれることは決してないからである。従ってデザインの問題は、常にそれ自体を十二分に表現する可能性に関することにある。このような観点からすれば、デザインは幾何学や数学、生物学などに比肩されるものであり、あるいは科学的な社会での相互交流から生まれ得る創造的な行為でもあるのである。

従ってデザインは、近年の流行が言うような、絵画や彫刻、文学、詩に並び称されるものではない。一般的には、創造物自体は創作者とは不可分であるからそれだけを個別に評価することはできないなどと思われているようだが、逆にデザインは製品へ、現実に対してできるだけ客観的な力を与えるように務めねばならない。デザイナーの特別な感性や抽象的な構想力を発揮する能力などが常に物につきまとうというようなことはあり得ないのであって、良いデザインとは現実にその基本を置いているものであり、そこには感性だとか直感だとかいうものは何の関係もないのである。

その過程では、無定形の素材に、素材の性格に由来する形態を与えねばならない。鉄、木、プラスチック、陶器、銀、ガラスなどは形態的な性格だけでなく、それに内在する物理的、化学的性質や、表現の可能性、その素材に関連する技術なども考慮せねばならない。陶器の花瓶をデザインして、それをそのままガラスで製作することはできないのだ。それは陶器とガラスにある固有の差異を理解していないということであり、デザインの基礎を理解していないということである。言い換えると、物質の客観的な性格とデザイナーの個人的な創造力とが対等な役割を演じるようなデザイン手法を提案したいのである。

こうした関係性にあっては、素材は克服すべき障害でもなければ、デザイナーの意図と戦うべき要素でもない。むしろデザインの起源、出発点であり、アイデアや着想に満ちた参照資料である。同様にデザイナーは常に素材の有りようを通訳しているのであって、それは即座

に生み出されるようなことのない、計画から次の計画へと更新していくような辛抱強い研究と実験によって発見され、理解されるような行為なのである。つまり、素材の客観性と創造的な発明との間に潜む境界上に物は生まれるのだ。

たとえ同じ素材と同じ技術を組み合わせても、異なる計画では全く異なる形態を呈することとなるのである。たとえば、ダネーゼの灰皿に使った「ヴィツェンツァの土」と呼ばれる粘土は、リチャード・ジノリのティーポットに使った陶器にとって、素材がそれぞれの性格を決める要素になってはいても、全く異なる意味を持っている。同様にデザインあるいは計画の詩情が絶対的な教条を表現するようなことはなく、使われた素材の特徴に基づいた表現となっているだけである。こうした意味において、偏った判断は存在しない。クリスタルガラスの流麗さを強調するように曲がりくねった形態をした〈ビブロ〉(p.91参照)は、工業デザインの典型的な人間工学的手法を用いて表現した有機的な形態の〈エルゴノミカ〉のセットとともに並存することができる。それはすべて、デザインの同一性の内側にある出来事でしかない。

現代社会の性急さ、政治、社会、経済的な価値のめまぐるしい変化に直面すると、過去に発達した現実を解釈するための教条的な構造を持つ理論は、少なくとも新しい時間の枠組みの中で、現代社会で個を表出するような学習と吸収を素早く行なうことによって、見直され、改変されようとしているのである。つまり、物そのものから考えるような計画をデザイナーが始めるのは不可能になりつつあるのだ。その代わり、状況に直面したときに自分の意のままに操れる意味、言語、技術、素材を変わらぬ手法に常に工夫して持ち込むこととなるのである。しかしデザインの世界では、科学や技術が常に供給する革新的な素材や工法を常に考慮に入れていなければならない。こうした革新への関心には決して終わりはないが、常に発展し続ける社会経済的状況にみる新しい面の中から最も調和する表現方法、新しい素材、新しい生産手法を選択することが当面の目標となるのである。そうしたことに比べれば工業デザインはひどく遅れたものに感じられるだろう。

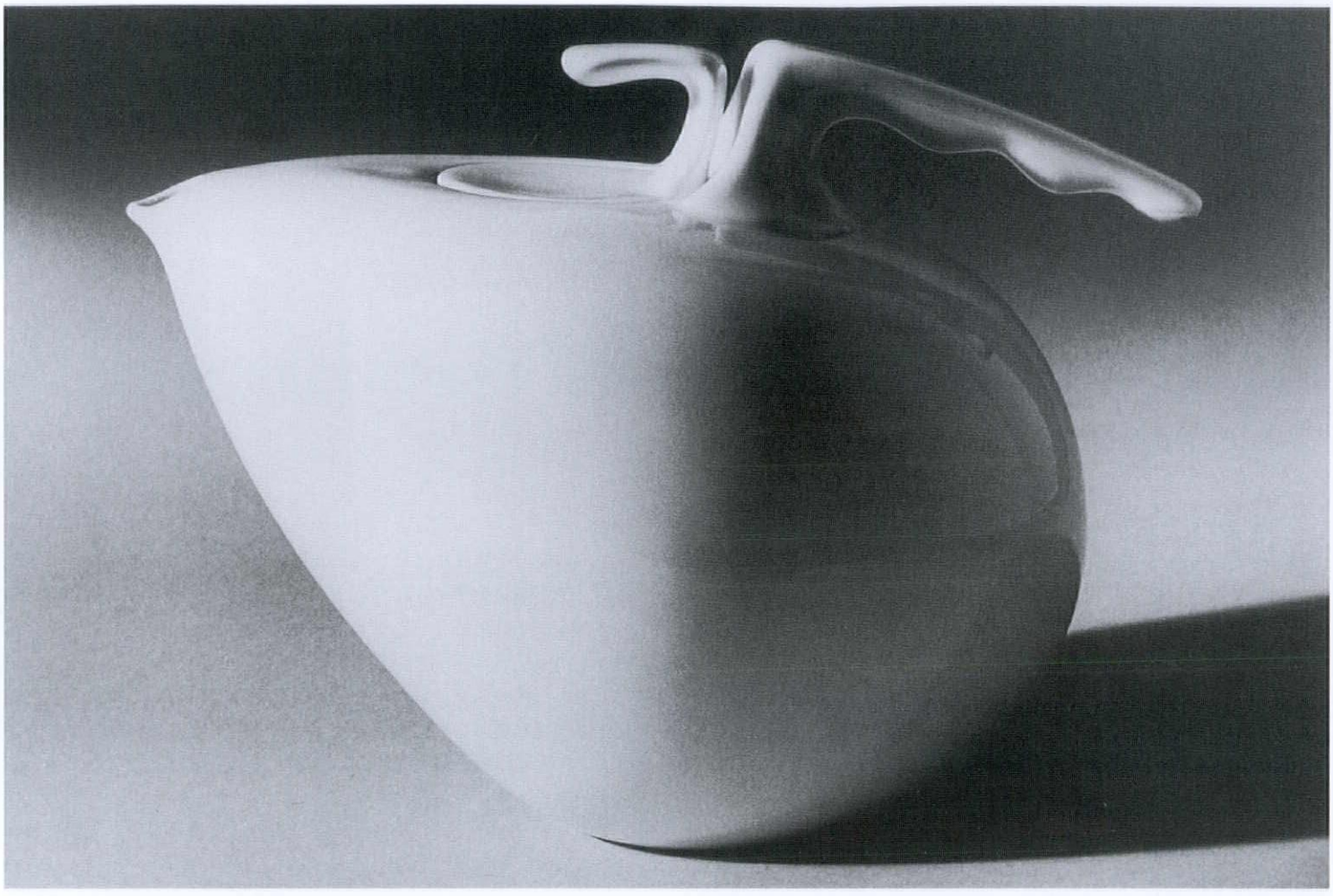
現代の発展へ目覚めてゆくと、大概技術信仰であると批判の対象になる。工業製品デザインにおけるいわゆる「ハイ・テック」表現の蔓延を見るならば、そうした批判も当然かもしれない。同時代の技術を使うということは、技術が持つ道具としての役割という視点を維持するのであれば、我々のまわりにある自然と人工の資源に存在する潜在的な可能性を理解していることを意味するのである。こうした意味において、私は伝統と現在との間には否定できない連関が存在すると考えるものである。

もちろん、デザインは伝統を否定することはできない。人間のすべての表現は、生まれつき文化の「一員」とでも言うべきものであり、過去の形態に連関し、いわば固有文化因子とでもいうものを通して昔の姿形を思い起こさせる。しかし、技術的な視点が現代のふさわしい表現のひとつであると提案することができないように、過去はむしろ記憶や構造であって、拝物やモデルとして扱うことはできないのだ。過去について興味深いのは、現代と調和して現代のものになることができる能力である。記憶は決して模写を与えるものではなく、現在との関連を見せてくれるものである。デザインに現れるのは、過去と現在との間の類推ではなく、隠喩なのである。デザインが工業的か職人的かに関わらず、人間の需要を満たす機能においてその意味があるということを思い起こすと良いだろう。デザインはよりよく生きたいと望む社会の自由な選択肢でなければならない。

これが素材や技術、科学技術を超えてデザインを正当化するものである。

しかし、もし暮らし振りを選択するにあたって、多くのデザインやその倫理に関係のない要因で決定するのであれば、そしてデザインに込められた内容を無視するのであれば、デザインは形態的な働きを失い、社会にとって役に立たぬ有害な活動へと自らを貶(おとし)めることになるだろう。

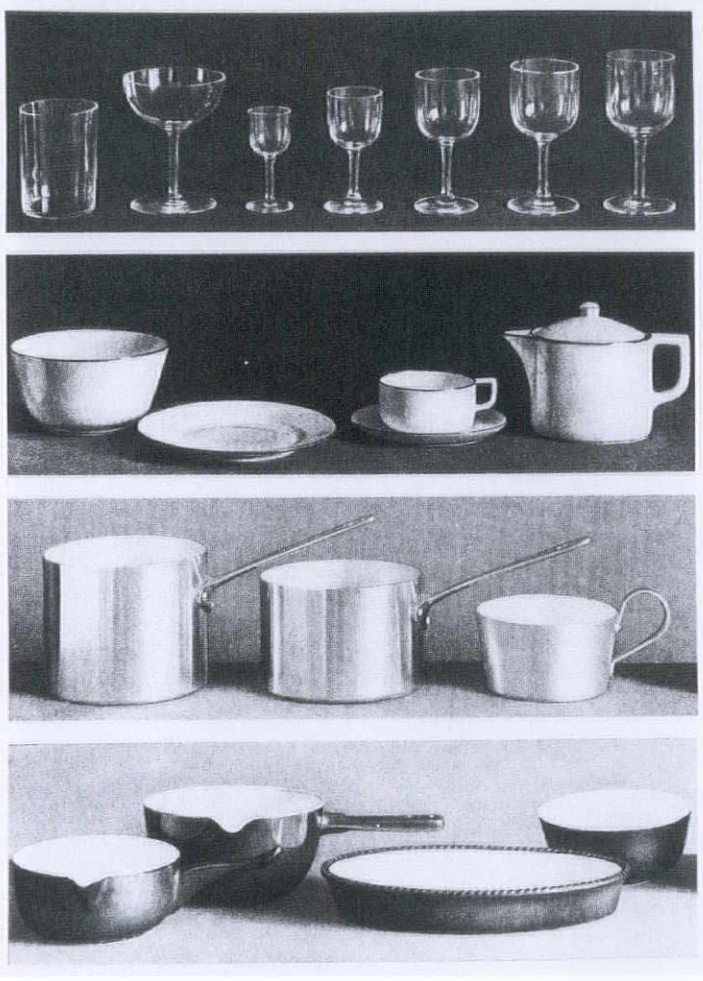
●Angelo Mangiarotti／Studio Mangiarotti　訳＝櫻井義夫



Teapot 1990
Angelo Mangiarotti
Richard Ginori, Italy

陶磁器デザインのこれから

長井千春



19世紀末、普仏戦争後のドイツは、短期的な空前の好景気と投機熱に沸いていて、これまで貴族階級の特権的な所有物であった磁器を、台頭する市民階級のために製造する民営会社の創立ラッシュであった。現在のドイツの磁器製造メーカーのほとんどが、その頃にルーツを持っている。当時の陶磁器製品は、開国後の日本の殖産興業政策において重要な役割を果たしたのと同様に、ヨーロッパの後進国であるドイツにとっても大切な外貨獲得の手段であり、そのデザインには絶大なる関心が払われていた。博物館付属の意匠研究所や商品陳列館の設置による製品デザイン改良と、生活改善をめざす啓蒙活動の歴史は、後に日本もたどることになる。これまでの貴族趣味的な古典様式からユーゲントシュティールを経て、新しい市民生活にふさわしい機能的な食器のデザインが一般に浸透し始めるには、1930年代を待たねばならなかったが、グロピウスやワーゲンフェルドのデザイン以前に、いち早く取り組んだのがアーデルベルト・ニーマイヤー（Adelbert Niemeyer 1867–1932）であった。1904年にニンフェンブルグ王立磁器マニュファクチャーのためにデザインされた、このコーヒーセット（写真参照）の業務用食器を思わせるシンプルな形態は、当時まだ主流であった装飾過多な食器デザインのなかでとりわけ異彩を放っており、ドイツ工作連盟やバウハウスデザインの先駆けでもあった。これは、選定された優良デザインを紹介する雑誌『ドイツ製品ブック』(*1)の1916年の号に掲載された製品のひとつであった。日本では、陶磁器量産のための産業技術基盤の整備がドイツよりかなり後れを取っており、借り物のデザイン思想の普及努力から定着までには、戦後を待たねばならなかった。戦後の復興を経て第1回グッドデザイン賞に選ばれたのは、森正洋の醤油さしであった。このふたつに共通する率直で美しいデザインが持つ魅力は、まさにドイツと日本における当時の生活自身が必要とした美であった。

両国の陶磁器デザインとの取り組みが始まって百年後の現在、陶磁器産業とそのデザインの役割はまた新たな局面を迎えている。次世紀の生活がどのような陶磁器デザインを必要としているのか、今はまだはっきりとした輪郭を現してはおらず、デザイナー達は暗闇の中で模索し続けている。私自身はデザイン解釈の重層性を必要とする時代空間にあると認識して、陶磁器のデザインに携わっている。効率良く大量に製造された機能的な道具が誠実に用をなし、生活空間において使用者と美的な信頼関係を育むだけではなく、あるいは伝統文化的な価値観に依存するだけでもない陶磁器デザインの役割として、道具が人との間にさらなるコミュニケーション空間を生みだすことが課題であると考えている。声高に自己主張する道具が生活の中を独善的に濶歩するためのデザインではなく、それは元来シンプルな機能を有する食器、器が、まさに使われる瞬間に使う人と語らい、使う人の創造性や詩情を取り込みながら、生かされてゆく「こと」のデザインである。

●ながい・ちはる／愛知県立芸術大学美術学部デザイン・工芸科助手

＊1：
"Deutsche Warenbuch", 1916。生活の質の向上を目指すデューラー協会とドイツ工作連盟が協賛して発行したもの





Teacup 1932

Wilhelm Wagenfeld

Jenaer Glaswerke Schott & Gen, Germany

Glass cup 1933

Wilhelm Wagenfeld

Jenaer Glaswerke Schott & Gen, Germany

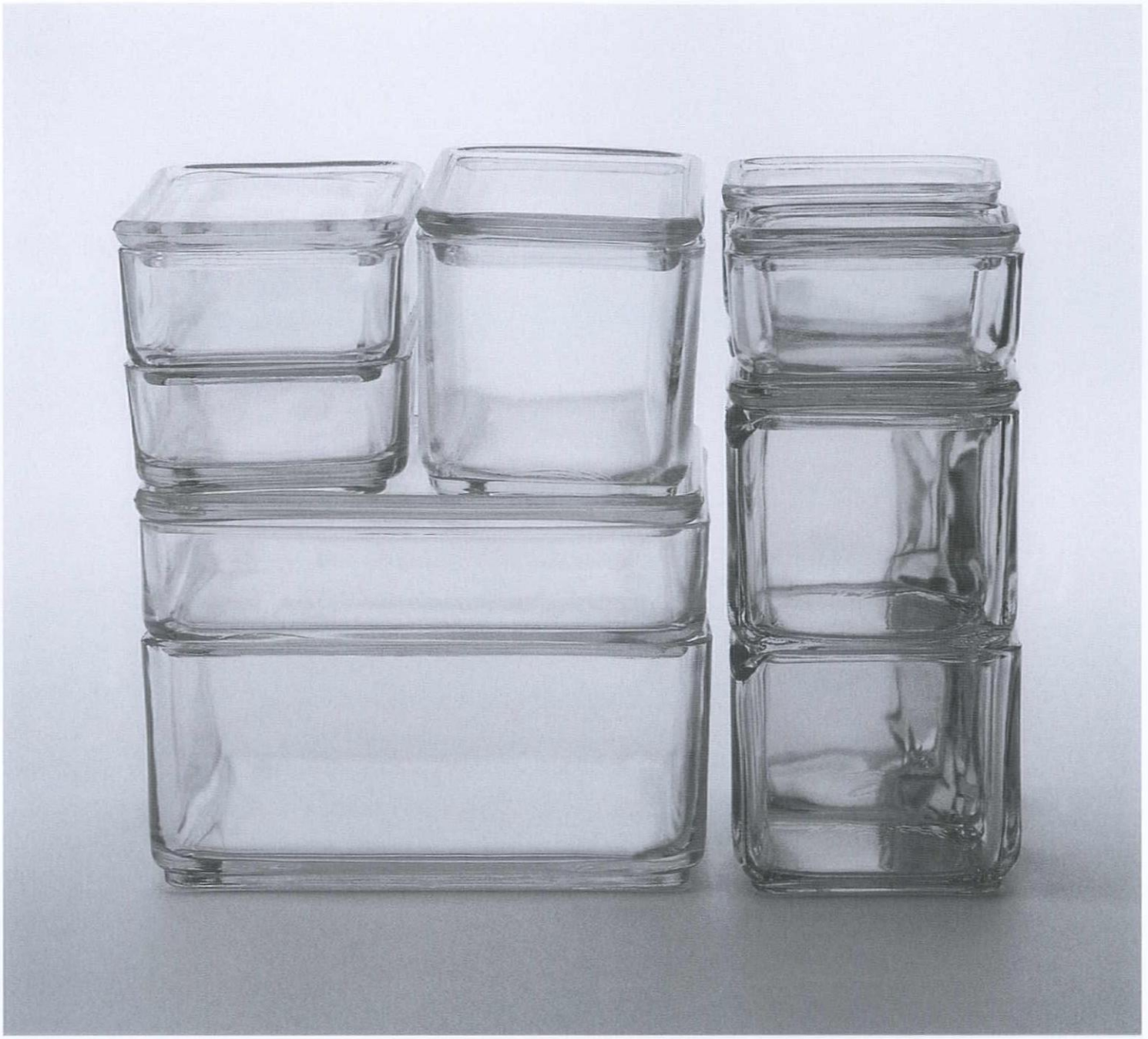


Feuerfestes Teaservice 1932

Wilhelm Wagenfeld

Jenaer Glaswerke Schott & Gen, Germany

バウハウスで学んだワーゲンフェルド（1900—1990）の作品。90年に90歳で亡くなるまで数多くの工業デザインを手掛けた。有名なランプから、金属食器、カトラリーなど。このポットは現在では入手困難だが、私たちの周りには彼のデザインを今でも見ることができる。市井の職人と同様、彼は生み出したものの後ろに隠れ、その価値を知らない人たちにも恩恵を与えている。恐らく彼は工業製品の生れるプロセスの全般を熟知して掌握し、何事もなかったような顔をしている親方のような存在であったに違いない。（K.N.）



"Cube" stackable glass service 1938

Wilhelm Wagenfeld

Lausitzer Glasverein, Germany

スタッキングする事で、最大限の容積を最小のスペースで確保する。ここにあるのは、デザインではなくて「潔さ」だと私は思う。家庭にあっては、日常的に供される様々な食品を収め、そのまま食卓に上ったのであろう。その後に生まれたプラスティックの密閉容器がこんなガラス器を駆逐したが、思い出してほしい。私たちの先達も重箱というすばらしい容器を生んでいた事を。(K.N.)

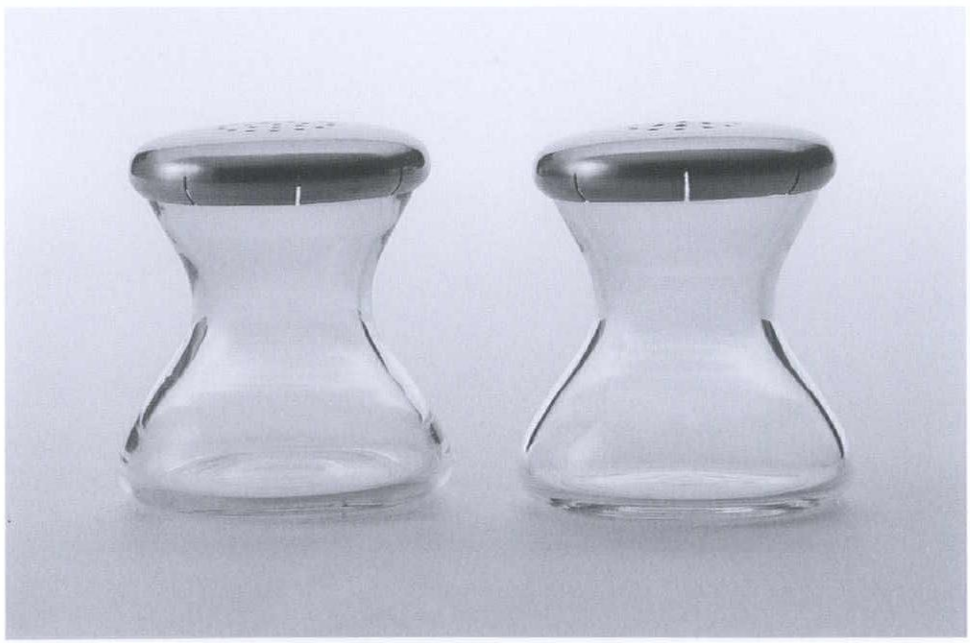
Egg-cooker 1935
Wilhelm Wagenfeld
Jenaer Glaswerke Schott & Gen, Germany

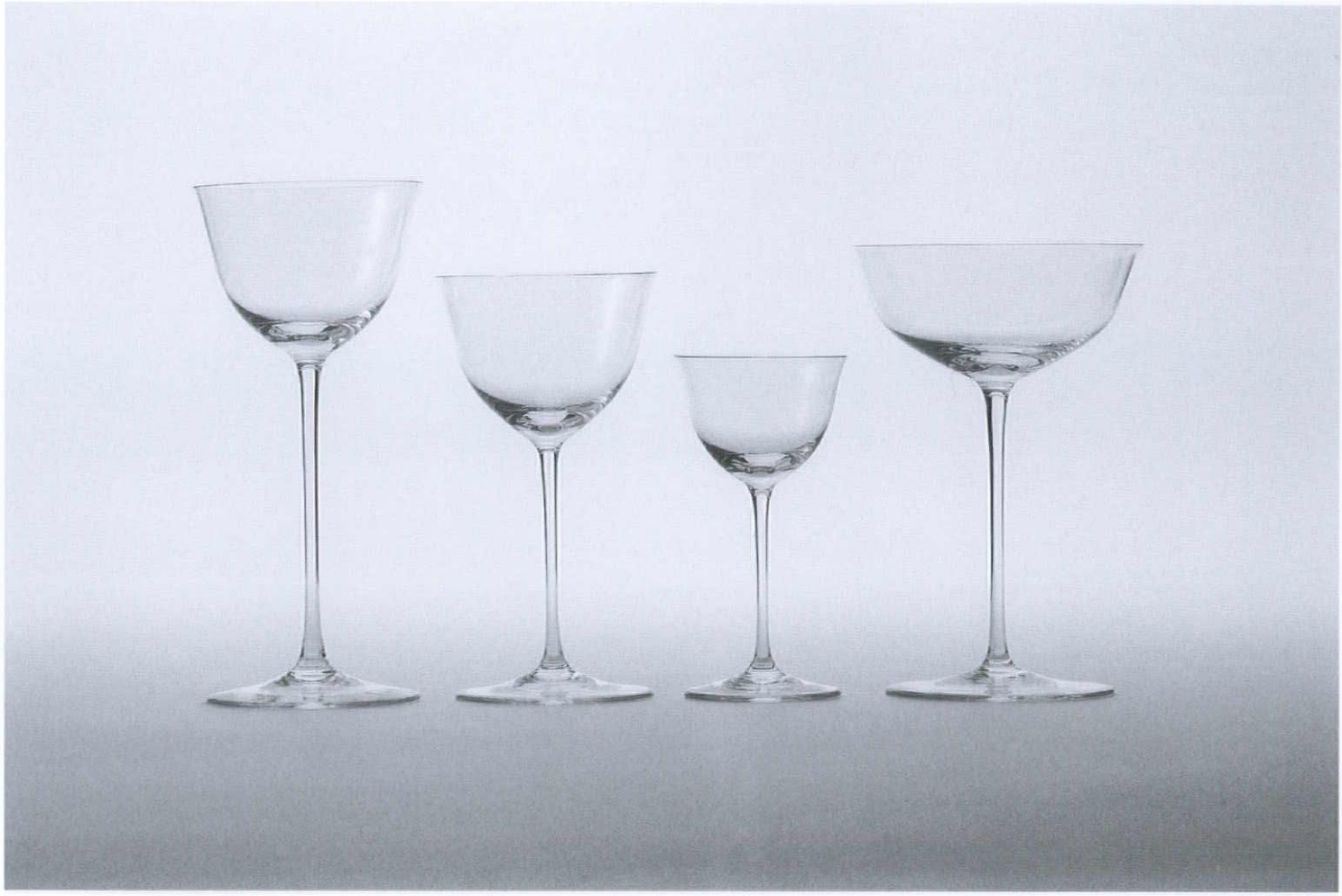


Ink bottle "Pelikan" 1938
Wilhelm Wagenfeld
Vereinigte Lausitzer Glaswerke, Germany



Salt and Pepper Shakers 1953
Wilhelm Wagenfeld
W.M.F., Germany





Wine Goblet 1920

Josef Hoffmann

ヨセフ・ホフマン（1870—1956）もまたデザインの巨人だ。その仕事のひとつ、このグラスたちは、極限まで薄く吹かれ、繊細なステムは美しい花を支えるか細い茎のようだ。私はMoMAで初めて目にして心惹れ、いつかは手にしたいと熱望したが、意外にも再会は日本。雑誌で目にした彫刻家・宮脇愛子さんのアトリエの写真に写っていたのである。さらに、このグラスが今でもウィーンで作られている事を知り、以来渡欧する知人にせがんでは少しずつ手に入れた。その後知遇を得た宮脇さんはこう漏らしていた。「うちの磯崎はこのグラスをよく割るのよね」と。（K.N.）



Glass set "The Patrician" 1920

Josef Hoffmann

J. & L. Lobmeyr, Austria



Coffee Maker 1941

Peter Schlumbohm

Chemex, U.S.A.



Water Kettle 1949

Peter Schlumbohm
Chemex, U.S.A.

ピーター・シュラムボーム（1896―1962）ドイツ生れのアメリカの化学博士である。この他にも電気扇風機をデザインして、これらのコーヒー・メーカーや湯沸かし器と共にニューヨーク近代美術館のパーマネント・コレクションになっている。この特集の最大の協力者：永井敬二氏は、いつもこの湯沸かし器で、お湯を沸かし、前頁のコーヒー・メーカーでコーヒーをたててておられる。筆者も何度かそのコーヒー・タイムの機会を得た。湯沸かし器の湯が沸騰すると、その蒸気が細いガラス管を通って、シューと音を立てながら垂直に上って行く。実に見事だ。中程の小さな三角形をした注ぎ口から出すお湯は、結構細くなめらかに出て行く。そして、ほとんど外側に逆もどりすることはない。そして、この造形は、ちょっとした彫刻以上の造形美と存在感がありはしないか。M.デュシャンの「パリの空気」のように……！（S.H.）



"The Museum" 1955

Heinrich Löffelhardt

Jenaer Glaswerke Schott & Gen, Germany

ウイルヘルム・ワーゲンフェルドのデザインは全体が丸型が多い。それに対して、また時代的にその後に及んで、このハンリッヒ・ローフェルハルト（1901—1979）のデザインするものは、少し角ばったものが多い。彫刻家でもあり、金属ワークもしたローフェルハルトは多才であった。このイエナー・ガラス会社では巨匠ワーゲンフェルドの後を継ぎ、陶器会社アルツベルク社では巨匠H.グラッツェ博士の後継者として立派な美しい形態を残している。（S.H.）

Cocoa Pitcher 1930-34

Wilhelm Wagenfeld

Jenaer Glaswerke Schott & Gen, Germany





"Caroll" 1971
Signe Persson-Melin
Boda Nova AB, Sweden

ボダ・ノバ社が、シグナ・パーソン-メリン女史等を擁して、一連の金属やコルク、耐熱ガラス、磁器等を組み合せてデザインされたテーブルウエアには、当時事務所を始めた頃の小生にとっても新鮮な驚きを感じたことを覚えている。個々の器の教条的な価値感やアカデミズムを乗り越えて、日常性の中の使い心地を持ち、少しポテッとした明解で健康的なフォルムで食卓を演出する、その使う立場の眼差しの若々しさに共感し、色々とこのシリーズを買い求めて、食卓にローソクを灯し、夜長を友と語らったことを思い出す。

(M.K.)



Service "The Patrician" 1920

Josef Hoffmann

J. & L. Lobmeyr, Austria



Service "Ambassador" 1925

Oswald Haerdtl

J. & L. Lobmeyr, Austria

Nesting glasses and pitcher 1951

Saara Hopea

Nuutajärvi-Notsjö Glass, Finland



Glass set "Alpha" 1952

Hans Harald Rath

J. & L. Lobmeyr, Wien, Austria





Decanter KF504 1960

Kaj Frank

Nuutajärvi-Notsjö Glass, Finland



Carrying case KF505 1960

Kaj Frank

Nuutajärvi-Notsjö Glass, Finland

この木箱に収められた小ぶりのデカンターに満たされる酒は何がよいだろう。ショットグラスと組み合わされている所を見ると、度数の高いものと推察される。このデカンターは、型吹きされたボディ部の柔らかさと、鋭くカットされた口のエッジが絶妙なバランスを持つ。職人の仕事と、デザイナーの感性。(K.N.)





"Pitcher 1610" 1954

Kaj Frank

Nuutajärvi-Notsjö Glass, Finland

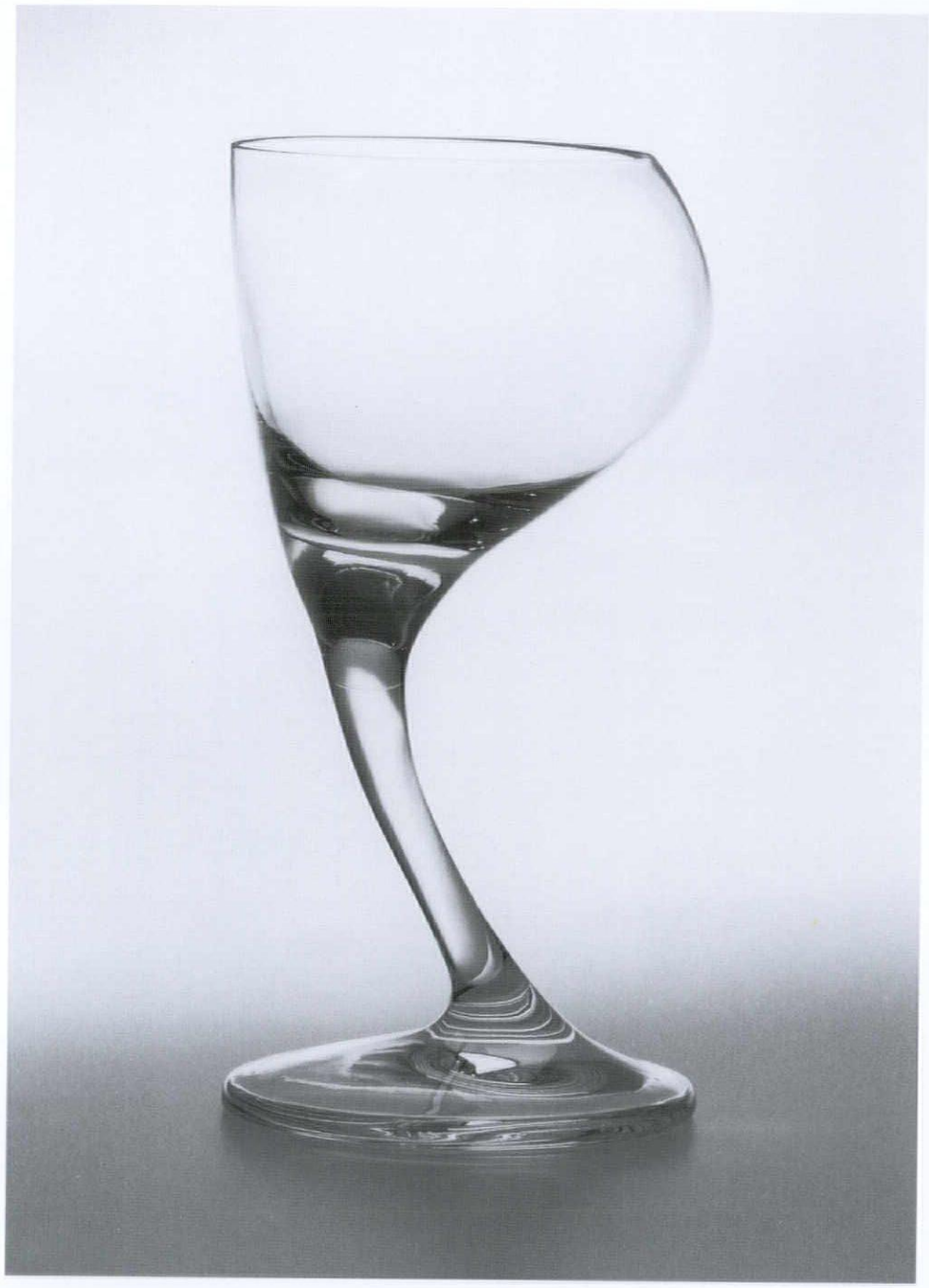
カイ・フランク（1911—1989）はフィンラド屈指のデザイナーである。ヘルシンキ工芸学校に学び、その後、テキスタイル、ライティング、家具などのデザインで活躍したが、1946年アラビア陶磁器会社の日用品量産部門の主任デザイナーとなり1948〜51年機能的でシンプルな名作「キルタ」Kiltaシリーズ（P.37参照）をデザインし、ひろく全世界に親しまれた。その後、少しづつ種類も増やし、リ・デザインも、行いながら1981年材質を陶器から磁器に変更「ティーマ」Teemaとなって続いている。フランクは、今までキッチンでしか使用しなかったポットや鍋を食卓に出しても通用するシンプルな美しい邪魔にならない、無言で、目に見えないメイドの役目をするような食器をめざした。アラビア陶磁器会社と同系のヌータヤルヴィ・ガラス会社やイッタラ・ガラス会社の製品もデザインしており、いずれも単純化したベーシックなデザインであるが、その形態の完成度は高い。（S.H.）

Jug of White Porcelain 1962

Henning Koppel 1962

Bing & Grøndahl's Porcelain Factry, Denmark





Wine glass "Bibulo" 1986
Angelo Mangiarotti
Colle, Italy



Glasses of the series "Bibulo" 1986

Angelo Mangiarotti

Colle, Italy

ビブロは、アンジェロ・マンジャロッティ（1921—）独特の優美なフォルムを持つシリーズのひとつである。人間工学的な視点からのアプローチによりデザインされたそのフォルムを構成する曲線は、手に持つと非常に柔らかであり、テーブルに並べられたビブロの一群は、クリスタルガラス独特の光の共鳴を伴なってよりエレガントなものになる。ワイングラスは、上部と下部（脚部）を別々に製作して、後で一体とするものであるが、流れるような曲線のデザインを完成に至らしめた職人たちの技術の高さは称賛に値する。

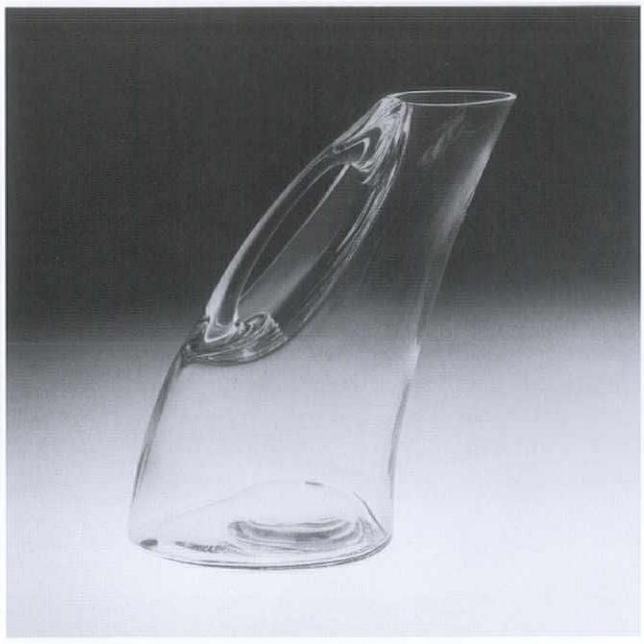
（T.K.）

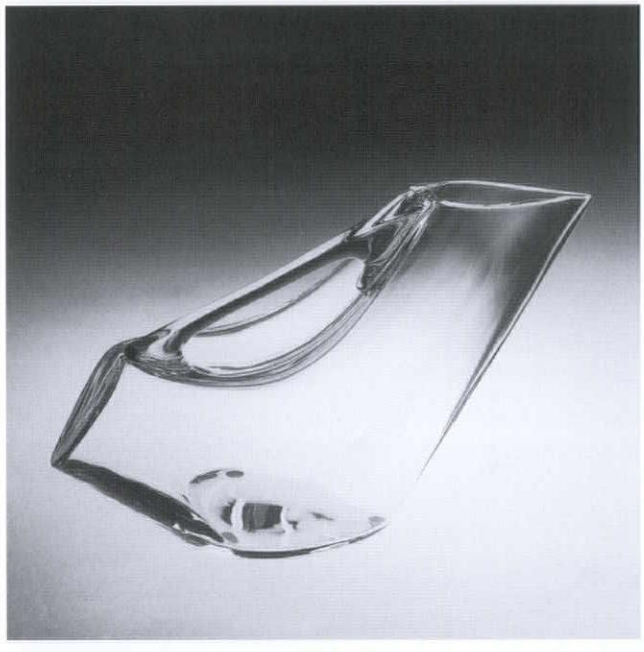


Glass "Ice-Stopper" 1986

Angelo Mangiarotti
Colle, Italy

かつてシンメトリーに、かつ垂直に立っていたグラスを斜めにする。そんな発見に驚きを感じる。中央付近のくぼみは、このグラスの名前の通り、氷を止めるためにつけられたものであるが、同時にガラスという素材の特性をも表現している。食卓に並べられるとその空間が変わってしまうほどの存在感である（T.K.）





Carate "KYATHOS" 1985

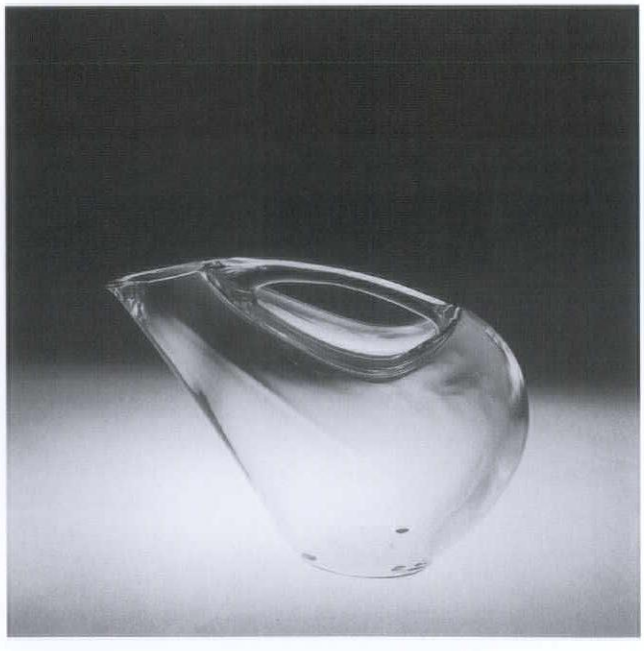
Angelo Mangiarotti
Colle, Italy

Carate "ANATIS" 1985

Angelo Mangiarotti
Colle, Italy

Carate "ASKOS" 1985

Angelo Mangiarotti
Colle, Italy





Glass "Smoke" 1964

Joe Colombo

Arnolfo di Cambio, Italy

立席パーティーの時などに、よく取り皿とグラスを一度に持って、箸やフォークをうまく扱えずに右往左往することがある。タバコを吸う人はなおさらである。このグラスはシンメトリーな伝統的フォルムを破った最初のグラスかも知れない。くびれた細いところに指1本かけて残りの指でフォークを扱ったりタバコを吸うことができる。仕種や振る舞いから発想された典型で、このグラスのデザイナー、ジョエ・コロンボは、機知と遊び心と好奇心をみなぎらせながらエネルギッシュに60年代のイタリア・デザイン・シーンをリードして、若くして去っていった。〈Smoke〉グラス大小7タイプのバリエーションがあり、〈ASIMMETRICO〉と名のついた、よりデフォルメされたタイプも生産された。(M.K.)



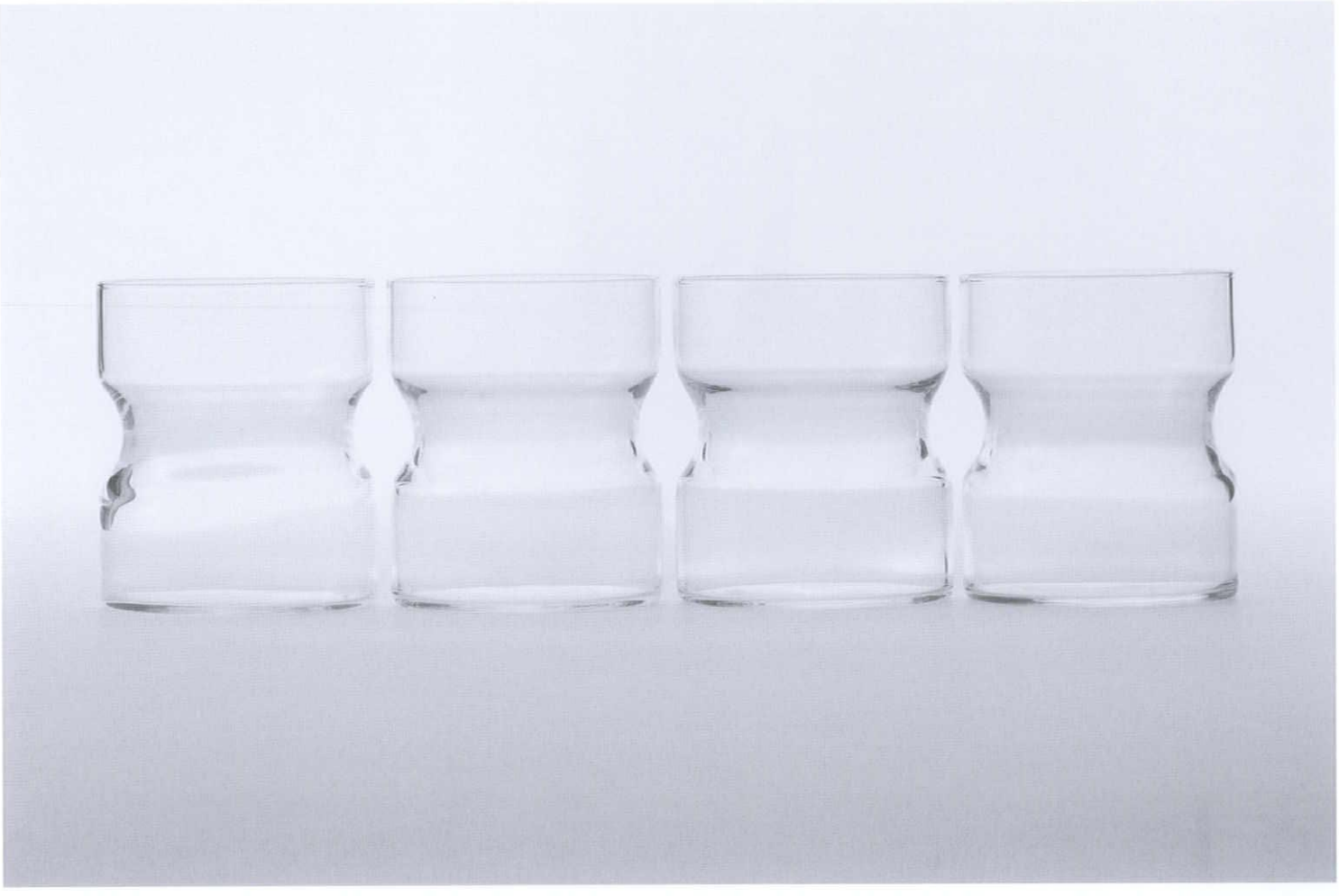


Double glass 1962

Wilhelm Wagenfeld

W.M.F. Geislingen, Germany





Glass "I-line" 1957

Timo Sarpaneva

iittala, Finland



Carafe 1978

Timo Sarpaneva

iittala, Finland



Carafe and glass "TAPIO" 1954

Tapio Wirkkala

iittala, Finland



11-41 "Stub" stacking glasses 1958

Grethe Meyer, Ibi Trier Mørch

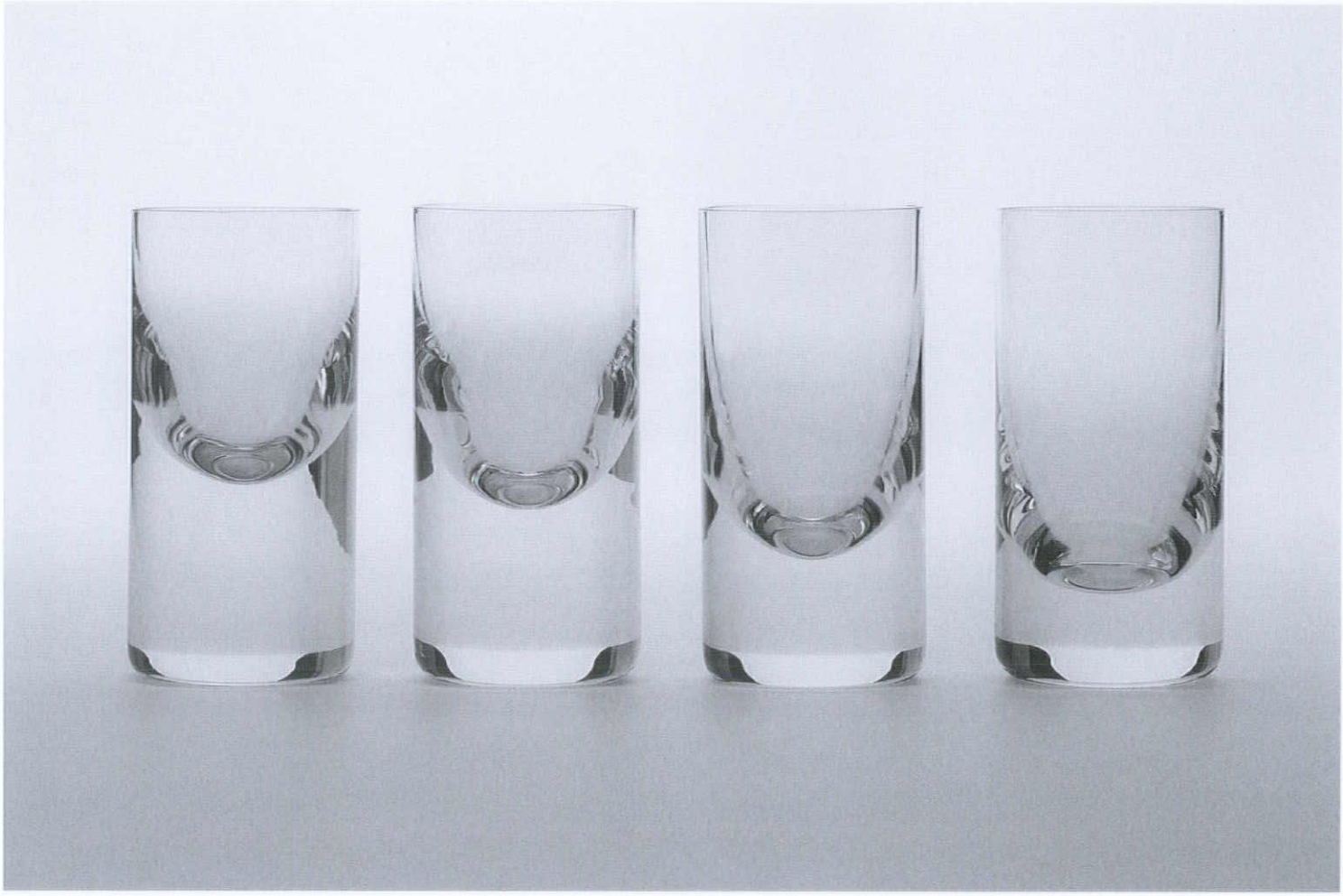
Kastrup og Holmegaards Glas-værker A/S, Denmark



Stackable glasses 1962

Tapio Wirkkala

iittala, Finland



Four crystal glasses "TIR tavola" 1971

Roberto Sambonet

Baccarat, France

画家、そしてグラフィック・デザイナーであり、家業のステンレスメーカー「SAN BONET」社を継ぎ、デザイナーとして多くのステンレスの生活用品の名作を生んでいる。このバカラのシンプルなグラスは、トポロジカルに底の厚味を変化させたもので、他にもやはりバカラ社でつくられた〈Préhistoire〉というクスリタルのボールがある。これも同様にムクなものから肉厚の薄いものへと4タイプのものがある。(M.K.)



Glassware "AARNE" 1930

Göran Hongeli

iittala, Finland



Glassware "AINO AALTO" 1932

Aino Aalto

iittala, Finland

建築家アイノ・マルシオ・アアルト（1894—1949）は1923年フィンランドのユバスキュラで、アルヴァ・アアルトに出会い、同僚として建築事務所を設立、翌年結婚した。これは1932年コンペに応募したプレス加工のガラス食器デザインとして入賞し、それが生産化され今日に至っている。アルヴァとは違った、女性らしい柔らかい愛らしさがある。（S.H.）



Glassware "LUNA" 1970

Kaj Frank

iittala, Finland



Stackable crystal glasses "Empilage" 1971

Roberto Sambonet

Baccarat, France

Caviar bowl 1971

Roberto Sambonet

Baccarat, Paris, France



11-38 Bowl 1958

Per Lütken

Holmegaard, Denmark





"Fuga" glass bowls 1950

Sven Palm Quist

Orrefors Glasbruk, Sweden



Pitcher 1929

Vicke Lindstrand

Orrefors Glasbruk, Sweden







Decanter and Glasses 1959

Tapio Wirkkala

iittala, Finland





Decanter and Glasses "Ginevra" 1996

Ettore Sottsass

Alessi, Italy



Glass set "Orseggi" 1997

Achille & Pier Giacomo Castiglioni

Alessi, Italy



2 way glass "PARO" 1983

Achille Castiglioni

Danese Milano, Italy



Karafe with glass 1968

Ingegerd Råman

Skrufs Glasbruk AB, Denmark





コンディメントセット 1969

船越三郎

保谷クリスタル、日本

食卓環境への道具提案から

日本人が造り上げた秀れた味文化に、しょうゆがある。日常的にも不可欠であるべき醤油差しのデザイン不毛の実状打破への試みとして、透明度に秀れたクリスタルガラスによる品格ある造形への挑戦だった。

一般品の多くは陶器で安かろう悪かろうのものと一部圧迫成形によるガラス製品で注目するようなものはなく、ほとんどのものは小皿に乗せないと液のしりもれでべたべたになるという低品位のものが使われていた。

それに対し、透明なクリスタルガラスを素材とし、しりもれのない清潔感を重視したシンプルな造形を試みていった。金属パイプでのマウスブロー成形、安定感のある美しいフォルムへと決着した。問題は差し口の造形は特殊地具の併用で伸びやかな形状を保持させて出すことを職人との打ち合せから可能とした。

注器としての使用に当たり、安定感のある心地良さを持てるよう配慮した。

醤油差しと同一卓上に必要な容器に塩、こしょうの振り掛け容器の機能形状も、小さいながらに、内容物の湿気防止を兼ねた機構を設けた。胴の口部と栓の下部をスリ合わせみがき仕上げとし、口部1ケ所をけずり、栓の1ケ所を曲面研磨面を造ってある。それぞれのカット面を合わせると粉末状調味料が振り出せるスキマが出来る。1/3周程栓をまわすと湿気防止機能が生まれるよう考慮し、フォルムの統一を計った。

また、辛子入れ容器は、シリンダー状で開口部を造り、粘性度の調味や粒状のゴマ等の使用にも耐えるシンプルなフォルムとした。

以上の3点のデザインは、錬度の高い成形技能者の作業内容に主眼を置き、冷間仕上加工比率の軽減を計った。(S.F.)

クリスタルガラス企業内37年のデザインワークからのメッセージ

船越三郎

'57年秋、光学ガラスを基にクリスタルガラスでのもの造りを指向する(H)社からの要請でプロダクトデザインで仕事をすることに決めた。しかし、当時の一般生活者に役立つ素材かどうかデザインは未知の領域であり気がかりだった。ただ若い技術集団を指向する小さい組織が気にいった点、また大企業を好まない自分にとって幸いだった。

また、クリスタル素材が未知の領域で好きで始めた仕事でなかったことが広く素材と接する上で幸いした。常にガラスを知るのは灼熱の成形現場で学べと云う先輩のアドバイス。そんな中でしゃにむにその長所・短所を職人の技と動きの中に研鑽し、透明なガラス特有の量感・質感特性への理解度を高めていった。

当時の日本人の生活環境を背景としたデザインの質的向上に視点を置き、シンプルな美しい造形の中に使う楽しさ、存在感としての喜びを見出していった。'50年代の日本製品の代名詞として安かろう悪かろう、その上に海外デザインの模倣と、モラルの低さが大問題であった。真にクリエイティブな造形活動が担うデザインと技術力が問われた社会だった。

永年プロダクトデザイン造形の作業での基本は、泥くさい汁にまみれた行為の中に重要な感性を磨くことに欠かせない要素が有ると信じている。紙や粘土・石膏・プラスチック等々の材料を自分の手を通して思考試作するプロセスが大切だと云いたい。コンピュータの精度向上から、マウスを握って探る作図方法の併用の便利さに流されることなく、手を汚す仕事を軽視する処に脆弱を生み出す結果を危惧することを心すべきだと思うのだが。

一方、現在の(H)社が生み出すガラス品質は当初から一環して継続してきた技術重視の経営からその開発成果は原料の精選、電熔システムとハイテク制御システムの開発から安定した高品質なクリスタルガラスを現実のものとし、併せて成形方法の可能性、技能者の革新的な努力なくして実現し得なかった美しいガラス溶融を手にし、海外評価も高い。

このような質的な環境を築き続けてきた企業の中でデザイン行為ができたことに満足している。

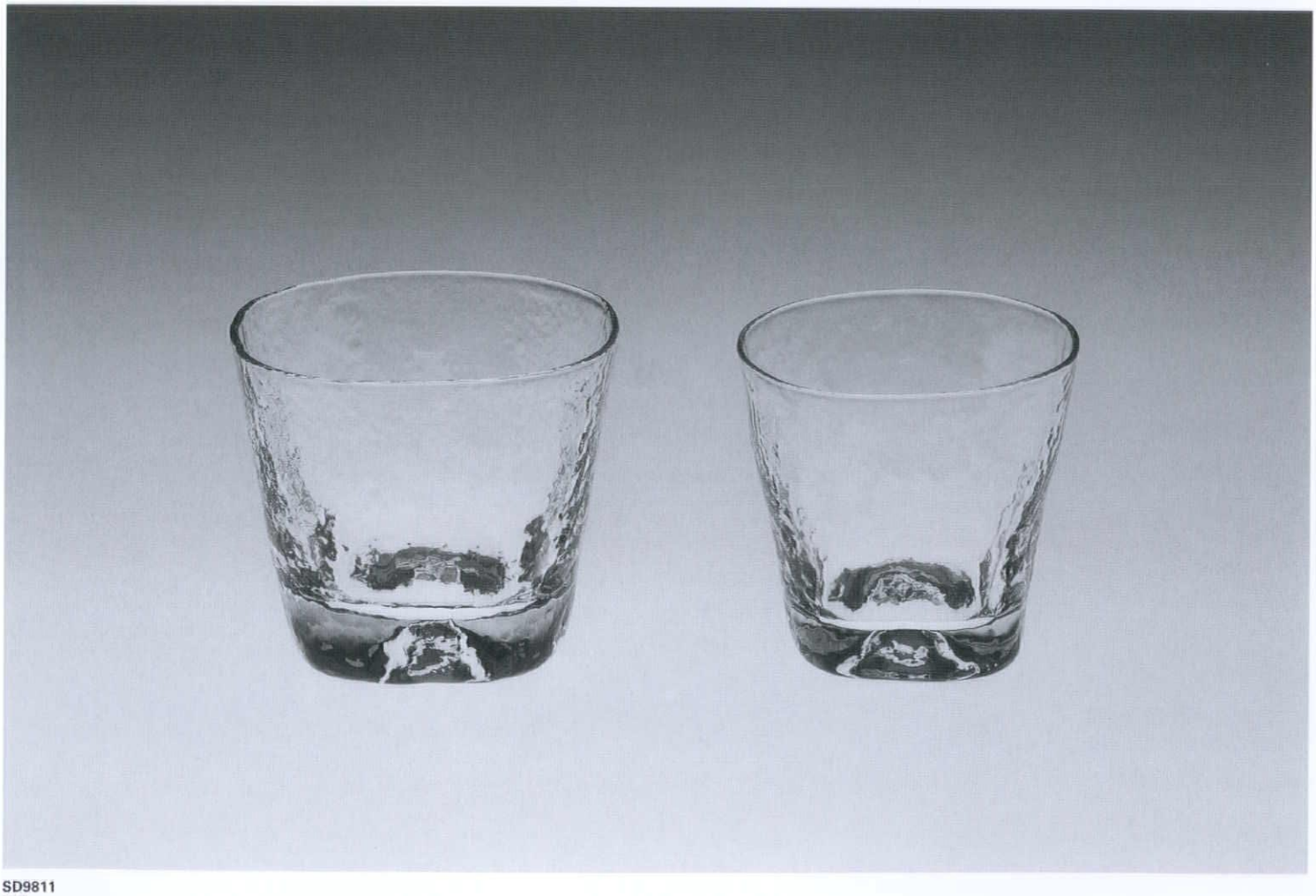
ものに満たされた生活環境、世紀末の変化の激しい中でプロダクトデザイン領域に注目される製品が海外を含めて非常に少ないのが現実、これからの造形のむずかしさを感ずる。

今春、(F)メッセで再生産販売を始めたW.ワーゲンフェルドが'31年にデザインした美しい耐熱ガラスのティーポットを軸としたデザイン群がドイツのイエナ社からレプリカとして再現されたのはうれしい。40数年振りのトピックス。

大変興味深いこと、シンプルでコンテムポラリーで楽しく、品格の高さは永遠に新しく、年代を越えたロングライフデザインの証しである。

●ふなこし・さぶろう／プロダクトデザイン, 船越デザイン工房主幹



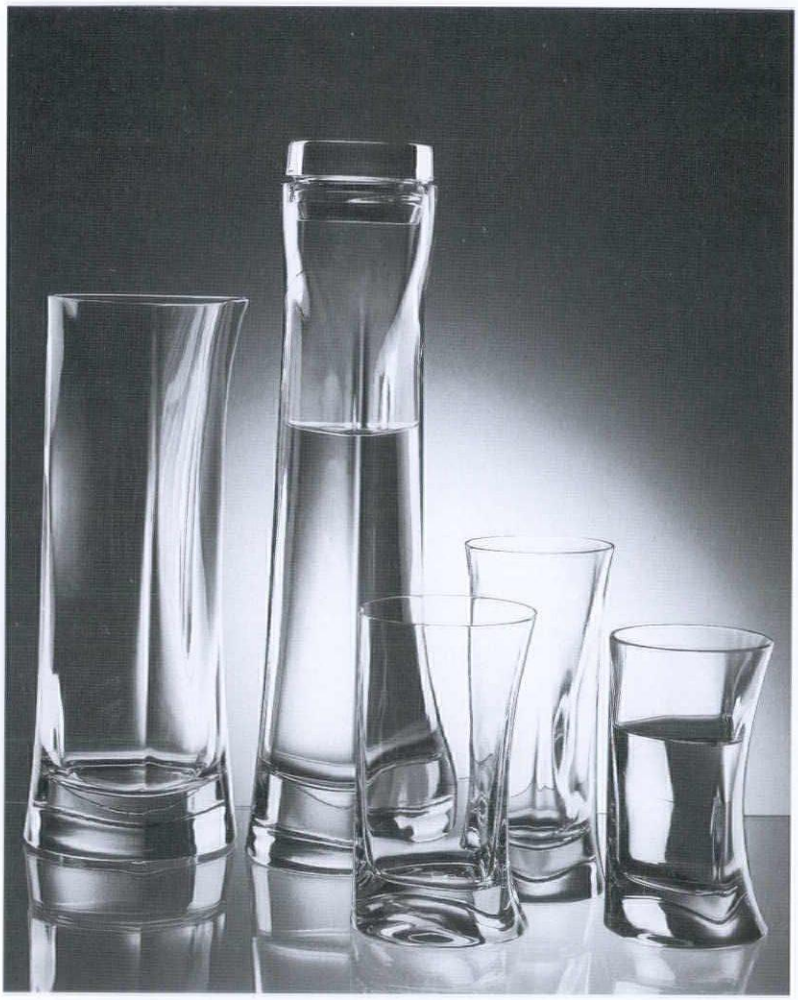




“しづくガラス” ゴブレット 1955
淡島雅吉
淡島ガラス、日本

〈しづくガラス〉と呼ばれる一連のシリーズは、淡島氏の土型を用いてその地肌をガラスに直接写し取る手法から始まったとされる。そうして、3個に型が壊れるところから、その後原型製作の研究の末、製法特許を取得。手作りの風合いと温かい肌合いや「和」の趣きが広く好まれるところとなり、品種は150種以上に及んだといわれている。この味わいは、多くのガラス作家やデザイナーに影響を与え、「ひびガラス」とともに、我国のガラススタイルとして広く定着している。
(M.K.)

“しずくガラス” ゴブレット、タンブラー 1955
淡島雅吉
淡島ガラス、日本

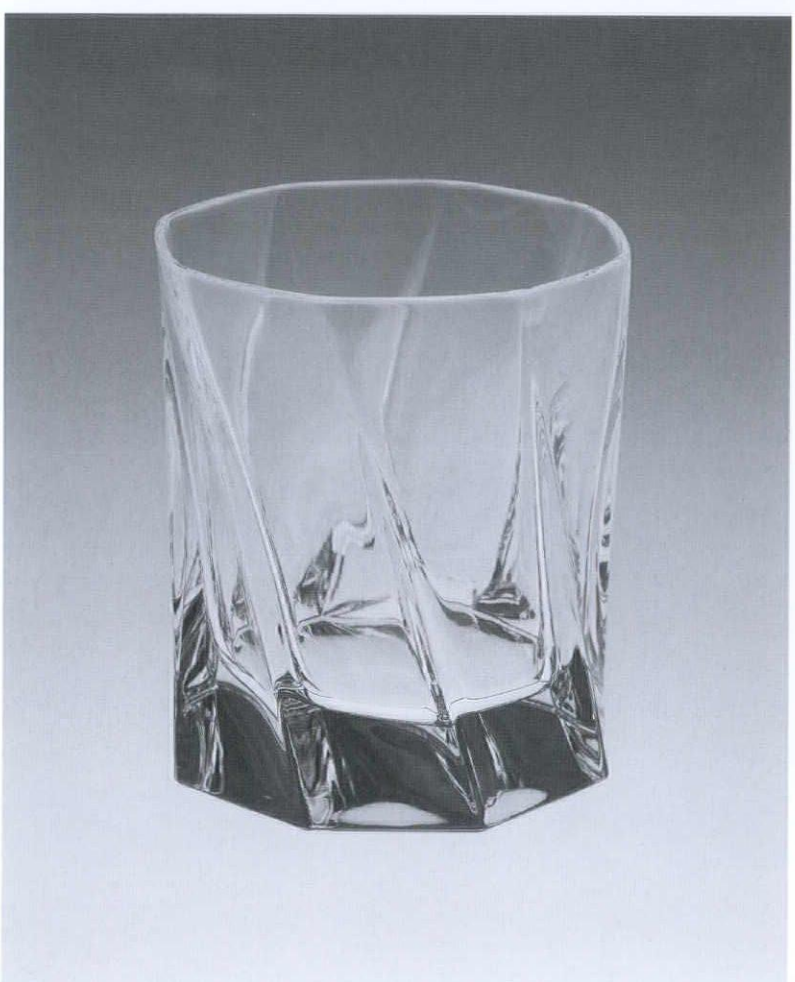


Glass-set "KEIKOSAN" 1995

伊藤　節

Colle, Italy

機能的グラスの基本は、口元が円であり底部がやはり円である。このシリーズは、その基本を守りながらも、その中間に三角形の平面を入れることにより、全体のフォルムのダイナミックさを表現している。円から三角形、そして、円への形態の三次元的移行の中で、同時に飲み物の表情の変化を楽しむことができ、かつ、すべりにくく持ちやすいものになっている。幾何学形態操作の面白さと人間工学的視点をふまえた、非常にベイシックで新鮮なフォルムをもつシリーズである。(T.K.)



Glass-series "MISAKO" 1991

元良信彦

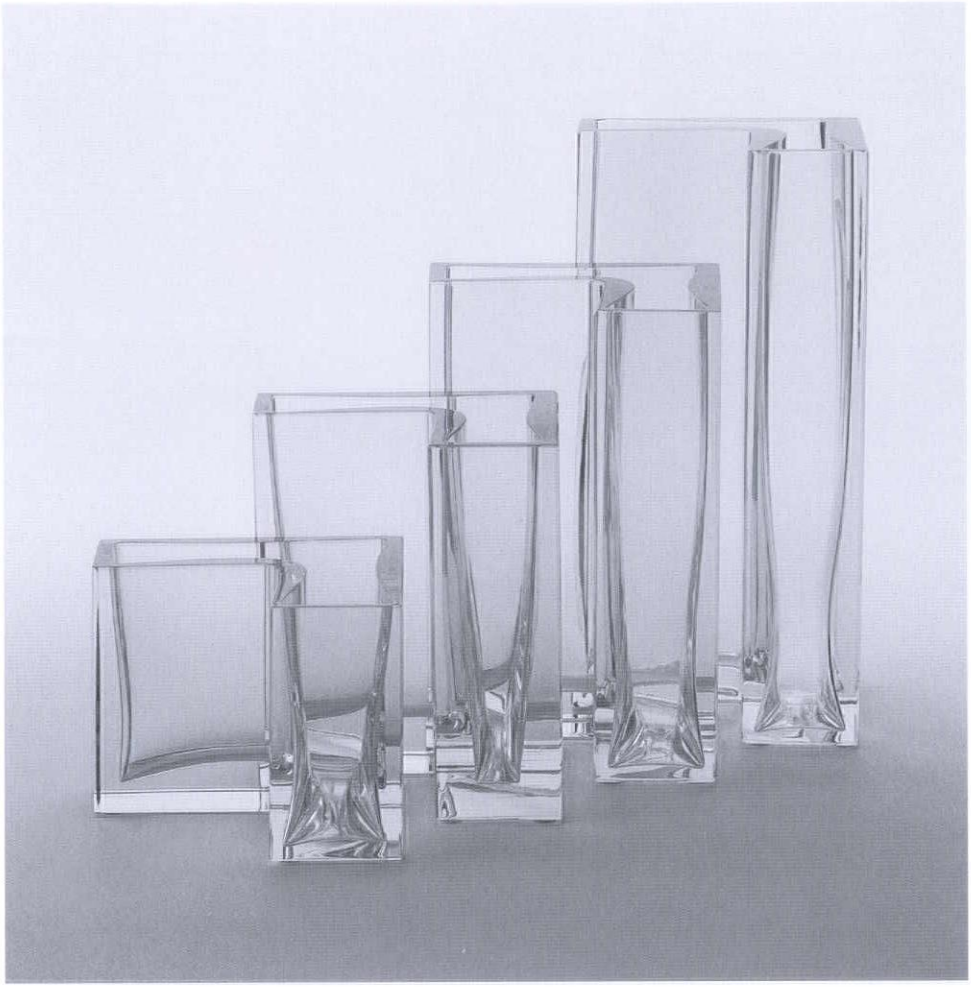
Colle, Italy

クリスタルグラスが成型後の装飾的なカッティングによりその輝きを表現するのに対して、成型時点での断面の厚みに変化を持たせることで独特の輝きを出している。螺旋状に昇る正八角形断面は、グラスに動きのある表情を与えると共に、技術的にも脱型時のパーティングラインを目立たなくさせる効果がある。コッレ社の製品の中では、Old Fashion（オールドファッション）タイプと分類され、特にオンザロックを楽しむグラスとして位置付けられている。氷を入れたグラスは、その内部の凹凸により、手の中で回すことで硬質で軽やかな音色を奏でる。(N.M.)

Vases "ANGLE" 1977

Roberto Sambonet

Baccarat, France



Pitcher "TRINIDAD" 1969

Enzo Mari

Danese Milano, Italy

本来、水差しとしての機能をもつものであるが、何か日本の伝統的花器や向付けの形態を髣髴させる。ガラス素材の特性と吹きガラスの独特の技法を十分に引き出した作品と言える。(T.K.)



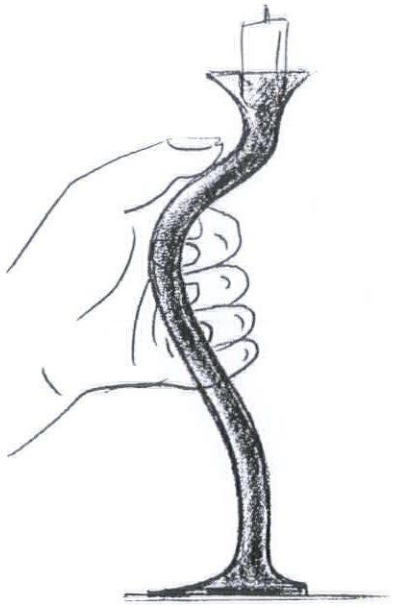


Candle holder 1990

Angelo Mangiarotti

Colle, Italy

機能的には同じロウソク立てである上と右の作品は、まったく違う手法によりデザインされている。ひとつは、あたかもガラスのプレキャストをイメージさせる分節と組み合わせにより構成されており、ひとつ1つのパーツにろうそくを立てることができ、そのヴァリエーションを楽しむことができる。そしてもうひとつは人間工学的視点からのアプローチである。手に持って移動させることができるロウソク立てということのみならず、クリスタルガラスの素材を用いた曲線が、幾重にも重なったとき、ロウソクの光と共にその素材の奥深さを感じるものである。(T.K.)

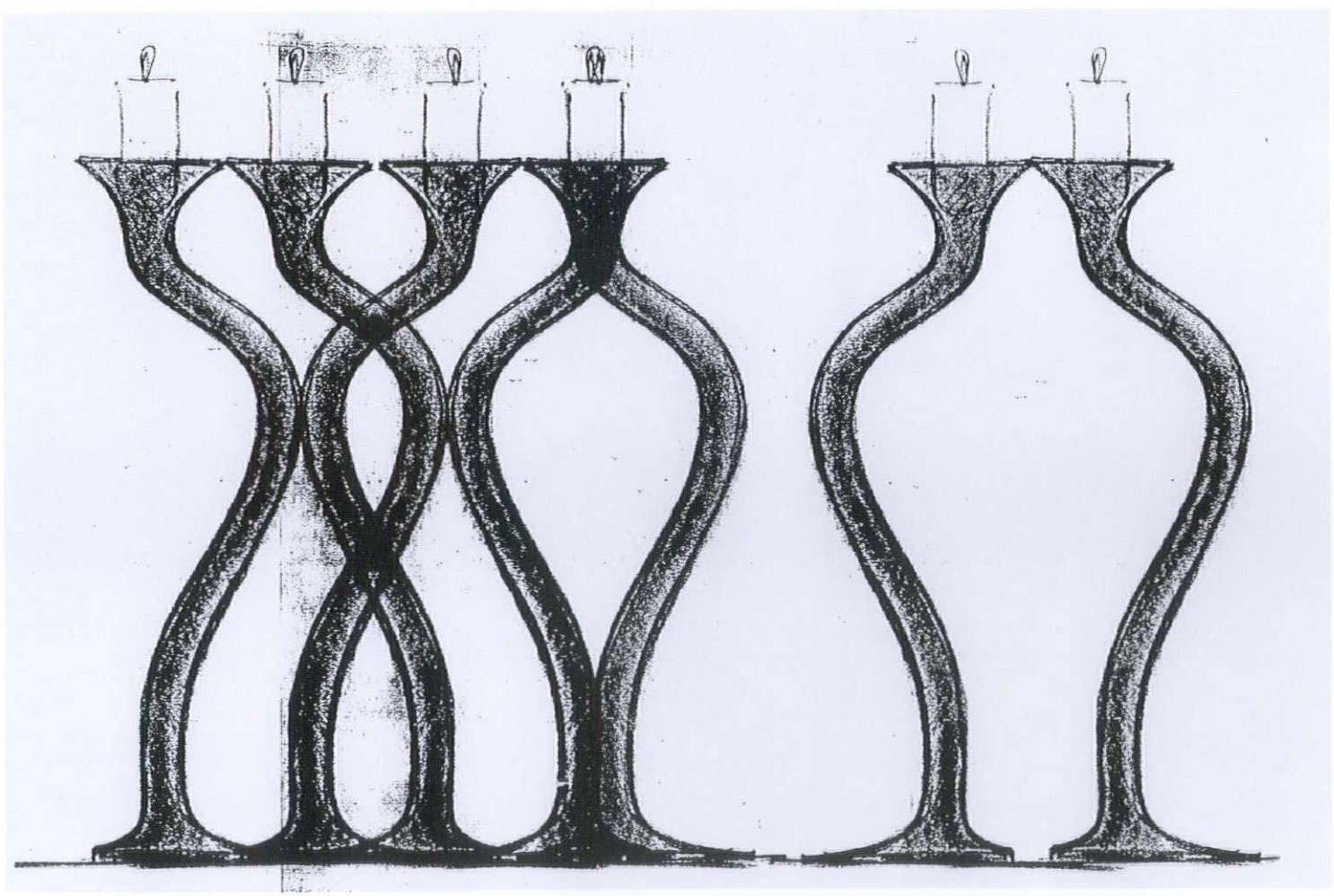




Candle-stand "ERGO" 1987

Angelo Mangiarotti

Colle, Italy

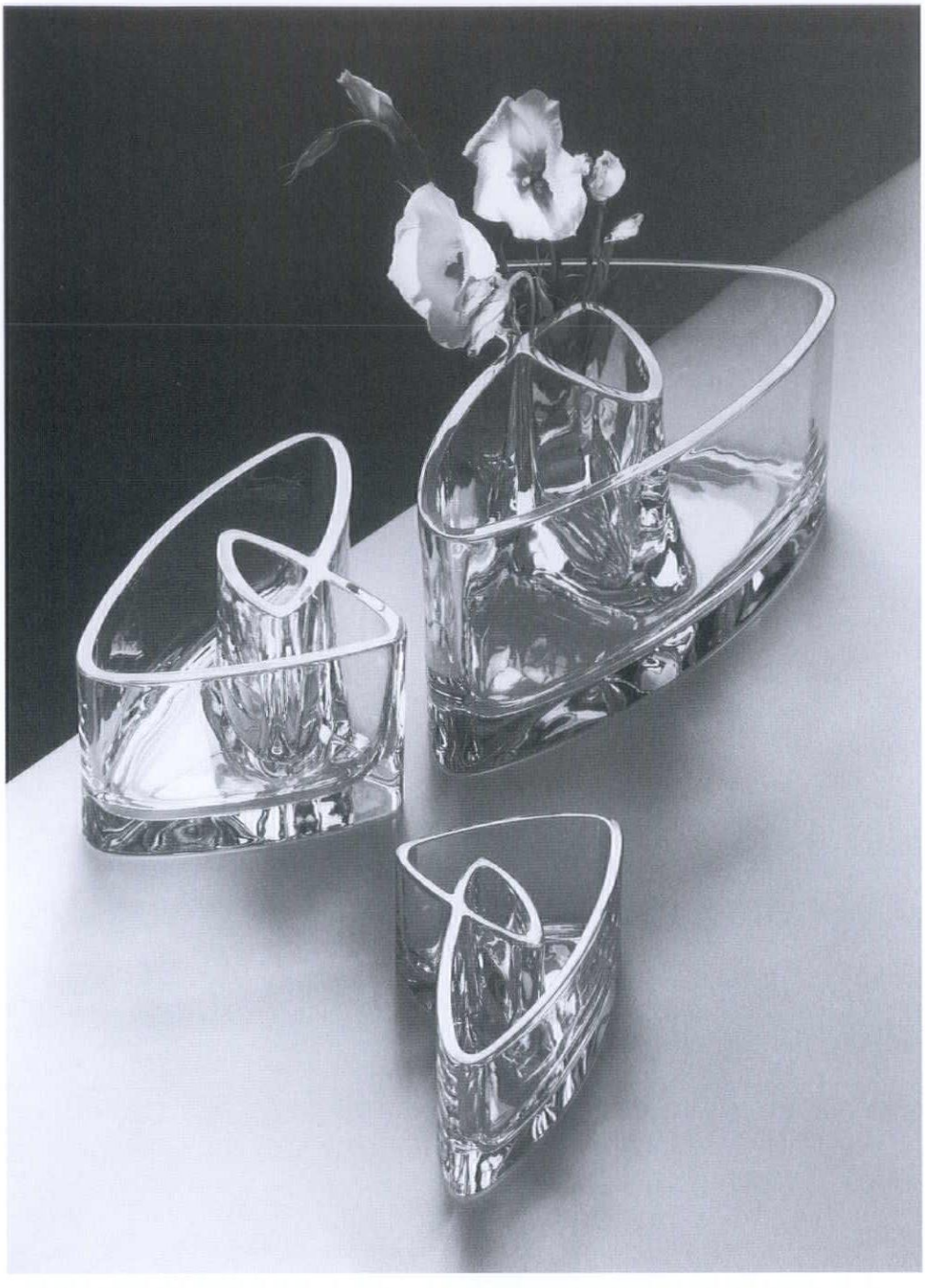


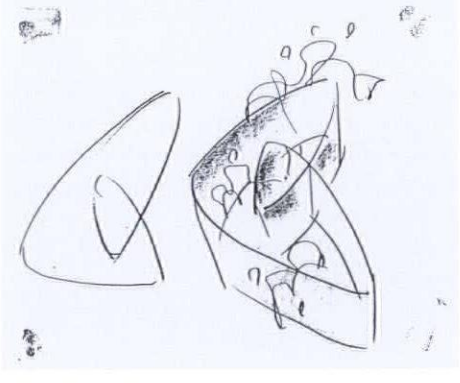


Vase "ESTATE" 1991

Angelo Mangiarotti

Colle, Italy



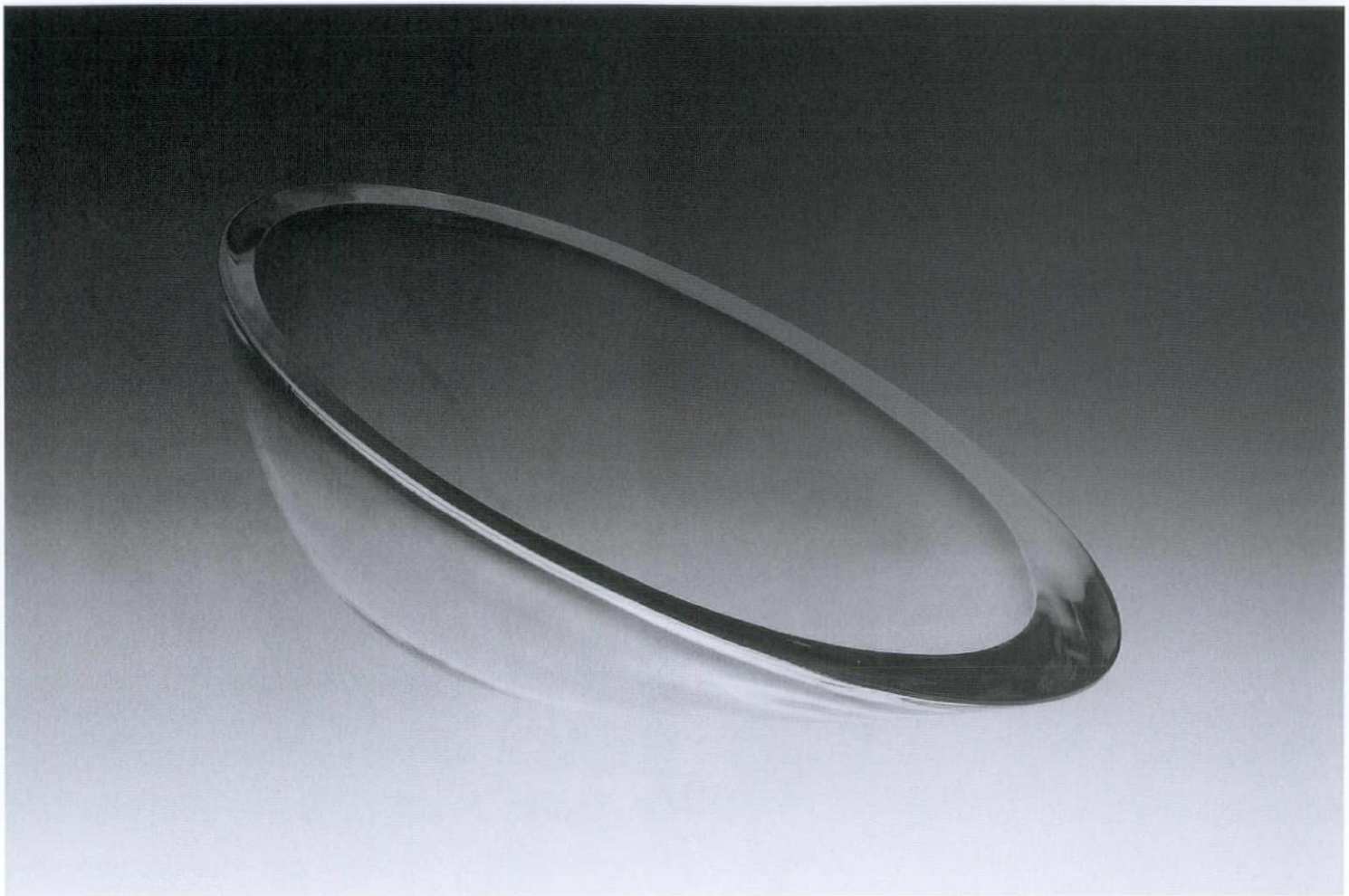


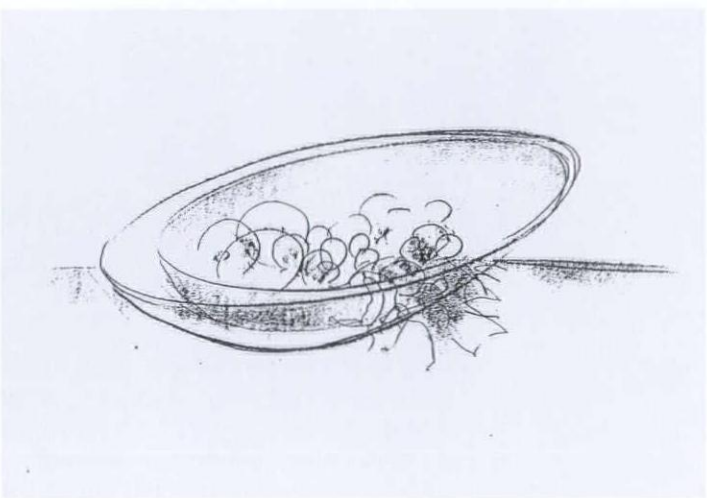
Centerpiece "ALOE" 1986

Angelo Mangiarotti

Colle, Italy

一筆描きの線によってできた一輪差しの花器。その中央部は、底がなく抜けている。水を入れると、その部分の存在が明らかとなり、デザインのコンセプトを強調している。他に円と楕円それぞれの幾何学の重り合いをもつヴァリエーションが存在する。重なった部分はやはり底が存在しない。(T.K.)





平面的にふたつの円の中心をずらし、直径を変えることにより、ガラスの厚みの変化が生じる。それと同時に重さの変化が生じて傾く。極めて自然で単純なことであるが、「重力」というものを熟知している者のみが生み出すことのできるアイデアである。クリスタルガラスという素材の厚みの変化によって生ずる輝きの変化も重要な表現となっている。(T.K.)

Centerpiece "CASTA" 1988

Angelo Mangiarotti

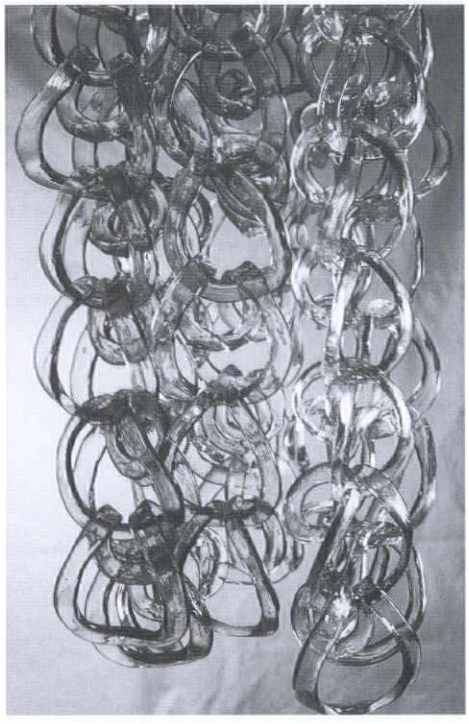
Colle, Italy

Lamp "I GANCI" 1964

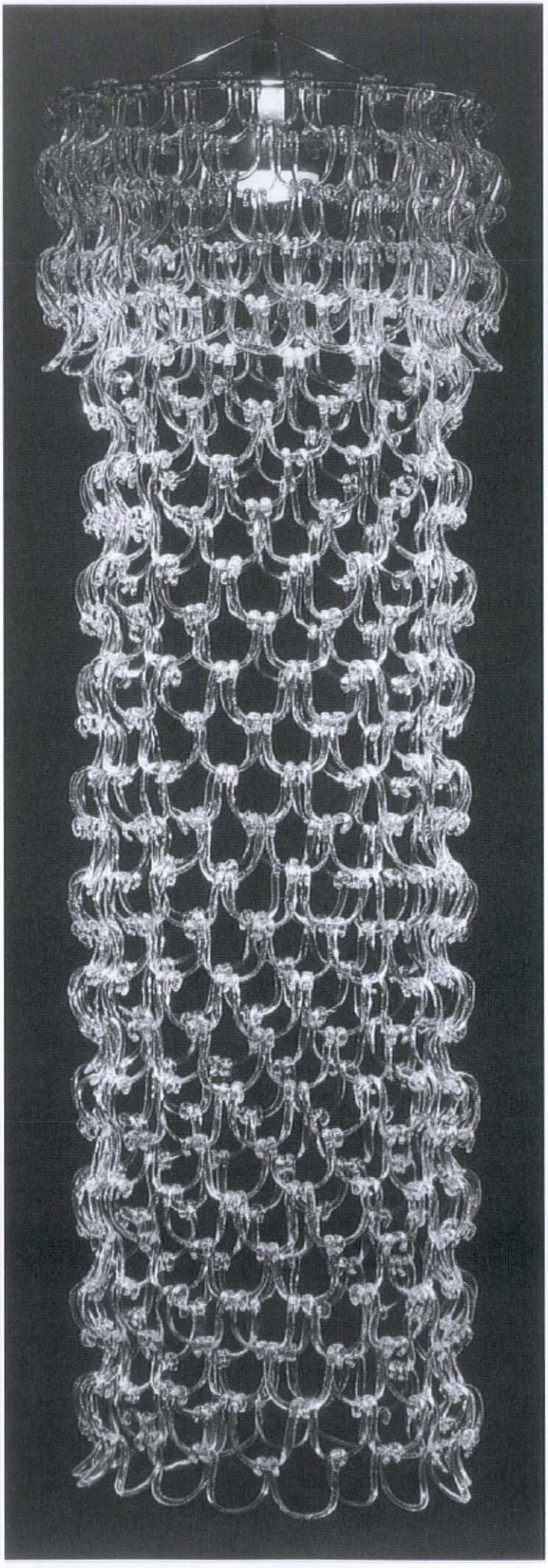
Angelo Mangiarotti

Vistosi, Italy

直径10mm程度のループ状のガラスのピースを連結していくことにより、照明を作り出している。天井からの光源が、ガラスの中を伝わって下部に降りてくる。大きいもので3m近くにもなる。本来、上部と下部では、その受ける荷重が異なり、部材断面も変化せざるを得ないはずであるが、その組み方によって構造的問題も解決されているのは驚くべきことであり、全体として、照明の新しい概念を作り出した作品と言える。ガラスのピースは、ヴェネツィア・ムラノ島の職人によりひとつ1つ手加工によって作られたものであり、その温かみが光と共に伝わってくる。(T.K.)









Stacking bottle 1959

Timo Sarpaneva

iittala, Finland



Vase "KANTTARELLI" 1947
Tapio Wirkkala
iittala, Finland

まず、白い食器から

森 正洋

白いいろ、白い陶磁器、それは素(しろ)い材料ではない。自然のままの材料ではなく、白くするために多くの技術的処理をして作りあげた近代的な人工の材料である。

一方で私たちは自然のままの材料を使用した例を数多く見ることができる。木を組み合わせた木造の家、日干し煉瓦を積み上げた粘土造りの家、石片を積み上げた石造りの家など、地域や民族によって使用してきた材料の必然性と作るための知恵を見ることができる。この風土・民族・歴史の流れを考えながら、近代の生活・現代の道具を創るものとしてまず白い陶磁器をイメージしている。

生活の道具をデザインすることは、人々の行動や暮らしを道具で規制することになる。人間の肉体的要求からの形と生産加工技術からの要求、社会的、情報的要求からの形が融合して物がデザインされるのであろうが、技術、環境、状況によって、物の存在や価値は変化するものでもある。

デザインするということは、自分の生き方、自分が望む人間生活のありかたが考えられなければならない。それがデザインの出発点といえよう。物を作りながら物だけを見るのではなく、物の後ろに人間が居ること、人々の生活があることを忘れてはいけない。なぜあなたは物を創りたいのか、それも生活に必要な道具類を、そのことをいつも考えることが社会から遊離することなく、物の密度をあげ、また埋没することなく、指導力を発揮するデザインを生む原動力になると考える。

時代は混乱し大きく変動しようとしているこの頃、人間と物との関係をあらためて見つめ、憂のないようにしたい。

●もり・まさひろ／デザイナー、元愛知県立芸術大学教授

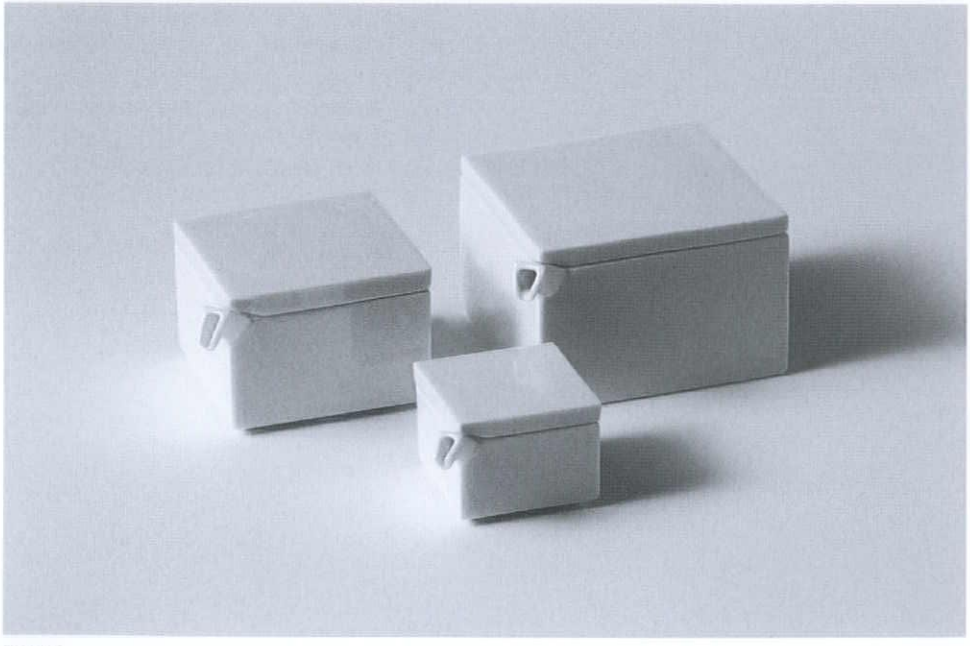


醤油さし 1958
森正洋
白山陶器、日本

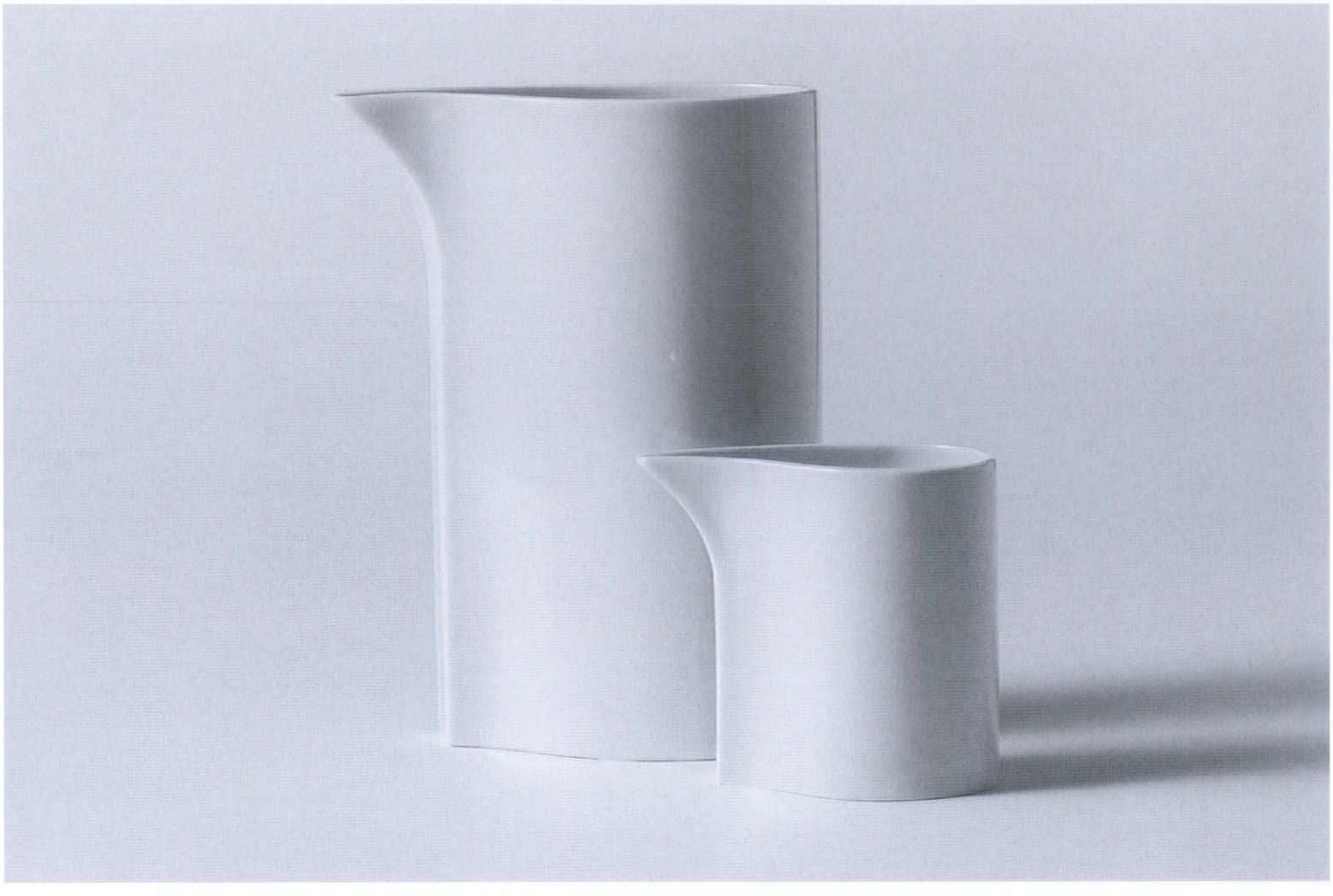
良質で適切な価格の生活雑器を多くの人々の暮しに役立てる。この命題に対して、この醤油差しは、入れ易く差し易く、そして形も気持良く……と、要求される機能を見事に充足させ、復興に向ける我が国の新しい時代の空気を表現した名品で長年にわたる定番品であり、産業におけるデザイナーの指標となるものであった。今日も作り続けられている。(M.K.)



つのカップ 1973
森正洋
白山陶器、日本



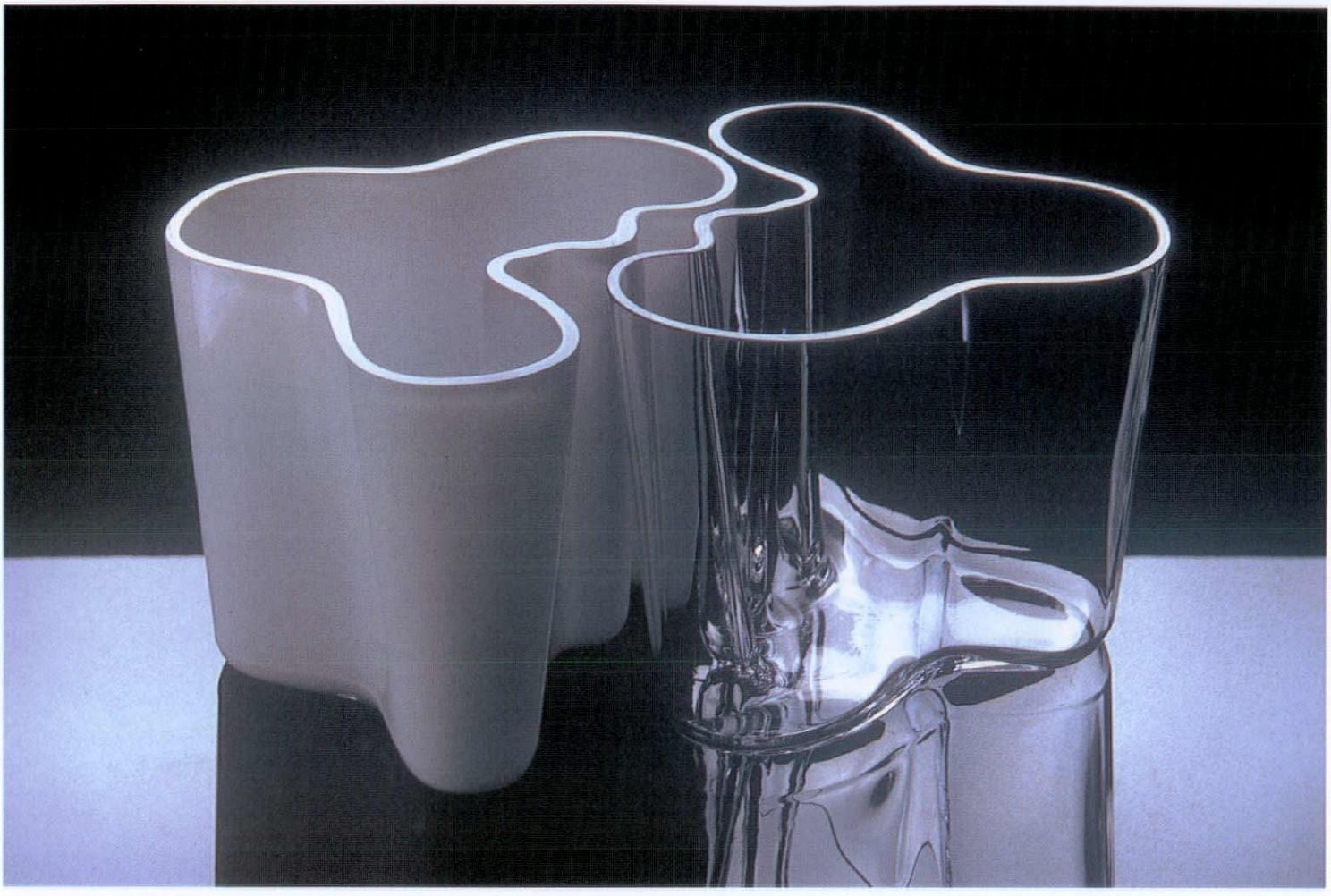
D型 醤油さし 1987
森正洋
白山陶器、日本



Pitcher "COMBINATION"

Niels Refsgaard, Jens Quistgaard

DANSK, Denmark



Vase "Savoy" 1936

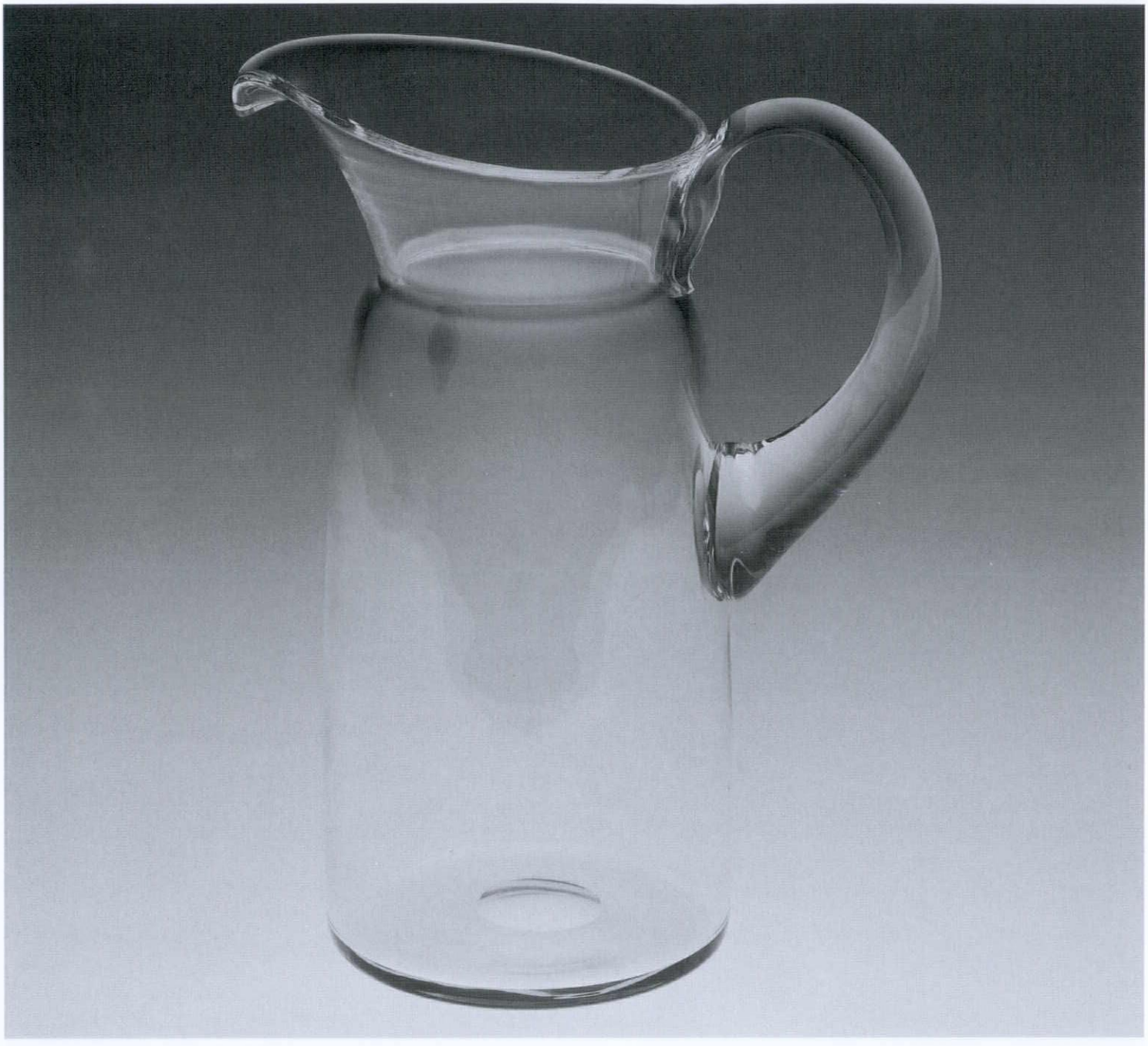
Alvar Aalto

iittala, Finland

アルヴァ・アアルト（1898—1976）は今世紀世界を代表する建築界の巨匠であるが、家具その他照明器をはじめとするインテリア・デザインの器具にも一貫性のある質の高い作品がある。そのデザインは暖かく、人間らしく、常識的な態度を崩さず、どんなインテリアにも調和する魅力があるものである。「われわれはシンプルで優れ、非装飾的ではあるが、人間と調和するもののために仕事をするべきなのである」と語っている。その上彼のデザインはそのほとんどの形態が「非対称＝アシンメトリー」であることに注目したい。それは教会の平面でさえそうである。この花器も、どの位置から観察してもシンメトリーではない。アアルトの思考的前衛と形態的感性の不思議な解決である。

（S.H.）





Picher "IA KANNA" 1981

Ingegerd Råman

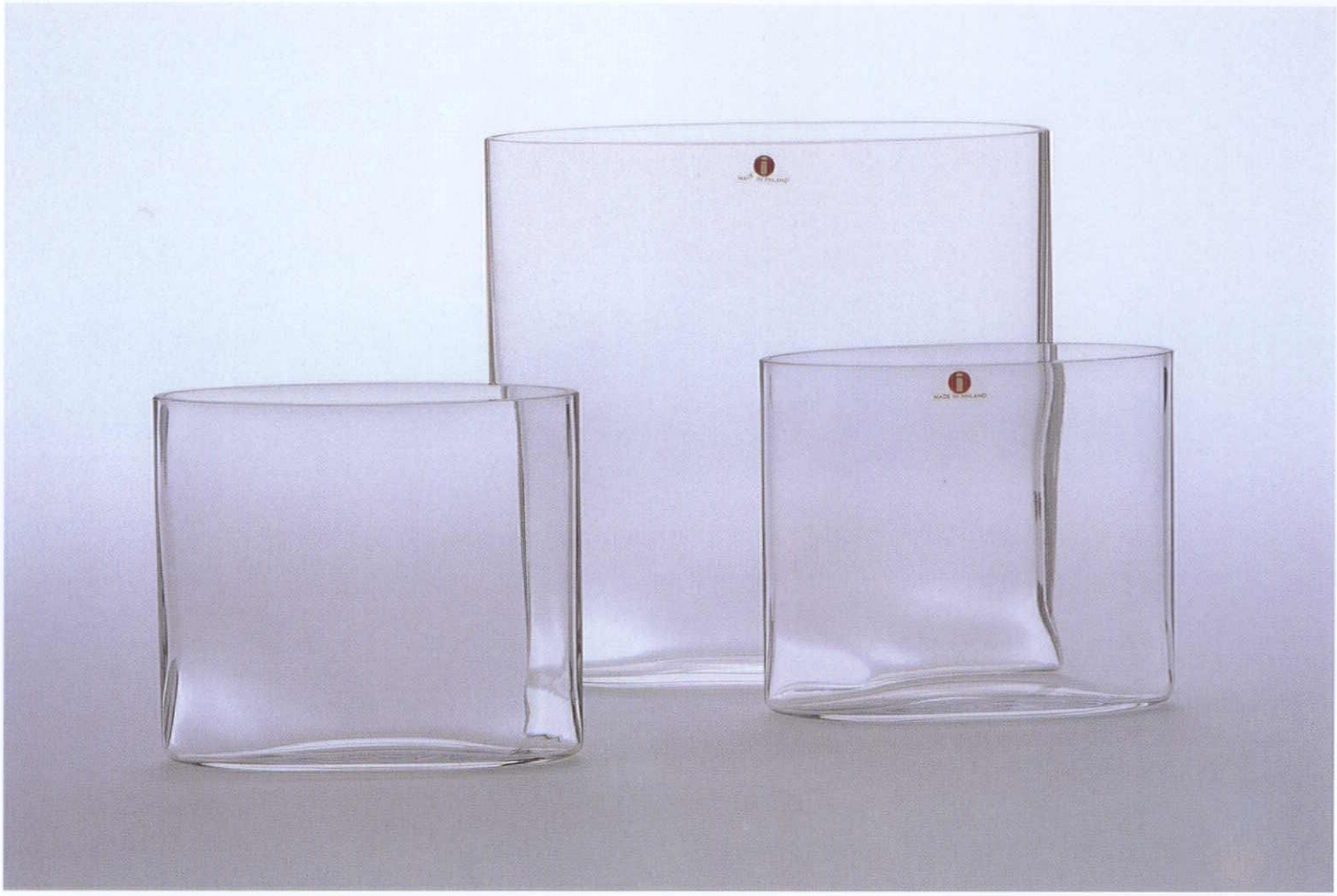
Skrufs Glasbruk AB, Denmark



Pitcher "Form 24" 1962,1965

Henning Koppel

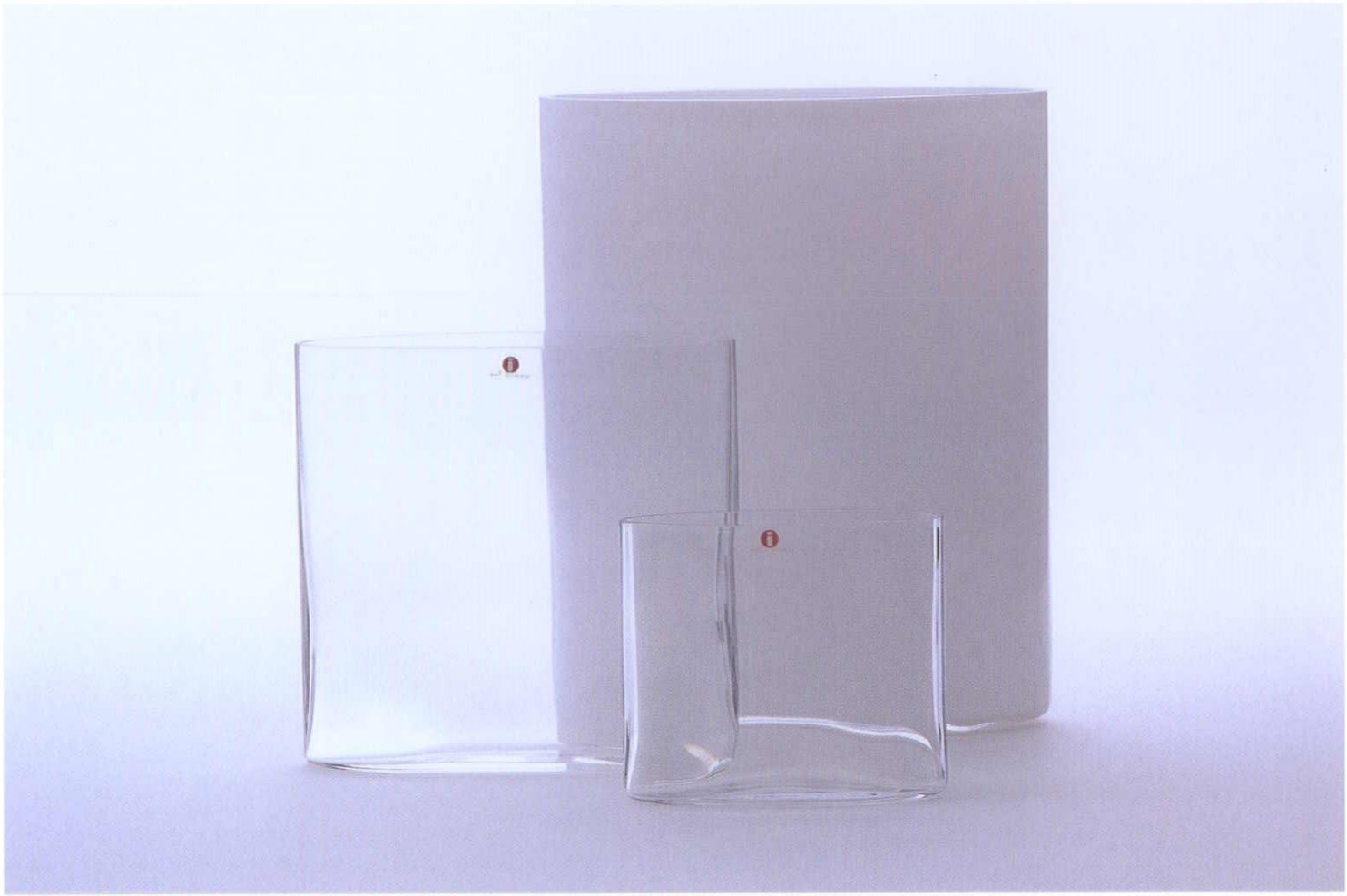
Orrefors Glasbruk AB, Sweden
Bing & Grøndahl's Porcelain Factry, Denmark



Vase "PINUS MINERVA"

Tapio Wirkkala

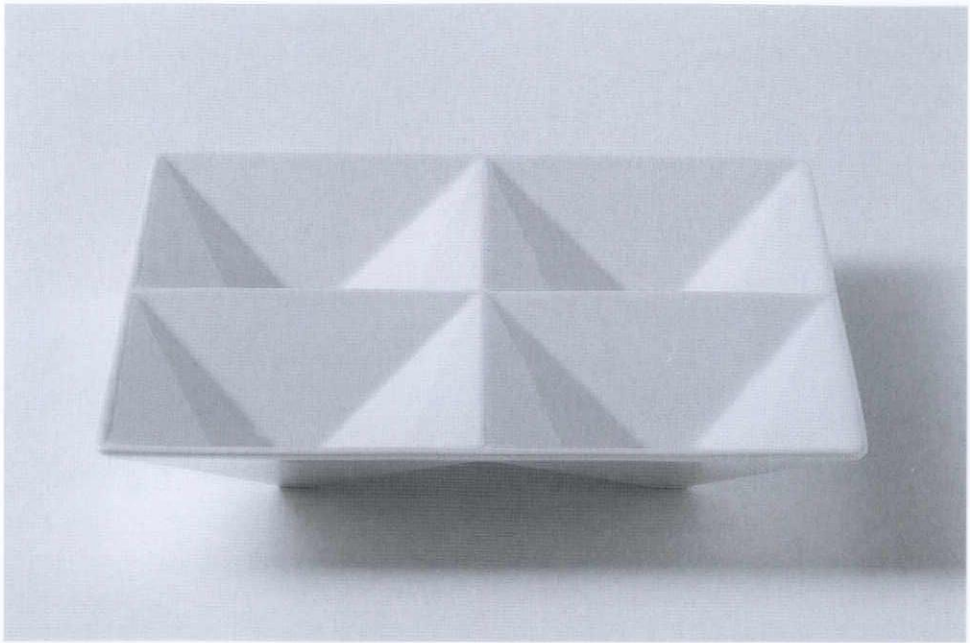
iittala, Finland



Vase "PINUS MINERVA"

Tapio Wirkkala

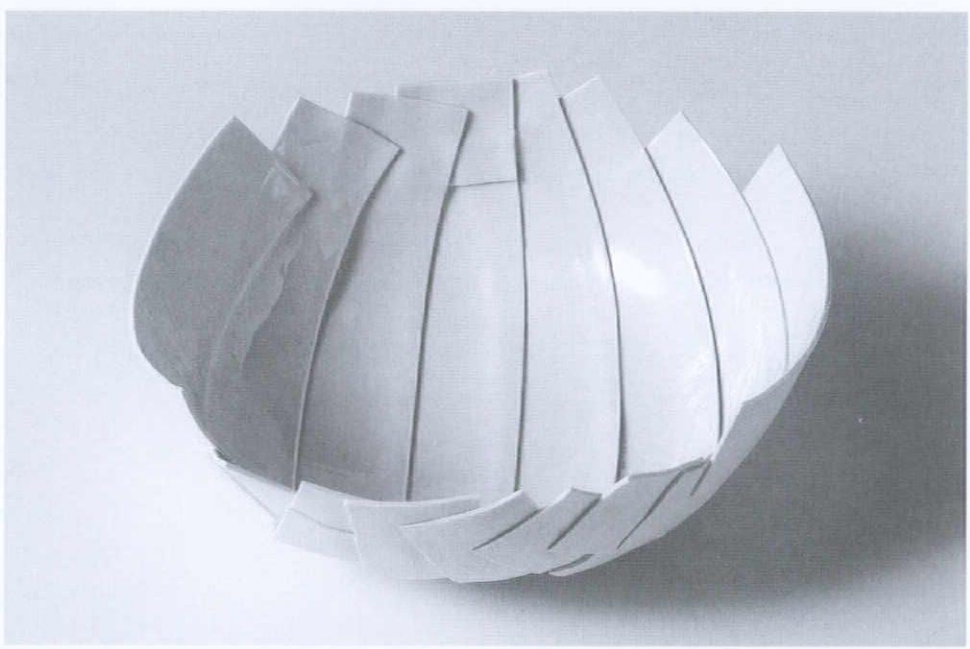
iittala, Finland



Center dish "KF-1" 1957

Kaj Franck

Arabia, Finland



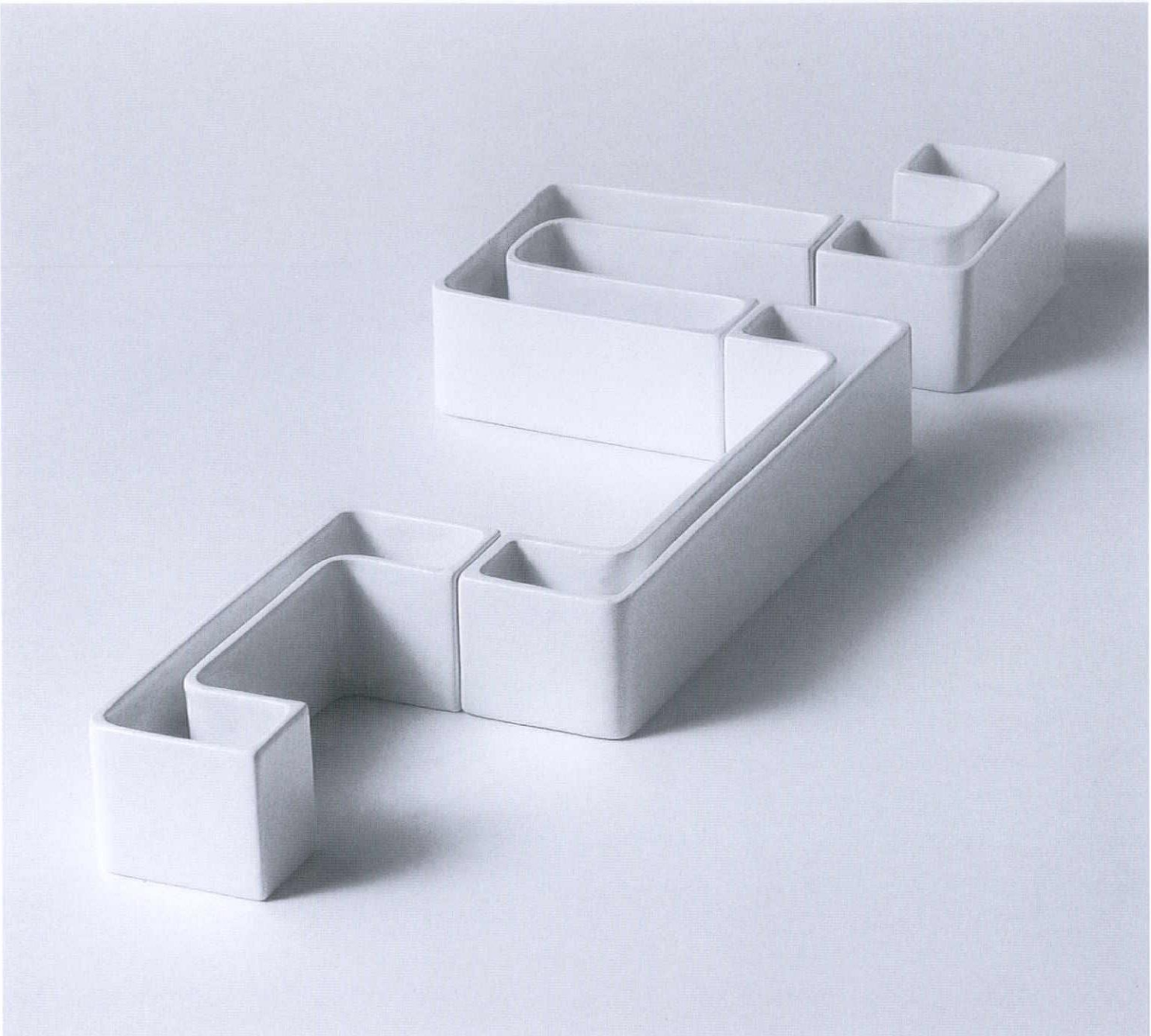
Center dish "MODEL-S"

Enzo Mari

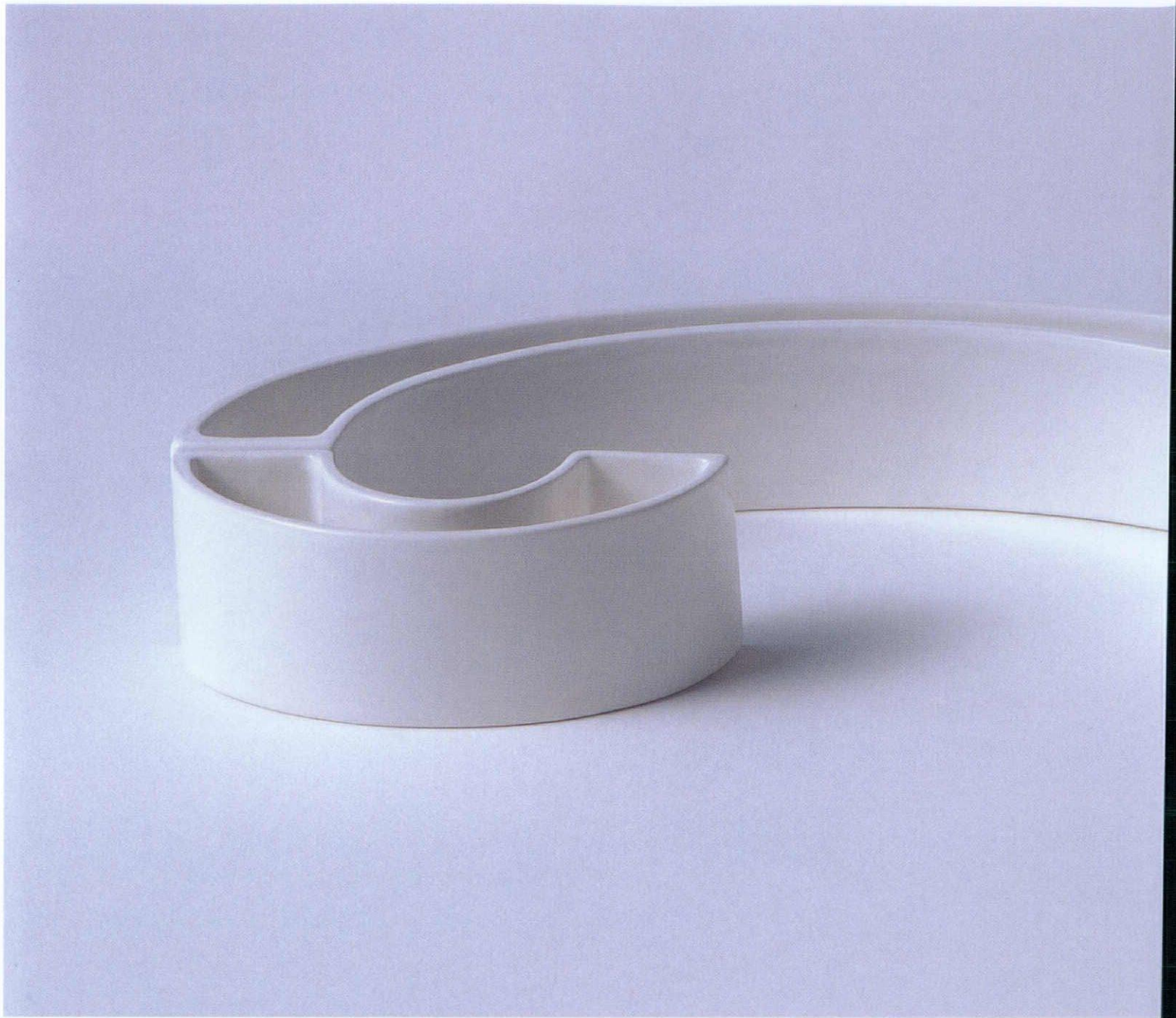
Danese Milano, Italy

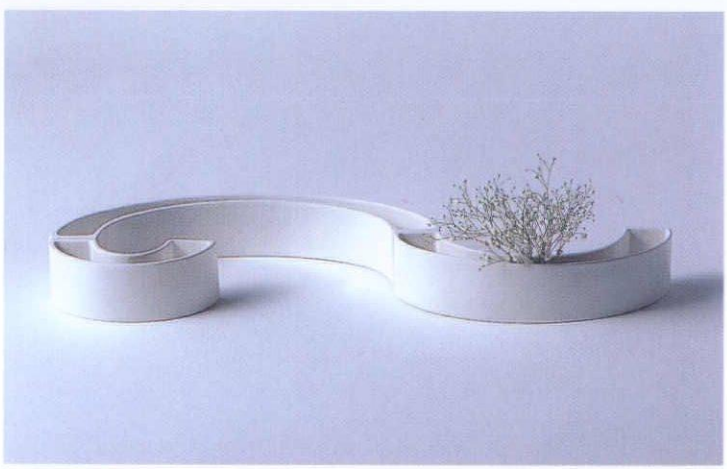
ダネーゼ社から多くのテーブル・ウエアやグラフィック・オブジェの佳品を出しているデザイナーで、1974年に突然従来の工業的文脈の造型から、手工的であり、形而上的な手法でデザインの新しい側面を模索するかのごとく、セラミックで原型的な造型の数々を発表した。また同時期に、板で構成するDIYの家具シリーズのシステムを広くアピールし話題になった。

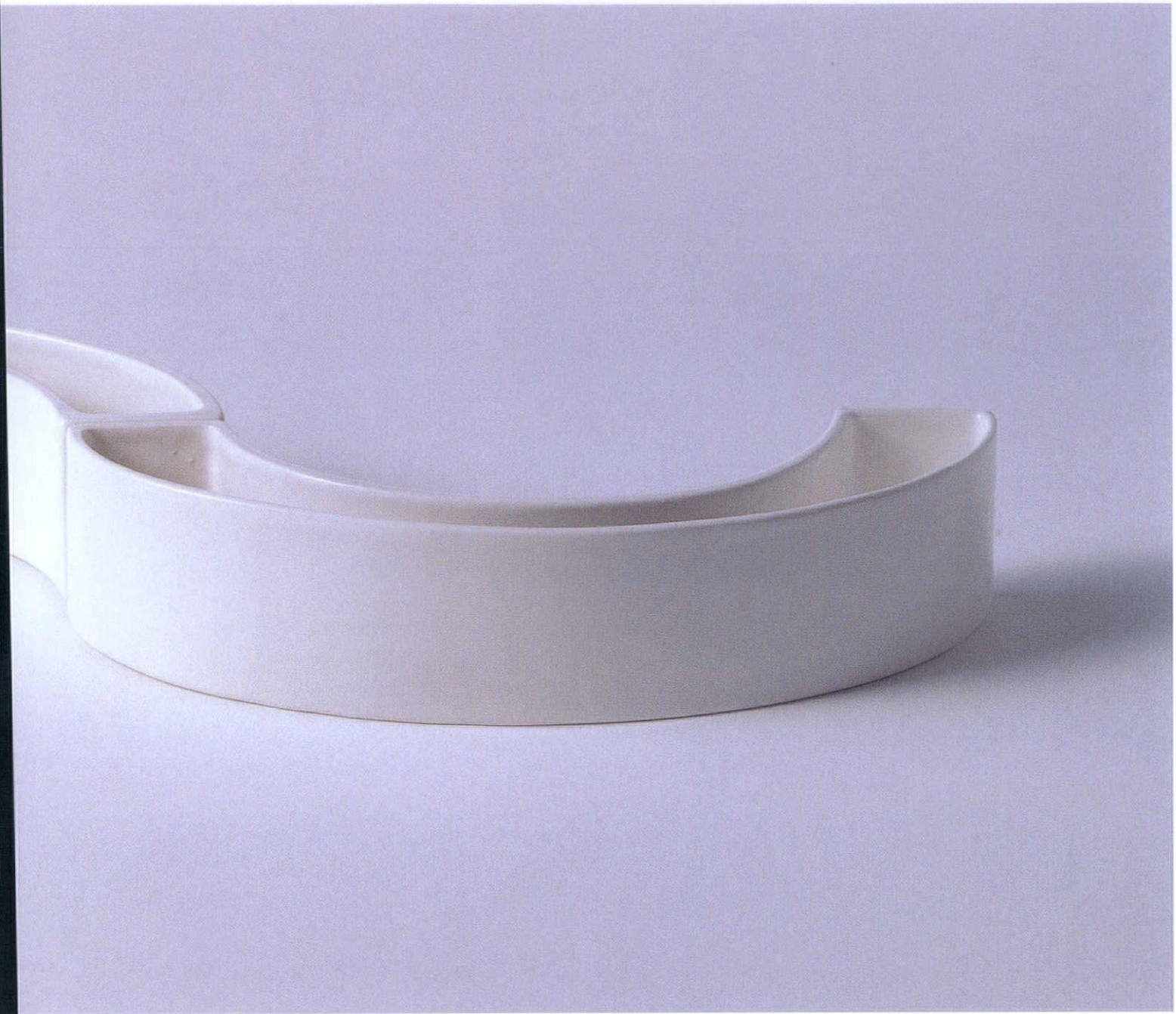
(M.K.)



Vase 1964
Angelo Mangiarotti
Danese Milano, Italy





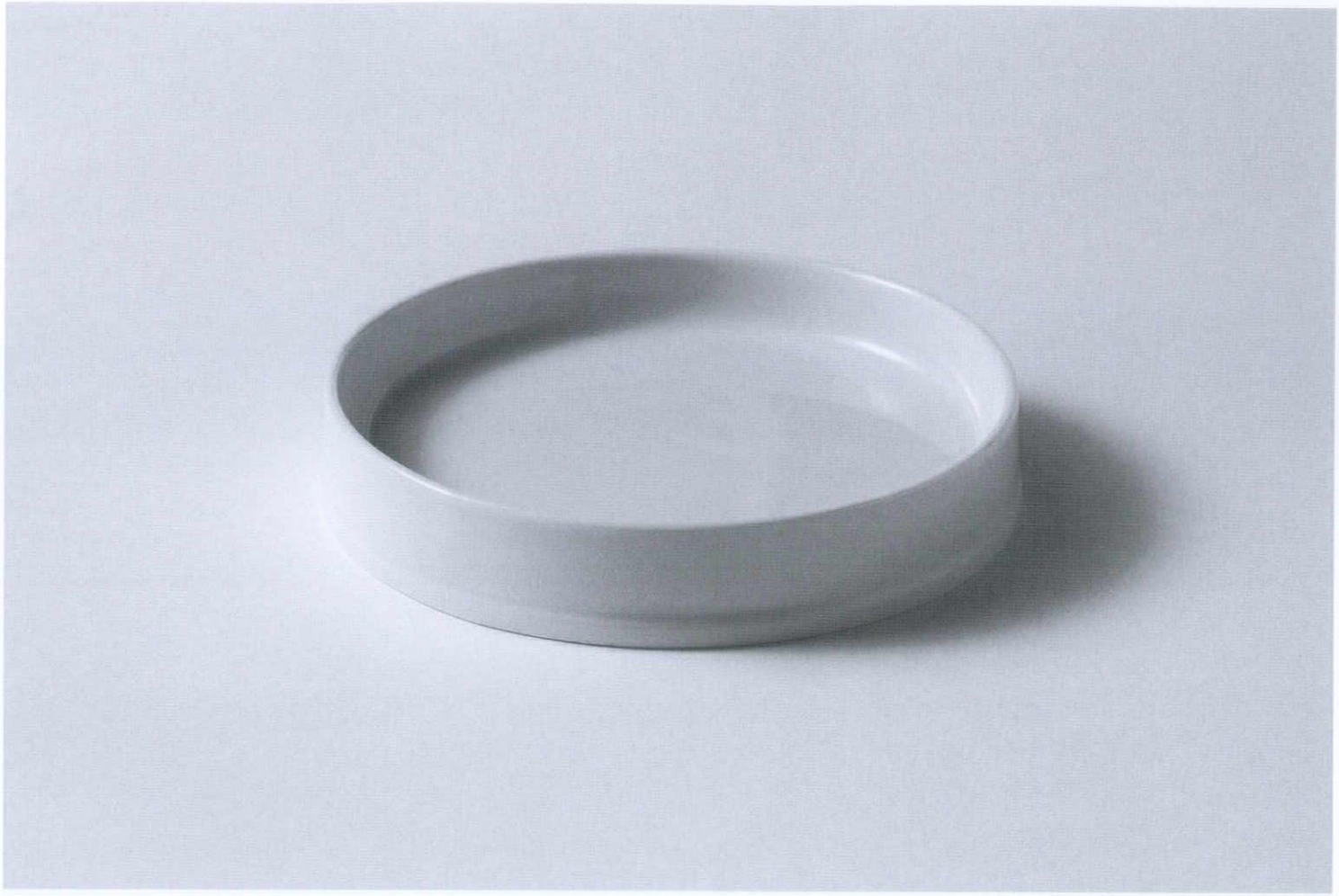


Vase 1964

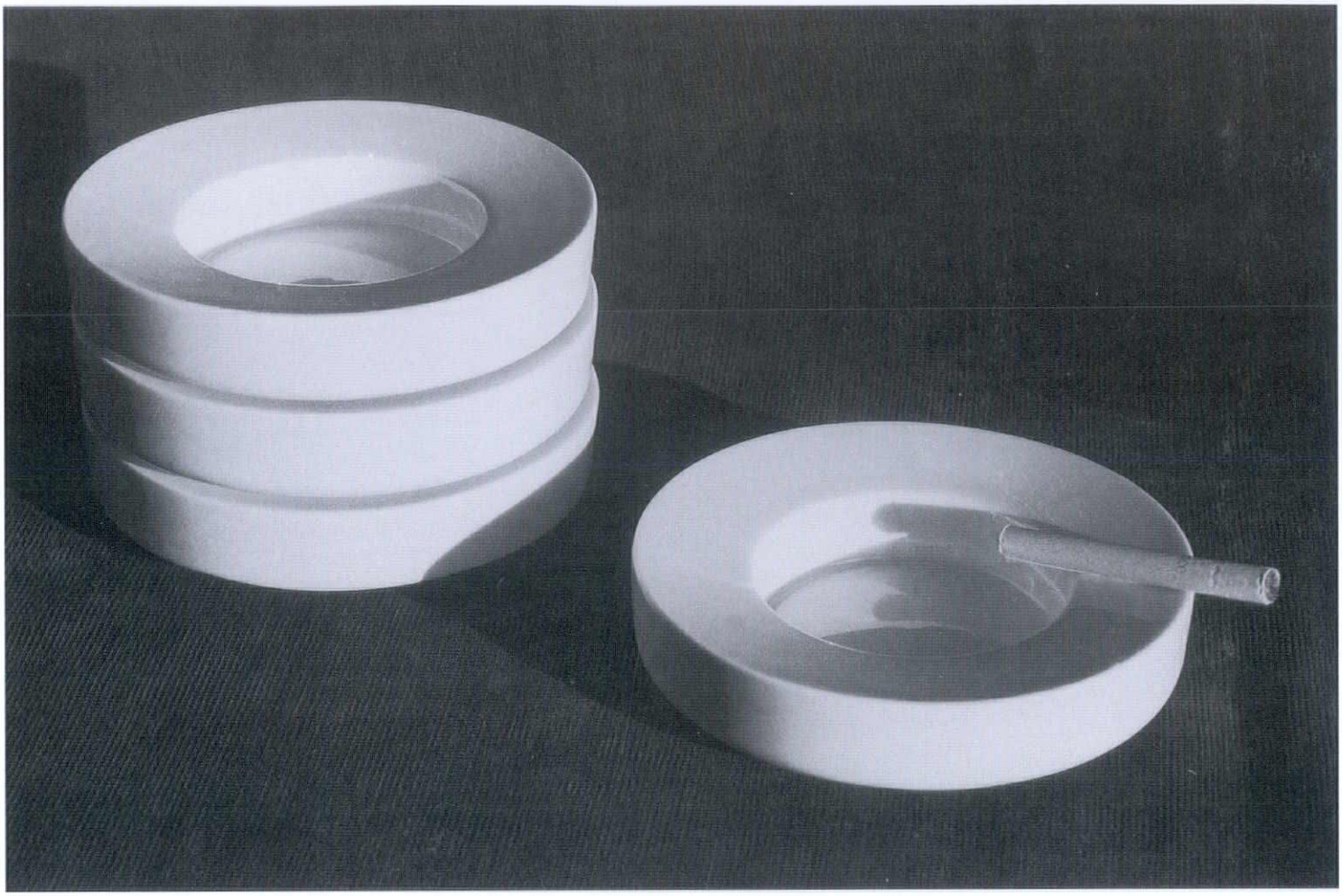
Angelo Mangiarotti

Danese Milano, Italy

曲線で構成された花器を集めると、扇型を形成する。逆に扇型の平面を円弧上に分割したものが、ひとつ1つの花器となっている。幾何学の分割、そして連結という手法を用いている。連結する組み合わせによっ様々な姿を見せる。ヴィツェンツァの土を用いて焼成されたこの花器は、花を生けることとその姿を大きく変貌させる。その表面の白さのやさしさと共に、イタリア・ベネト地方の自然までも表現しているかのようである。(T.K.)







灰皿 1950
柳宗理
松村硬質陶器、日本

1998年4月18日～6月1日までセゾン美術館で「柳宗理のデザイン――戦後デザインのパイオニア」という展覧会が開催された。柳氏を集大成した展覧であった。柳宗理をもっと知ろうとする人には、この時発行されたカタログを見られると良い（展覧会終了後、河出書房新社から単行本として刊行が予定されてもいた）。その中にも書いたが、この灰皿は筆者の学生当時、実測図面を描く課題の教材として提出されたものである。一見、端正に見える形の中にも、微妙に湾曲したディテールがあり、レンダリングでは現われない形態があったように思う。ラフスケッチとかドローイングをしないで直に、あるいは、いきなり石膏とか木材を手で触りながら造形、形成してゆく柳氏の独特の人間味が現われている。当時、もうひとまわり小さい模造品が多くの喫茶店で流行し、使用されていたのが、何か可笑しく印象に残っている。（S.H.）

Ashtray for SAS Royal Hotel 1956-61
Arne Jacobsen
A/S Kongens Lyngby, Denmark

Ashtray 1964
Angelo Mangiarotti
Danese Milano, Italy

オリジナリティの尊厳

日本文化の構築に向けて

河合俊和

約400年前、千利休亡きあと秀吉の茶頭を務め、二代将軍徳川秀忠の茶の湯の指南役を務めた武士、古田織部がいた。

美しい緑釉と斬新な絵付けで、視覚的革命を起こした向付には、桃山の時代の感性の要求によるものが大きいとしても、その形態的斬新さには目を見はるものがある。それらは、私たちが現在認識するところの幾何学的形態操作がさまざまな形で行われていた。幾何学の合成、変形、連続、ひずみ等その手法の多様化には、時代を経た徳川時代中期において、織部焼として継承された後においてもその概念を受け継ぎ、衰えをみせていない。あたかも抽象絵画を思わせる自然の風景の絵付けをほどこし、幾何学で構成された織部の器に、数学的な幾何学でない自然なかたちを見出すことができる。歴史的には古田織部という人物は武士であり、自ら土をこねることをした形跡はなく、いくつかの名の入った器と、織部好みという茶席等が残る。また、織部焼との因果関係は明確ではないといわれているが、今でいうデザイナーあるいは、建築家の役割をになっていたに違いない。自然の真理の探求の中で、千利休との対比的要素を含むにせよ、その動の造形の中での形態は、その手法の多様化、機能からくるそれぞれの形の意味をも合わせて、器の中に見出すことのできる自然観、人間観共にその根本を問うべきものであったと考える。織部の緑釉は美しい。しかし、問題はその色ではなく、その奥に隠されたものであることは疑いもないことである。見えざるものの形を持ち、動の概念をもつ、白い世界である。

白い世界の中で何も言葉を発しないが、その意味を自らをもって訴えている素材に与えられた形は何にも増して力強い。つまり、素材を見つめることは、原点に立ち返り、思考し始めたことを意味している。問題は、何色が美しいかではない、ものの本質の議論とは、それを何色にしようかということから始まるものではないのである。色彩は、秩序を保つために必要とされるものであり、素材のもつ本質は、何よりも力強く存在している。そしてその素材が変われば、形も変わり、色も変わる。白い世界への探求は、素材の探求から始まる。

時間と共に、すべての素材の表情は変化する。ごく当り前のことである。普遍的な形をもつ素材が変化する様を、造り手は想像する。時と共に、あるいは、四季と共に変化するそれらを使い分けて楽しむ。こんな豊かな思考は他に類を見ないはずである。

かつて、柳宗悦、バーナード・リーチらによって、日本各地でその地域性、あるいはその形態・技法の独自性あるものが取り上げられ「民藝」と名付けられたのは、周知の通りであるが、用の美を持つこれらの中には、今もなお、作り続けられているものも多い。九州の山深い、日田(ひた)の皿山、小鹿田(おんた)の器は今も純粋な形で残り、造り続けられている。私自身、それらを継承して造り続けている人々に尊敬の念を持ってそれを使い、時間と共に変化する姿を楽しませてもらっている。時間軸を思考の中に取り入れ、そして体験するとき、その持続性の重要さと豊かさを時間と空間と共に感じることができるのである。白い世界がそこにも存在する。

日本的なものという表現をしばしば耳にすることがあるが、これほどあいまいなものはない。日本の文化的背景をもち、独自の表現をするものは、おのずと日本のものであるからである。問われるべきものは、歴史や文化に対する思考と認識の深さであり、創造者による表現の独自性の強さに他ならない。

今や幻影ではない日本文化の本質を問い直し、原点に回帰することは、恐れるべきことではなく、時代がそれを要求している。つまり、日本のオリジナリティを表現することを意味していることに他ならない。

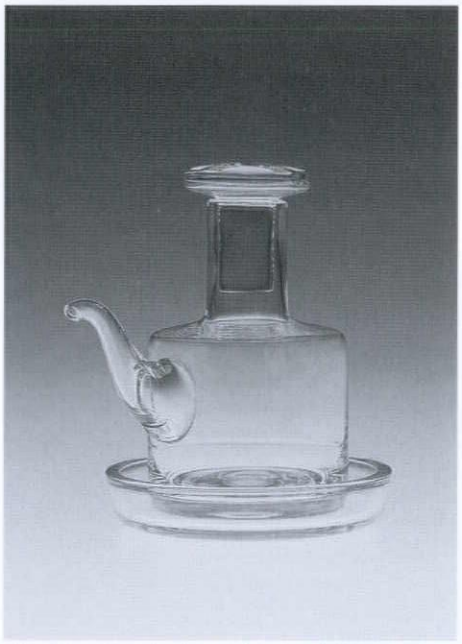
●かわい・としかず／建築家



Vodka bottle and glass 1977 / Tapio Wirkkala / iittala, Finland

■フォト・クレジット

知識たかし
表紙、P.7、12—45、50—67、72上、73—89、94、96—111、116、121、128—133、137—144、147
有川幸雄
P.72下、95、115、118、119、120下、122、126、136、148
柳工業デザイン研究会
P.47右—49、145
Studio Mangiarotti
P.70、90—93、123—125、127
Studio Castiglioni
P.114
Studio Setsu Ito
P.120上
カッシーナ・インターデコール青山本店
P.112、113
スキャンデックス
P.134、135



醤油さし　1973／東條衛／ノリタケ, 日本

■資料提供

川上元美
永井敬二
羽原肅郎
宮川格
元良信彦

■編集協力

河合俊和
川上元美
永井敬二
羽原肅郎

■参考文献

"Design in Sweden" 1985／The Swedish Institute
"Scandinavian Modern Design 1880—1980" 1982／Harry N. Abrams, Inc., New York
"Danish Arts and Crafts 1931—1981" 1981, Frederic Sieck／Den Permanente A/S
"TAPIO WIRKKALA" 1985, 2nd edition／The Finnish Society of Crafts and Design, Helsinki
"Images of Finnish Design 1960—1990" 1991, Finnish Association of Designers Ornamo／Kustannusosakeyhtiö Tietopuu, Espoo
"sarpaneva" 1986／Otava Publishing Company
"Arabia-made for life" 1996—1997／Arabia Finland
"Unique Scandinavian Design" 1996／iittala Finland
"GLAS för husshållet" 1960／form januari 1960
"Moderne Klassiker MÖBEL DIE GESCHICHTE MACHEN"／Schöner Wohnen-Buch
"Design Since 1945" 1983／Philadelphia Museum of Art
"Design in Sweden" 1972／The Swedish Institute
"100+3 Great Danish Industrial Designs, ID prisen 1965—85" 1985／Danish Design Council
"TÄGLICH IN DER HAND" 1987／Worpsweder Verlag
"Ein Form die Geschichte macht ; Arzberg 1382"／Porzellanfabrik Arzberg
"The Museum of Modern Art, New York" 1984／Harry N. Abrams, Inc., and The Museum of Modern Art, New York
"wilhelm wagenfeld 30 jahre künstlerische mitarbeit in der industrie" 1961
"Industrial Design ; Reflection of a Century" 1993, A. F. A. A., Association Française d'Action Artistique, Ministère des Affaires Etrangères／Frammarion/APCI
"design IM 20. JAHRHUNDERT" 1989／KATALOGE DES MUSEUMS FÜR ANGEWANDTE KUNST KÖLN
"DESIGN 1935—1965 WHAT MODERN WAS" 1991, The Lake St. Louis Historical Society, Montreal／Harry N. Abrams, Inc., New York
"Zwischen Kunst und Industrie Der Deutsche Werkbund" 1987／Deutsche Verlags-Anstalt GmbH, Stuttgart
"Piet Mondrian ; Life and Work" Michel Seuphor／Harry N. Abrams, Inc., New York
"The Complete Works of MARCEL DUCHAMP" 1969, Arturo Schwarz／Harry N. Abrams Inc., New York
『イタリアデザイン展』カタログ　1976、イタリア文化会館／美術出版デザインセンター
『JAPAN INTERIOR DESIGN』1975年7月号、1976年12月号、1978年9月号、1980年9月号、1981年9月号、1982年11月号、1983年11月号／インテリア出版
『made in japan　世界に花開いた日本のデザイン』1996／サントリーミュージアム天保山

この特集は、私達の生活における身近なデザインに
焦点をあて、その秀作を紹介した。
その数135（シリーズものやセットのものはひとつに
数えている）を掲載したが、中にはその姿を
初めて見る方も少なくないだろう。
135の作品のほとんどは実物をこの特集のために撮影したもの
であり、資料提供者のご協力の賜である。その中でも、
全作品の9割以上を所有されていた永井敬二氏とその撮影者の
知識たかし氏には深く感謝したい。
読者の方々からは、ここに掲載されているもの以外にも秀作は
たくさんあるとのご指摘もあろうと思うが、（例えば、
アドルフ・ロースがロブマイヤー社のために1929年にデザイン
した "Loos Bar" シリーズや
1975年のバカラ社のデカンター "Dyonisos" など）
極力実物撮影をしたかったことからこうした選定となった。
今回紹介できなかった作品はまた何れの機会を考えたいと思う。
本特集が、多くの読者の方々にとって、
身近なモノたちのデザインに目を向けられる契機となり、
また貴重な資料として役立てられることを願っている。（編）

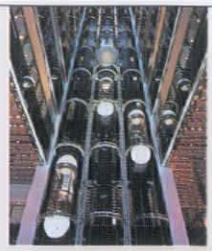
HITACHI

超高速エレベーターから、ホームエレベーターまで。

広がる生活空間を、
やさしく、
速やかに結びます。

地上数百メートルの超高層ビルから一戸建ての住宅まで。日立は、ますます多層化する暮らしを、より快適にするエレベーター・エスカレーターの研究・開発を続けています。たとえば、定格速度810m／分の〝超高速エレベーター〟や、身近な暮らしの中で利用される〝車いす用ステップ付きエスカレーター〟、〝ホームエレベーター〟など、施設に応じた設備で、誰もが住みやすい街づくりをサポートします。

日立エレベーター・エスカレーター



Office Building













Hotel & Residence







Public Space

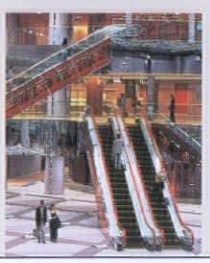






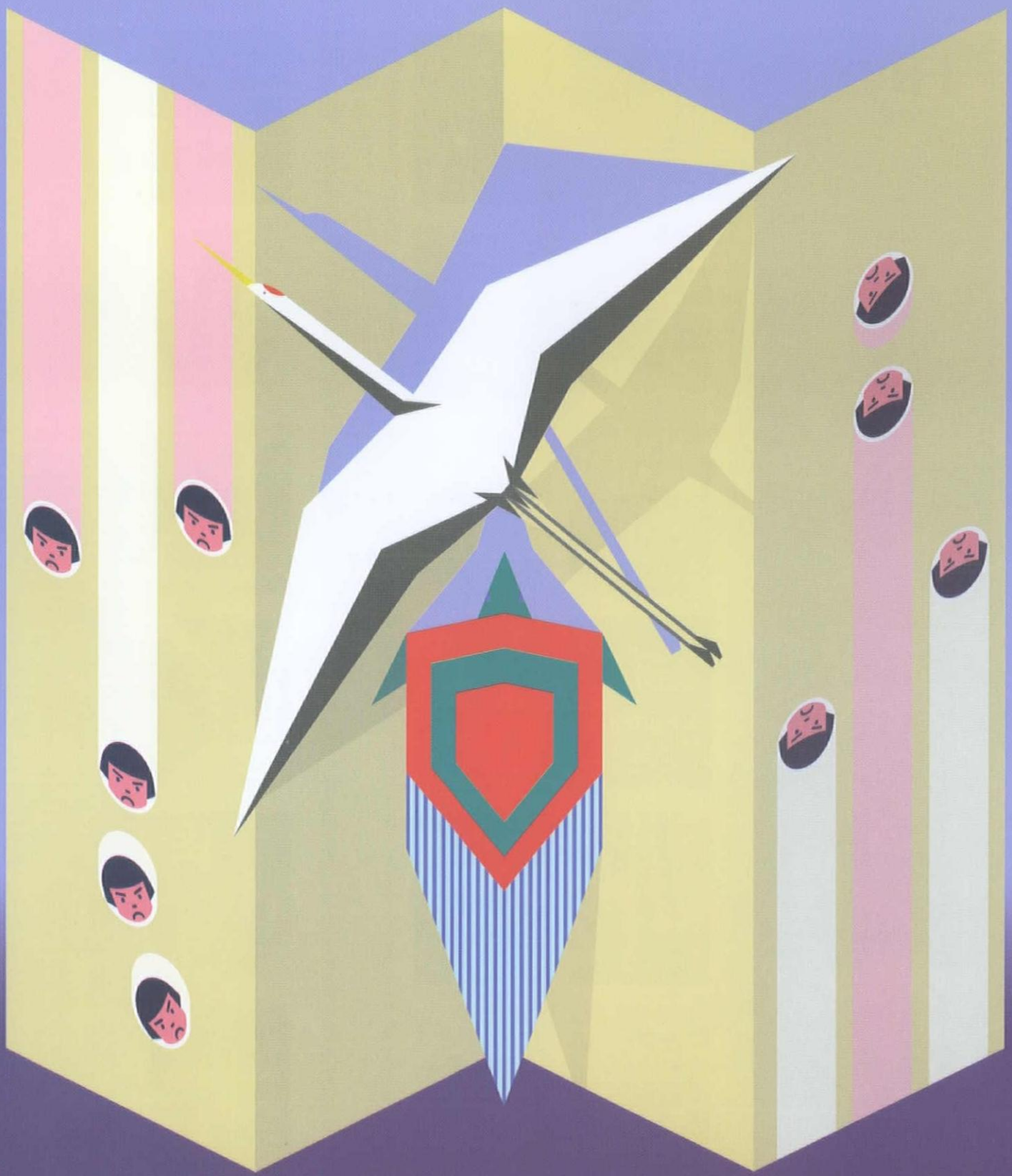
Shopping Center







株式会社 日立製作所
お問い合わせは＝電機システム事業本部 昇降機事業部/電機システム統括営業本部 〒101-8010 東京都千代田区神田駿河台四丁目6番地
電話/(03)3258-1111〈代表〉 または最寄りの支社へ 北海道(011)261-3131・東北(022)223-0121・横浜(045)451-5000
北陸(0764)33-8511・中部(052)243-3111・関西(06)616-1111・中国(082)223-4111・四国(0878)31-2111・九州(092)852-1111



連載⑪森島紘史の起こし絵図

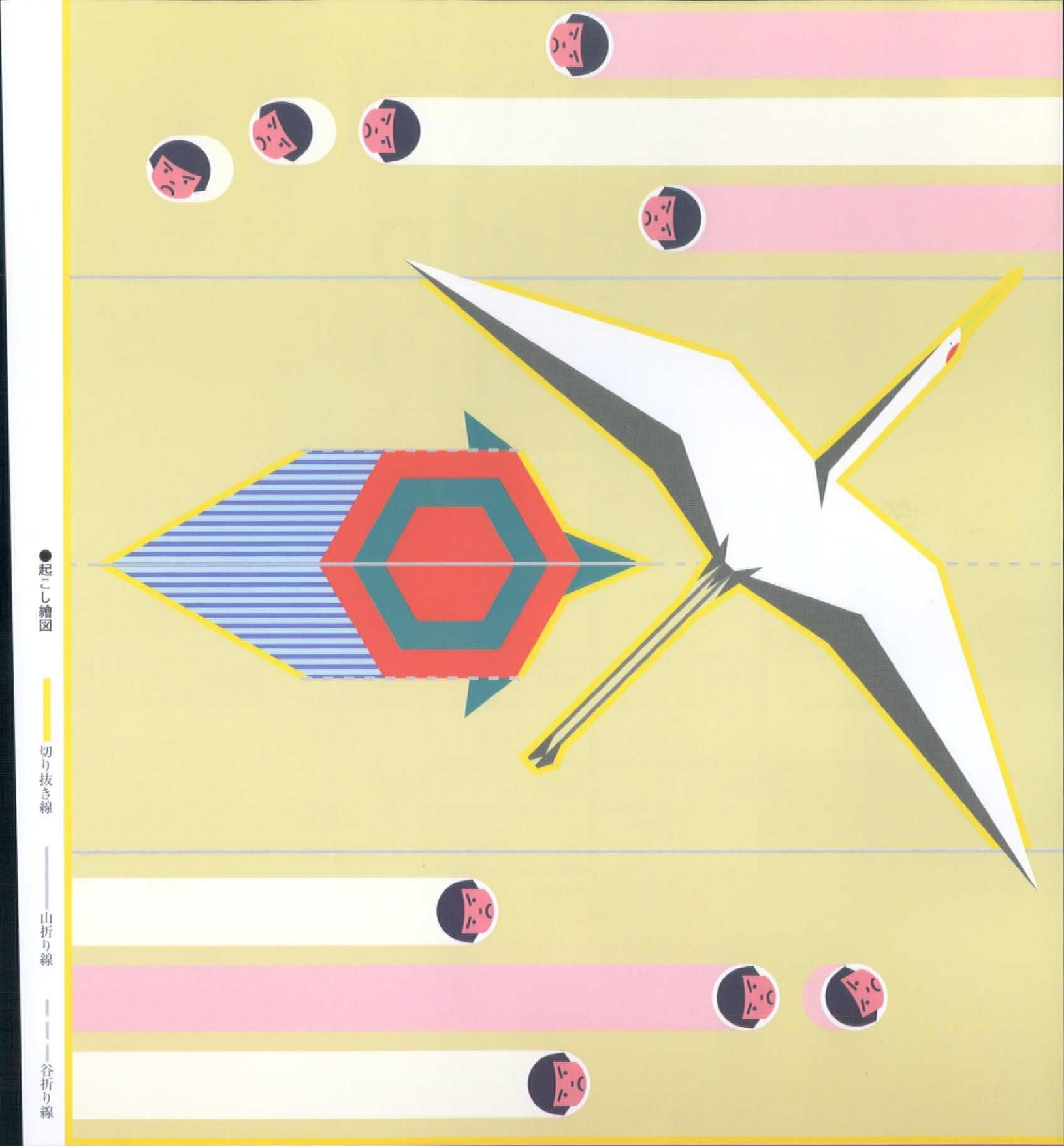
日本のかたち紙考

七五三

江戸時代、徳川3代将軍家光の四男、徳松（後の綱吉）が生来虚弱だったために、5歳を迎えると盛大な祝いの儀式を行ったのが「七五三」の始まりである。

以後、子供が成長していく節目となる3歳、5歳、7歳の奇数年に無事を祝う習慣が一般社会に定着した。その日は家で「髪置、紐落とし、袴着、帯解」などの儀式を行い、家族で神社に参詣する。

「髪置」は、頭頂部の髪を丸く残して結び周囲を剃り落としていた髪型から、頭髪全体を伸ばし始めるための儀式である。魂が飛び出



きないようにと願い着物の結びが付け紐から付け帯に代える「紐落とし」、共に男女児3歳のための儀式である。

「袴着」は、5歳の男児が初めて袴をはくもので、冠を被り碁盤に乗り四方に向かい神々に必勝を祈る。勝負の場に乗ることにより、どちらを向いても常に勝つようにとの願いを形にしたものである。

「帯解き」は、7歳に成長した女児の付け帯をとり、八つ口をふさぎ小袖を着せて巾広の帯にする。魂をしっかりと包み、身持ちの堅い娘に育つようにとの願いから行った。7歳までは神の子と言い、例え罪を犯しても許されたが、この日を境に大人の仲間入りをすることになる。儀式は、親以外の者が親代わりを勤めることで、子供には自覚を促し、親には過保護になりがちな幼児期の親子関係を戒めて、冷静になる機会を持つようにと考えられている。

神社の参道では鶴亀や松竹梅などの長寿と吉兆のシンボルをあしらった細長い飴入り袋が売られるが、この千歳飴、豊臣残党のひとり平野陣右衛が飴屋になり、江戸浅草で売り出したのが始まりという。

●もりしま・ひろし／名古屋市立大学芸術工学部教授



Kinden CORPORATION

May I Help You?

Kinden CORPORATION 株式会社 きんでん 配電工事担当
架空配電設備
地中配電設備

Kinden CORPORATION 株式会社 きんでん 電力工事担当
発・変電設備
架空送電設備
地中送電設備

Kinden CORPORATION 株式会社 きんでん 情報通信(広域)工事担当
CATV設備
移動体無線通信設備
光通信設備

Kinden CORPORATION 株式会社 きんでん 情報通信設備(構内)担当
データ通信設備
統合ネットワーク設備
LAN設備　構内映像設備

Kinden CORPORATION 株式会社 きんでん 内装設備担当
システム天井
OAフロア インテリア内装
小規模建築

Kinden CORPORATION 株式会社 きんでん 空調・衛生設備担当
空気調和設備
給排水・衛生設備
クリーンルーム設備
公害処理設備

Kinden CORPORATION 株式会社 きんでん 一般電気設備担当
ビル電気設備
工場電気設備
施設電気設備

Kinden CORPORATION 株式会社 きんでん 計装設備担当
ビル計装設備
工場計装設備
パワープラント計装設備

Kinden CORPORATION 株式会社 きんでん 国際事業担当
アジアエリア
太平洋エリア
中近東エリア
他海外ネットワーク

Kinden CORPORATION 株式会社 きんでん エネルギー有効利用システム担当
地域冷暖房設備
コージェネレーション設備
氷蓄熱空調設備

Kinden CORPORATION 株式会社 きんでん 防災・防犯設備担当
自動火災報知設備
避難誘導設備
防犯設備

Kinden CORPORATION 株式会社 きんでん 新エネルギーシステム担当
太陽光発電設備
燃料電池発電設備

Kinden CORPORATION 株式会社 きんでん ファシリティ・マネジメント担当
設備診断
設備改善提案
リニューアル・メンテナンス

きんでんがお手伝いできることは結構多い。

私たちの事業分野にご注目ください。すでにご存じの人もいらっしゃるでしょうが
おや、こんなこともやっていたのかという人もいらっしゃるはずです。
きんでんは、「情報」「エネルギー」「環境」をテーマに技術領域を拡げ
それらの技術を有機的に結合させることで新たなる価値を創造する
総合設備エンジニアリング事業を展開しています。
そのなかで生まれたのがこれらの事業です。その多彩さは
きんでんが現代の都市や社会が求めるニーズにフレキシブルにお応えしている証と言えるでしょう。
今日の都市をより豊かにするために、明日の社会をさらに創造的にするために。
私たち きんでんが、いろいろとお手伝いしていきたいと思います。

いろんな技術が集まって、きんでんです。

株式会社 きんでん
本　店 大阪市北区本庄東２丁目３番41号
東京本社 東京都品川区東五反田５丁目25番12号

国内事業所185ヵ所／海外事務所12ヵ所／国内関係会社19社／海外関係会社4社／海外合弁会社7社

連載：世界の現代美術館探訪

美術館は生まれ変わる

最終回

座談会：21世紀の美術館はどうなるか

太田泰人+水沢勉+渡辺真理+松岡智子

■W. O. M²（美術館研究会）
太田泰人／神奈川県立近代美術館学芸員
水沢勉／神奈川県立近代美術館学芸員
渡辺真理／建築家、法政大学教授
松岡智子／倉敷芸術大学芸術学部講師

連載を振り返って

太田　美術館というと、建物とその中身の美術との関係を意識するわけですけど、今まで連載してきたことを振り返ってみると、期せずして、話題が都市とか場所というところに傾いて、そこに我々の関心があるんだなと思いますね。水沢さんが連載で書いてきたドイツのように、近代、現代、複雑な苦悶をはらんだ歴史を持っていて、その中に文化、芸術がやわらかく着地している場合と、ウィーンみたいに中央ヨーロッパのいささか古びた絨緞みたいになっているのをなんとか埃を払ってピカピカにしようという試みや、あるいはフランスの場合のナポレオン時代以来の中央集権と、地方への分散というシチュエーション、それぞれポリティックスもあるし、その地域の文化の特性もある。それに対しアメリカの場合、そういう意味では極めて測りにくいことがある。ゲティセンターなんて、ほとんどカルチャーショックというぐらいとんでもないところだと思いましたね。都市性からかけ離れたところに、テーマパークがポーンとできた感じ。でも、ゲティセンターだけがそうなんじゃなくて、ロサンゼルスという街は自動車交通を使っている人にとっては暮らしやすい町なのかもしれませんけど、普通のヨーロッパの都市の感覚では全く感知されないような索漠たる中にあるわけですね。

渡辺　アメリカの中でもロサンゼルスというのはかなり特化した都市ですよね。

ゲティセンターがUCLAの近くのブレントウッドの山の上にできても地域の活性化にはなってなくて、今は非常に交通渋滞が起きていて、周辺の住民から猛烈なクレームが発生してるというように、文化が本当にテーマパーク的な現象にしかならない。それは、美術館のせいというよりは、都市構造が本来的に持っているもので、それを云々することはできないんじゃないかと思うんですね。

例えば、僕が磯崎さんの仕事でかかわったMOCAという美術館は、ロサンゼルスのダウンタウンの再開発の中心に位置する文化施設です。MOCAは、美術館としてはかなり成功しているんですけれども、ただ、ダウンタウンが素晴らしく活性化されてきてるかというと、必ずしもそうとは言えない。

ひとつの文化施設にはできることとできないことがあって、例えば比較的小さな町に、ある個人のアーティストの美術館みたいなものができた場合に、年間何万人かの人を集めるとか、そういうスケールではできると思うけれども、ロサンゼルスのような大都市で何万人ではあまり意味を持たない。何十万人、何百万人と動員しなくちゃいけなくなると、美術施設の限界もあるのかなあという気がちょっとするんですけどね。

――マットレスファクトリーとか、ああいう事例はどうですか。

渡辺　マットレスファクトリーという施設は、ピッツバーグの非常にさびれた地区にあったマットレス工場を改築して、その中にかなり優れたパーマネントインスタレーションがいくつか納められているのですけども、一緒に行ったカメラマンの古舘さんがヤバイからと言ってカメラを車のトランクから出さなかったような土地柄なんです。ですから、これが美術館だ、と言われなければ、絶対誰も到達し得ないような「倉庫型」の美術館です。一般的に言っても、優れた美術館にはその都市の外部からのビジターが多いように思えます。企画によってはその都市を国際化したりもっと都市化する力はもっているけれども、その町の内部の文化的なものを高めるのは、かえって難しいかなと思います。

太田　ヨーロッパでは、アムステルダムの市立美術館、ストックホルムの近代美術館、パリのポンピドゥ・センター、これらが現代美術館の理念の重要な系譜をつくっている。第二次世界大戦の傷跡に対するものとして見ると、彼らはレジスタンス側なんですね。一方、ドイツはナチスドイツの体験をひきずりながら、近代美術に象徴されるような現代性を1回失って、そこでもう1回取り戻そうとした。つまり、ヒトラーによってドイツは強烈に失ったんだけど、実はパリやほかの地域だって、ヨーロッパは一時期はそれを失いかけたといえる。それで戦後になって、文化というものはシビルモラリティを結集していく価値の軸だと言ったのがアムステルダムのサンドベルグだったり、ストックホルムのフルテンだったり、70年代末のポンピドゥの連中だったり、ということがあったと思うんです。

ところがそれを受け継いで、例えば、ロスのMOCAが生まれても、やっぱりアメリカ資本主義と組んで、
コミュニティが変わっていくとだんだん変質してくる。ヨーロッパの歴史の中の現代性と同じものが必ずしも継承できないということが出てきているんじゃないですかね。

ヴァシヴィエールのようなフランスのへんぴな地方の美術館の場合は、ポンピドゥとかの機能不全への懐疑として、都市性みたいなものは諦めてでも、創造的な主体、人間と、それに集まってくるある数のパブリックだけをエントリーして楽しむというコンセプトを追求する。ヴァシヴィエールはとんでもない田舎なんです。そういうところに、館長とアシスタントがひとりかふたりという少人数で、しかし積極的に動かしていく。それを地方自治体とかいろんな基金とかがサポートしている。そこでつくられていくものに、いいクォリティ、高い現代的な質があるということを、経済効果とのバランスもないわけではないけど、みんながいいなあといって見る。

教育的機関としての役割とポピュラリティ

渡辺　先程、現代美術館の役割ということがちょっと出たんですけど、僕がある程度知っているのはアメリカの美術館のことなので、アメリカに限って言えば、アメリカでは現代美術館というのは人を大量に呼べる機構ではないんです。ですから、企画の内容は問わないが（というと語弊があるけれども）、ともかく現代美術をやるのは結構、でも、ちゃんと人を呼べるだけの一般の市民が興味をもつテーマ設定をしてやりなさいという考えがある。

それには色々な理由があって、それは連邦政府からの補助が非常に少ないですから、美術館が経済的に自立しないといけないという


水沢勉


太田泰人


松岡智子


渡辺真理

ことがまずあります。アメリカの美術館の運営者側の発想として、彼らはよくポンピドゥ・センターを例に挙げるんですけども、ポンピドゥ・センターの後では美術館の概念が変わった。それまでは、一部の文化的なエリートがひとつのパースペクティブを与えるというか、文化的啓蒙活動を示すものが美術館である、ということだった。しかし今はそうではなくて、端的にいうと、一般大衆を満足させなければいけない。これは美術館の企画を立てる側に猛烈なプレッシャーになりつつあると思います。

太田　歴史的に考えてくると、19世紀に美術館、ミュージアムというのは、啓蒙的な目的で成立したわけですが、コレクションで見せるという限りでは、長い間入館者数はそんなに伸びてなかったんですね。それに対して、美術についてもっとポピュラーなエンターテインメント、スペクタクルってあるじゃないですか。それの最大のものが万国博覧会という類ですよね。それは、膨大な動員数がある。それから、サロン。つまり、政府のやる公募展。それらが美術館と別にあったのが20世紀のどこの段階からか、テンポラリーな展覧会（エキシビジョン）という形式を導入してきて、飛躍的に入館者数は伸びていると思うんですね。それから、もうひとつは観光ということがあって、ルーブルみたいなのが伸びていく。でも、地域と結びついていくからには、絶えず新しい刺激を供給するためにエキシビションというものをやらざるを得ない。そこで、経済効率の問題が生まれるんだけど、本来、それじゃあミュージアムというものがもっていた作品を通しての教育というものは、その場合にどこに行くのか、という問題がある。アメリカやヨーロッパは、日本の美術館と比べてみると、圧倒的にコレクションの量が多いから、その場合にはエキシビションに対して傾いてもバランスは崩れないんですけどね。日本の場合は、その方向にばかり向かって傾いてしまうと、コレクションという短期的には数量化し得ない部分が弱くなる。

渡辺　いまの太田さんのお話は、コレクションとエキシビションというアートのふたつの属性を言い当てていると思います。美術館はこのままで行くと、いわゆるコレクションはどんどん限界に近づいていくわけですから、ある意味で現代美術館の役割というのは、生まれてきたのをすぐ吸い取っていくという手続きをコレクションと呼べるとしても、現在の美術館の食欲というか、消化量に比べて、生産量には限界がある訳ですから、コレクションを念頭に置くと美術館という概念は非常に継続が困難なことになってくると思います。

先程僕が言ったポピュリズム（一般大衆）の話も、どちらかというと、エキシビションの話じゃないかと思います。コレクションを主体にする展示については、ルーブルとか、メトロポリタンとか、アメリカのナショナルギャラリーとか、ブリティッシュミュージアムとか、そういう例外的な美術館は、別に問題ないわけですけど、そうでない美術館が今後どういうふうにして自らの文化的なインスティテューションという役割を果たしていこうかと思うと、どうしてもエキシビション中心にならざるを得ない。では、エキシビションする時にその内容が、たぶん教育ということでは19世紀も今日も変わってないんだけども、教育という言葉の意味合いがどんどん拡がってきているんじゃないか。

ポンテス・フルテンがポンピドゥ・センターで「パリ・モスクワ」展などの一連の展覧会をやりましたよね。ああいう展覧会がひとつの突破口になっているところがはっきりあるんじゃないかと思うんですね。

――　水沢さんが書かれたような現代の新しいメディアアートみたいなものをZKMのような美術館に展示されるということについてはいかがですか。

水沢　ZKMのようなかなり大規模な研究施設であり、展示機関でもあるものが全体としてどれだけの経済的な効果を今後発揮するかというのはまだよくわかっていないですね。ただ、少なくとも、開館して半年の間は週末は1日に5000人以上来るというぐらいの集客能力は、持っているけれども、内部の人間たちは長期的にそれを持ち続けるということは期待していないみたいですね。もう少しゆったりと世界的なネットワークを、デジタルの仕組みに則った上でつくり上げていく。それがどのぐらいできるかというのをまず模索する施設として、そういう能力をもっている人間には来てもらう。そういう人間たちがやってくることによって簡単には計算できない、文化的、経済的、両方含めた大きな効果を持つはずだという見通しはあるものだと思いますね。

その時に、今言ったような、非常にわかりやすい、ショウ的な要素を持って観客に訴えかけるというようなプログラムをつくろうとしているかというと、それはほとんどないと言っていいと思います。

これが仮にアメリカにできたらかなり違うんじゃないか、という気はして、その部分に、おそらくドイツの美術館というのは、こうでなければいけないという美術館の理念みたいなものを主導的に提示することをいつも相対化するという特性がありますね。それはもちろんヒトラーの記憶やプロイセンの記憶、そういう呪縛があるから、そういうものを絶えず自分の中から解除しておくみたいなことで、これがある部分、それとは異質なものがすぐそばにあることを許す。その極端な例がフランクフルトみたいに数珠つなぎの美術館になっている。そういうあり方というのが、アメリカは大きな経済力を背景にして文化施設をつくった場合に、経済も文化もすべて含めた社会効果みたいなものが、非常に早く回収できる。そういうダイナミックな動きが文化施設が活発であるかどうかのパロメーターみたいな要素があるけれども、ZKMのような大胆な施設の場合にも、もう少し長く見ているという印象が感じられますね。

渡辺　ZKMと、ゲティセンターは、いろんな意味で対比的ですよね。かたや、既存の兵器工場を使って、建物自体は割にリジッドなフォーメーションでできている。ゲティセンターは、もちろんタブラ・ラサからつくっているけれども、その原型としてはヴィラ・アドリアーナのような、いくつかの軸線を持ちながら、全体構成としては建物がばらけたような、ルーズさとリジッドさを兼ね備えた配置計画が与えられている。その結果、ロケーションは丘の上にあるのですが、イタリアのヒルタウンとは趣の異なった、もっと人為的な印象を受ける。

それは、僕が連載の第1回で取り上げた「コンテナ・コンテンツ」問題の話ともちょっと関係してくることですが、ゲティはリチャード・マイヤーという建築家を起用して、21世紀の美術館はこうあるべきだというひとつの投企をしたと思うんですね。しかし、その結果についてはロサンゼルスの人はちょっと違っているんじゃないかと思っているふしがある。人気はあって、人はたくさん来てい

るけれどもここに示されているものは21世紀の美術館ではない。

21世紀の美術館のかたち

渡辺　21世紀の美術館は何かというのは、僕も全然わからないんですけど、なんだかわからない巨大な施設が都市のようになっている。文化都市みたいなものですよね。そういうものがひとつの可能性としてあるのかな、という気もしますし、あるいは、フランクフルトモデルというか、建物自体は小さくて、都市環境の中にポツポツとはめ込まれる。そういうやり方もあるのかなと思うんですが、そのへん両方ご覧になって、どうですか。

水沢　ZKMもそうなんだけれども、決してすべてを集約しようというものではないんです。かなり複合化されているけれども、むしろ、ばらけながら外に拡がっていくという性格のほうが強い。おそらく、フランクフルトの美術館も、どこにも集約する美術館はない。それは組織上もないけれども、ある意味ですべてが相対的に、一種の対話性をつくり出す。そのある種の遊びというか、そういう感覚を気にしながら文化施設をつくりたい。で、なんかすごく強い塊りのようなものを文化として、その石をボンと投げ込むのではなくて、そっと乗せていくとその波紋が不思議な、今まで見たことのない絵模様をつくり出すというようなことに対する期待がある。だから、過去を捨てたとは言わずに、過去をよく見て、その丁寧な組み合わせができないか、というのがフランクフルトには典型的にあるし、ZKMのような、かなり特異なものであっても、そういう性格をかなり強くもっているという印象が僕はあるんですね。

太田　ポンピドゥ・センターも栄光の時代もあったけれども、ある意味で失敗していくというか、硬直化していくわけですよ、やっぱりフランス独特の官僚主義が起こってくる。そうすると、企画内容そのものが硬直化してきますよね。ポンテス・フルテンがやった頃は、アメリカとフランスの関係の見直しがアクチュアルな話題だったし、それからソビエトと西側世界の東西対立の構造もペレストロイカに向かっていくことが予感されている時代であり、独仏関係もまたしかりで、そういう時代のヨーロッパのアクチュアルな政治状況、みんなの感じていることを展覧会の形にしたから、すごいインパクトがあったんだと思うんですね。でも、そういう形の大衆との出会いというのは、68年5月革命が何回も来ないように、そんなものはなかなかあり得ない。その形で始まったものがぐんぐん組織的に硬直化していくから、キュレーターたちはそれこそポンピドゥから出て、地方でやりたいということが生まれてくるわけですよね。ミッテラン政権に変わっていった時に、やっぱり中央集権ではなくて、地方における活性化というものを基盤に現代美術の状況を変えていこうと。コンテンポラリーアートというのが若い世代と地域社会の出会いの場となることを求めていったんだと思うんですね。大きな旗印の下ではなしに、もっとコミュニティとの関係がビビットに感じられるスケールで動いていって、その中での本当の新しさとか、クリエイティブな感覚とかをつくれるかということに、みんな関心を持っていったと思う。

そうしたヒューマンなスケールということで言うと、ヒューストンのメニルコレクションなんかの活動はとても丁寧なことをやっていますよね。例えば、ロスコーチャペルといって、マーク・ロスコーの作品を注文してチャペルをつくりますよね。あれは60年代の公民権運動とかの関連で、暗殺された、マーティン・ルーサー・キング牧師に捧げられてるんですよね。ドミニク・ド・メニルはすごくリベラルな人で、だからあえて、南部の町にそれを作る。その地域における大学に美術学部を創設したり、いろんな複合的な動きの中に美術館というのがありますよね。

それから、メニル美術館ですごく魅力的なのは、館長のオフィスとかブックショップとかが全部町の中というか、住宅街に分散してる。それがすごく控え目な形で溶け込んでいるわけ。で、結局、レンゾ・ピアノの建物もその一部になっている。それと比べて、ヒューストンに同じように、ヒューストン美術館、ミュージアム・オブ・ファインアーツ・ヒューストンというのがあって、あっちのほうが町を代表する美術館なんだけれど、どうもあちらは町に対する関係がうまくいかなくて、評価もどうも高くない。

渡辺　そうですね。ただ、実際的にはメニルコレクションというのは、あくまでプライベートミュージアムで、コレクションもメニル家の持っているコレクションを徐々に変えながら常設展示するという恵まれた施設で、入場料もとらない。そういう施設であるのに対して、ミュージアム・オブ・ファインアーツ・ヒューストン（MFAH）というのは、アメリカでいうと、シビックプライドのミュージアム、つまり、その都市を代表する美術館です。そういう美術館は、シビックプライド、つまり市民の誇りでなくちゃいけない。美術館には本来的にそういう要素もあると思うんですね。ですから、それを持たなくていい美術館と、持たなくてはいけないものの差というのは、大きいと思います。日本の公立美術館はほとんど持たなくてはならないものですよね。アメリカでいっても、マリオ・ボッタが手掛けたサンフランシスコの近代美術館なんかは、はっきりシビックプライドのための美術館です。

美術館を出たアーティストたち

渡辺　Dia財団（当初はDiaファンデーション、今はDia芸術センターと名前が変わりましたが）は設立の時から、個人のパトロンではサポートできないようなアートをサポートしようという理念を持っていました。わかりやすい例で言うと、ウォルター・デ・マリアの〈ライトニング・フィールド〉とかジム・タレルの〈ローデン・クレイター〉がそれにあたりますが、共に、とても個人のパトロンでは支援不可能なアートです。70年代半ばからハイナー・フリードリッチとフィリッパ・デ＝メニルのふたりが中心となり活動を始めたのですが、10年後にはほとんど破産状態になった。結局わかったのは、ある種の現代美術はすでにパトロネージが不可能な状況になっていることでした。

Diaは、80年代後半に一大改革をやって、それまで行っていた美術館の外に出ていくアーティストを支援することをやめたわけです。いろいろなアーティストとの契約を全部取りやめた。特に力を入れていたジャッドを例に取ると、Dia財団とジャッドが共同して改修を進めていたチナティーファンデーションという、プライベートミュージアムを全部ジャッドに渡して、それをいわば手切れ金として、あとはあなたがやってくれ、ということにした。

そういった荒療治を経て、Diaは負債を清算し、Diaのコレクションのためのギャラリーをウエストエンドにつくった。リチャード・グラックマンという若い建築家が設計をして、インスタレーションアートを中心とする、それも9ヵ月という長期間のユニークな展示形式のギャラリーはアート通の話題になりました。

ところが、今度また揺り戻しが来た。9ヵ月間という展示期間は、インスタレーションという手法は、アートの行為としてはいいのだけれど、理事たちが実際に〈ライトニング・フィールド〉を見に行ったり、マルファに行ったりすると、どうもあちらのほうがインパクトがある。フリードリッチが実現したものの方が財政面の問題を除けばよほど良かったのではないかという反省が生まれた。マイケル・ゴヴァーンという人が新館長になったんですが、マイケルは、設立者のフリードリ

掲載号一覧

第1回（1997年7月号）
「コンテナ・コンテンツ」問題
グローニンガー美術館＋ボンファンテン美術館
渡辺真理

第2回（1997年8月号）
モノの美術館から空間の美術館へ
オーストリア国立工芸美術館
太田泰人

第3回（1997年9月号）
複合された美術館空間
フランクフルトの13の美術館
水沢勉

第4回（1997年10月号）
200年後の大改造
ルーブル美術館
松岡智子

第5回（1997年11月号）
パーマネントインスタレーション
マットレス・ファクトリー＋チナティ・ファウンデーション
渡辺真理

第6回（1997年12月号）
情報と文化の工場の20年
ポンピドゥ・センター
太田泰人

第7回（1998年2月号）
ミュージアムとその場への参加
ヴァシヴィエール現代美術センター＋ツゥグ美術館
カトリーヌ・グルー（翻訳＝松岡智子）

第8回（1998年3月号）
旅への誘い——ベルリンの新現代美術館
ハンブルガー・バーンホーフ
水沢勉

第9回（1998年4月号）
天の窓——スカイライトという問題構制
ロサンゼルス現代美術館＋ルイジアナ美術館＋メニルコレクション＋群馬県立近代美術館＋イエルバ・ブエナ芸術センター
渡辺真理

第10回（1998年6月号）
21世紀を目指す人文科学の理想郷
ゲティセンター
太田泰人

第11回（1998年7月号）
都市に息吹を吹き込む美術館
現代芸術ガリシアセンター＋グッゲンハイム美術館ビルバオ
丹下敏明

第12回（1998年8月号）
混在による解放のための工場
ZKM
水沢勉

ッチの遺したものを評価する立場をとった。Dia財団というのはそもそもがメインストリームじゃなくて、アートの中の非常に特化した部分を支援しようという組織だったわけですね。そういう理想に燃えて出発して、財政問題で今度は後退したけれども、やはりそちらの方向に行かなければいけないという動きが再度起きてきているというのは、かなり注目していいことなんじゃないかと思います。

もうひとつ似た例をあげますと、MOCAがしばらく前に、マイケル・ハイザーの〈ダブル・ネガティブ〉の権利を買ったというんですね。それはどういうことかというと、作品は砂漠の中のランド・アートだから、なかなか見られないわけです。ただ、MOCAのメンバーはツアーで見に行けるようになった。

太田　〈ライトニング・フィールド〉みたいな。

渡辺　そう、〈ライトニング・フィールド〉みたいなものです。美術館が必ずしもギャラリーになくても、そういうふうに権利を買ったり、あるいはコンセプチュアル・アーティストのコンセプトを買うとか、そういうことも既に起こっているわけです。

水沢　思考の形態としては、美術館というコンテナを越えて、もっと大きな網で〈ライトニング・フィールド〉まで包んでいると考えてもいいですよね、ある意味でね。

渡辺　それはアーティストとオーガニゼーションとしての美術館、というものでいうと、アーティストとその作品が　両方とも包まれるのかわからないけれども、実際上はおっしゃるとおりだと思います。アーティストだって、ウォルター・デ・マリアは自己資金だけで全部まかなっているわけではない。スポンサーがいて、ボランティアの人がいて、そういうものがなければ、とても彼のアイデアは実現できないわけですから。

水沢　そういう時にも、現代美術のクライテリアというか、古典性というか、誰がどのようなレベルで判断するかということがあるけれども、〈ライトニング・フィールド〉とか〈ダブルネガティブ〉というのはある意味で古典的な意味合いをもつものという了解があるわけですよね。そういうものに則っているから、コレクションはできないけれども、それを資本のオーガニゼーションとして包んで、管理し、後世に伝えていく。ある意味で美術館をボーンと拡大しているというふうに考えることもできますよね。そういう大きな動きというのは、アメリカ型の資本の動きが可能にさせるものなんだなと思うんですね。ヨーロッパにそういうものにあるかどうか、今あまり思い浮かばないんですけど。

渡辺　クリストなんかはどうですか。

水沢　クリストの場合は、そのための一過性の、いろんなレベルでの資金繰りがあるけれども、それが恒常的にクリストの活動を支えているわけではないでしょう。ベルリンの国会議事堂のプロジェクトであればベルリン市やドイツ政府も資金を出しますけど。でも、それはそのための組み立てであって、そのプロジェクトが終れば、きれいになくなってしまう。そうじゃない形の財団みたいなものを支えていくという例は……。

太田　あるのかもしれませんが、あんまり聞いたことがないですね。

渡辺　僕がDiaを評価するのは、〈ライトニング・フィールド〉などの企画をいわばプロデュースして、運営しているというところです。たぶん現館長と新しい理事たちはもう一度それに相当することをしなければいけないと決意していると思う。それは非常に困難な任務だろうと思うんですね。〈ローデン・クレーター〉はまだ完成していませんが、〈ライトニング・フィールド〉と、チナティ財団のように、コンテンポラリーアートのマスターケースを残せたということが彼らのひとつの自信であり、責任感を刺激しているんだと思うんですけど。

水沢　それはすごくアメリカ的だと思うんですね。スーパースター的なアーティストを絶えず潜在的に求めていくあり方。僕は非常に好きなあり方の一例ですけど、クレーフェルトにあるカイザー・フリードリッヒ美術館という19世紀にできた、非常に古典的というか、融通の利かない重々しい美術館がクレーフェルトという工業都市の真ん中にあるんですけど、そこの周辺に住宅街があって、その中にミースの建物がふたつ、ハウス・ランゲとハウス・エステスという建物があって、それは市の管理で、文化財として保存することになっている。その時にカイザー・ウィルヘルム美術館のキュレーターたちがそのハウス・エステスとハウス・ランゲを展示場に使うんですね。その中に、例えば、若手のドイツの作家、カタリーナ・フリッチとかを買って置くんですね。そして、それは申込制で見学できるようになっている。見に行くと、その中で一番若いドイツの作家が仕事をしている。それをコレクションとしていくものをお披露目する時に、すべてではなく、そこでうまく合うものですけど、そういうものを展示するために利用する。そうすると、その空間は死なないというか、その時に、人たちが実際に生きていた個人住宅だから、その空間を壊さないように置ける作品を選んで置いていくわけです。そういうやり方というのは賢いなと思います。非常に小規模ではありますけど、若

手の作家をひとつ買ってあげて、それを市民レベルの空間に置いて、その市民のレベルというのはまたひとつのモダニストたちのつくった成果というか、そういう空間の中に置かれて、一種の循環を起こす。その時に19世紀のカイザー・ウィルヘルム美術館という重々しい建物ではなく、その外へとソケットを持っていて、ある部分、半分美術館から出て、それも包んでるのかもしれないけれども、そういう対話というのが、僕はニュアンスがあってなかなかいいなと思うんですよ。それに似たことが今美術館をつくるという時に、ただ単純に新しい美術館を、まったくまっさらな更地の上にドーンとつくりますよ、というのではなく、既存の建物の中にうまく美術館という空間のまた別の可能性を探す。そこに合った建物の歴史性というのがあって、その中に対話の要素を感じ始める。キンキラキンのピッカピカの理念が提示されているわけではないけれども、いろいろ歴史のシミがついてるけれども、その中でクリエイティブなことって何かというのをまた考える。あるいはクリエイティブとされているものをその中に置くことによって吟味して、ある意味で批評的にもう一度見る。そういうクッションというか、間接的な相対化する視点というか、より豊かに対話することを楽しむというか、そういう美術館というものの広がり。例えば、僕らが持っている東京という都市の中にある、ほとんどただ保存しているだけというようなある建築空間をもう少し積極的に美術のディスプレイの場所として使えないか。そういう可能性も求めてやっていって、それをまったく若手の作家にやらせてみるとか、そうやってもう少し都市の中へと毛細血管を延ばしていくような美術館のあり方というのは、それほどの巨大な資本ではなくできる。Diaファンデーションのようなものすごい規模で用意しなくてもできることではないか。それは模索してもいいんじゃないか、というような気が僕はしています。日本の地方の公立の美術館を実際につくるというような時に、その都市、町の歴史性を帯びた空間との対話とか、そういう可能性というのは、今建築家たちはどんなふうに考えるんですかね。

渡辺　いま、水沢さんが言われたのが、まさしく日本の美術館建築の現状に対する最高の批評になっているんじゃないかと思います。建築家サイドからは自分の建物は都市の景観に十分にマッチしているといった弁明がなされるでしょう。それなりの根拠や論拠はあると思うんですけれども、それをさらに踏み込んだ意味で、実際に既存の施設を利用しながら建物をひとつのジグソーパズルのようにはめ込むような作業がなされた例を僕はまだ知らないんですよね。ジャッドがやったマルファのドナルド・ジャッド・エステイトという彼の仕事はまさしくそういうことで、既存のビルを買い取ってはその内部を直す。住宅も改装する。彼は改装しては自分の初期の作品とか家具をちりばめていく。

個人のアーティストでもやれたことが、日本ではまだあまりなされてない。なされているのかもしれないけれども、我々の目にとまってきていない。

太田　僕が思ってるのは、日本では倉敷の大原美術館の展開というのは、例外的にうまくいってるなと思うんですね。すごい細やかな展開を歴史的にたどってきていると思うんですね。パブリックな意味でも成功しているし。なかなかあんな具合にはいかないんですよね、公立の美術館では。

渡辺　公立の美術館は、さっきの理屈で言うと、やっぱりシビックプライドだから、倉庫を改造しました、ではシビックプライドにまだならないっていうのが現状なんじゃないですか。

太田　でも、「立派な市役所をつくりました」では、果たしてそれがシビックプライドになるか……。大原家はプライベートだけど、公や国よりはるかにプライドとなるものを残した。メニル家はそれこそフランス人でヒューストンでは他所者だけど、その理想の方が本当の価値を作っているとすると、シビックプライドって何なのかな。

松岡　倉敷に市立美術館があるんですけど、あれはもともと市役所だったらしいんですね。市役所だったものを美術館として使っているということなので、学芸員の方に聞いてみると、非常に使いづらいと。確かに展示室は、これはもともと市役所だったなあ、と思わせるところがあるんですけど。

渡辺　そういう意味では、ある程度、水沢さんが言われるような、本来美術館でない建物を美術館として転用するような時代が日本でも徐々に来つつあって、お話に出たように倉敷の市庁舎が美術館になった例もあるし、磯崎さんの大分県立図書館も、完璧な美術館ではないけれども、そういうスペース（アート・プラザ）に変換されたわけですね。そういうことがもう1ラウンドくらいあると、次は水沢さんが言われるような、もっといろいろなスペースに美術館が自由に出ていくというようなことになっているんじゃないかなと思います。

太田　水沢さんの話というのは、建物があった場合に、その中に美術館という制度を持ち込むんじゃなくて、特定の作品、を持ち込むわけですよね。日本の倉敷市立美術館の場合は制度を持ち込んじゃうから、なかなかうまくいかない。でも、そこに合った作品、可能性のある陳列を選択して使っていく。それによって生かしていって、そうじゃない時には別の用途に使うような可能性はあるはずなんですけどね。

僕が取り上げた中で、ウィーンの工芸美術館ですごく面白いと思ったのは、例えば、現代美術のための倉庫兼陳列施設は、昔の高射砲、ウィーン市防衛のための施設の地下室みたいな巨大なところを使っていて、週に1回だけ開けるとか。あるいは、ロサンゼルスに支部があって、ルドルフ・シンドラーの建物をオーストリア出身だからということもあるわけだけれども、それを購入して保存する。そうすると、ウィーンとアメリカというコネクションが物理的について、それによってアメリカから、MOCAのものがMAKに回るとか、ホイットニーのものが回るとか、そういうことがすごく多くなりましたよね。そういう形での国際化、活性化の拠点にもなるし、いわゆるアーティスト・イン・レジデンスとしても利用できますね。

グッゲンハイム・ビルバオ

渡辺　僕はさっきゲティセンターとZKMとの比較の中で、もうひとつ言おうと思っていて触れなかったんですが、グッゲンハイム、ビルバオというのはまた別の構造を持っていて、アメリカ人の建築家がヨーロッパの町おこしをアメリカ資本とヨーロッパの市の財政の両方でやったという見方もできます。僕はまだビルバオは直接本物は見てないんですけれども、ゲティセンターとは違った意味でテーマパーク的な、建物の新奇性とかが非常に面白い。ただ、美術館としてはどうか。非常に人気は高くて、人がたくさん来る。日本の建築家なんかはこういう話を聞くと、やっぱり重要なのは建物なんだよというかもしれない。それこそ変わった目立つ建物をつくれば、みんな来るんだよ、というロジックにも短絡的にはつながりますよね。皆さんいかがでしょうか。

――もうひとつ、グッゲンハイムは色々なところにあるため、そのネットワークを使って巡回展をしていったりとか、今ある作品をいかに回転して見せていくかという、ほかの美術館でも、そういうネットワークを組んで、作品をいかに動かしていくかということが今後活発化していくんじゃないかと思うんですがその辺りもおうかがいしたいのですが。

太田　既に国際的に展覧会というのは、美術作品が傷んじゃうぐらいに回している。例え

ば、ピカソの展覧会を組もうと思えば、一級の作品は限られていますから、僅かな作品の取り合いになるわけですよね。あるいは、現代のアーティストでも、名前がある程度出た人たちというのは、何年も先まで予約でぎっしり埋まってて、あっちの美術館、こっちの美術館という感じになっていると思いますね。ただ、グッゲンハイムのやり方というのは、正確には、これは渡辺さんに伺ったほうがいいんでしょうけれども、館長がメッサーからトマス・クレンツに変わった時に出してきた方針ですよね。最初、例えば、コレクションを売るということもやりましたよね。コレクションを売る、コレクションを大きく回す。マネージメントとしては当然なのかもしれないけれども、いろいろやってきたのをアメリカではどう見ているんですか。

渡辺　ある意味では画期的なマネージメントという意見ももちろんあるわけです。つまり、美術館のコレクションというのは、膨大に膨らんでいくけれども、倉庫は限られている。また、グッゲンハイムのような大きな美術館であれば、ドネーションとして、作品が寄贈されて来るわけです。それをずっと持っていくと、本当に倉庫の運営費だけでもばかにならない。それから、作品数をたくさん持っている側からしてみれば、コレクションは1級品、2級品、3級品、それ以下という具合にカテゴリー分けされていくわけだから、それ以下というのは持っていてもしょうがないじゃないかということになる。寄贈した人がいるということが最大のネックなわけですが、倉庫代と作品の価値とをビジネスマンの目で秤に掛けるなら、コレクションの売却も当然かもしれません。

そして、もうひとつの理由は、太田さんが言ったのと同じで、作品の購入費や展覧会の企画費用がどんどん膨んでいくから、その財政をどこかからファンディングをしないといけないということです。売却の話は理事が納得したということでしょう。

それだけで済まないで、全世界にグッゲンハイムのブランチをつくるという壮大な計画は、まだ全部実現しているわけではないわけですけど、展覧会の世界巡回を全部自分の関係でやっていけば、メリットがいろいろあるという理屈はわかる。でも本当に成功するかどうかは、まだわからないですね。やっぱり、アメリカの文化支配みたいなことに対してヨーロッパは非常に神経質でしょうし、日本でさえ、最近はちょっと神経質になってきているから、そのまま素直にいくとは思えないんですけどね。

太田　それこそ、グッゲンハイムというブランドですよね。ビルバオという、今まであまり聞いたことのないような町にグッゲンハイム・ビルバオと付けると、なんか国際的に通用する通貨になってくるわけですよね。それにゲーリーの非常に大胆な建物がついて話題性を呼んでいく。ビルバオという町にとっては、別にあれだけではなくて、都市再開発でノーマン・フォスターとかいろんな建築家を入れている、その一環なわけで、スペイン全体でひとつの流行だったんじゃないかな。スペインはフランコ体制が崩壊してからある種の高度成長期に入っていったわけですけど、その時にアメリカ的なものがうれしい、ということはあったと思うんですね。で、スペインに優れた建築家はいくらでもいるのに、バルセロナ現代美術館にはマイヤーを採用するというのは、マイヤーの建築ということと同時に、アメリカンブランドが入るということの新鮮さというのがあって、再開発に使ったんだと思いますね。

水沢　現地のキュレーターはいるわけですか。

太田　キュレーターの部分まで正確にはわからないけれども、グッゲンハイムのコレクションを回し、ローンフィーをとる。建物はビルバオ市と政府につくらせると。同時に、雇用に当たっては、国際的にキュレーターを採ると同時に、スペインの中からも採用する。そうするとスペインの現代美術もそこから拾ってくることができる。確かそういうふうに書いてあったと思いますね。だから、全くアメリカ美術、グッゲンハイムのコレクションだけをいつもローンして貸していくだけじゃなくて、もちろんスペインのコンテンポラリーアートにも対応できるスタッフも持つと。

ただ、スペインの場合は、現代美術の美術館はそんなに多くないでしょう。それで、レイナ・ソフィアというマドリードの中心の現代美術センターなんかでも、キュレーターはずいぶん外から入れてますよね。外からというか、展覧会のたびに頼んでいますよね。だから、グッゲンハイムの人がやったり、ポンピドゥの人がやったり、テートの人がやったり、キュレーションについてはインターナショナルで動いてますね。そういう形を持ち込んだほうが、現在のスペインの状況だと有利だというようなところはあるのかもしれないですね。日本だってそうでしょうけど、人を国際的に混ぜ合わせてシャッフルしていくことで生ずる展望を取り込もうというのはあるんじゃないかな、スペイン側にすれば。

渡辺　そうでしょうね。で、その時の容器（コンテナー）の設計者として、ゲーリーという建築家を選べば結果ははっきりああいうふうになるわけです。それがショートランでは非常に成功している。

アーティストに聞くと、ゲーリーはなんであんなのをつくったかと、それこそみんな展示空間はレイナ・ソフィアの方がいいわけですよ。でも、館を運営する立場であると、彼が必要な場合もある。ブルックリン美術館のジョン・ダラーという副館長と話した時に、彼女はミュージアムプログラムとかをつくるのが専門の人なんですけど、彼女が、日本の人はプログラムを勉強すれば美術館ができるというふうに思い始めているようだ、それはある意味では確かにそうだけど、プログラムというのは、いわばチェックリスト、失敗しないための工夫であって、結局は、自分が考える美術館の設計というのは、信頼に足る人を建築家としてどのようにして選ぶかが最終的な目的なのだと言っていたことが印象に残っています。そして選んだからといって、その人に全部一任するわけではなくて、きちんとしたプログラムブックを渡して、それを守ってもらう。でも、誰を選んだかによって美術館の運命が決定される、と言ってました。

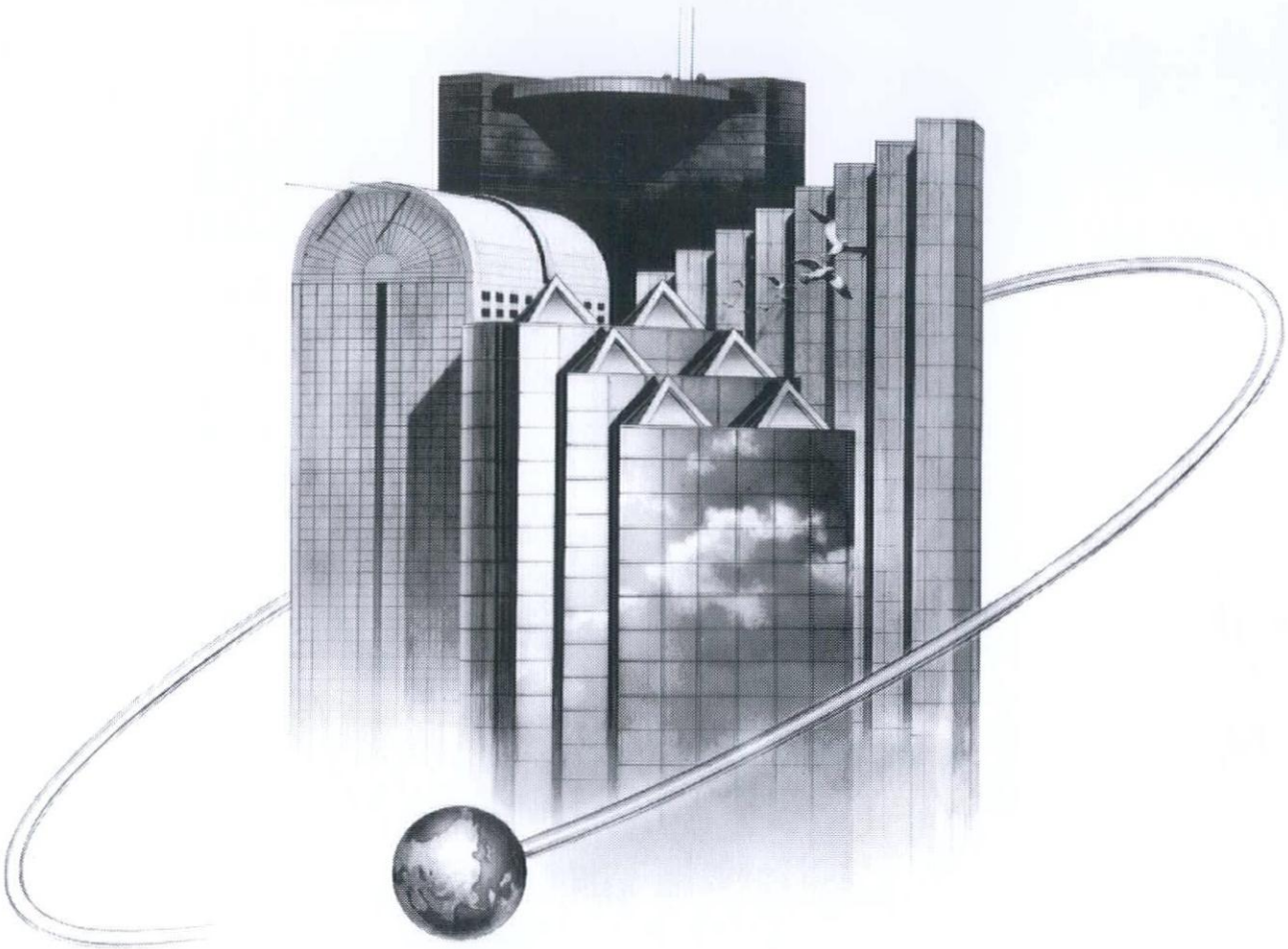
水沢　ベルリンのグッゲンハイムはドイツ銀行の建物の中に、ウンターリンデンの目抜き通りにありますよね。でも、あれは一種のがらんどうみたいなもので、実際にグッゲンハイムのコレクションが回って来るけれども、その時にはキュレーターも一緒に飛行機に乗ってきて、展示もやって、終るといなくなっちゃう。あとは維持管理だけしている。それはドイツ銀行がグッゲンハイムというブランドが付くことの対価としてその部分をやっている。だから、キュレーターはまるでいないのが普通の時間、というあり方なんですね。

そうすると、ベルリンみたいにかなり濃い独特の文化都市の中にそういう虚のグッゲンハイムが入っているとすごい異様なのね。キャプションのつけ方とかも、完全にニューヨークスタイルで、シルクスクリーンでスパッときれいにキャプションがついていたり、本当にきれいで、非常に洗練された展示がされているわけ。

これがベルリンみたいにぐねぐねとした町の中で本当にじわりじわりと、僕はさっきから、対話とか、相対的な何か、とか言ってますけど、そういうものをつくり出すかというと、あんまりつくれないような気がしちゃうんですね。それが逆に出ているのがビルバオで、もっとそれを外へすごく強烈にひとりの建築家の才能によって露出させてるけれども、構造としては、一種の虚みたいな部分があるんじゃないかという怖さを僕はちょっと感じますね。

（1998年7月27日　於：鹿島出版会）

快適創造



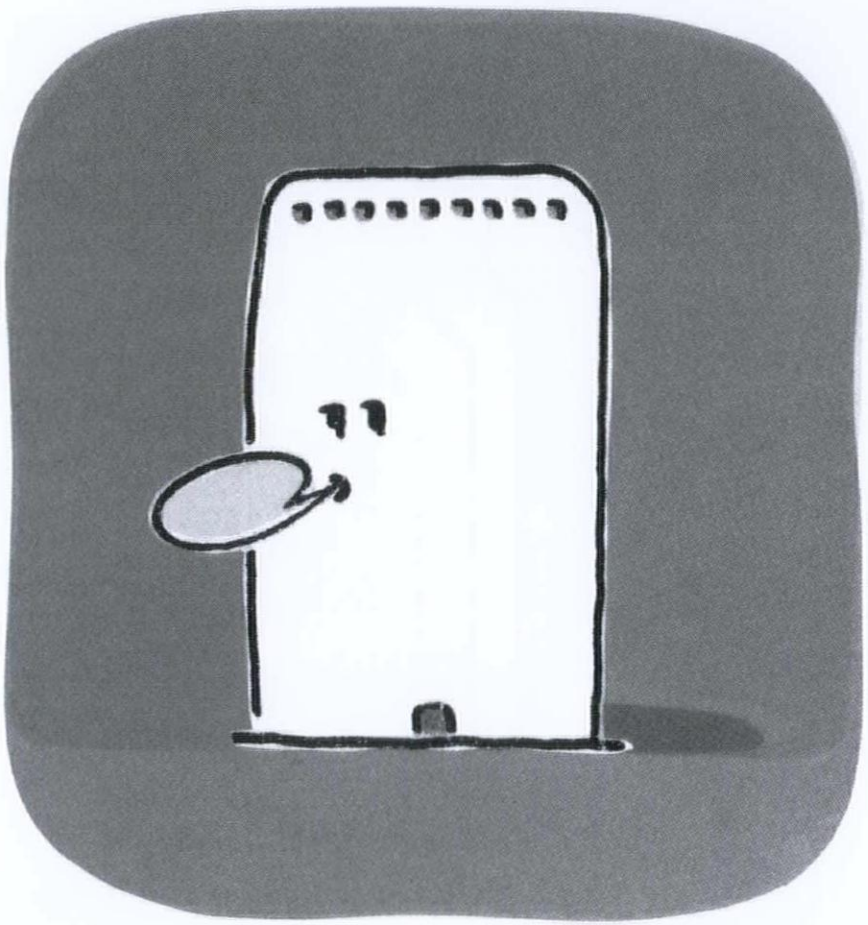
人と自然と機能が調和した理想の快適環境を。

人と自然、そして機能が調和した新しい快適環境を創造する。
それが三機工業のめざす総合エンジニアリングです。
都市、コミュニティ、産業施設…人をとりまくさまざまな環境について考え、
その理想を追いつづけている三機工業は、
いま、地球環境という視点にたって、すばらしい未来にむけての新しい環境のかたちを提案しています。

三機工業株式会社

〒100-8484 東京都千代田区有楽町1-4-1 TEL.03(3502)6111

人間すう、はく。ビルすう、はく。



私たちの呼吸は自然の呼吸に支えられています。

私たち人間が意識しないで呼吸しているように、人をとりまく環境も、知らないうちに呼吸しています。海も陸地も、動物も植物も。この地球全体が、ひとつの完成された空調システムとなり酸素をつくり、酸素を消費しています。

東熱のめざすひとつの頂点が、この自然の摂理を解明し、システム化することです。温度、湿度のコントロールによる環境を超えて、フィジカルな面から、メンタルな面の可能性のヒントが自然の中に隠されています。

ビルも呼吸しています。中にいる私たちのために。さまざまな分野のさまざまな建物が呼吸しています。だから東熱はいつも考えています。次に求められる環境とは何だろう。より私たちに優しく、より私たちに身近な環境の実現のために。山の朝のさわやかな空気や、冬の夜の透明な空気を東熱は忘れません。

宇宙センターからスポーツドームまで、東熱のマインドはあなたのまわりに息づいています。

時代、呼吸、マインド

東洋熱工業

〒104-8324 東京都中央区京橋2-5-12 Tel.03(3562)1351(大代表)

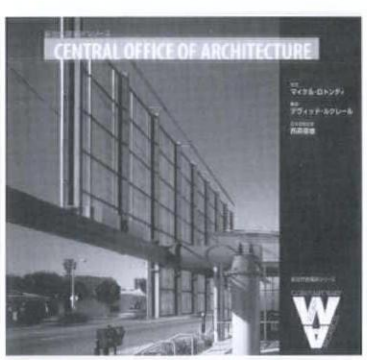
新刊紹介

『新世代建築家シリーズ――
セントラル・オフィス・オブ・アーキテクチャー』

オスカー・リエラオヘーダ+ルーカス・H.グエッラ=編
西森陸雄=日本語版監修
B4変型　132頁
グラフィック社　2800円

シリーズの6冊目は、セントラル・オフィス・オブ・アーキテクチャー(C.O.A.)。1987年にロン・ゴラン、エリック・A.カーン、ラッセル・トムソンの3人によって設立されたC.O.A.は、拠点をロスアンゼルスに置いている。だが、この世界でも最も混沌とした都市のひとつに彼らがいることには、何らかの意図すら感じられる。地元にはプロジェクトをオブジェとしかとらえていない建築家がいる中で、彼らはストイックなまでにモダニズムを継承している。彼らによれば建築とは「本質的に明晰さと秩序を打ち立てるための戦い」である。1981年にカリフォルニア州立工科大学を卒業した「若手」の彼らがこうした軸をもって活動を続けているのは感心に価する。

掲載作品は〈完全かつ独立したオブジェ〉、〈映像の組み替え〉といった初期の実験的なものから、建築をツールととらえてより現実的なアプローチをとる〈マッケイ集合住宅〉など。序文はマイケル・ロトンディ。概説は、ジャン・ヌーヴェルのもとで活動後、アメリカに移住。『ラルシテクチュール・ドジュールドゥイ』のアメリカ駐在員を務めるデヴィッド・ルクレールが担当。



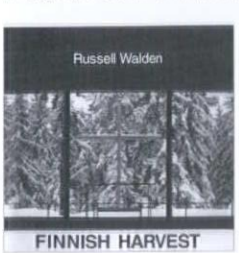
『数寄屋ノート二十章』
早川正夫=著
B6判　256頁
建築資料研究所　2800円
『住宅建築』での連載を中心に、1987年から1995年までの数寄屋に関する文章をまとめた本書。
数寄屋という言葉の定義があいまいと指摘し、「数寄屋」像の混乱を嘆いている著者だが、論拠の参照先は多岐に及び、説得力がある。



『クアラルンプール新国際空港』
日経アーキテクチュア=編
A4判　160頁
日経BP社　5000円
今年6月30日に正式開港したクアラルンプール空港。本書では、ハブ空港としてアジア最大規模となるこの空港の計画から竣工までを微細に解説。デザインアーキテクトである黒川紀章を始めとして関係者が多く文を寄せ、建設プロセスがじっくりとわかる一冊。

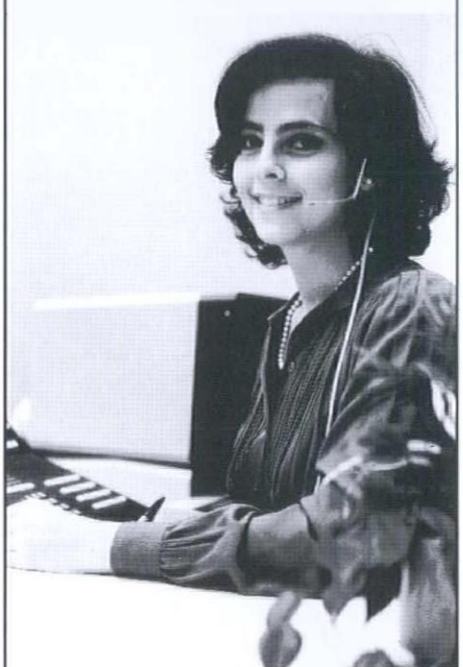


『Finnish Harvest』
Russel Walden=著
B4変型　142頁
Otava Publishing Company
イギリス、スコットランド、ニュージーランドなどで活躍する建築家ラッセル・ウォールデンが、フィンランドの旅で得た印象を綴った本書。
オタニミ教会に魅せられた著者がフィンランド建築、ひいてはフィンランド・デザインを温もりをもって語る。



まーるい地球を、まわるくつうも。
日立電線

情報とエネルギーの
ネットワークをつくる
日立電線



情報やエネルギーを伝える技術を中心に、
人と人、人と世界を結ぶグローバルなネットワークをつくり、
「私達の住む地球をまわるくつうも…」。日立電線は、いま、
快適で豊かなくらしの創造をめざして多彩な活動を展開しています。
21世紀に向かって、ますます進展する情報化社会――
たえず革新を続ける情報・通信、エレクトロニクス、エネルギーの世界で
ひとつの大きな役割を担っているもの――
それは、ハイテク技術を駆使した日立電線の製品です。

日立電線株式会社 ☎東京(03)3216-1616

書評

『市民社会のデザイン』

評者＝伊藤ていじ

建築評論は彼から始まった



『市民社会のデザイン』
浜口隆一＝著
浜口隆一の本刊行委員会＝編
B5判　430頁
而立書房　3000円

浜口隆一さん（1917～1995）はわが国の建築評論の開拓者であり、この本はその半世紀にわたる成果を一冊にまとめたものである。ご存知の方も多いだろうけれど、もともと戦前の東京帝国大学では卒業生が建築家を志す人はきわめて少ない。しかし浜口さんが卒業した昭和13年は例外で、丹下健三さんを始めとして設計を志した人は多い。建築界は不況に向かい、設計の仕事もなくなっていたのに。

そして浜口さんの卒業設計は〈満州国中央火力発電所〉だった。私はそのパースを見たことがある。大平原に巨大な円筒の列が立っている。その構想力と建築的センスは、十分に感じとることができる。これはまさしく雄大なモダニズムである。

この卒業設計は辰野賞の対象になったわけであるが、ある先生がこう話していた。「あれは何だねと浜口に説明を求めたら『大きいことに意味があるのです』という返事」。こういう事情でうかがわれるように、浜口さんは感覚的に建築をよく分かっている方である。「丹下さんは天才、常人の及ぶところではない」と話されていた。といって建築設計に向かわれなかったわけでもない。では初めから建築評論の世界に突き進もうとされていたのか。私はとうとう尋ねる機会を失ったが、疑わしく思っている。建築ジャーナリズムは最初の論文発表の頃をもって壊滅していたからであり、メディアは未成熟であった。

戦後の社会的変化は急速で、活躍は多面にわたる。建築評論の最初の金字塔に等しい論文、現代建築の諸問題、他分野のデザイン、サイン計画論、そして地域主義へと、浜口さんは論点を移していく。

こういう浜口さんを評価できない人がいた。具合の悪いことにその最大のひとりがマスメディアとアカデミズムに力を持っている人で、さらに悪いのはその人を利用するメディアが多かったことである。

浜口さんが地域主義を掲げて静岡県の掛川市に転居したのを「都落ち」と表現していた。この人は浜口さんをまったくわかっていないのである。そしてこれは自分の不明と音痴を告白しているようなものである。

浜口さんの評論集の中核をなすのは『日本国民建築様式の問題』（1944年）であり、次いで『ヒューマニズムの建築』（1947年）である。そしてその後の他のものは浜口さんの社会的実践活動の中で生まれたものである。

私が最初の論文を拝見したのは、発表時の戦時中である。一見して最初は奇妙さを感じた。モダニズムは国境を越えるものと思っていたのになぜ「国民様式」なのか。ナショナリズムと結びついている概念用語ではないのか。

しかしふたつの点で興味をもった。ひとつはこの評論が前川國男さんと丹下健三さんに捧げられた点である。前川さんは講師だったから、週に一度おいでになる。授業をしない方である。雑談を通して人格に触れるということであったように思う。丹下さんは内田祥文さんとは友人であったので、内田先生の研究室にしょっちゅう来ておられた。ちなみに私は内田研究室の病人学生である。丹下さんは「腹が減った」とは決して言わない人で、いつも日本の伝統と世界の文化を論じていた。スプーン一杯の大豆をヒマワリの油でいためたものを食べながら。

こういう身近なふたりのかたに捧げられた論文を読むのは、大きな期待であり大きな刺激であった。しかし浜口さんに限らず、丹下さんもそうであるが、二元論的発想には納得できなかった。そうではないのではないかという思いが、私にはあったから。

しかし私が最も感銘を受けたのは西欧文化の伝統と日本文化の伝統にかかわる古典を駆使しての論旨の展開、煮詰め方の文学的きめ細かさ、そして築き上げられた構想の大きさである。私はこの雄大なピラミッドは、浜口さんの旧制高校時代の教養に支えられていると感じとった。戦後の教育制度のなかで生まれた評論家との大きな違いのひとつに、旧制高校時代に広範で深い教養を徹底的に叩き込む3年間をもったか否かがあるように、私は感じている。

浜口さんは行動を起こす前に哲学をぶつ時期があり、その行動を終わらせるにも哲学のあった人である。そして社会主義信奉者と対するときによく使っていた台詞を覚えている。「分配論はもういい。パイを大きくしなければ」。そして終生、自分の思想を変えなかった人である。同時に自分の思想と反対の人も大事に協力し合い、親しくつきあっていた。包容力のある人である。

自分の生き方と終わり方を考えている人にこの本をおすすめしたい。ひとつの思想を貫いて新しい分野を開拓する最初は「北海道で泥炭地を農地にしようとする」ようなものらしい。これは疎開先の北海道から戻ってきた浜口さんらしい言葉である。

●いとう・ていじ／建築史家

書評

『集合住宅原論の試み』

評者＝室伏次郎

身体性集合住宅論



『集合住宅原論の試み』
黒沢隆＝著
B5判　160頁
鹿島出版会　3800円

1968年「個室群住居」論の発表から、ホシカワ・キュービクル'77年を経て、98年SOHO型個人用居住単位に至る、実に30年間に亘り、個のための空間に向けた思考と実践の業績を持つ、建築家にして学究の著者の労作に触れて、快著の誕生を読者として大いなる喜びとした。そして今さらながら、建築を計画学として意味付ける側が見る人間と、設計というモノ作りするところから見えてくる人間の違いを、いかにも明解に指摘したものであり、日本の集合住宅におけるパブリックハウジングの悲劇ともいうべきものを、何と鮮やかに焙り出したものかとの感慨を持つ。著者は論証にあたり、まず集合住宅の分類に「2～3階までを『低層』、4～5階までを『中層』、それ以上を『高層』と呼ぶ平準な呼称を外れた定義が必要となる」としている。それを「『低層集合住宅』とは、各住戸がいずれも接地している集合形態」、「住戸の集合にあたって重層性を第一義とし、かつ重層を人力で上り下りできる範囲とするものを『中層集合住宅』とし、」「重層する集合によって成立する集合住宅のうち、エレベーターなどの機械力によって上り下りするものを『高層集合住宅』と呼ぶ」と定義付ける。つまり集合された住戸に如何なる方法でアプローチするかを基準とする分類という、正に身体性に基づく視点をもって、思考の立場を明らかにしている。さらに「集合住宅の計画の原点は住戸だ。それは天与の人格に付帯する容器に他ならず、その時代その時代に対応して改善され続けるべきものだ。よりよい生活を求めての住戸の改善の中から、住棟も配置も、団地そのものも発想されて然るべきもの」としている。ここにもまたひとりの住む者としての意志がある。評者は1995年3月号本誌上で鼎談「集合住宅の現風景」に際して同潤会の仕事を始めとし、戦後集合住宅から現代までの主作品のファイルをすべて概観する機会をもった。その時改めて日本の集合住宅の歴史とは、正に住戸の集合の歴史であり、集合される住戸の変革の歴史などではないことを痛切に感じた経験を持つものだが、それは主に民間の仕事での一握りの住戸の改革の裏にパブリックハウジングにおける膨大な「C51型」のバリエーションとも言うべきものの歴史であったと思わせるものであった。そのような歪みの構造には本書に指摘されるように「『政・官・財・学』のテトラ構造が事態を金縛り」にしてきたことがある。その事は住のジャンルに限るものでなく、現代日本の社会的事象のあらゆるジャンルに見られるところの、官僚主導の国の在り方が、住という最も生活を映す空間の歴史に投影された風景である。本書は集合住宅の誕生の歴史から説きおこし、世界の集合住宅の歴史を踏まえて日本の場合を相対化するという意味で、まぎれもなく日本の集合住宅の歴史書として読むことができる。そしてその歴史は、平面図によって語られる。本書の豊富な資料図版は、あらゆる主題に関してその平面図は完全なまでに網羅される。が、断面についてはほとんど例外的に表れて10点に満たない。平面図は思想を語り、断面図は空間を語る。この完璧なまでの日本集合住宅の歴史書であるにも拘わらず、それは断面図によって語られることがない。それは冒頭に記したように実作者である著者は、住む者、生きる者として常に個の側から、その身体性をもって事を見てきた立場から、日本の集合住宅に住むための空間がないことを訴える証なのではないかと私には読める。この選択の余地なくすべてのジャンルに改革を迫られる現在、集合住宅もまた公団の撤退、新しい供給体制――NPO組織、CDC等を背景に、人口減少というまったく新しい課題をもって新たな都市の誕生を予見しつつ、歴史に楔を打ち、個の身体性に根ざした住戸の新たな集合へと向かう著者の、これは優れて明晰な文明批評の書と言うべきものと思う。

●むろふし・じろう／建築家、神奈川大学教授

Book Review

メトロポリタン ライブラリー

1998年の評者＝
渡辺武信／太田佳代子／港 千尋

今月の評者＝太田佳代子



『リゾート世紀末』　山田登世子＝著
筑摩書房　3900円＋税



『村木与四郎の映画美術──黒澤映画のデザイン』
丹野達弥＝編
フィルムアート社　2500円＋税



『ムービーウォーズ』　仙頭武則＝著
日本経済新聞社　1500円＋税

本が発する声

この「メトロポリタン・ライブラリー」欄の原稿締め切りが近づくと、いつも3〜4軒、大手書店に足を運んだ。当然、建築のコーナーも覗いてみるが、どの書店でも奥の方にあって人がいない。平積みの新刊書を含め、声が聞こえてこない。建築の世界と外とをつなぐ言葉は未だ開拓されないままで、ただもう「ワカンナーイ」という感じなのである。

雑誌『インターコミュニケーション』26号に載っている「海市──もうひとつのユートピア」展の締めくくりとして5月に開かれた大激論集会なるものの報告を読むと、若手建築家たちはあまりにも「無声」である。彼らひとり一人が言葉を持たなくなっているのか、あるいは社会とのスタンスを特別な領域にいる人間同士で論じようという磯崎新氏のセッティングの中で無言になるのか。何にせよ、声が発せられない、聞こえてこないというのはマズイっすよ。

話が最初から逸れてしまったが、『リゾート世紀末──水の記憶の旅』という近代の都市論としても読める魅力的な本が、仏文学史のジャンルから出た。著者は「声」のセクシュアリティを論じて強く印象に残っている山田登世子氏。まず、筆者が身を削る思いで長年集めたという豊富な図版が嬉しい。そう、モーパッサン、フロベール、プルースト、マラルメといった世紀末文学からの引用に留まらず、印象派をはじめとする絵画、写真、統計、広告、図面など、当時のありとあらゆるメディアからの「物証」が集められ、それらを前に近代の欲望の変遷がきめ細かくも一気に語り明かされていく、という構成である。

水という単純きわまりない物質を辿りながら、近代という遠くて近い世界への旅を満喫させてくれる、心憎い企て。それを可能にしているのは著者の柔らかな想像力と明晰さ、そして巧みな文章だろう。

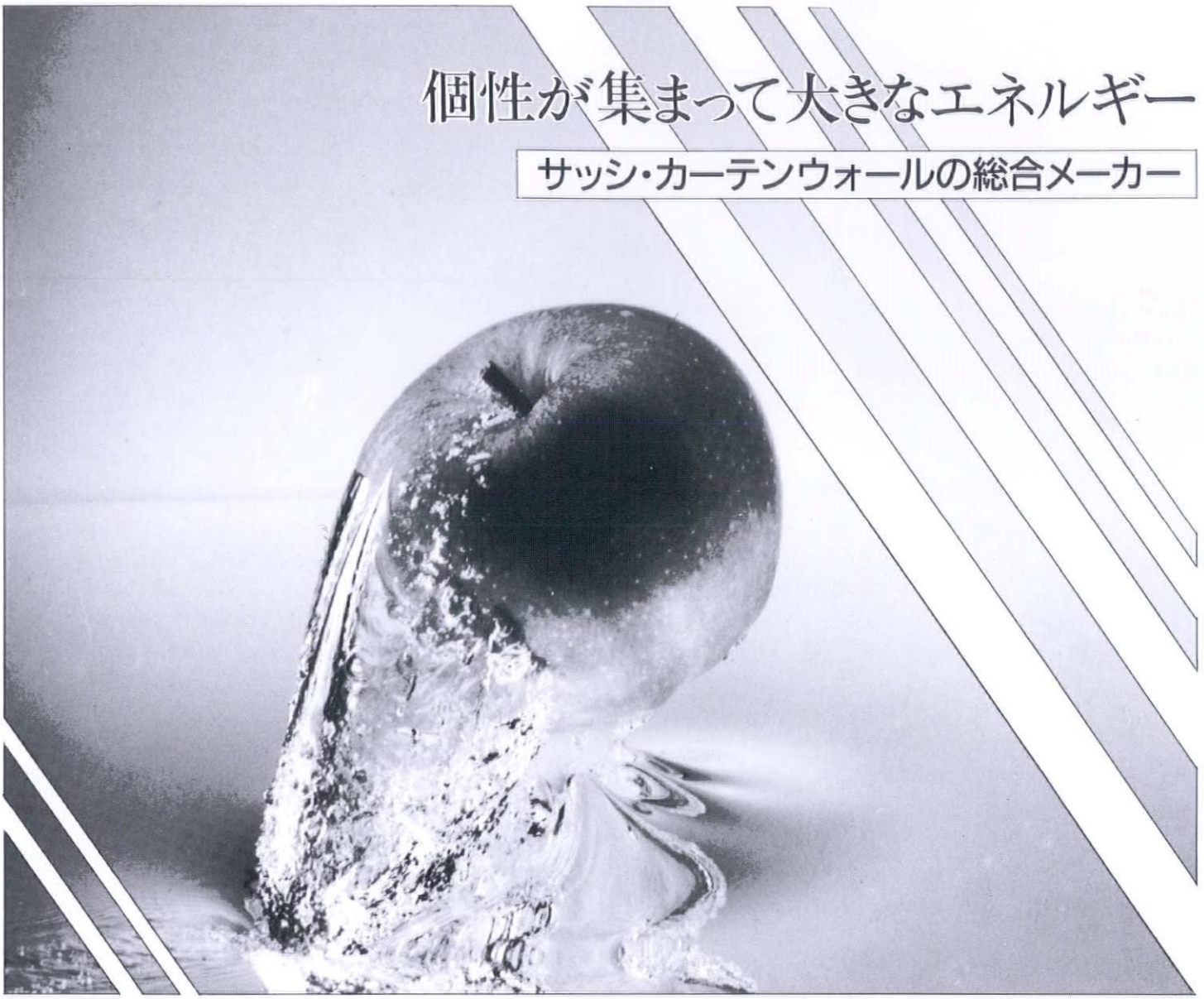
産業の発達は都市を構造化し、郊外を生んだ。パリにとってのそれは、理想的な風景を楽しむ悦楽の場所であり、資本主義がもたらした価値である「健康」を実現する、新鮮な空気と水の場所でもある。折しも結核やコレラが流行し、細菌が発見されて、清潔な水の価値が高まる。鉄道や電気の発達に後押しされ、人々はノルマンディやコートダジュールといった海辺のリゾートへと向かい始める。リゾート産業の幕開けだ。温泉、ホテル、飲料水、健康用の機械装置、そして鉄とガラスのアールヌーヴォー建築。いち早くこれらを充実させたヴィシーは快適なモダンライフの先駆けとなり、「健康」を消費の対象にした。そして時同じくして高まっていくスポーツ、万国博覧会、オリエンタリズム、インテリア装飾への熱……。

水先はやがて、装飾を否定し、スポーティブでシンプルな「水の衣裳」(リゾートウェア)を都会の最先端モードに替えたココ・シャネルにたどり着く。黒と白にこだわり、安価な素材を使い、一切の無駄を排した彼女の革新は、モードを媒体とした20世紀モダニズムの出発点だった。思えばこの10月、新宿のパークタワーホールで展覧会が開催されたシャルロット・ペリアンも、シャネルと同時代の女性である。ペリアンの目に、言わば「無駄と矛盾だらけ」のこの都会はどう映るのだろうか？　ともあれこの本の読者にとっては、健康オタク、ブランド指向、ヴァーチャルな旅行体験ができるテーマパークの隆盛、といった「19世紀末ヨーロッパの現象」が妙に現代と重なっていて、興味深い。

『村木与四郎の映画美術──黒澤映画のデザイン』は黒澤明が亡くなって書店に並んだ新刊書の1冊。「酔いどれ天使」以来、黒澤映画の美術を最後までずっと担当した村木氏の体験を映画ごとに聞き書きしたものである。黒澤はとにかく逸話の多さでも群を抜く監督だった。セット作りも凝りに凝って、ほとんどドキュメンタリーを撮るためにフィクションの精度を上げているといった感じだ。しかも『どですかでん』でカラーになるまでは、モノクロの世界でリアリティを出すための涙ぐましい試行錯誤があったという。『椿三十郎』では椿の赤を強調するために、白い花をひとつ一つ真っ黒に塗った、等々。

そうした日本映画のヒロイックな時代を再び我らの手に、と野望に燃える若手プロデューサーが今、何人か出てきている。そのひとり、仙頭武則氏の『ムービーウォーズ──ゼロから始めたプロデューサーの奮闘記』には、衛星放送局WOWOWの営業マンが映画プロデューサーとしてカンヌ映画祭の新人賞受賞作を作るまでの8年間が綴られていて、痛快である。映画界というのは新旧の交替が激しいように見えて、現場には古い体質が根強く残っている。しかもテレビ会社での映画作り。そんな中で、自前の論理を頑固に貫き通して常識を変えた男には、映画監督でさえ付いていきたくなるような魅力があるに違いない。建築界にもこんな行動力旺盛なプロデューサーが現われれば、元気のいい「声」が聞こえるようになるのかも──というのは単純すぎるだろうか。

●おおた・かよこ／編集者



個性が集まって大きなエネルギー

サッシ・カーテンウォールの総合メーカー

私たちは、今、ひと昔前の科学技術の進歩を強調するだけの時代から
〝テクノロジーとヒューマニズムの調和〟をめざす新しい時代をつくろうとしています。
とくに人間の生活空間を創造する建築業界においては、
こうした先進性が強く要求されていますが、その中で、生活空間としてのアメニティ(快適さ)や、
建築物内外の両面にわたるデザイン・外観・色彩など
美的付加価値の重要性もますますそのウェートを高めています。
弊社は斬新で、確かな品質の製品を供給することを通して、
社会へ大きく貢献していきたいと考えています。

昭和サッシ
昭和鋼機株式会社

本　　社▶〒174-0063　東京都板橋区前野町6丁目1番10号
☎東京(03)3969-1101(代表)
所沢工場▶〒354-0045　埼玉県入間郡三芳町大字上富1163
明石工場▶〒674-0093　明石市二見町南二見21番3号
昭和鋼機サービス株式会社▶〒174-0063　東京都板橋区前野町6丁目1番10号
大阪支店・札幌営業所・仙台営業所・横浜営業所・名古屋営業所・九州営業所

ニュース

ヨーロッパというジレンマを超えて

社会との葛藤がもたらしたもの

ロート美恵

オーストリア現代建築展「ミニマルを超えて」
会期：1998年9月30日～10月10日
会場：ヒルサイドフォーラム
シンポジウム
日時：1998年9月30日
会場：ヒルサイドプラザ

「ミニマルを超えて」と銘打って行われたオーストリア現代建築展。展示初日4組の出展建築家が出席し、シンポジウムが開催された。

ミニマリズムのその先は？　というテーマへの期待からか、会場は若い建築家達に占められていた。本展のキュレーター、ピーター・ハリソンにより、ヘルツォーク・ド・ムロンやズントーらすでに数多く紹介されているスイスドイツ語圏とオーストリア現代建築の傾向との比較がされた後、来日した個々の建築家の設計姿勢や思想背景を発表した。

・設計する上での規制や諸条件が厳しいほど建築の質は高く多元的であるべき
・機能の厳密な分析、環境や立地条件など外的コンテクストが建築を必然的に決める。建築はアイデンティティの希薄な周辺環境にもポジティブな影響を及ぼすべきだ。厳格でストイックな建築が豊かな空間を使い手に提供する。
・通俗的なものを見栄え良く取り繕うという類の建築を否定する。
・ふさわしい建築形態は必然的に生まれるもの、恣意的なデザインや装飾を排除する。

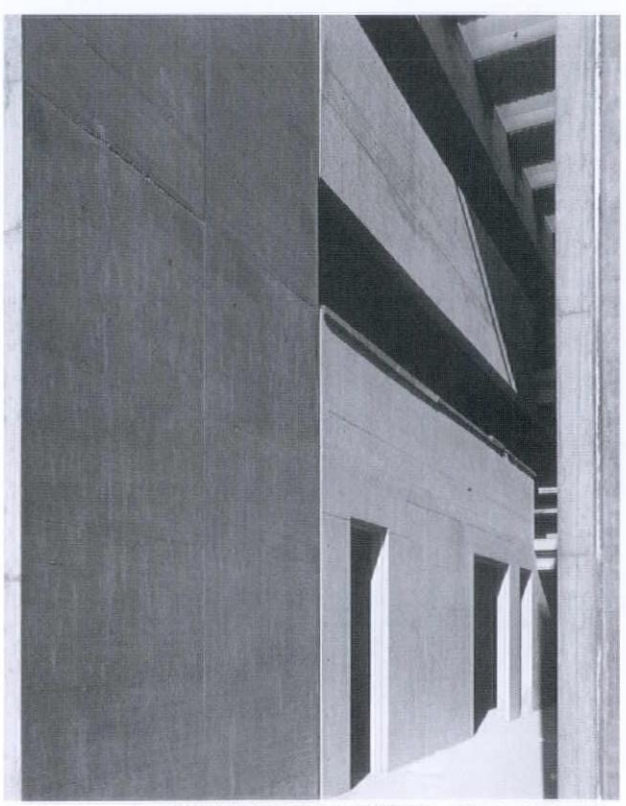
要約すると以上のような内容であったと思うが、一部の発表はオーストリア人が聞いても解説が必要なほど難解で同時通訳も機能しなかった。休憩をはさんだパネルディスカッションでは日本サイドから「建築家の存在そのものの意義」が問いかけられた。「形態は必然的であり恣意的なデザインを否定する」というストイックなまでのオーストリア建築家の発言を受けたものであったろう。

3時間にわたるシンポジウムを終えて不満を覚えたのは私だけだろうか。この場に限らず、シンポジウムに出席する発表者に述べたい。聞き手に対し「メッセージを伝える」という最低のルールを守るべきではないか。解答が得られることはないだろう。しかし人は表現者と同じ時間を共有し生のメッセージに触れ、何かを感じ考え議論や対話を求めて足を運ぶ。そうした聞き手にも難解な文脈を羅列することはもうそろそろやめにして欲しい。同時に若い聞き手の側にも沈黙を破り抗議する元気があってもいいではないか。

残念ながら以上のような理由で、日本サイドのパネラーを交えたディスカッションでも相互の発言は噛み合わず、平行線をたどったままタイムリミットになってしまった。海外から来日したのにもかかわらず、対話は生まれず、残念なことに衝突もなかった。スイスドイツ語圏の作品、特にヘルツォーク・ド・ムロンやズントーが日本に初めて紹介された時の壮快感、同時に既存の価値観を問いただされるような動揺。そうした速効力は今回紹介されたオーストリアの作品群には感じられないかもしれない。

スイスの一部の作品に見られるようにスマートで洗練されてもいないし、どちらかと言えば不器用でディテールも粗削りだ。ミニマルな手法が禁欲的なまでにひとつの素材や形にまで還元していくことであれば、彼らの作品のほとんどはミニマルでさえもない。使われる素材も多様で陰影があり空間も複雑だ。当然のことに彼ら自身ミニマリズムということばでくくられることに違和感を感じていた。

オーストリアを始め、ヨーロッパで建築をすることは受難に等しい。まず実践の場が少ない。都市空間の多くは完結し既存の都市の破壊なくしては、新たな建築はあり得ないと建築家は訴える。その上デザインを強く規制する建築基準法、ルーズで封建的な役人や政治家が足を引っ張る。クライアントとの衝突やストレスは日常茶飯事だ。せめてもに始めた自邸の些細な増築にまで「歴史」の重い足かせがついて回る。既存の建物と同じ形状にするように、と。そんな状況を踏まえてみると4組の展示の中で個人的ではあるがパウホッフの活動に興味をもった。数々の国際都市計画コンペに入選しながら過去10年の活動を通じ、実現したのは一件の住宅のみ。世間の目に触れるのはアンビルドな都市計画のモデルや空間インスタレーションぐらいのものだ。それでも建築をやめない。彼らを取り巻く情勢をシリアスに見据え、権威や規制に屈せず社会に向かって発言する。攻撃の手を休めず妥協するくらいなら建てない。そうした一貫性や設計者としての葛藤とプロセスが見



リーグラー・リーヴェ、〈情報技術大学情報技術電子工学研究所〉グラーツ、1993～99年

る者に力強い元気とユーモアをくれる。葛藤や闘争はなく、伊東豊雄氏のことばを借りれば「美意識のソフィスティケートに終始している」。それでも不透明な閉塞感に包まれる日本の私たち建築家達に向けるメッセージだろう。

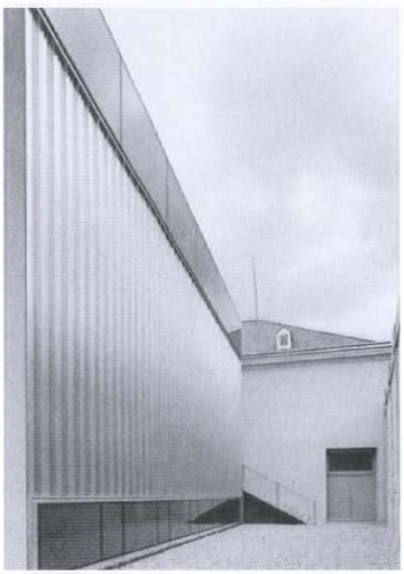
日本側パネラーの発言に「オーストリア建築の現在はようやく階段の踊り場にたどり着いたというところだろう、方向は良さそうだが頂上には達していない」ということばがあった。混沌としているが、何らかの動きが水面下で模索されていることだけは確かなようだ。今回の企画は「ミニマリズムを超えて」というより「ジレンマを超えて」という言葉のほうが素直にしっくりくるかもしれない。

この展示はロンドンのAAスクールに始まり日本、アメリカと巡回していく。展示に合わせて出版された英語版のカタログに加え、川向氏による作品の解説パンフレットは理解を深める上での手助けとなる。

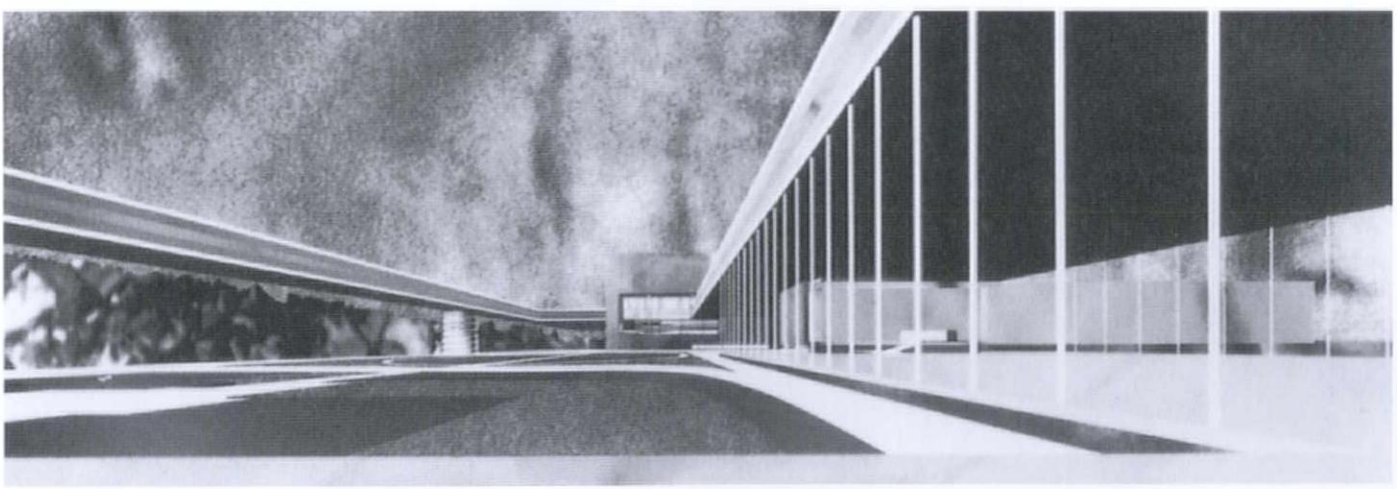
●ロート美恵／建築家

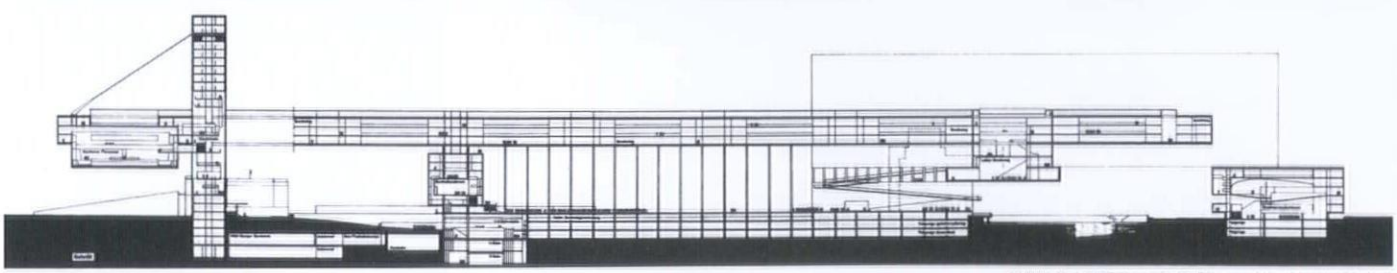


アルテック、〈公共住宅〉スティーリア、1992～98年



アドルフ・クリシャニツ、〈美術館〉オーストリア南部、1992～95年





パウホッフ、〈行政センター〉ベルリン、1993年

図版出典：展覧会カタログ「Beyond the Minimal」より

ニュース

ワイズマンの捉える場所／空間、あるいは欲望
フレデリック・ワイズマン映画祭

緒方恵一

私たちが「ある空間や場所」を捉えるという行為を他者に証明しなければならないのだとすれば、物理的にそれらをデザインすること、言葉あるいは芸術的手法を通じて証明しなければならないだろう。アメリカ人ドキュメンタリー作家、フレデリック・ワイズマンは映像のフレームにそれらを写し置き換えることによって、私たちに「空間や場所」の意味を問いかける。「場所の消滅」(P・ヴィリリオ)ということが言われ始めて久しいが、彼の代表作に数えられる『高校 High School(1968)』、『病院 Hospital(1970)』、『ストア The Store(1983)』、『動物園 Zoo(1993)』、そして『パブリック・ハウジング Public Housing(1997)』などは私たちの人生において一過的にせよ必ず通り過ぎる場所であり空間である。そしてワイズマンの冷徹な視線の流れは、私たちにその場や空間に対する視野の広がりを意識させ、一瞬その場に引き寄せる。

ワイズマンはそれらを彼の言葉で検証/分析そして定義するわけでもない。彼の映像には一般的なドキュメンタリー手法である作者自身の説明的叙述(ナレーション)は皆無である。つまり、もし、イーフー・トゥアンが述べるように「場所に対する感情は、知識の影響を受ける」のであるならば、ワイズマンは私たちにその場所に関する特定の知識や歴史を与えてはくれない。それらは人間が作りだした空間であり、人の集まる場所にすぎない。そこにはただ登場人物の顔(表情)があり言葉、そして動作(姿)がある。そしてその裏側から滲み出る人物たちの感情の動きや欲望を私達が読んでいくことになる。彼はしばしば、オーディエンスに映画の場所(舞台)を説明する導入部分さえ省くことがある。登場人物と私達を作品の冒頭から直接的に対峙させることにより、傍観者であるはずの私たちをその場で起きているイベントに落とし込む。登場人物たちはカメラやインタビュアーに向かって語りかけるわけではない。それらを意識せずに、彼ら独自の言葉で語り、呟く。こうして私たちが彼等の空間と言葉を共時的に経験していくことにより、社会科学者マルク・オージェの書き記すように「場所とは、ある人々の集団がその場所を表現する共通言語を生み出したときに、はじめて成立する」のである。ワイズマンは私たちに、ひとつの思索の結果生じる場所の概念を提供する。

ワイズマンの空間や場所はその内面を伺うというよりは、むしろ多面的なまなざしで捉えられている。一般的に彼は制度や組織の狭間や歪みに目をむける社会的作家として知られているが、彼自身、思想的には偏りを持ちたくないという。「パブリック・ハウジング」の中の、ある公共団地の境界線が行政上の区画ではなく、警察の管轄区域と住民が関わる犯罪やもめごとによって様々に変化していくこ







左:『高校』(High School, 1968)
ワイズマンにとって、状況に最も近い傍観者としてのドキュメンタリストの視点/立場、つまりシネマ・ヴァリテ的手法が確立された作品。これ以後、フィラデルフィア市内にある高校の日常の記録。経営者、教員、学生、PTAなどの姿を軸に、学校内で起こるの様々なイベントが捉えられる。その過程で、学校という場をめぐる大人と子供の間でのイデオロギーや価値観に対する認識の相違や、何が教育環境をより創造的にするのかという問題提起が浮き彫りにされていく。
基体的な場所があり、それに呼応する相対的オブジェクトとしての登場人物がある。それら相互を関連づけることにより社会制度や状況のはらむあらゆる性格や意味、言葉を見い出していこうという試みは、以後も一貫してワイズマンの映像理論の根底にあるようだ。
photo: Frederick Wiseman





右:『パブリック・ハウジング』(Public Housing, 1997)
アイダ・B・ウェルズ・プロジェクトと呼ばれるシカゴ市南郊の低所得者/労働者向けの団地を舞台に展開する人間模様。集合住宅の外観が客観的に捉えられた後、アパートの内部で、あるいは路上で、団地に関わる人々の日常の会話や議論、独白を通して描かれる様々な動作や表情の裏側には、彼等がそこでどのように生き残り、今ある生活を維持させていくかという人間の生の原点をかいま見ることができる。シカゴ市当局の政策により、10車線道路で隣接する中流階級の居住区から隔離されたその団地には、コミュニティという人間の集合体がある以上、規律や制約が社会(シカゴ市当局)からも、そして彼等自身の側からも必要とされるという葛藤がある。その団地を管轄区域に持つ警察官と住民とのやりとりが随所に配置され、他のエピソードを結びつける役割をしている。
photo: Public Housing

上映スケジュール：
東京：草月ホール　1998年11月20日(金)～24日(火)
横浜：横浜美術館
11月27日(金)～29日(日)、12月4日(金)～6日(日)
愛知：愛知芸術文化センター・文化情報センター
11月21日(土)～29日(日)

主催：フレデリック・ワイズマン映画祭実行委員会、
(財)国際文化交流推進協会(エース・ジャパン)
共催：横浜美術館、愛知芸術文化センター・文化情報センター

とや、平和的な娯楽を求めて動物園に足を運ぶ人々のために、集められた動物たちの生命を人間の手で維持していく「動物園」のスタッフの役割や、「高校」での空虚に広い廊下や工場と錯覚を起こしてしまいそうな校舎と、意外にも多い部外者の干渉、「競馬場」の表層には賭に一喜一憂する人々の姿があるが、裏側にはその場が存在する上で欠かせない、信じられないほど多様な組織や職種が関わり、それらが常に障害や対立的要素をはらみながら、それでもレースは続いて行く内と外のことなど、つまり彼にとっては、「病院」は単に治癒だけの場ではなく、「学校」は学ぶための場ではなく、「パブリック・ハウジング」とは住むためだけの場ではないのだ。彼の映像は、場所や空間の複雑さが一元的には捉えることができず、そこには常に逆説的なアイロニーや欲望が潜むことを示唆する。

ドキュメンタリー作家の常として、ワイズマンも同様に既に動き始めている事象を捉えるが、「撮影が終わるまでは、作品の意図やどのような組立てをするかを念頭には置かず、編集の時点で膨大なフィルムをおおまかにいくつものシークエンスの山に分ける。そして数日間取りためた映像の全容を意識下で反芻した後、内と外のリズムの関係性を考慮しつつ各々のシークエンスを組立てながら一本の作品として構築していく」(ワイズマン)。彼の言うリズムや対置的に据えるシークエンスを意識しながら見ていくことで、この作者の意図するものを伺い知ることができるかもしれない。ワイズマンによると、「撮影するということが場を経験すること」であり、「編集作業が描写するということ」なのである。このように、彼の仕事がいかに実証的様相を帯びているにしても、意識下の無意識の領域と何らかの関わりを持っているように思われる。それは単に、場所や空間上の見えないものを見たいという作家自身の好奇心にすぎないのかもしれない。

彼の映像に漂う曖昧さは、場所のはらむ複雑な制度・システムと交錯する人の意識の曖昧さなど、その場に積層するあらゆる要因を単なる空間上のオブジェクトとしては捉え得ないとしている様だ。彼は人の心や表情を通して場や空間を捉える。人と空間／場所との関わりの様相を人の側から明らかにする。そして、そのまなざしには人間の場所や空間をめぐる欲望の本質を探ろうとする知性と機智に富んだ好奇心が込められている。けれど、その欲望の本質についての考察はオーディエンスとしての私たち観客に委ねられている。そんなドキュメンタリー映像作家フレデリック・ワイズマンの作品の多くが今年11月、東京をはじめ日本各地で紹介されるという。

●おがた・けいいち／映像作家







左：「動物園」(Zoo, 1993)
フロリダ州のある動物園に関する映像には、世界中から訪れる観客の平和な表情を点景として配しながら、動物園の維持/管理、そして運営に携わる人々が中心に置かれている。私たちオーディエンスが普段目にすることない施設の内側と外側のシーンの対比が印象的。
スタッフが動物たちを守り、飼育している様子や、研究材料としての動物、新たに導入するための他の動物園との駆け引きや宣伝活動の様子などが描かれる。人間の創造した場に人間以外の生物を持ち込むことにより現われる否定的、あるいは肯定的要因や条件など、動物園という場所の包括する様々な観点が示される。
photo: from above; Evan Eames, Zipporah Films Inc., Miami Metrozoo

右：「病院」(Hospital, 1970)
ニューヨーク市にあるメトロポリタン病院の救急病棟と外来病棟を中心に、患者たちをはじめ、病院に関係する様々な人々の表情やできごとをワイズマンのカメラが丹念にスケッチしていく。その映像の奥底には「病んでいること」あるいは「死」のイメージと、それらに対する「救済」や、「癒し」のイメージが投影されている。流れていく映像を追いながら私たちオーディエンスが思索していくうちに、病院という建築物の空間的な広がりが意識下に再現されていく。そしてワイズマンの探求は、ひとつの病院という場を通してその背後にあるニューヨークという大都市の症状にまで及んでいく。
photo: Zipporah Films Inc.





ニュース

中心市街地の活性化へのアクション

都市づくりシンポジウム「これからのパブリック空間と都市施設」を通して

後藤幸三

都市づくりシンポジウム「豊橋東口駅前広場プロジェクトを通じて」：これからのパブリック空間と都市施設
日時：1998年9月26日
会場：ヒルサイドプラザ
主催：都市綜合技術研究所会
総合司会：土屋善仁（都市総合技術研究会幹事、都市・建築計画研究所）
パネルディスカッション：宇野求（建築家・千葉大学助教授）
河井幸稔（豊橋都市整備部長）、神田昌幸（建設省都市局街路課）、北川フラム（アートディレクター）、中村良夫（京都大学・東京工業大学教授）、真野響子（女優）、面出薫（照明デザイナー）、

地方都市の中心市街地の空洞化の進行が言われて久しいが、今回のシンポジウムは今後の中心市街地活性化に対して都市や土木の専門家に何ができるか、多くの示唆に富む内容だった。本シンポジウムは、今年4月にオープンした豊橋東口駅前広場プロジェクトの事例を通して、今後の都市的公共空間への課題提起を目的として開かれた。

豊橋東口駅前広場プロジェクトの特徴

このプロジェクトの特徴は第一に複数事業の総合である。具体的には豊橋駅の東西連絡通路の整備、橋上駅舎化、ステーションホテルの増改築、路面電車の延伸および公共交通のターミナルの整備等々である。当然、事業主体である豊橋市、JR等の民間会社、および事業の支援をした建設省等多くの関係者が存在する。必然的に事業プロセスは複雑になり、完成までの並々ならぬ苦労が推察される。

第二の特徴は様々な専門家のコラボレーションである。7年ほど前の市の英断によって、プロポーザル方式で、このユニークなデザインを提案したものが採用された。結果的に、その提案をした建築家とエンジニアとのコラボレーションが継続し、最終的にはアートディレクター、照明デザイナーの参加にまで発展した。

中村良夫氏（京都大学・東京工業大学教授）が指摘するように、都市内の公共空間は多くの人々が利用するが、今日その人々の価値観は多様を究めている。それ故、前述のように異なる価値観を持つ専門家が議論を重ねながら、計画を進めることが公共空間にかかわる事業成功の必須条件であろう。

中心市街地活性化へのインパクト1：結節点

今回の豊橋のプロジェクトが及ぼす中心市街地へのインパクトは大きくふたつ挙げられる。

第一に、建設省の神田昌幸氏が指摘しているように一日約10万人の乗降客が利用する駅と周辺市街地間の結節点となる空間を提供したことである。現在、地方都市の中心市街地を振り返ってみるとその空洞化は大きな課題である。ほとんどの地方都市の中心市街地を形成する商店街は、成り立ちも古い故に道幅が狭く、駐車スペースも少ない所が多い。一方、車を利用する買い物客が、郊外に広い駐車場を持ち、効率的に買い物できる大型小売店へ流れることは避けられない。その結果中心市街地への来街者は年々減少し、個人商店の閉店や空き地が増えてきたのが現状である。その点で今回の駅と周辺市街地間の結節点の創出によって周辺市街地への来街者が増加し、市街地活性化が期待される。

中心市街地活性化へのインパクト2：路面電車

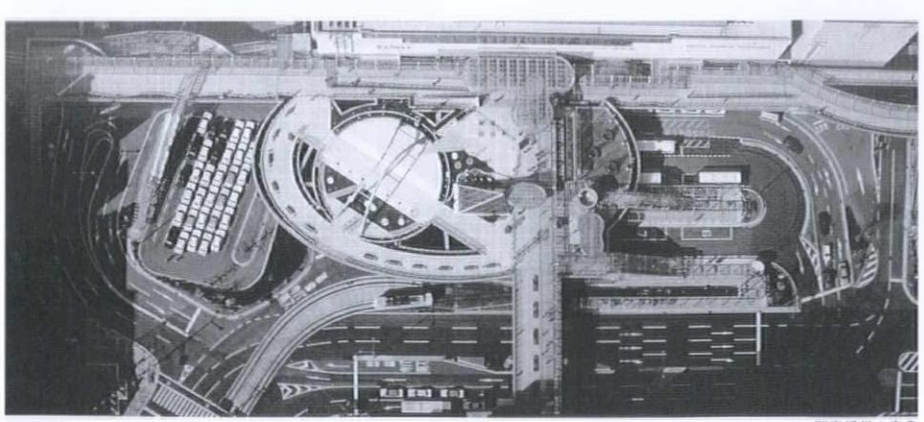
第二は路面電車の延伸である。路面電車は、かつて日本の多くの都市に存在する市民の足であったが、高度成長期の急激なモータリゼーションの発展に伴い、路面電車は交通渋滞及び事業の赤字等が原因となって多くの都市で廃止されてしまった。しかし、この路面電車が及ぼす中心市街地活性化への波及効果が、現在注目されつつある。

その先進事例の一つとして有名なのが本シンポジウムで紹介されたフランスのストラスブールの路面電車である。導入された路面電車はデザインも斬新、かつ高齢化社会対応の低床式車両である。また同時に、都市景観に寄与する軌道の緑化、停車場、トランジットモール等の整備も行った。さらに市民の理解の上で旧市街地への車の流入規制及びフリンジ・パークの整備等の施策も総合的に行っている。その結果、環境負荷の少ない公共交通機関利用者の増加に伴い、旧市街地への来街者も増えた。こうして路面電車はこの街のアイデンティティの重要な要素になると同時に市街地の活性化へ寄与した。この成功は、廃止の一途を辿っていたフランス地方都市における路面電車の復活ブームを巻き起こした。

しかし、フランスで市民合意の上で路面電車の導入等が可能になった背景には、事業プロセスにおける公開討論会等の制度とその討論会用資料の存在がある。また、その討論会での、個人の利害を超えた公的議論には、客観的な多手段／複数ルート間の比較評価等が必要不可欠である。フランスにおいてもその検討ツールを保有する会社は2～3社しかなく、それらが地方都市における路面電車新規導入等の検討を行っているのである。日本でこの技術分野はまだ、始まったばかりである。

豊橋のように現在でも路面電車が走っている都市は稀少である。今回のプロジェクトにおいて、路面電車が東口駅前広場と結びつけられたことによって、周辺市街地への来街者の増加が大いに期待される。

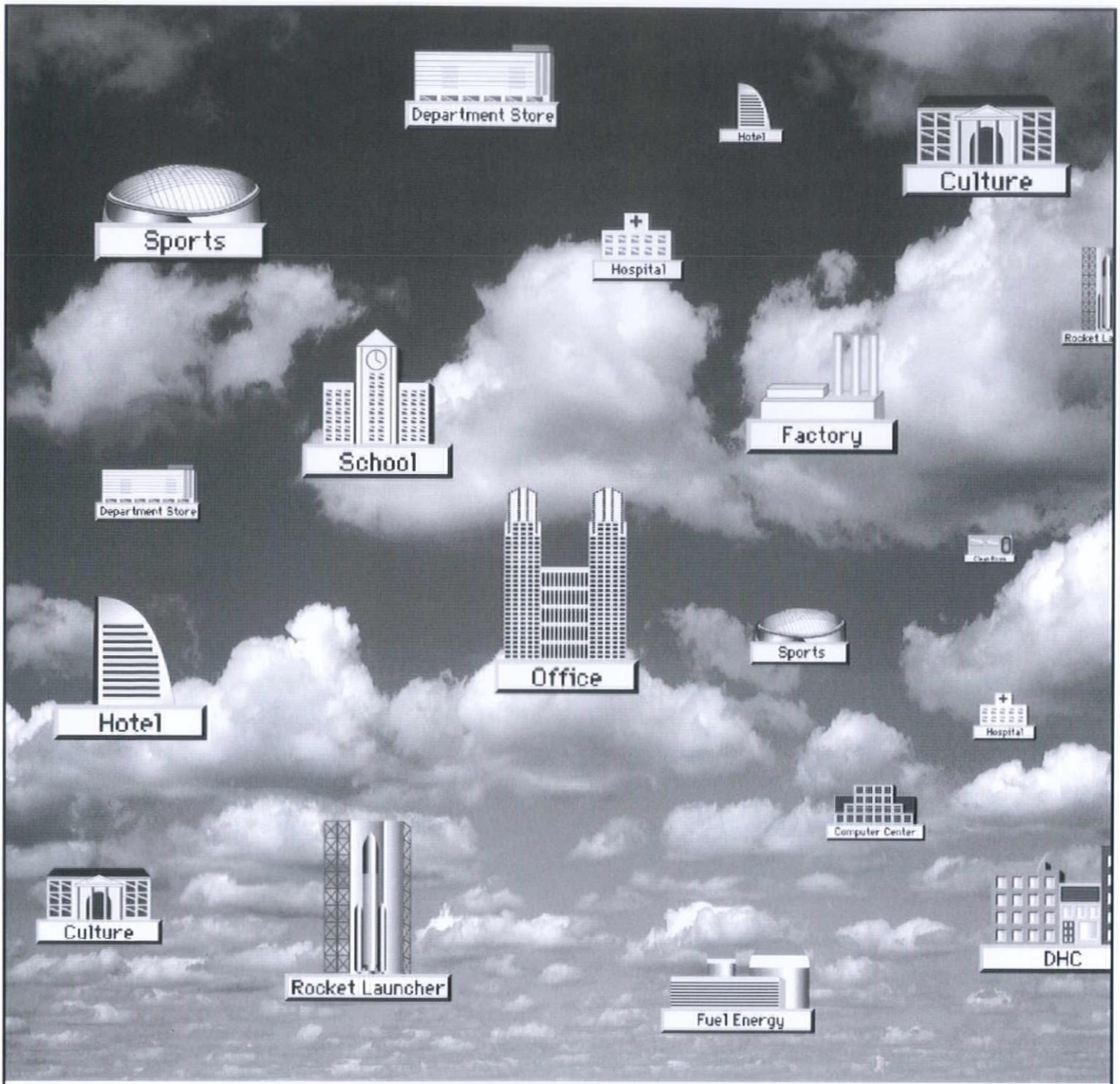
●後藤幸三／建築家



写真提供：鹿島



写真：中川敦玲



空気のメニュー。

オフィス、工場、学校、病院…。それぞれの建物には、もっとも適した空調システムがあります。
新菱冷熱は「さわやかな世界を創る」という思想のもとに、
用途に合わせたオーダーメイドの空調システムを、設計・施工しています。
バリエーション豊かな私たちの空気のメニューから、21世紀の新しい都市環境が始まります。

新菱冷熱
SHINRYO CORPORATION

本社：〒160-8510 東京都新宿区四谷2-4 ☎03-3357-2151(代)　　支社：札幌・仙台・千葉・横浜・名古屋・大阪・富山・広島・福岡



都市の顔をつくる仕事。

都市の詩情をスクリーンのように映し出すカーテンウォール。
その多彩な表情のひとつひとつに私たちの技術が活かされています。
不二サッシは、都市景観を彩る、新しい建築文化
コミュニケーションスペースを創造してまいります。

窓から夢をひろげていきます
不二サッシ

本　社 〒211-0012 川崎市中原区中丸子135 TEL.044-422-1111
東京本部 〒150-0031 東京都渋谷区桜丘町9-8 TEL.03-5458-7024

お知らせ

山口隆建築展十庫裏内覧会

自身の設計による清涼山霊源皇寺展示ホール(Gallery 0)にて、新作プロジェクトを中心とした模型、CGアニメーションおよび映像によるインスタレーションを行う。また17:00以降、庭園と建物のライトアップを行い、非公開である境内の一部を公開する。

会期：1998年11月15日(日)～11月23日(月)
時間：13:00～19:00(ライトアップ17:00～19:00)
入場料：800円
会場：清涼山霊源皇寺展示ホール(Gallery 0)
京都市北区西賀茂北今原町41　Tel：075-491-7975



清涼山霊源皇寺 庫裏内部　photo: Kaori Ichikawa

旭屋書店本店 リニューアルグランドオープン

1998年11月20日(金)「専門書の充実」で有名な大阪市北区・旭屋書店がリフレッシュ・オープン。建築書のコーナーもより充実し、建築専門雑誌のバックナンバーも常設する。

営業時間：10:00～21:00(年中無休)
問い合わせ：旭屋書店本店　06-313-1191

第3回2D──書籍の建築── コンペティスカッション開催

建築家西沢立衛氏による2D──書籍の建築──コンペティションの第3回目のディスカッションの参加者募集。コンペティションの参加のみも可。

日時：1998年10月30日(金)18：30～
場所：早稲田大学理工学部55号館S棟9階サロン
講師：西沢立衛、曽我部昌史、堀井義博
登録費：2500円
振込先：あさひ銀行大久保支店　普通口座1077927 建築等学会代表　田中智之
登録期日：11月1日、提出期日：12月1日
応募・問い合わせ先：建築等学会事務局　〒169-8555 東京都新宿区大久保3-4-1早稲田大学理工学部建築学科古谷研究室気付 建築等学会事務局
Tel :03-5286-3274
URL：http://nadoo.arch.waseda.ac.jp/
E-mail：stuff@nadoo.arch.waseda.ac.jp

SE-LL HOUSE 7人の建築家による木骨商品化住宅展

SE-LL HOUSE(セル・ハウス)とは、SE工法(自由度の高いシステム化された木造工法)を用いて建築家がデザインした住宅を、低コストで販売を可能にし(SELL)、性能、工期共に安定した商品として提案するプロジェクト。

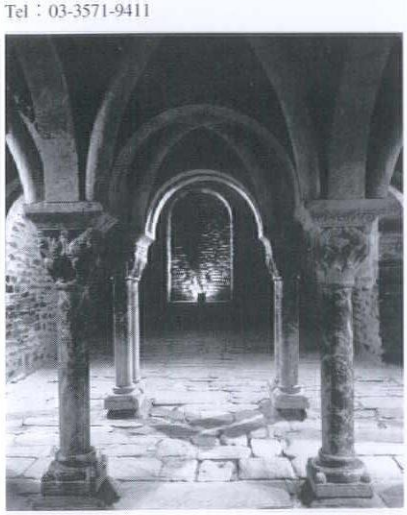
コーディネータ：播繁
出展建築家：押野見邦英、城戸崎和佐、内藤廣、難波和彦、平倉直子、古谷誠章、横河健
会期：1998年11月4日(水)～11月8日(日)
時間：11:00～19:00
会場：ヒルサイドフォーラム　東京都渋谷区猿楽町29-10ヒルサイドテラスF棟　Tel：03-5489-3648

都市・建築デザインセッション'99開催

三浦周治遺作展
期間：1998年11月3日(火)～11月7日(土)
会場：お茶の水スクエア「プラザ」
フォーラム
パネラーが、三浦周治のプロポーザル資料をどう読んだかを話し合う。
司会：元倉真琴
パネラー：山本理顕、神谷裕直、相田康幸、村上處直、野島紀久、山本良文
その他コラボレーション／ワークショップや関西でのフォーラムも計画中。
問い合わせ：人・空間研究所　Tel：03-3280-2661

堀内広治写真展 「ロマネスク」──フランス古都巡礼

会期：1998年11月13日(金)～11月19日(木)
時間：10:00～20:00(最終日14:00まで)
会場：富士フォトサロン　入場無料
東京都中央区銀座5-1 銀座スキヤ橋センター2F
Tel：03-3571-9411



セラボンヌ修道院　写真＝堀内広治

アルヴァ・アアルト評伝「白い机」 日本翻訳出版文化賞を受賞

ヨーラン・シルツ著、田中雅美・田中智子共訳(鹿島出版会)によるアルヴァ・アアルト評伝『白い机』シリーズ3巻が、第34回日本翻訳出版文化賞を受賞。本書はアルヴァ・アアルトが設計、デザインした数多くの作品についての解説はもとより、その人物像にまで取材検証を重ね細かく記してあり、建築関係者のみならず一般読者からも広い支持を受けている。

問い合わせ：日本翻訳家協会　Tel：03-3294-3936
鹿島出版会　Tel：03-5561-2551

アーカス構想パイロット事業 アーティスト・イン・レジデンス

アーティスト同士、アーティストと地域住民、地域住民同士など、様々な人に向けてアートを通したコミュニケーションの場を提供することをめざす事業。6名の国内外のアーティストが茨城県守谷町に集結し、約4ヶ月に渡って創作活動を行う。また期間中にワークショップやレクチャーを行うほか、スタジオを一般公開し、成果発表を行う。

参加アーティスト：ジーニー・クロスビー(インスタレーション)、カタリナ・コボニー(メディアアート、写真ビデオ)、ディディエ・クールボ(写真)、ツァン・ウェイ(彫刻)、スシラワティ・スライマン(絵画、インスタレーション)、岩井成昭(ビデオ、サウンドインスタレーション)
会期：開催中～1999年1月31日
会場：アーカススタジオ　茨城県相馬郡守谷町板戸井2418もりや学びの里 Tel：0297-45-1545
主なプログラム(予定)
11月3日　スタジオ公開、守谷町アート祭り
11月22日～24日　ワークショップ、レクチャー
12月5日～1月31日　プロジェクトルーム公開
問い合わせ：ワコールアートセンター
Tel：03-3499-3922　担当：野上、岡田



カタリナ・コボニー〈NO TITLE〉

お詫びと訂正
SD10月号で以下の誤りがありました。お詫びして訂正致します。
P.15　「THE YHP Way」→「THE HP Way」
P.82　本文中の「祇園白川」はすべて「祇園新橋」となります。
P.83　8行目「六曲二双の大屏風の平家物語」→「六曲一双の大屏風の源平合戦」、写真キャプション「吉田邸坪庭」→「小島邸庭」
P.87　文末の小島氏、大谷氏の肩書き「京町家再生会」→「京町家再生研究会」
P.103　文末の宗田氏の肩書き「京町家再生研究会会長」→「京町家再生研究会会員」

海外レポート

ディズニー・コンサート・ホールとフィランソロピーの相関関係

from Los Angeles

瀧口範子

故ウォルト・ディズニーの夫人だったリリアン・ディズニーが寄付した5000万ドルから、ディズニー・コンサート・ホールの計画は始まった。およそ10年前のことである。建築家に指名されたのはフランク・ゲーリー。だが1998年も後半に入った現在も、まだその建物のかけらもない。そして敷地に杭の1本が立てられるのを見ないまま、リリアン・ディズニー自身も昨年逝去した。

建設費のための寄付金が集まらず、1995年以降計画が棚上げになっていたこのディズニー・コンサート・ホールに、ようやく着工の目処がついたらしい。昨年末にディズニー社の会長兼CEO(最高執行責任者)のマイケル・アイズナーが、ディズニー社として2500万ドルをこのプロジェクトに寄付すると発表してから弾みがつき、建設のために必要とされる総額1億7150万ドルが集まる見通しがついたのだ。

ディズニー・コンサート・ホールは「ディズニー」という名前がついているため、同社が建設するホールで、しかもディズニーの楽団が演奏でもするのではないかと勘違いされがちだが、「ディズニー」の名前はこの建設実現のために寄付の先陣を切ったリリアン・ディズニー、そして夫のウォルト・ディズニーゆえのものである。そもそもこのコンサート・ホールは、すでにロスアンゼルス・フィルハーモニーのホームベースとなっているドロシー・チャンドラー・ミュージック・ホールが手狭になったために、より多くの人がいい環境で音楽を鑑賞できるようにとの思いから計画されている。そのチャンドラー・ホールも、ロスアンゼルス・タイムズ社主夫人によって建設費寄付の召集がかかって、1969年に完成したものである。

美術館であれコンサート・ホールであれ、アメリカの文化関連の施設は、こうした資金集めの過程を経て実現されるものが多い。ディズニー・コンサート・ホールの場合は、ニューヨークなどの東海岸の歴史あるフィランソロピスト(文化活動などに寄付をする人々)と比べて、ロスアンゼルスの新興成金がどれだけその精神に欠けているのかという引き合いとして言及されることがしばしばあった。寄付集めが難行して、しかも一時は建設費が2億6500万ドルにもなると見積もられたこともあって、すべてはフランク・ゲーリーの設計が複雑でコストがかかりすぎるためだと、彼をプロジェクトから降ろそうとする圧力もあったらしい。

数年間の膠着状態を溶かしたのは、ウォルト・ディズニーの娘であるダイアン・ディズニー・ミラーで、普段はロス社会から遠ざかっている彼女が一役買って出てフランク・ゲーリー設計案で関係者の意見をとりまとめた。折しもスペインのビルバオでゲーリーが設計したグッゲンハイム美術館が、コスト内で収まった上に大変な人気を集め、そこにロスアンゼルスのランドマーク的企業ディズニー社の寄付も加わって、風向きがすっかりと上向きへ変わったというわけである。

寄付者として一番大きいのがディズニー家の1億ドル、それ以外にディズニー社、ロスアンゼルスを拠点とするスーパー、金融サービス会社などが名前を連ねている。現在このプロジェクトはさまざまな意見を代表する9人のメンバーからなるコミッティがクライアントとなっているが、寄せ集めの不安定な資金的、政治的状況の中で、設計者が右へ左へと揺れざるを得ないという典型的なプロジェクトだったようだ。

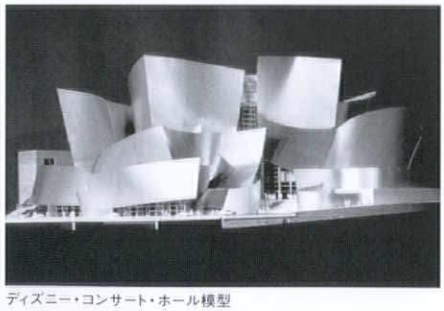
アメリカは資産家が多い上に税制によって寄付行為が優遇されるので、フィランソロピーは社会的にも認知されている。しかし公共的な建物に名前がつく名誉がその主な対象だった数10年前に比べて、寄付を求める声は比較できないほどに多くなっている。教育問題を扱う非営利組織、エイズ患者を救う活動、はたまた自然環境保護を謳う団体などなど。そうした組織の間で寄付金の取り合いが起こっていると言っても過言ではなく、資産を寄付する側はいくつもの選択肢からこれと思うものを見定めて寄付をする。募金を募る人間の口車にむやみに乗せられないようにと、最近は資産家を対象とした寄付のための講座もあって、繁盛していると聞く。

ディズニー・コンサート・ホールは、2002年のオープンをめざして、来春着工する。座席数は2350。外壁を石ではなくメタルでカバーすること、野外の円形劇場を併設するなど、いくつかの設計変更がなされている。荒廃の激しいロスアンゼルス・ダウンタウンを復興させる目玉プロジェクトとして期待されており、このコンサート・ホールの後ろにはスポーツ・アリーナ、エンターテインメント・センター、ローマン・カトリック教会などのプロジェクトが都市復興の切札として控えている。

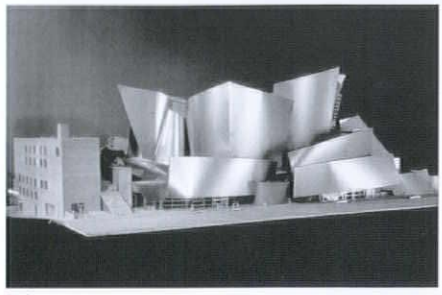
高密度都市であるニューヨークと比べて、広大な地域に広がったとりとめのない都市構造が、ロスアンゼルスのフィランソロピーを遅らせているという見方もあるが、いずれにせよ、ディズニー・コンサート・ホールはロスアンゼルスのいろいろなランドスケープを変える一翼を担うことは間違いない。

●たきぐち・のりこ／ジャーナリスト

photo: Whit Preston



ディズニー・コンサート・ホール模型



同左



ディズニー・コンサート・ホール内部模型

海外レポート

「海派(ハイパイ)建築」案内

from Shanghai

陸鐘驍

空港から浦東へ向かう道はふたつある。私はいつも大橋ではなくトンネルを選ぶ。この方がより多くの建物と出会えて楽しいからだ。屋上にUFOが停泊しているオフィスビル、大きな透明な球にすっぽり入る商業ビル、耳が3つ付いている鍋のような博物館……。何回見ても面白くて、ディズニー・ランドの〈スモールワールド〉に初めて入ったときのことを思い出す。モダン風、ポストモダン風、ネオモダン風の超高層やネオクラシック風の商業施設、基壇に救命艇などのオブジェを乗せたスポーツ施設。人類が20世紀をかけてつくってきた建築の歴史が、この都市ではほとんど5、6年の間に再現できたという事実は本当に信じられ難い。

黄浦江のトンネルをくぐり抜け、目の前の景観が一変する。左斜め前に超高層の森が目に飛び込んでくる。6年前にリチャード・ロジャース、ドメニク・ペロー、伊東豊雄など著名建築家を集めて開いた都市計画コンペ以来、この浦東陸家嘴開発地区は常に世界の注目の的となり、最近では漸くその姿を人々に見せ始めた。170haもの広さのエリアに、すでに20棟を超える超高層ビルが建てられ、さまざまな近・現代の様式がここではタイムスリップしたようにほぼ同時に立ち並んできた。初めて訪ねる人には不思議に感じるかもしれないが、上海の人々はこのような現象を名づけて「海派建築」と呼び、素直に受け入れている。つまり、海のようにみな取り込むような建築で、これは上海の様式だと自負している。最近この「海派建築」には新たにふたつの作品が加えられ、魯班賞(中国国家建設賞)の有力候補として、話題を呼んでいる。

中国一の高さを誇る88階の〈金茂大厦〉は、浦東陸家嘴地区の中心に位置する賃貸オフィスと高級ホテルのコンプレックスである。竣工式が済んだものの、今尚、内装工事は進められている。下段のオフィス部分の内部は、八角形の平面に上に行くに従い徐々に細くなる普通のセンターコア形式だが、ホテル部分の中央にある巨大アトリウムには迫力を感じる。外装はステンレス・パイプなどを使用したアルミ・カーテンウォールの小細工が目立つ。全体デザインは中国の伝統建築──「宝塔」をイメージしたと言われているが、まるで数千kmの地理的距離と文化的差異を超えて、中国北部寺院の仏塔建築がそのまま10倍位のスケールアップで移築されたように見える。道路から見上げると、多数の金属球体に飾られた頂部は太陽光線を反射し、目に痛いほど眩しい輝きを射ち放す。

再びトンネルをくぐり抜け、そのまま直進すること約1kmで、博物館や市庁舎が建つ人民広場に出会う。広場の西側に建てられた〈上海歌劇院〉(オペラハウス)はグランド・オープンを迎えようとしている。石の大階段に廻られた基壇の上に直方体のDPGガラスの箱が置かれ、展望、サービス施設が備えられた白い屋根が空に向かって大きく円弧を描く。この建築は、天から恵みを受ける「集宝盆」だとコンセプトでは謳えている。市庁舎が隣接するせいか、古典的な三段構成とシンメトリーの平面からは、いつかどこかにあった社会主義建築を想起させる。左右3本ずつガラスに包まれる階段によって持ち上げられた屋根がその固さを和らげ、現代の雰囲気を匂わせてくれる。

ふたつの作品とも国際コンペで選ばれた。政治的意志、中国建築に対する外国の建築家の再解釈など、ここから多く読み取れる。異なる機能はもちろん、意匠的にも伝統と現代という二項対立的なデザインであることは明らかだが、表層においては「宝」に関わる縁起物によって直喩的に語られ、共に「海派建築」には呑み込まれている。

歌劇院を離れ、以前からこの近くにある「花鳥魚市場」をふっと思い出して寄りたくなった。子供の時によく足を運んだ場所だ。探すまでもなく、超高層現場の足元の隙間に十数年前の光景は依然残っている。長屋の隙間から注ぐ光、虫、鳥、人間の交じり合う声。曲がりくねった路地に沿って動物、植物、食べ物、着物と街の様相が変わる。ここには前述した作品のような美しく輝く外観も縁起を担ぐ形もない。いや、ほとんど純粋な内部しか持たないとも言える。しかし、これこそ何でも呑込む海のような力を持つ空間であり、本当の上海の空間かも知れない。何かの力が私を興奮させ、奥へ奥へと引き連れていく。

直喩的な形を通しての「海派建築」は、まだ外側からの風景のみで語られている。表層と空間、決して相対する概念ではないが、ここではどうしても対立しているように見える。輝くガラス・カーテンウォールの表層に挟まれる(外部の)隙間に、私はその内部の祖型を見つけたような気がする。西洋の様式を一通り体験した上海の建築家達は、次に何を生みだすのだろうか。私は本当の「海派」の力が見えるのを期待する。

●ろう・つぉんしょう／日建設計


古典の仏塔を再現する〈金茂大厦〉


〈上海歌劇院〉(オペラハウス)


華麗な衣裳で飾られるスラブの集積(浦東開発地区一角)


路地に人が溢れ出る金魚市場の風景

海外レポート

21世紀へのヴィジョン
オランダ建築博物館の野望

from Rotterdam

吉良森子

今年の8月最後の週末に、世界最大の規模を誇るオランダ建築博物館(NAi)では設立10年を記念して「未来のヴィジョン(visions of future)」をテーマにさまざまなイベントが行われた。NAiの野望が、建築家による建築家のためのメディアではなく、建築家、市民、行政、企業など建築に関わる多種多様の人々のクロスポイントとして、地位を確立していくことにあることが、このイベントのプログラムからはっきりと読み取ることができる。

土曜日の朝のオランダ地方都市の建築家による作品のプレゼンテーションから始まって、南アフリカの学生30人によるロッテルダムを敷地とする2週間のアーバン・デザインワークショップの最終発表、デザイナー、建築家による子供のためのエアークッション・デザインコンペの発表など、9つのイベントが行われた。2日間のプログラムは、先に述べた建築に関わる人々すべてを対象にしており、誰もが楽しく参加できる建築エンターテイメントの週末である。展示、ワークショップ、出版、イベントなどNAiのもつ多元的メディアを最大限に活用し、さまざまな人々、機関にそのメッセージを伝達しようとする戦略はここ数年のNAiのポリシーを象徴している。言うなれば、このNAiの10年祭は「広く社会に開かれた建築メディア」というNAiの21世紀へのヴィジョンの声明なのだ。

建築家と一般の人を交えた昼食会の後は、この2日間のハイライトであるシンポジウムがNAiの1000m²の大展示空間を会場として行われた。「未来を発明する」と題したこのシンポジウムは、イタリアからマッシミリアーノ・フクサス、ドイツからはハンス・コルホフ、イギリスからピーター・ウィルソン、アメリカからトム・メイン、オーストリアからコープヒンメルブラウのヴォルフ・プリックス、日本から妹島和世が招かれた。オランダからは若手注目株のMVRDVのヴィニー・マースが参加し、それぞれこれまで最も影響を受けた建築と自分の近作ひとつから未来へのヴィジョンをプレゼンテーションし、その後パネル・ディスカッションを行った。どう考えても真剣なディスカッションによって未来のヴィジョンを模索しようというような企画ではなく、むしろインターナショナルなスター建築家のウィットの効いたコメントを観客に楽しんでもらい、そして今や建築界のスター的存在であるヴィニー・マースや妹島和世の斬新な最新作をこの大々的な建築の祝祭のクライマックスにしようという意図であることは明らかであった(実際翌日の新聞にはヴォルフ・プリックスの極めて切れ味の良いステートメントが大きな記事になり、会場に来ていた建築家や学生の多くは妹島和世の新しい作品のガラス・ファサードのイメージに魅了されていた)。シンポジウムが終わると会場はパーティ会場となり、いささか堅苦しいが、同時にNAiの国立機関ぶりを見せつけた、元文化大臣、元NAi館長、新しい住宅・国土計画・環境省大臣のスピーチの後はファッションショーとダンス・パーティでNAiの10年祭は夜更けまで多くの人で盛り上がった。

NAiの館長クリスティン・ファイライズが今年の春に来日した際に『AXIS』誌のインタビューに答えてこう言っている。「どのような手段であってもいいから、まずは人々にNAiに来てもらわなければならない」。そのためにNAiは、1000m²の大展示空間を誰もが楽しめるような展示を行い、展覧会のテーマに合わせた子供たちを対象とするワークショップを月に一度行っている。スポンサーには展示の内容に一切関与させないが、彼らのためのツアーやパーティを企画するなど、きめの細かいサービス・マニュアルが作られる。さらに行政のポリシーを反映した企画を積極的に行い、若い建築家や学生に多くの発表の場を与えている。

建築の社会的意味を考えると、このようなNAiのポリシーは非常に興味深い。建築は全く異質の複数のシステムを統合し、さまざまなプロフェッション、利害のバランスの中にだけ存在しうる。このことは自明なことでありながら、これらの建築のパートナーたちの間に立ってオープンなコミュニケーションの場を提供し、それぞれから与えられる情報を集積している機関というのは希である。NAiは、毅然と文化的視点に立ちながら建築に関わるすべてのパートナーにその門を開き、21世紀への建築のヴィジョンを着々と暖めているのである。

●きら・もりこ／Schroevers-Kira主宰

photo: Louis Haagman



展示風景



建築をテーマにしたファッションショー



毛むくじゃらの動物のようなメガサイズのエアークッション

SD

12月号予告



山田幸司建築都市研究所（角谷邸新築工事―フォアタワー）

9812

特集

SDレビュー1998

17回目を迎えたSDレビュー。今年も9月と10月に東京・大阪の2箇所で巡回開催された。
鹿島賞、朝倉賞、SD賞、新人賞の4賞の誌上発表、および審査員のコメントも含め、入選作15点を紹介する。

［審査員］
林 昌二（建築家）、播 繁（構造家）、岸 和郎（建築家、京都工芸繊維大学助教授）、圜 紀彦（建築家）

［入選者］
アルヴァロ・ヴァレラ+サイード・シエド、アンドリュー・バリー+ミヌストリー・アーキテクチャー、遠藤政樹+池田昌弘、岡村和典+石井米二郎+清水里司／日本設計九州支社、尾沢俊一、川嶋彦一郎、駒井貞治／駒井貞治の事務所、ジン・タイラ+三好隆之、手島浩之+都市建築設計集団／UAPP、手塚貴晴+手塚由比／手塚建築研究所、長倉威彦、廣谷純弘+石田有作／建築研究所アーキヴィジョン、三上晴久+三上建築事務所、山田幸司建築都市研究所、和田吉貴

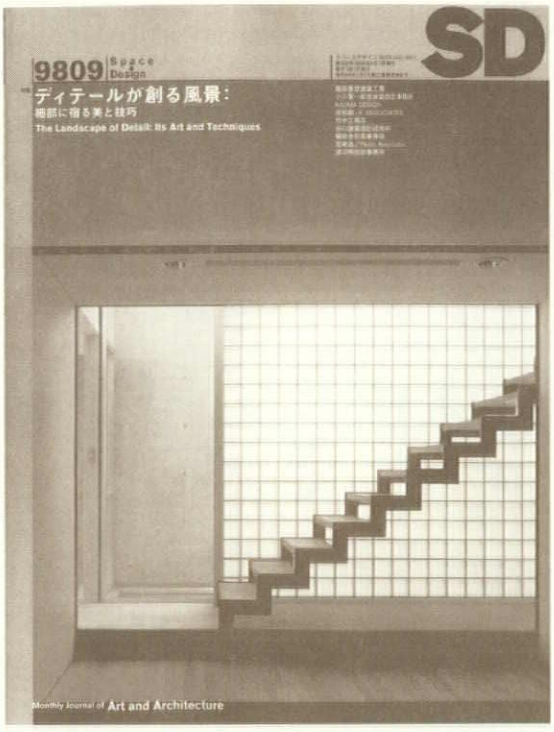
小特集3題

Metal Turnings：コルゲート鋼板による遠藤秀平の近作
「HAPPENING」：現代インテリア・家具展
シャルロット・ペリアン：思考のプロセス

連載：
海外レポート：バルセロナ、ヘルシンキ、ベルリン
森島紘史の起こし繪図――日本のかたち紙考 12（最終回）／森島紘史

SD

バックナンバー





9809

特集

ディテールが創る風景
細部に宿る美と技巧

ある建物に足を踏み入れた瞬間、緊張感と心地よさを無意識のうちに感じることがある。また街を歩いてると、ある建物のファサードが雑然とした街並みを極めてさりげなく純化している情景に出会う瞬間がある。そこには、細部意匠と全体の空間の精緻な均衡の上にのみ成り立つ、寡黙で静謐な風景がしっかりと存在している。本特集では、寡黙で静謐な風景をつくり出す要素であるディテールに焦点をあて、そこに込められた意図を検証しながら、美しい写真と精度の高い図面によって各作品を紹介する。

●作品紹介
飯田善彦建築工房〈川上村林業総合センター 森の交流館〉、小川晋一都市建築設計事務所〈GLASS HOUSE〉、KAJIMA DESIGN〈東京海上東日本研修センター〉、岸和郎+K. ASSOCIATES〈山口大学医学部創立50周年記念会館〉、竹中工務店〈東京自転車健康保険組合会館〉、谷口建築設計研究所〈豊田市美術館〉、槇総合計画事務所〈風の丘葬斎場〉、宮崎浩／Plants Associates〈NSP Building〉、渡辺明設計事務所〈成城の住宅1996〉計9作品
●細部への眼差し（コラム集）：現代のディテール・マイスター達が描く情景と射程
和泉正敏／石のアトリエ、新日軽、宮崎浩、小川晋一
●ディテール写真館：写真家が捕らえた桂離宮の細部に息づく美
岡本茂男（写真家）
●対談：赤坂喜顕×宮崎浩

連載：
海外レポート：リスボン、香港、チューリッヒ
森島紘史の起こし繪図——日本のかたち紙考 9／森島紘史

特別定価＝2,300円／本体2,190円

9810

特集

オフィス環境の近未来

ノンテリトリアルなレイアウトや、SOHO（Small Office Home Office）、サテライトオフィスといった国内、海外の先端的オフィスの状況を対比的に紹介しながら、今後のオフィス環境の姿を考察する。
事例：日本＝電通インタラクティブ・ソリューション・センター、日本ヒューレットパッカードビジネスセンタ、NTT中央研修センタ、乃村工藝社商環境事業部、チューリッヒ・ダイレクト、他
海外＝DEGWロンドン、ハマーウィンブラッド、ワイアード・デジタル、LAセルラー、他
文：仲隆介、小倉善明、岸本章弘、月館君枝

失われた時と空間を求めて
京都町屋再生の手法

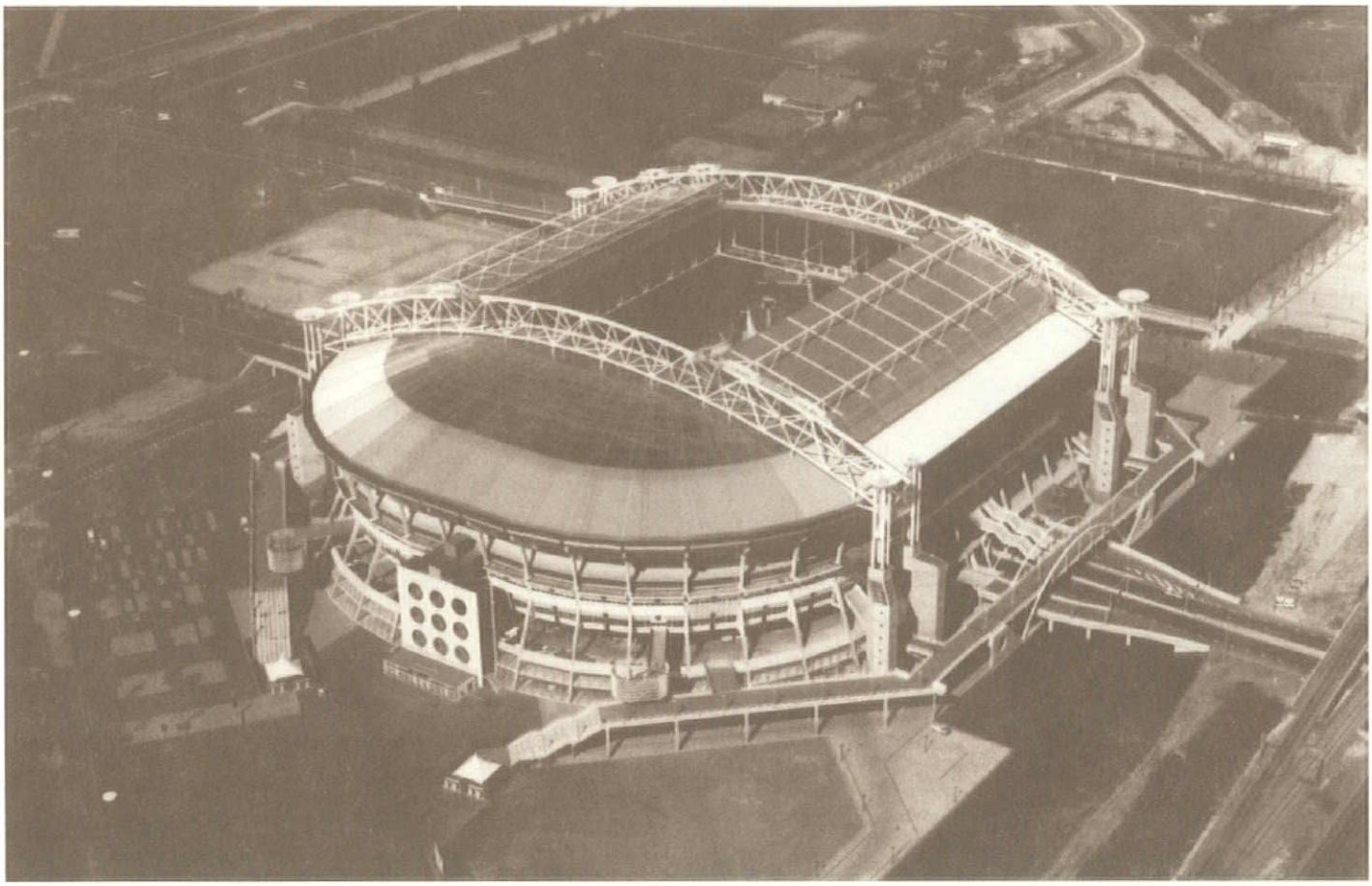
店舗付住宅として調和のある街並みの美を示してきた京町屋が徐々に失われつつある現在、単に保存するということだけでなく、その歴史・文化を継承しつつ現代性のある建築空間として再生しようとする、京町屋再生研究会の活動を紹介する。
事例：橋弁慶山町会所、祇園望月、ミホプロジェクト、他
文：宗田好史、長尾重武、野間光輪子、大谷孝彦、望月秀祐
対談：野間光輪子×小島冨佐江

木構造密集市街地の将来像を考える
向島国際デザインワークショップ報告

［文］山本俊哉、ティートス・スプリー、他

連載：
海外レポート：ニューヨーク、ミラノ、パリ
森島紘史の起こし絵図——日本のかたち紙考 10／森島紘史

定価＝2,000円／本体1,905円



SD別冊32号

スポーツのための空間——スポーツ施設の新しい風

日本設計＋SD編集部　総頁数：180頁　価格：3800円（本体3619円）

スポーツを行い、楽しみ、観戦するための空間は、多くの課題を抱えている。

巨大化する競技イベントへの対応、利用頻度の向上を求めての多目的化、新たな魅力付加を求めての複合化、高度な観戦空間を求めての専用化、あるいは既存施設の再利用や機能の向上など。

また、高齢者、身体障害者、女性など、スポーツ参加層の急激な拡大や変化に対応することも早急に求められている。

本書では、そうした課題の解決に挑戦し、大きな成果をあげている最新事例を豊富に取り挙げ、詳しい解説を付し、今後のスポーツ施設の設計に明瞭な指針を与える内容としている。

第1部：スポーツの空間の新しい風
1：専用または共用
2：屋外または屋内
3：都心または郊外
4：複合化と多目的化
5：再生と改修
6：仮設と転用

第2部：最新事例紹介
海外：ベルリン・オリンピック自転車競技場及び水泳場、フランス競技場、ウィンブルドン新コート、2000年シドニーオリンピック公園、香港スタジアム、アムステルダム・アリーナ、アトランタブレーブズ新球場、オリオールパーク球場、バンク・ワン球場、シアトル・マリナーズ新球場、マディソン・スクエア・ガーデン改修、ミレニアム・ドーム、ナッシュビルアリーナ、ユナイテッドセンター、ユービック地下スポーツホール
国内：横浜国際総合競技場、武蔵野の森競技場、東京ドームシティ、大阪ドーム、西武ドーム球場、Jヴィレッジ、ツインリンクもてぎ、他全40例

第3部：空間の拡張と参加層の拡大
スポーツの空間の拡張：代用、自然、ヴァーチャルリアリティ、放送メディア
スポーツ参加層の拡大：簡易スポーツ、高齢者、身体障害者、女性

SD別冊

次世代街区への提案

—安全で環境にやさしい街づくり—

三宅理一・林　明夫編
A5判　204頁　定価(本体3,000円＋税)

本書はわが国の都市問題の第一線で活躍する専門家たちが、既存の都市モデルを検証し、近未来の防災都市計画の提案を行うもの。鉄を素材とした長寿命の集合住宅システムの具体的な提案がなされているのが特色。

［主要内容］

1. 日本の都市の脆弱性
2. 密集市街地の住民意識
3. 街区を利用した密集市街地の改善
4. 次世代街区のためのＳＩ集合住宅
5. 市街地再生のためのプログラム
6. 次世代街区の導入効果
7. 実現に向けた利用権分譲方式

不気味な建築

A. ヴィドラー著　大島哲蔵・道家　洋共訳
四六判　312頁　定価(本体3,400円＋税)

ポーやメルヴィルによって描き出された「不気味なもの」とは、モダニズムによって抑圧されていたが、一方で「崇高なもの」と結びつき、現代建築に大きな影響を与えていた。ヴィドラーによって著わされた問題の書。

［主要内容］

I 住居——居心地の悪い家／生き埋め／ホームシック／ノスタルジア
II 身体——寸断された建築／顔の喪失／トリック：トラック／地の変換／サイボーグのための家
III 空間——ポストアーバニズム／サイコメトロポリス／夢幻性／放浪の建築／透明性　訳者あとがき

アントニン・レーモンドの建築

三沢　浩著
A5判　244頁　定価(本体3,500円＋税)

汎世界的な「国際建築」ではなく，地域の気候と風土に根ざし，人々に愛され使われ続けるもの——それこそがレーモンドの考える「近代建築」であった。近代建築の失墜を，日本近代建築の巨匠を再考することで克服。

［主要内容］

第１章　「日本の」建築家
第２章　流浪の時代
第３章　戦前の活動——スタイルの試行錯誤
第４章　黒い木造横板張りの近代住宅
第５章　運命の星
第６章　離日とアメリカ時代
第７章　再来日——近代建築展開への布石
第８章　リーダイ論争
第９章　戦後近代建築の展開
第10章　レーモンドの設計プロセス
第11章　群馬音楽センター
第12章　脱近代の方向へ
第13章　レーモンドの現代的位置付け

新しい交通 まちづくりの思想

—コミュニティからのアプローチ—

太田勝敏編著
B5判　216頁　定価(本体2,800円＋税)

都市のインフラとしての鉄道や道路計画，そしてアメニティ施設としての遊歩道や駐車場など，交通に関わるさまざまな「まちづくり」の問題を，住民参加という根源的で今日的な手法により創り出すノウハウを提示。

［主要内容］

1. 交通まちづくりとコミュニティからのアプローチ
2. わが国の交通計画における「住民参加」
3. 住民参加の方法とツール
4. 各国の住民参加制度と事例——アメリカ・フランス・イギリス・ドイツ
5. わが国の先進的な取り組み
6. コミュニティからの交通まちづくりの思想に向けて

鹿島出版会の建築図書案内



集合住宅原論の試み

黒沢　隆著
B5判　168頁　定価(本体3,800円+税)

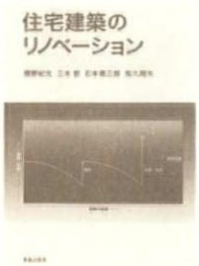
集合住宅論を建築の社会的側面と計画原論との関連を軸に総合的に捉え直した具体的・実践的な書



建築とリアル

松畑　強著
四六判　240頁　定価(本体2,700円+税)

建築や都市デザインを単体として考察するのではなく、広く経済や政治情勢などを接点として捉える



住宅建築のリノベーション

樫野紀元・三木哲・石本德三郎・知久昭夫著
A5判　208頁　定価(本体3,300円+税)

住宅建築をリニューアルするために、建物の診断方法から計画・工法までを詳細に記述した解説書



都市・住宅論 (SD選書232)

東　孝光著
四六判　224頁　定価(本体1,800円+税)

戦後日本の都市発展とともに変化してきた都市居住の解析をふまえ、21世紀に向けて提案する



同潤会のアパートメントとその時代

佐藤滋・高見澤邦郎・伊藤裕久・大月敏雄・真野洋介著
B5判　260頁　定価(本体3,300円+税)

同潤会の誕生した時代背景、そして代官山アパートを中心にその建築や居住者の生活を記述する



ふれあい空間のデザイン (SD選書233)

清水忠男著
四六判　216頁　定価(本体1,800円+税)

望ましいふれあい環境のデザインについて幅広い調査と実例を駆使し新しい視点と方法を紹介する



これからの家—健康で快適な住まい

快適住居研究会編著
四六判　208頁　定価(本体1,800円+税)

住宅における健康及び快適とは何か、建設省建築研究所及び住宅メーカーの専門スタッフが詳述



北　京—都市空間を読む

陣内秀信＋朱自煊＋高村雅彦共著
四六判　248頁　定価(本体2,900円+税)

中国の首都北京を対象にその歴史的都市空間の特質を描く。アジアの都市を解析するための手引書



揺れを制する

小堀鐸二著
四六判　384頁　定価(本体2,500円+税)

21世紀に向け自から各種媒体で語り綴られた思考・行動・論理の根幹を文筆成果より収録



庭の楽しみ—西洋の庭園二千年

A.S.ジェイムズ＋O.ランカスター著　横山　正訳
四六判　200頁　定価(本体2,700円+税)

古代ローマから中世、近代、現代に至る庭園の様々な様相を楽しいイラストとエッセイで紹介



20世紀の建築思想

キューブからカオスへ

杉本俊多著
四六判　224頁　定価(本体2,800円+税)

20世紀の建築のパラダイムの崩壊から、再生、転生を経て爛熟に至る段階的変化を21世紀に向け示す



地球のためのデザイン

建築とデザインにおける生態学と倫理学

ヴィクター・パパネック著　大島俊三他訳
A5判　288頁　定価(本体4,100円+税)

21世紀のヒトと地球を救うデザインとは?　作られる状況、使う環境を考える独自のデザイン論

建築関連雑誌
ARCHITECTURAL MAGAZINES' BACK NUMBER FAIR
バックナンバーフェア'98

'98.10/3(土)〜11/15(日)

※一部の書店では開催期間が異なります。

全国40書店
同時開催

建築関連雑誌
出版9社の
協賛により、

バックナンバー
19誌を一堂に出品。

全国主要都市の
40書店で同時開催。
(一部の書店では開催期間が異なります。)

■出品出版社・出品予定誌
(株)エー・アンド・ユー [a+u]
(株)鹿島出版会 [SD]
(株)建築技術 [建築技術]
(株)建築資料研究社 [住宅建築・confort・造景]
(株)建築知識 [建築知識・パドマガ・建築知識スーパームック]
(株)彰国社 [建築文化・施工・ディテール]
(株)商店建築社 [商店建築・Wind]
(株)新建築社 [新建築・住宅特集・JA]
(株)マルモ出版 [ランドスケープデザイン・マイガーデン]
※増刊・別冊・ムック含む

札幌市 丸善 札幌南一条店
(TEL011-241-7254)
旭川市 ブックセンター冨貴堂MEGA
(TEL0166-29-2888)
仙台市 ジュンク堂書店 仙台店
(TEL022-265-5656)
宇都宮市 宇都宮ブックセンター
(TEL028-627-7700)
前橋市 煥乎堂
(TEL027-235-8111)
水戸市 ツルヤブックセンター 本店
(TEL0292-25-2711)
浦和市 須原屋
(TEL048-822-5321)
千葉市 千葉そごうブックセンター
(TEL043-245-8331)
(東京)
千代田区 三省堂書店 神田本店
(TEL03-3233-3312)
中央区 八重洲ブックセンター 本店
(TEL03-3281-8203)
新宿区 紀伊國屋書店 本店
(TEL03-3354-0131)
渋谷区 大盛堂書店
(TEL03-3463-0511)
渋谷区 青山ブックセンター 本店
(TEL03-5485-5511)
豊島区 東京旭屋書店 池袋店
(TEL03-3986-0311)
横浜市 有隣堂 本店書籍館
(TEL045-261-1231)
厚木市 くまざわ書店 本厚木店
(TEL0462-30-7077)
新潟市 紀伊國屋書店 新潟店
(TEL025-241-5281)
富山市 BOOKSなかだ 本店
(TEL0764-92-1192)
金沢市 ブック宮丸 金沢南店
(TEL076-244-3211)
長野市 平安堂 新長野店
(TEL026-224-4545)
静岡市 静岡谷島屋 本店
(TEL054-254-1301)
浜松市 浜松谷島屋
(TEL053-453-9121)
名古屋市 丸善 名古屋栄店
(TEL052-261-2251)
京都市 丸善 京都河原町店
(TEL075-241-2168)
京都市 大龍堂書店
(TEL075-231-3036)
大阪市 旭屋書店 本店
(TEL06-313-1191)
大阪市 紀伊國屋書店 梅田本店
(TEL06-372-5821)
大阪市 丸善 なんばOCAT店
(TEL06-635-3225)
大阪市 柳々堂書店
(TEL06-443-0167)
神戸市 ジュンク堂書店 三宮店
(TEL078-392-1001)
松江市 松江今井書店 本店
(TEL0852-24-2230)
岡山市 丸善 岡山シンフォニービル店
(TEL086-233-4640)
広島市 丸善 広島本通店
(TEL082-247-8763)
高松市 宮脇書店 本店
(TEL087-851-3733)
松山市 紀伊國屋書店 松山店
(TEL089-932-0005)
北九州市 井筒屋ブックセンタークエスト 小倉店
(TEL093-522-3924)
福岡市 紀伊國屋書店 福岡店
(TEL092-721-7755)
熊本市 紀伊國屋書店 熊本店
(TEL096-322-5531)
大分市 晃星堂書店
(TEL0975-33-0231)
鹿児島市 ジュンク堂書店 鹿児島店
(TEL099-239-1221)

SD Space Design Back Issues

Home Page Address:
http://www.kajima.co.jp/group/publish/index.htm



9707 Hong Kong 1997: The Accelerating City
Grasping the aspect of Hong Kong through visual works by artists and interview with architects. artists: Alan Chan, Tycoon Graphics, Satoshi Asakawa, Shin Egashira, etc. Supervision: Shin Muramatsu, Kazuhiro Kojima, Hikaru Kinoshita. Text: Naonori Matsuda ¥2,000



9708 Venturi, Scott Brown and Associates: 1990's Works: Focuses on the first work in Japan, Mielparque Nikko Kirifuri and introduces 1990's works such as Seattle Art Museum and Additions, Renovations and Restoration, San Diego Museum of Contemporary Art. **Toward a New Living Environments:** Gifu Kitagata Housing Project ¥2,400



9709 A New Phase of Railway Station Space:
Introduces Railway Stations having additional value and tie with community such as JR Yabuki and JR Ohmagari. Also Introduces JR Kyoto widely noticed as International Competition. Text: Takayuki Miyabayasi etc. Talk: Tadanori Yokoo×Hiroshi Hara ¥2,000



9710 Architecture in Glass: Introducing architectures which adopt the characters of glass in such as optical and structural aspects. Searching for the present situation and possibility in the future: Extension of the Winterthur museum of Art, Hotel P, Konami Nasu Seminar House, etc. Text: Kazuhiko Nanba, Masao Ando, etc. ¥3,000



9711 Kengo Kuma: Digital Gardening: Introduces recent leading works of Kengo Kuma, advocate of post-modern architecture and winner in 1997 of the Architectural Institute of Japan Prize and the Benedicta Prize. Memorial Park and other designs. Articles by Youichi Iijima, Greg Lynn, etc. Discussion: Fumihiko Maki and Kengo Kuma. ¥2,800



9712 SD Review 1997: Publishing the result of SD Review contest with comments from the screening commmittee. Participants: Shigekatsu Takayasu Architects+Tatsuya Sakuma+Hirotada Hashizume+Hiroyuki Shigetomi, Hiroshi Kawahito, Sosuke Hujimoto, etc. **Spaces of Lighit and Color: Glass Artsits of Czecho** ¥2,000



9801 SD Review 1982-96
16th anniversary retrospective of SD Review looks at entries later built, examines relation to and significance in the world of architecture, and considers future directions. Text: Fumihiko Maki, Hiroshi Hara, Youichi Iijima, Osamu Nakasuji, ect. Round-table discussion: Makoto Motokura, Ryoji Suzuki, Akira Kuryu, and Kazuhiro Kojima ¥2,800



9802 Transparency in Architecture and the City: Swiss German Architecture Explores the appeal of the Swiss German sphere through an understanding of the background of Swiss architectural works and the context in which they came into being. Architects introduced are Herzog & de Meuron, Gigon & Guyer, etc. Texts by Momoyo Kaijima, etc. ¥2,200



9803 Czech Cubist/Rondocubist Architecture: A Reappreciation of the Revolution: Featuring extant Cubist and Rondocubist architecture in Prague; original photos. **Hiaso Kohyama: Drawings and space:** introduces Hisao Kohyama's architectural space and handling of detail through the architect's own drawings. ¥2,000



9804 Versatile Architects of the New Generation: Introduces the works and creative activities of young architects in their thirties to portray a sense of the times: INTENTIONALLIES, MIKAN, etc.
Desktop Community
¥2,000



9805 The Cutting Edge in Space Design:
Introduces specific examples of collaboration between architects and designer artists:Kazuko Fujie, Kinpei Nakamura, Susumu Shingu, etc.
House for Frida Kahlo and Diego Rivera:
Juan O'Gorman's Architecture and Mexican Modern
¥2,000



9806 Landscape Creation Today: The Challenges for Landscape Architects: Introduces landscaping set apart from the natural environment and purposefully designed to serve society. Architects introduced are Yoji Sasaki, PLACEMEDIA, Hiroki Hasegawa, Toru Mitani, Makoto Noborisaka, N. Finley+M. chiba, Ken Smith, Kyathryn Gustafson, Douglas Reed, etc. ¥3,000



9807 Coelacanth Architects: Traces their activities over twelve years, mainly through introduction of their works. Kibikougen Elementary School, Suijo Fire Station of Osaka City, Sotogaoka Exchange Forum, etc. Text: Hiroshi Hara, Yoshitake Doi. Interview: Riken Yamamoto ¥2,600



9808 Design Vocabularies of Light: LPA Works 1990-1998: Introducing a selected list of 40 concepts from LPA's design vocabulary, this book is a bible of illumination lore for the overall study of space created by light. Text: Arata Isozaki, Kaoru Mende ¥2,500



9809 The Landscape of Detail:
Its Art and Techniques
Introduces the details of architectural works with photos and drawings. Hiroshi Miyazaki, Akira Watanabe, Takenaka Corporation, Yoshio Taniguchi, Kajima Design, Shinichi Ogawa, Waro kishi, Fumihiko Maki, Yoshihiko Iida.
¥2,300



9810 Office Environments for the Near Future
Introduces recent developments in office environment design through specific examples. Works: Dentsu Interactive Solution Center, etc. Text: Ryusuke Naka, etc.
Machiya Restored: The Future of Central Kyoto and The Development of Machiya Restoration
¥2,000

SD

Space Design
Hardcover Edition
and Order Form

Space Design published its first issue in 1965 as a monthly journal for a general readership introducing noteworthy achievements and leading works in the fields of architecture, urban problems, design, and the fine arts. The journal has established a solid reputation over the years in the fields of architecture and design. It enjoys the support of a broad readership in an age when up-to-date information on contemporary design, urban planning, and architecture is in heavy demand. **SD** endeavors to make its features and articles ever richer in content, focusing attention on the methodological, and aesthetic themes of modern architecture, the city, design, and the arts. The text of **SD** is mainly in Japanese, but in certain cases English translations or summaries are provided for feature articles.

Send your order for subscriptions to Space Design and/or for back issues or hardcover editions by:

Filling in the order card below and faxing it to:
Space Design: 81-3-5561-2560

Or mail the card to:
Subscriptions Department
Kajima Institute Publishing Co., Ltd.
6-5-13 Akasaka, Minato-ku,
Tokyo 107, Japan
tel: 81-3-5561-2550

An invoice will be sent immediately. Upon receipt of the invoice, you may pay by check or international money order or bank check.

Order Card
Name (in block letters please):

Address:

Fax number (if available):

Occupation:

Please check one of the options below:
☐ Please enter my SUBSCRIPTION to Space Design, starting in

	sea mail	air mail
12 issues	¥30,000	¥55,000
24 issues	¥50,000	¥80,000

Price includes postage and bank charges.

☐ Please process my order for the following BACK ISSUES and/or HARDCOVER EDITIONS of SD:

The invoice includes:

1. Price of the publication
2. Bank charges(¥1,500 per order)
3. Postage(determined upon receipt of order)

Alvar Aalto
A special comprehensive collection of celebrated architect Alvar Aalto's major works. Aalto's Design Vocabulary, by Akira Mutoh / Chronological Review of A. Aalto's Life : 1898-1976 / Worldwide Distribution of Alvar Aalto's Works ¥3,090

Tadao Ando 2
His 21 works since 1981 including Church with the Light are classified into five categories and introduced at once here. The 10-meter long drawing of Nakanoshima Project lets the readers feel his vigorous approach to architecture. ¥4,800

Arata Isozaki 2
Introduces whole of Isozaki's major works, 1976-1984, especially his shocking work : Tsukuba Center Building. Ministry of Foreign Affairs of Saudi Arabia, MOCA, Blick of Flats, Berlin, Okanoyama Graphic Art Museum, ¥4,944

Kiyonori Kikutake
Collection of Metabolist Kiyonori Kikutake's works from the early years to 1980 : Architecture of The Third Generation, On the Notion of Replaceability, Phase of Methodological Search, Data, Location of Works ¥3,090

Kisho Kurokawa 2
13 major works for these 10 years, including Hiroshima City Museum of Contemporary Art which won 1990 The Prize of the Architectural Institute of Japan, and 2 other Museums are introduced. ¥4,300

Seiichi Shirai
Introduces a collection of the gem-like works by Seiichi Shirai, an architect of proud loneliness. Kaisetsu-kan, Noa Building, Sei-Akira-kan, Sassetsuken, Kohakuan, etc. Essays by Arata Isozaki, Ichiro Haryuu, Ikuma Shirai ¥ 3,605

Atelier Zo
Presents the first collection of the works by Atelier Zo who has continuously brough forth fresh works by their original formative ideas. Nago City Hall, Shinsyukan Community Center, etc. Essay by Hiroshi Aramata ¥4,000

Kenzo Tange 3
29 projects are introduced at a stroke so that his footwork in 1980's can be seen. Also, the noticeable new Tokyo City Hall is introduced through many drawings and photographs of new model. Full English text. ¥4,100

Fumihiko Maki 2
Presents the second collection of Maki's works which show his activities in 1980s. Spiral, Keio University Hiyoshi Library, Fujisawa Municipal Gymnasium, Hillside Plaza, Tokyo Metropolitan Gymnasium, etc. ¥4,326

Toyo Ito
9 projects of his semi-permeable architectures such as restaurant NOMAD and Silver Hut and 11 projects of Transformations by Light are introduced. The Shinorama Space by Kishin Shinoyama shows White U. ¥3,900

Shin Takamatsu
All of his major works including Kirin Plaza Osaka which won 1988 The Prize of the Architectural Institute of Japan are introduced. His working field in which he has continuously been creating his sharp works can be observed. ¥3,800

Kunihiko Hayakawa
His original pastel-colored works such as ATRIUM and STEPS give the architectures allegro rhythm and feast one's eyes. His works and projects for 10 years since 1978 show his world. ¥4,300

Kazuhiro Ishii
His Sukiya-village which won 1990 The Prize of the Architectural Institute of Japan and 51 other works introduce his method of composition. ¥4,300

The Expressionist Architecture of Germany
Meaning of the Expressionism which is the mother of the modern architectures and has influence on the contemporary ones is introduced by 12 architects' works. ¥3,300

Wooden Architecture Today 1989
Introduces works of Europe, mainly German, Swiss, and French, as well as of the United States, Australia, and Japan. Works in Japan include those by Shoei Yoh, TAKE-9, Hideaki Katsura and others. ¥3,708

Bruno Taut
Introduces his activities mostly while staying in Japan 1933-36. Features in memory of Taut in 40th year of his death. Architect's Own House Istanbul, Housing on Erich-Weinert Strasse, etc. Taut's Handicraft and Books ¥2,575

Ecole des Beaux-Arts and its Glorious Tradition Updated: Essays: History and Credo, Thought Backbone/ On the Grand Prix : List of Recipients and their Presentations/ Genealogy of its Ateliers/ Collections : Notre-Dame at Lorette, Opera Theater, Paris, etc. ¥2,575

Details by Maki & Associates
Shows detail at Forum TEPIA, a showcase of high technology using a variety of new materials. The work features studies in surface, point, and line and develops numerous types of detail. ¥6,800

Kim, Swoo Geun
Introduces his 30 projects, mainly in Korea. Masan Cathedral, Korean Overseas Development Corporation Building, Art center of Korean Cultural and Arts Foundation, Seoul Sports Complex, Nam Dae Mun Market Redevelopment Plan, etc. ¥3,090

Architects Own Houses of the World
Introduces famous architects' own houses of the World. Architects: Richard Foster, Frank Gehry, Don Hisaka, Wilhelm Holzbauer, Michael Hopkins, Barton Myers, Christopher Owen, Arthur Erickson, Ulrick Franzen, Paul Gray, etc. ¥4,944

●

システムキッチン

クレディア

●

トステム株式会社



トステム㈱では，使いやすさと選びやすさを追求した，システムキッチン，クレディアを2年ぶりにフルモデルチェンジし，新発売した．

特長

①ワーキングライフプラン，クリーンライフプラン，ファミリーライフプラン，ロングライフプランなど，ライフスタイル別のプランを用意した．

②シンク回りの小物の収納スペースやゴミ処理のしやすさに工夫を加えた．　制振シート貼りで水跳ね音も小さく抑えた．

③腰をかがめずに作業できるトップオーブン式食器洗い乾燥機で作業動作がスムーズになった．

④フッ素加工やシリコン塗装で汚れを付きにくくし，清掃性を向上させた．

⑤セットプランを従来比3倍の12プランにした．

⑥キッチン全体のイメージを決定する要素となる扉に，天然ナラ無垢材の工芸調仕上と高級鏡面仕上を設定し，これを含め12デザイン30カラーを用意した．

⑦キャビネット材は低ホルムアルデヒド対応品を採用したので，安心して使用できる．

価格（写真タイプ）

1,699,500円

●

ガラス飛散防止対策フィルム

ルミクール 抗菌防汚タイプ 1501UH-CAZ

●

リンテック株式会社



リンテック㈱では，ガラス飛散防止対策フィルム，ルミクールの新製品として，フィルム表面に抗菌・防汚機能を付与した，1501UH-CAZを開発し，新発売した．　オフィスやホテル，飲食店，病院さらに幼稚園や小・中学校における衛生対策や汚れ防止対策に，また電話ボックスの貼り紙対策に幅広い用途に対応する．

特長

①大腸菌，黄色ブドウ球菌などフィルム表面に付着した菌の増殖を抑制する．

②フィルム表面に永久的なしみや汚れが付きにくく，清掃も容易である．　またシールやステッカーなどが付いていても，容易にはがすことができる．

③使用している抗菌剤は，急性経口毒性，皮膚一次刺激性，変異原生の各試験で高い安全性を確認している．

④耐候性試験後の抗菌・防汚効果も良好で，効果の持続性に優れている．

⑤フィルム表面のハードコート処理により，清掃時の不注意などによる擦り傷の発生を低減する．

⑥従来品同様，紫外線を99%カットする．

価格

標準施工価格　9,000円/㎡（50㎡以上の材工価格）

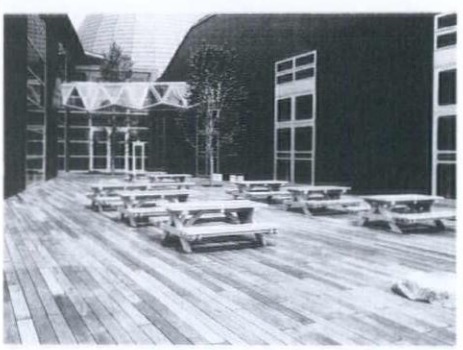
●

デッキフロアシステム

サニーデッキ

●

三洋工業株式会社



三洋工業㈱では，超硬質木材製デッキフロアシステム，サニーデッキを新発売した．　デパートのテラスや屋上，戸建て住宅のバルコニー，ビルやマンションのアプローチなどに最適である．

特長

①鋼製下地には耐食性に優れたステンレス鋼と，今回新日本製鐵㈱が新たに開発した極厚目付高耐食性溶融亜鉛メッキ鋼板「ダイマジンク」を使用し，屋外でも使用可能な鋼製下地となっている．　また，仕上材であるデッキ材にも耐朽性に優れた硬質木材を使用し，10年の品質保証を掲げることができた．

②デッキ材固定にはアルミニウム合金製の押出形材を使用し，従来のデッキフロア表面にでているビスや釘類の頭が無くなり，外観上均整のとれた床に仕上げることができる．　また，経年変化によるデッキ材端部固定のビスや釘部分からのヒビや割れが生じなくなり，同時にビスの抜けなどによるケガの危険性もなくなり，やさしさと安全性を持った床に仕上がった．

③これまでに多くの改善が加えられてきたレベル調整可能な鋼製床下地システムの施工性に加え，下穴加工を不要にした金具によるデッキ材固定方式により，従来より大幅な工期短縮が図れた．

トステム株式会社　広報部
東京都江東区大島2丁目1番1号
〒136-8535　Tel　03-3638-8115

リンテック株式会社
東京都板橋区本町23番23号
〒173-0001　Tel　03-5248-7741

三洋工業株式会社
東京都江東区亀戸6丁目20番7号
〒136-8502　Tel　03-3685-3452

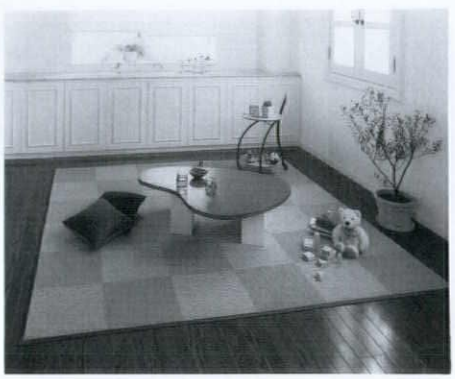
●

パネルカーペット

アタック400・500

●

東リ株式会社



東リ㈱では，住宅用のカーペット，パネルカーペットアタック400・500を新発売した．　発売以来好評を得ているアタック100・200・300に続きパネルカーペットシリーズを充実した．　アタック400は，健康・快適をテーマにサイザル調を生かしたサラット感が特長である．　大地や草木をイメージした色彩でナチュラルな印象の空間づくりに最適である．　アタック500は，安らぎ・癒しをテーマにカーペット本来の柔らかさと立体感が特長である．　カーペットならではの風合いを生かしたデザインが高級感や落ちつきを演出している．また，同時に手頃な価格の見切材も発売した．

特長

①コンパクトな40㎝角．　軽量で収納にも便利である．
②汚れた部分を外して水洗い可能，洗濯機で洗うことも可能である．
③衝撃吸収性・防音性に優れたソフトバック．　階下への音の伝わりをやわらげる．
④引越にも便利．　間取りが変わっても自由なレイアウトが可能である．(専用のＡＫシールをカーペットの裏に貼れば取外しが容易でしかもずれない．)
⑤部分敷きが可能である．　そのための副資材（見切材，コーナージョイントなど）もある．

東リ株式会社　販促宣伝部
兵庫県伊丹市東有岡５番125号
〒664-8610　Tel　06-494-6604

●

空冷式ガス吸収冷温水機

空冷アロエース　ACH-８

●

矢崎総業株式会社



矢崎総業㈱では，従来の冷却塔を含めた水冷吸収冷温水機に比べて，小型・軽量化を実現するとともに，定期メンテナンスを不要とした，空冷式のガス吸収冷温水機，空冷アロエースACH-８を新発売した．

特長

①空冷式を採用したことで，吸収冷温水機として初めて，定期メンテナンスフリーを実現．　コールメンテナンスにて対応するため，メンテナンス費は大幅に低減（矢崎水冷式の約10分の１）する．
②冷却水が不要なので，夏場の渇水期にも，運転が可能．　しかも，水道代が不要になるだけでなく，メンテナンスコストも削減できるので，運転維持費は水冷式に比べ約15％低減（当社比）できる．
③冷却水系統の機器類が不要となるため，設置工事が簡素化できるとともに，工期の短縮化，工事費の低減が可能となる．　サービススペースを含む設置面積で約50％，運転重量で約25％の削減，設置工事費で約10％の低減（いづれも当社比）が可能となった．
④室内リモコンからの運転・停止はもちろん，冷房・暖房の切替がワンタッチでできる，個別分散空調に対応可能である．

矢崎総業株式会社　空調機器本部
東京都港区三田１丁目４番28号
〒108-8333　Tel　03-3455-8812

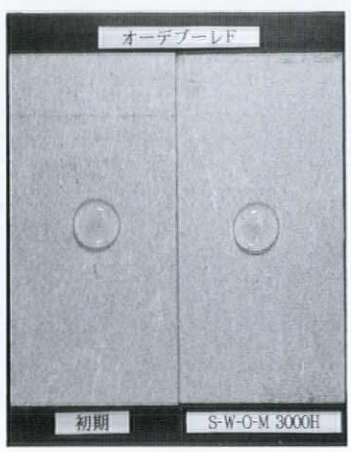
●

水性フッ素系浸透性吸水防止材

オーデプーレＦ

●

日本ペイント株式会社



日本ペイント㈱では，フッ素の耐久性とシランの浸透保護機能を水性で両立させた画期的な浸透性吸水防止材，オーデプーレＦを開発し，新発売した．　同製品は，コンクリート生地仕上げ面（打ち放し面）の吸水防止と中性化防止の保護材として最適である．

特長

①環境にやさしい水性で内部に有機溶剤をほとんど含まないので，危険性や臭気の心配がありません．
②フッ素とシランのハイブリット効果により，すぐれた撥水性と驚異の持続性を発揮する．　従来の浸透性吸水防止材に比べ数倍の持続性がある．
③フッ素膜の保護効果により中性化防止に威力を発揮する．　浸透性材料のため，素材の外観は変えない．
④最先端のバイオ技術で，藻やカビによる生物汚染を防ぐ．

積算価格

47,000円（15kg）

材工価格

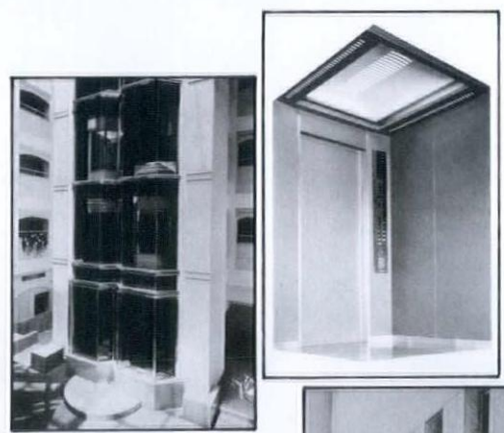
2,600円/㎡

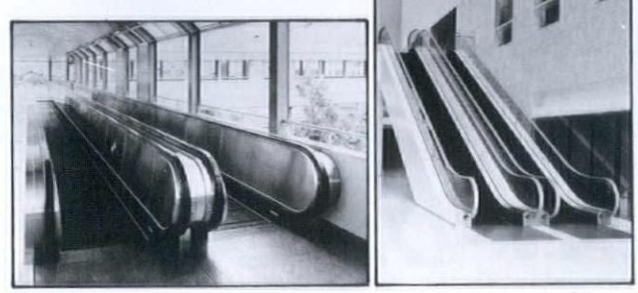
日本ペイント株式会社　建設塗装部
大阪市北区大淀北２丁目１番２号
〒531-8511　Tel　06-455-9123



乗る人の気持ちを考える。
そこから始まる技術、
すすめています。

21世紀を生きる、私たちの子供たち、そのまた子供たちが安心して利用できるエレベーター・エスカレーターづくりを。
そのために東芝が理想としている技術をひと言でいえば、それは、技術を感じさせない技術。乗っていることを感じさせない技術こそ、私たちの理想です。
人やモノを運ぶタテの輸送機関から、人の気持ちを考えたアメニティ空間へ。
私たち東芝は、21世紀を見すえた都市環境づくりに取りくんでいます。





東芝エレベーター・エスカレーター

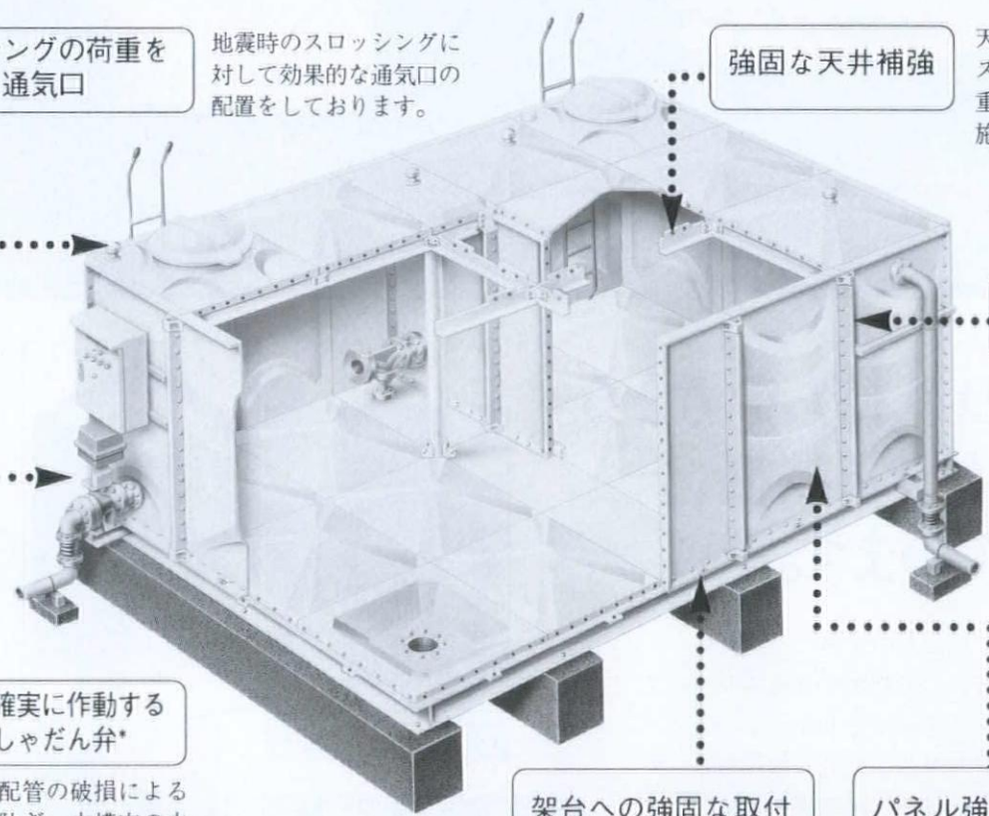
株式会社 東芝　　昇降機事業部

本社 〒105-8001 東京都港区芝浦1-1-1(東芝ビルディング) TEL (03)3457-4621

BRIDGESTONE

新・耐震基準
優れた耐震性でひとつ上をいく
安心をお届けします。

ブリヂストンパネル水槽は、衛生性、保温性、配管仕様、止水性といった独自の技術により高い評価を頂いております。そして、この度、求められる耐震基準に適合させ、緊急時には水槽内の水確保のために作動する緊急遮断弁も品揃えさせる等、皆様により安心してお使いいただける商品として生まれ変わりました。



スロッシングの荷重を回避する通気口

地震時のスロッシングに対して効果的な通気口の配置をしております。

強固な天井補強

天井には地震時のスロッシングの荷重に耐える補強を施しております。

水槽外壁面の連続補強

外壁面を連続した金属で補強してあります。

緊急時に確実に作動するスーパーしゃだん弁*

地震時に、配管の破損による水の流出を防ぎ、水槽内の水を確保する事を目的とした緊急時の保水用遮断弁です。
＊［オプション仕様］

架台への強固な取付

新耐震基準に基づいて本体と架台を確実に締結しています。

パネル強度アップ

耐震性に優れたパネルを採用しています。

スーパーウォータータンク H型 1.0G/1.5G/2.0G

スロッシング対策適合品

株式会社ブリヂストン 建築用品販売部 東京都中央区日本橋3-5-15同和ビル 〒103-0027 TEL. (03) 5202-6864 FAX (03) 5202-6869

日章工業株式会社

●本　　社 〒101-0047 東京都千代田区内神田３－11－７(日立神田別館) ☎03-3254-3000
●大 阪 支 店 〒541-0043 大阪市中央区高麗橋２－４－６(大正不動産ビル６階) ☎06-201-5704
●仙台営業所 〒980-0021 仙台市青葉区中央３－２－27(日産生命ビル) ☎0222-21-6989

日立製作所エレベーター・機電特約店
日立製作所ＯＡシステム特約店
日立金属フリーアクセス、ハイベース特約店
旭化成建材パイル・ヘーベル代理店
大和ハウス工業代理店

施設商品

エレベーター・エスカレーター
立体駐車場設備(新明和工業)
バスユニット(日立化成工業)
住宅機器類
集中浄化槽
受水槽
ソーラー
受変電設備
自家発電設備
無停電定電圧定周波電源装置
ビル監視制御装置
冷暖房空調設備
通信設備
ターボ冷凍機・吸収式冷凍機
各種ポンプ設備・換気設備

OAシステム機器

パーソナルコンピューター
ワードプロセッサー
ファクシミリ
オフィスコンピューター

建材商品

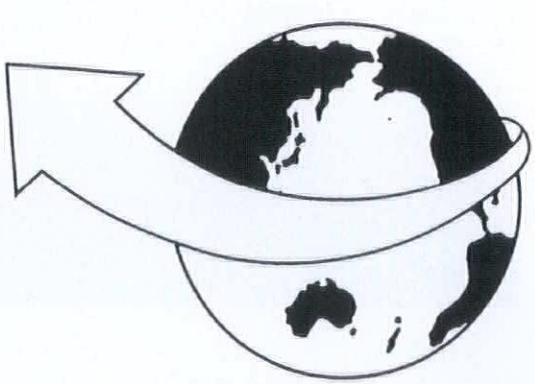
AHSパイル
ヘーベル
フリーアクセスフロア
ハイスプリット・ハイベース
鉄骨
大昭和ユニボード

建設商品

クローラクレーン
ショベル
軽量鉄骨プレハブ規格建築物
軽量鉄骨系プレハブ住宅

未来に向って…

限りある資源
限りある空間の中で
より快適な環境づくりの
ために努力しています。



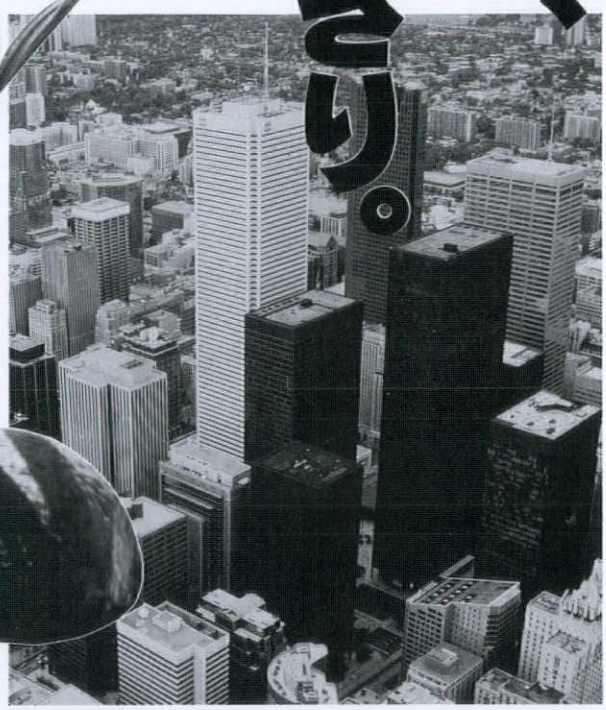
●営業品目
空気調和・冷暖房・給排水・衛生設備・設計施工

株式会社朝日工業社

本社・東京支社　〒105-0013 東京都港区浜松町1-25-7　電話 03(3434)5711
大 阪 支 社　〒532-0031 大阪市淀川区加島1-58-59　電話 06(302)2273
支　　店　北海道／東北／北関東／横浜／名古屋／中国／九州



この世に雨の、降るかぎり。



自然が私たちに雨と光を与えてくれる限り、
今日もどこかで新しい生命が芽生えます。
私たち日新工業の防水材料も、
人々が快適な暮らしを望む限り、
建築と共に今日もどこかで生まれています。
多様化する都市空間の生活環境づくりにおいて、
日新工業はつねに新しいトレンドを見据え、
時代のニーズにフレキシブルに応える
防水材料・工法を開発しつづけています。

アスファルト防水　合成高分子シート防水　塗膜防水　改質アスファルト防水　土木防水　シングル葺き

マルエス S 日新

総合防水メーカー

日新工業株式会社

営業本部〒103-0005/東京都中央区日本橋久松町9-2 ☎ 03 (5644) 7211 (代表)

札幌 ☎011(281)6328(代表)　名古屋 ☎052(933)4761(代表)
仙台 ☎022(263)0315(代表)　金沢 ☎0762(22)3321(代表)
大宮 ☎048(642)5811(代表)　大阪 ☎06(533)3191(代表)
東京 ☎03(5644)7221(代表)　高松 ☎0878(34)0336(代表)
千葉 ☎043(227)9971(代表)　広島 ☎082(294)6006(代表)
横浜 ☎045(316)7885(代表)　福岡 ☎092(451)1095(代表)



広告目次

SD誌に広告をお申込みの際は下記広告代理店にご用命下さい（五十音順）

●共栄通信社

東京――東京都中央区銀座8-2-1
新田ビル（3572）3381
FAX（3572）3590

大阪――大阪市北区西天満3-6-8
笹屋ビル06（362）6515
FAX06（365）6052

●建報社

東京――東京都文京区湯島2-30-8
（3818）1961
FAX03(3818)1968

大阪――大阪市中央区淡路町1-4-9
昭栄ビル06（231）4548
FAX06（227）0268

●新建社

東京都中央区八丁堀2-1-10
ハヤシビル（3552）8247㈹
FAX（3552）8249

●中外

大阪――大阪市北区浪花町14-25
日本生命天六ビル06（379）1791

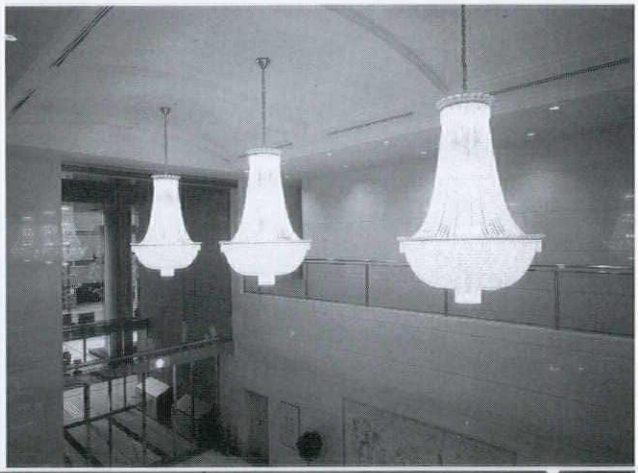
東京――東京都千代田区神田須田町2-5-2
須田町佐志田ビル（3255）8411

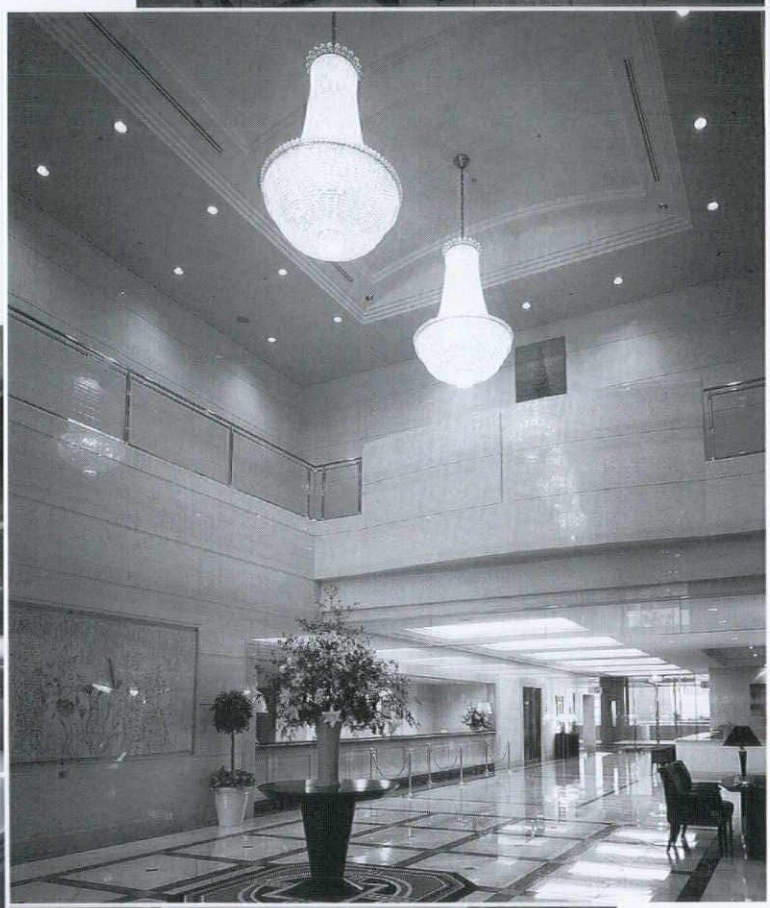
名古屋―名古屋市中区錦2-2-13
名古屋センタービル052（221）7641㈹

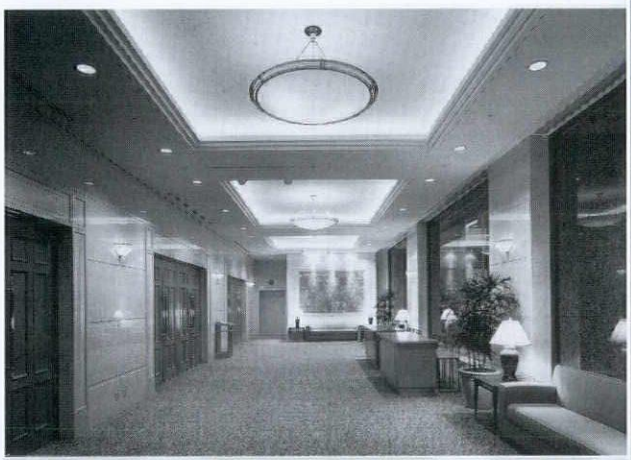
ア ㈱朝日工業社――A17
オ 大崎電気工業㈱――A1
カ 鹿島――A4・A5
軽井沢ホテル鹿島ノ森――A6
川崎電気㈱――A11
㈱関電工――A12
キ ㈱きんでん――152
サ 三建設備工業㈱――A10
三機工業㈱――159
シ 昭和鋼機㈱――165
新菱冷熱工業㈱――171
タ 高砂熱学工業㈱――表3
大興物産㈱――A8
ダイタン㈱――A10
大栄電気㈱――A11
ト 東光電気工事㈱――A3
東洋熱工業㈱――160
㈱東芝――A15
ニ 日章工業㈱――A17
日新工業㈱――A18
ヒ ㈱日立製作所――149
日立電線㈱――161
フ 不二サッシ㈱――172
㈱ブリヂストン――A16
ホ ホテルイースト21東京――A7
マ 松下電器産業㈱――A2
ミ 三菱電機㈱――表2
ヤ 山田照明㈱――A20
ロ ロンシール工業㈱――A9
ワ YKKアーキテクチュラルプロダクツ㈱――表4

表情多彩

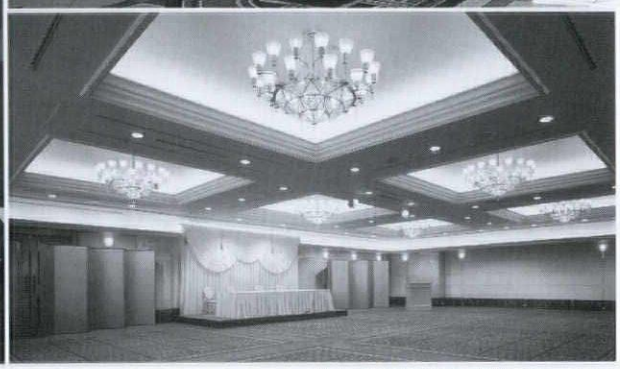
照明は空間づくりの重要なポイント。
人々に、常に気持ちよく空間を利用してもらいたい・・・。
山田照明ではさまざまな条件やニーズを満たすために、
多種多様な照明器具を用意。ベストなあかりで、
ひとつひとつの空間を、個性的・機能的に演出し、
表情多彩な空間創造を力強くバックアップしています。











地方職員共済組合 麹町会館（東京）

yamada

山田照明株式会社

本　　社／ショールーム 〒101-0021 東京都千代田区外神田 3-8-11　TEL.03-3253-5161
横浜支社／ショールーム 〒220-0005 横浜市西区南幸 2-20-1　TEL.045-311-1731

仙台支社 〒980-0824 仙台市青葉区支倉 4-34　TEL.022-267-1630
札幌営業所 〒003-0807 札幌市白石区菊水七条 2-61　TEL.011-811-2215
広島営業所 〒730-0805 広島市中区十日市町 2-2-34　TEL.082-293-6119
大阪支社 〒577-0006 東大阪市椿根 2-2-6　TEL.0 6-745-6811
北関東営業所 〒370-0851 高崎市上中居町 51-1　TEL.0273-26-4111
鹿児島営業所 〒890-0055 鹿児島市上荒田町 23-10　TEL.099-258-0031
福岡支社 〒812-0042 福岡市博多区豊町 1-9-61　TEL.092-414-8531
名古屋事務所 〒461-0001 名古屋市東区泉1-21-35　TEL.052-963-8411
宇都宮事務所 〒321-0971 宇都宮市海道町 818-2　TEL.0286-60-1381